宮城県文化財調査報告書第108集

中峯遺跡発掘調査報告書

昭和 60 年 3 月

宮城県教育委員会

宮 城 県 企 業 局

中峯C遺跡旧石器発掘区

中峯C遺跡Ⅶ層中出土の石器

序

本報告書は大崎広域水道事業に伴う中峯浄水場建設に係わる大和町中峯遺跡の発掘調査の記録である。はじめは、平安時代の集落跡を調査するのが目的であったが、調査が進むにつれ、地下深く火山灰層のなかに人類の生活の痕跡を示す石器などを含む文化層が5枚発見された。火山灰のなかの文化層の年代は、第一・二文化層が後期旧石器時代、第三・四・五文化層が前期旧石器時代に属する。

平安時代の集落跡は中央平坦部に掘立柱建物跡があり、それを囲むように竪穴住居跡が分布するなど、この時代の集落構造を知る重要な資料となった。

旧石器時代のうち特に問題になったのは第五文化層の石器である。これは地下5mで発見されたもので、出土した地層や地形・石器の特徴などから見てざっと10万年前になることは予想されていたが、熱ルミネッセンス法による年代測定で約14万年前から約37万年前という結果がでた。中峯遺跡の発掘調査は日本における人類の起原を中国大陸の北京原人の時代まで遡らせたことになり、県民に大きなロマンをもたらした。このことが現地説明会や新聞などを通じて発表されると全国から大きな反響がよせられ、新聞紙上を賑わしたことは御存知の通りである。今後、本報告書が学術研究のみならず、学校教育や社会教育の場でも大いに活用されれば幸いである。

調査や保存の協議に当たって、宮城県企業局をはじめ大和町教育委員会・石器文化談議会・東北歴史資料館などから御協力をいただき、心から感謝申し上げる。

昭和60年3月

宮城県教育委員会　教育長

郷　古　康　郎

序

宮城県は未来に向けて発展する「新しいふるさと」づくりを推進しておりますが、その一翼を担う公営企業の責務は極めて大きいものがあります。その中で県勢発展のための生活関連施設整備の一環として、広域水道整備計画が策定され、水資源の総合供給体制づくりが行われております。大崎広域水道用水供給事業は、この計画に基づく本県最初の県営広域水道事業であります。

本事業は、漆沢ダム及び南川ダムを水源として、大崎、黒川、栗原及び宮城地域の17市町村が行う水道事業に対し1日最大120000㎥の水道用水を供給しようとするものであり、漆沢系については、昭和55年度から一部給水を開始し、その全体は、既に昭和57年度に完成しております。一方、南川系については、黒川郡4町村と松島町を給水対象として、昭和58年度から本格的に事業着手しているところであります。

中峯遺跡の発掘調査は、この南川系中峯浄水場の建設事業開始に先行し、企業局と県教育委員会とが十分協議を行い実施したものでありますが、その結果、我が国の人類の歴史上重要な資料が出土し、高い成果をおさめたことはまことに意義深いものがあります。

本書に収録された資料が永く保存され、文化財保護思想の高揚に寄与するとともに、学術研究、学校教育の場で活用されるものと信じております。

最後に、この調査にあたり長期間ご協力頂いた県教育委員会及び関係者の方々に深甚な敬意を表明するとともに工事に対するご協力に対し厚く感謝申し上げる次第であります。

昭和60年3月

宮城県公営企業管理者

羽　田　光　雄

目　　次

序
調査要項・例言
1. 調査にいたる経過……1
2. 遺跡の位置と環境……2～4
遺跡の立地と段丘面／周辺の遺跡
3. 調査の方法と経過……5～7
発掘区の設定～遺構・遺物の記録の方法／調査の経過／発掘調査以降
4. 層位と生活面 ……8～12
中峯C遺跡の火山灰層／赤色風化と綱状斑（虎斑）について
5. 中峯C遺跡の火山灰　（山田一郎・庄司貞雄）……13～16
6. 平安時代の遺構と遺物……19～72
＜1＞中峯A遺跡……19～64
1）竪穴住居跡
第1号住居跡／第2号住居跡／第3号住居跡／第4号住居跡／第5号住居跡／
第6号住居跡／第7号住居跡／第8号住居跡／第9号住居跡／第10号住居跡／
第11号住居跡／第12号住居跡／第13号住居跡／第14号住居跡／第15号住居跡／
第16号住居跡／第17号住居跡
2）掘立柱建物跡
第1号掘立柱建物跡／第2号掘立柱建物跡／第3号掘立柱建物跡／
第4号掘立柱建物跡／第5号掘立柱建物跡
3）考　察
出土土器の特徴と分類／出土土器の共伴関係と住居間の比較／
出土土器の年代と問題点／住居の編年的位置と年代／遺構の検討／
集落の構成と地形について
＜2＞中峯C遺跡……64～72
1）竪穴住居跡
第1号住居跡／第2号住居跡／第3号住居跡
2）掘立柱建物跡
3）焼土遺構
第1号焼土遺構／第2号焼土遺構／第3号焼土遺構
4）出土土器の考察
7. 縄文時代の遺構と遺物…中峯B遺跡……73～80
竪穴住居跡と出土遺物／遺構外出土の土器／中峯B遺跡出土の石器
8. 旧石器時代の遺構と遺物……81～161

＜1＞旧石器時代の遺構……81～82
＜2＞Ⅱｂ層上面出土の石器……82～99
出土状況／接合資料・母岩別資料とその分布／第２集中地点の石器／
刃部再生について／第２集中地点内の石器の分布／第５集中地点の石器／
第７集中地点の石器／第８集中地点の石器／第９集中地点の石器／
集中地点外の石器／Ⅱｂ層上面出土石器群の石刃技法／石刃にみとめられる光沢／
考察…Ⅱｂ層上面における２石器群とその位置づけ／表採資料等
＜3＞Ⅱｃ層上面出土の石器……99～107
出土状況／接合資料・母岩別資料／第１集中地点の石器／
Ⅱｃ層上面出土石器群の剥片生産技術／Ⅱｃ層上面石器群の位置づけ
＜4＞Ⅲ層上面出土の石器……107～112
出土状況／接合資料・母岩別資料／第３集中地点の石器／第４集中地点の石器／
Ⅲ層上面出土石器群の石器製作技術／Ⅲ層上面石器群の位置づけ
＜5＞Ⅳ層上面出土の石器……112～115
出土状況／接合資料・母岩別資料／Ⅳ層上面出土の石器／
Ⅳ層上面出土石器群の石器製作技術／Ⅳ層上面石器群の位置づけ
＜6＞Ⅶ層中出土の石器……116～161
1）各集中地点の石器
出土状況／接合資料・母岩別資料のついて／第10集中地点の石器／
第11集中地点の石器／第11集中地点内の石器の分布／第13集中地点の石器／
第14集中地点の石器／第15集中地点の石器／第16集中地点の石器／
第18集中地点の石器／地点不明の石器／石器にみとめられるパティナの違いについて
2）考　察…Ⅶ層中石器の位置づけ
Ⅶ層中石器群の石材／Ⅶ層中石器群の剥片生産技術／Ⅶ層中石器群の二次加工
技術…石器の分類／周辺遺跡との比較…中峯Ｃ遺跡Ⅶ層石器群の位置づけ／
中峯Ｃ遺跡の測定年代について／石器を製作・使用した人間について／
まとめと今後の課題／石器属性表
9．中峯遺跡の熱ルミネッセンス年代　（市川米太）……162～164
10．中峯遺跡第Ⅵ層のフィッション・トラック年代　（輿水達司）……165～169
フィッション・トラック年代算出法式／測定方法／測定結果
11．まとめ・英文要約　170～172
写真図版　173～213

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県黒川郡大和町吉田字中峯囲、大衡村大瓜字中山 92 の 9

遺跡記号　：　中峯Ａ遺跡　ＨＪ
　　中峯Ｂ遺跡　ＨＣ
　　中峯Ｃ遺跡　ＨＫ

調査期間　：　中峯Ａ遺跡　昭和 58 年 4 月 7 日～昭和 58 年 10 月 1 日
　　中峯Ｂ遺跡　昭和 57 年 4 月 8 日～昭和 57 年 7 月 5 日
　　中峯Ｃ遺跡　昭和 58 年 4 月 7 日～昭和 58 年 10 月 1 日

発掘調査面積：中峯Ａ遺跡　5310 ㎡
　　中峯Ｂ遺跡　722 ㎡
　　中峯Ｃ遺跡　6317 ㎡（うち火山灰層調査面積：1346 ㎡）

調査主体者：宮城県教育委員会

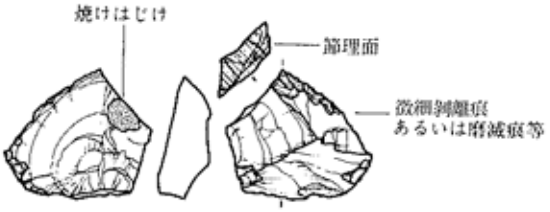
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
　　丹羽茂、菊地逸夫、小川出（中峯Ａ、Ｃ遺跡）、小井川和夫、佐々木和博、菊地逸夫（中峯Ｂ遺跡）

調査協力機関：宮城県企業局、大和町教育委員会

例　　言

1. 本書は大崎広域水道中峯浄水場建設に伴う、中峯Ａ、Ｂ、Ｃ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 周辺地形の理解については、中川久夫氏（東北大学理学部）、石田琢二氏（宮城県仙台第二高等学校）の御教示を得た。
3. 石材鑑定については蟹択聡史氏（東北大学教養部）、土壌分析については山田一郎、庄子貞雄両氏（東北大学農学部）、熱ルミネッセンス年法による年代測定については市川米太氏（奈良教育大学教育学部）、フィッション･トラック法による年代測定については輿水達司氏（北海道大学理学部）にお願いした。それらの結果は本書に収録してある。
4. 出土石器の中で酸化鉄の付着が著しい 10 点については、そのままでは観察が困難なことから、村山斌夫氏（東北歴史資料館）に依頼して脱鉄処理を行った。対象とした石器は以下のとおりである。№. 1001、1003、1402、1405、1506、1507、1503、1505、1607、1807
5. 石器の観察の過程で東北大学考古学研究室の院生諸氏から御教示を得た。
6. 遺構実測図の水系高は海抜高を示す。
7. 土色の観察は小山・竹原編『新版標準土色帖』を基準とした。

8. 石器にみとめられる節理面、焼けはじけ、微細剥離痕、磨滅については第１図のように表現した。
9. 本書の執筆、編集は文化財保護課員の協議を経て、藤沼邦彦（1）、菊地逸夫（6、7）小川出（2、3、4、8、11）が担当した。
10. 前期旧石器の調査を行うにあたっては、芹沢長介氏（東北福祉大学）、藤村新一氏から多くの御指導、御援助を頂いた。
11. さらに、発掘調査および報告書作成の過程で、次の各氏、各機関より御指導、御教示を賜った。記して感謝する次第である。
    阿子島香、安斎正人、岡村道雄、梶原洋、加藤晋平、鎌田俊昭、小林達雄、佐川正敏、佐々木隆、須藤隆、石器文化談話会、東北大考古学研究室、林謙作、平口哲夫、遊佐五郎、横山英介、横山裕平
12. 本報告にかかわる出土品および記録図面、写真等は宮城県教育委員会が保管している。



第１図　石器実測図における各種表現

1. 調査にいたる経過

中峯浄水場の建設は、南川ダム（黒川郡大和町八合田地内）建設に伴い宮城県北部の大崎地方に水道用水を供給するために、宮城県企業局によって計画されたものである。

昭和 55 年 9 月、宮城県企業局では、中峯浄水場建設の策定計画をたてるため、宮城県教育庁文化財保護課に「大崎広域水道用水供給事業中峯浄水場建設計画と文化財のかかわりについて」事前協議の申し入れを行った。文化財保護課では、すでにその年の 8 月にこの地の分布調査を実施していたが、周辺の畑地では遺物が採集されても、大部分は雑木の繁茂する山林となっていたため、地表面からの観察では埋蔵文化財の有無は確認はできなかった。そのため、申し入れに応じて、11 月に、企業局・大和町教育委員会・文化財保護課の三者立合いのもとに、重機（バックホー）を使用して広範囲にわたってトレンチをいれて確認調査をおこなった。その結果、須恵器・土師器・縄文土器の破片が三地点（中峯Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡）に散布していることがわかり、縄文時代と平安時代の集落跡が予想された。そのため、三者間で遺跡保存のための協議が繰り返されたが、浄水場の位置、立地条件、その他からみて、やはりこの地に建設せざるを得ないということになり、文化財保護課が担当して事前の発掘調査を行うことになった。

調査の経過はあとで詳しくのべてあるが、調査中に、まったく予測していなかった前期旧石器時代の遺物の発見や建設敷地の拡張などの問題が生じたため、発掘調査の延長・工法の変更による遺構の保存をめぐって幾度も、企業局と文化財保護課との間で話合いがもたれた。結果的には、建設敷地の拡張地域の発掘調査の実施を条件に発掘調査の延長が認められ、さらに、貯水タンク建設の位置を少しずらせ、前期旧石器時代の遺物包含層をごく一部であるが保存することが決定した。

2. 遺跡の位置と環境

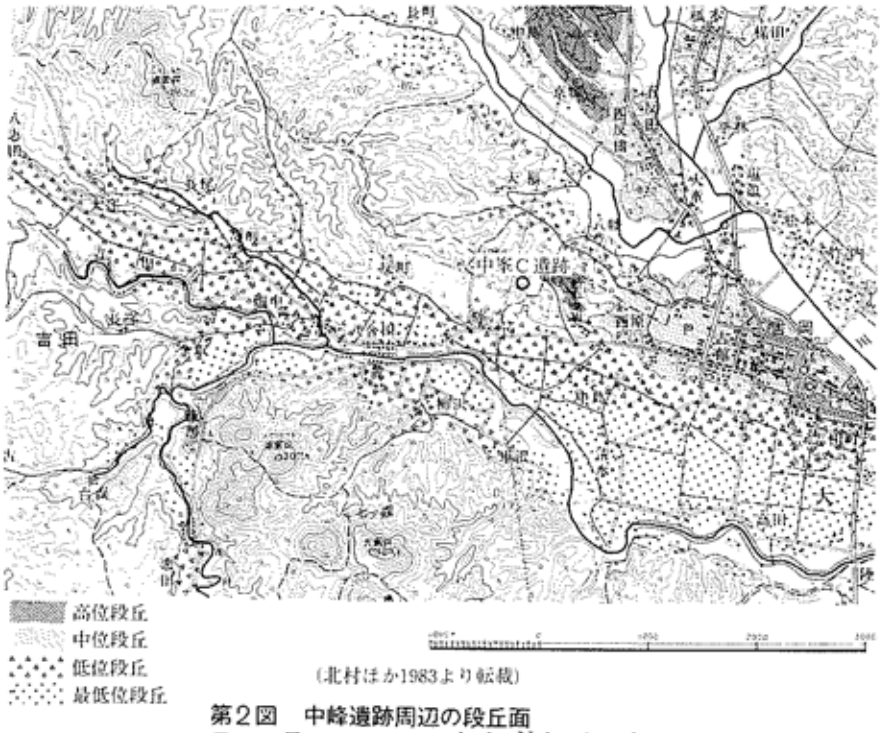
遺跡の立地と段丘面

中峯遺跡は、宮城県黒川郡大和町吉田字中峯囲から大衡村大瓜字中山にかけて位置する。遺跡は仙台の北約20㎞、大和町の中心である吉岡から西へ3㎞程のところにある（第3図）。

中峯遺跡は、A、B、Cの3遺跡からなり、それぞれが分岐した丘陵肢節の頂部平坦地に立地している。遺跡の周辺には、吉田川の北岸に沿って、このような起伏にとむ地形がつづくが、その頂部の高さは60～130m とほぼ一定しており、遠望すると、平坦な背面をもつ丘陵地であることがわかる。

これらは、北村ほか（1983）によれば、大衡丘陵とよばれ、第三紀鮮新世の宮床凝灰岩によって構成される。宮床凝灰岩は、中峯B遺跡付近の露頭でも確認されたが、今回の発掘調査によって、この凝灰岩の上位に、さらに、河成堆積物である礫層と軽石層を含む降下火山灰がのることが明らかになった。従って、遺跡付近は、密に開析され、平坦面も限られた部分にしか残されていないが、本来は吉田川によって形成された河岸段丘であることがわかる。

吉田川から、北上して吉岡にむかう道路上には、途中、２ヶ所の明瞭な段差があり、この付近に、よく段丘地形が発達しているのが観察される。吉岡周辺の段丘の分布は、北村ほか(1983)により、最高位、高位、中位、低位、最低位の５群に大別され、第２図のようにとらえられている。現在の吉岡の市街地のある標高 30～40ｍの平坦面は、下末吉段丘相当の中位段丘である。その西側には、一段高く、畑・果樹園・雑林・放牧地等に利用されている平坦部があり、これ



（北村ほか1983より転載）

第２図　中峰遺跡周辺の段丘面
Fig.2 Terraces around the Nakamine site

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	中峰A遺跡	平安	13	宮子沢遺跡	縄文、奈良、平安	25	平林遺跡	縄文、奈良、平安	37	四反田遺跡	縄文(早、前)
2	中峰B遺跡	縄文(後期)	14	南金谷遺跡	縄文	26	柘木A遺跡	縄文	38	尾無A遺跡	縄文、奈良、平安
3	中峰C遺跡	旧石器、平安	15	泰遺跡	奈良、平安	27	柘木B遺跡	奈良、平安	39	尾無B遺跡	奈良、平安
4	金谷遺跡	旧石器、縄文	16	天皇寺遺跡	平安	28	柘木C遺跡	縄文	40	座府遺跡	奈良、平安
5	大前遺跡	旧石器、縄文	17	大洲後岡前遺跡	縄文、奈良、平安	29	柘木D遺跡	縄文	41	河原B遺跡	奈良、平安
6	平林B遺跡	旧石器	18	松本遺跡	縄文、奈良、平安	30	長原A遺跡	縄文	42	河原A遺跡	縄文、奈良、平安
7	柘木遺跡	旧石器	19	松本A遺跡	奈良、平安	31	長原B遺跡	縄文	43	待井沢遺跡	奈良、平安
8	石神沢遺跡	旧石器	20	愛宕遺跡	奈良、平安	32	長原C遺跡	縄文	44	宮場遺跡	奈良、平安
9	一里塚遺跡	旧石器	21	寺沢遺跡	奈良、平安	33	大洲中学校東遺跡	縄文			
10	一の出遺跡	縄文(中)、平安	22	八幡神社南遺跡	縄文	34	ボード仙台工場南遺跡	平安、中世、近世			
11	瀬戸原遺跡	縄文	23	八幡神社遺跡	縄文	35	鬼岡遺跡	奈良、平安			
12	山沢遺跡	縄文、奈良、平安	24	八幡神社北遺跡	縄文	36	中山遺跡	縄文			

第3図　中峰遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院発行1／25000「七ッ森」「吉岡」を転載）
Fig.3 Locality of the Nakamine site and other sites

が高位段丘に比定されている。中峯A遺跡は、この高位段丘と谷１つへだてたところにあり、標高約70mと高さもこれに一致する点から、本来は、この高位段丘面に連続していたものと考えられる。中峯C遺跡は、標高約90mにあり、隣接するA遺跡のある高位段丘よりさらに一段高く、この付近の最高位段丘面になる。この面は、仙台市周辺であれば、青葉山段丘と本砂金段丘に相当し、多摩段丘に対比しうるものである。

段丘堆積物のうち、礫層は、その組成から中峯A、C遺跡とも同一のものと思われる。よって、C遺跡のある最高位段丘面の形成は大規模な礫層の堆積によるものであり、これを侵食する形で、高位段丘面が形成されたと考えられる。降下火山灰は、この多くが、開析にともなって二次的な移動をうけており、中峯C遺跡の中でも丘岐頂部のみにプライマリーな分布がみとめられた。中峯C遺跡の降下火山灰層は、軽石層をはさみ、最も厚い部分で5m以上にも達する。旧石器時代の生活面は、すべてこの火山灰層中より発見されている。火山灰の起源は明らかでないが、周辺に分布する高位段丘面以下の各段丘上には、今のところ、軽石層以下の層序がみとめられない。従って、軽石層を含む火山灰層の一部が、最高位段丘上にのみみとめられるものであれば、この降下時期は、最高位段丘形成後、高位段丘面の安定する時期以前に限定できる。

周辺の遺跡

中峯遺跡の周辺には、第3図に示すように、旧石器時代から中、近世にわたる多くの遺跡があるが、その詳しい内容のわかるものは少ない。

旧石器時代の遺跡としては、吉田川、善川の河岸段丘上に、金谷、大童、平林B、柧木、石神沢、一里塚といった諸遺跡があるが、いずれも高位段丘およびそれ以下の段丘面上に立地している。金谷遺跡は、中峯遺跡の東方約1㎞にあり、4層上面、4層中（軟質火山灰）より、槍先形尖頭器、箆状石器等が断画採取されている（岡村・鎌田 1980）。岩出山町を中心とした宮城県北部は、石器文化談話会の調査によって多くの遺跡が確認されているが、中峯遺跡は、これらの県北の遺跡群と、既に発掘調査によって前期から後期にわたる旧石器が出土している、仙台市山田上の台、北前遺跡とのちょうど中間地点に位置する。

中峯遺跡の周辺で、詳しい内容のわかる縄文・平安時代の遺跡は少ないが、大衡村亀岡遺跡では9世紀の掘立柱建物跡が出土している。

〔引用文献〕

北村信・大沢穠・中川久夫（1983）地域地質研究報告『吉岡地域の地質』

岡村道雄・鎌田俊昭（1980）「宮城県北部の旧石器時代について」東北歴史資料館研究紀要6

3．調査の方法と経過

発掘区の設定～遺構、遺物の記録の方法

中峯Ａ・Ｃ遺跡は工事にかかる範囲のうち、遺構、遺物の存在する可能性のある平坦部から斜面の一部にかけてを調査対象とした。発掘調査は重機で表土を剥いだ後、遺構、遺物の精査を行った。中峯Ａ・Ｃ遺跡にはそれぞれ、基準点１(国家座標Ｘ＝－172014.179, Ｙ＝2463.612)、基準点２（Ｘ＝－171790.713, Ｙ＝2304.320）を設定し、遺構を確認した場合は、これを基準として1/20縮尺で実測し、また写真を撮影した。

中峯Ｃ遺跡の火山灰層の調査については、当初は遺構・遺物の有無を確認する目的で６×6mのグリッド設定し、このうち１×2mの範囲を試掘調査して、遺構、遺物が発見された場合にはこれを拡張する方法をとった（第40図）。調査が進むにつれて、丘陵頂部の比較的平坦な部分に火山灰の堆積がよいことが判明したので、この部分については全面調査を行った。
Ⅶ層以下については発掘区を第40図の『形の部分約730㎡に限定し、これを全面発掘した。発掘区が2m以上の深さに及ぶ場合は、作業の安全のため2m毎にテラスを設けた。調査は唐鍬もしくはスコップで薄く土をけずる形で行い、遺物を検出した場合はこれを精査に切りかえた。出土遺物はフィールド No. を付してその出土層位、平面位置、絶対高を記録した。遺物集中地点が認定できる場合は、現場で発見順に No. をつけた。また必要に応じて発掘区の層位を示す壁面図を作成した。

中峯Ｂ遺跡は工事道路建設にかかる調査であり、道路中心杭を結ぶ線を基準線とし、全面に3m単位のグリットを設定した。発掘調査は道路に直交する方向でトレンチを 3m毎に設け、出土した遺構、遺物は個々に実測したものを除き、すべて先のグリットで一括記録した。

調査の経過

中峯Ａ、Ｃ遺跡の調査は、昭和58年４月11日より開始した。４月中は主にＡ遺跡の調査を行なったが、25 日からは、Ｃ遺跡の平安時代の調査も開始した。Ｃ遺跡の調査が進展するにともない、同地に火山灰の良好な堆積が確認されたため、旧石盤時代の遺構・遺物が存在する可能性を考え、5 月 13 日より火山灰層の調査を開始した。その後、たしかな旧石器の出土はなかったが、中峯Ａ遺跡がほぼ調査を終了し、竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡１棟と、大和町でははじめての平安時代集落の解明となったため、この成果を公表すべく、5 月 21 日に現地説明会をおこなった。ところが、この現地説明会を見学していた藤村新一氏がＣ遺跡で旧石器を採取されたのをきっかけに、21 日から23日にかけて、火山灰層中から２ヶ所の遺物集中地点を確認することとなった。これに続いて、5月30日には第３集中地点、6月２日には第４集中地点を発見し、6月末には、4枚の生活面から９ヵ所の集中地点、計約200点の旧石器を記録するにいたった。

第４図　周辺の地形と発掘区の配置
Fig.4 Topographic map of the Nakamine site

この間、周辺の吉田、鶴巣、宮床、吉岡の各小学校から見学があった。7 月にはいって、さらに下部の層位を調査するため 4×3m の探掘区を設定し、4m ほど下げたところ、7 月 11 日に再び、藤村氏がこの発掘区の最下部より 3 点の安山岩製石器を発見した。季節はすでに梅雨であり、湧水のため深掘区の調査は困難をきわめたが、7 月 14 日には、同地点の約 10 cm下部の面からさらに三十数点の出土があり、事態を重くみた文化財保護課では、研究者の意見をあおぐとともに県企業局との再度の協議を行ない、最下部の調査を主目的とした調査の延長を決定した。新たな発掘区は、先の石器出土地点を含む 12×12m の範囲のほか、約 15m 東側に 22×12m の発掘区を設定した。7 月 22 日より作業の効率化のためベルトコンベアーを導入したが、7 月中ばより 8 月 12 日までの約 1 ヵ月間石器の出土はなく、猛暑の中、40℃をこす発掘区では厳しい発掘作業が続けられた。お盆明けの 8 月 17 日、東側の発掘区ではじめて石器が出土し 20 日にかけて 40 点をこえる石器を検出した。8 月下旬より、A遺跡の平安時代の追加調査の要請があり平行してこれを行なった。9 月に入って、C遺跡では東西の発掘区の中間部の調査が進められ、丘の東側の集中地点の 10 cm程下位の面から 19 点が新たに出土した。この中間部の発掘調査により、東西の層位の対比がなされ、また最下層の石器は、中央に若干凹んだ地形をはさむ緩斜面上に分布することが明らかになった。5 月から 9 月にかけての調査で、中峯A遺跡では総計竪穴住居跡 16 軒、掘立柱建物跡 5 棟からなる平安時代の集落が検出され、また、中峯C遺跡では、平安時代の竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 1 棟、焼土遺構 3 基の他、新たに前期旧石器が発見されるにいたった。そこで、9 月 12 日にはこの内容を記者発表し、17 日には約 700 人を集めて第 2 回の現地説明会を行なった。さらに、9 月 20 日には山本県知事の視察があり、その後の協議で未発掘の北側部分については保存されることが決定した。中峯C遺跡の発掘調査は、年代測定他のための土壌サンプル採取も含め、10 月 1 日まで行なわれ、一応終了した。

発掘調査以降

10 月以降、出土遺物の整理作業を行なった。この過程で、10 月 7 日に市川米太氏が来跡され熱ルミネッセンス年代測定のための年間放射線量測定棒を設置した。12 月 18 日には石器文化談話会の例会で調査の概要を紹介した。59 年 1 月 12 日から約 2 週間、中峯浄水場の工事開始にともない、雪中、立会調査を行なった。この過程で、中峯C遺跡の南側へくだる斜面はほとんど二次堆積の火山灰層よりなっており、旧石器を含む良好な火山灰層は、丘陵頂部のみに遺存するらしいことが明らかになった。4 月 13 日には先の熱ルミ用測定棒のぬきとりを行なった。

6 月には発掘調査の概要について『考古学ジャーナル』誌上に短報を発表し、また、10 月 7 日には、東北史学会で中峯遺跡出土の旧石器について研究発表を行なう機会をえた。

11 月には市川米太氏より年代測定結果の報告があり、同 19 日にこの内容を公表した。

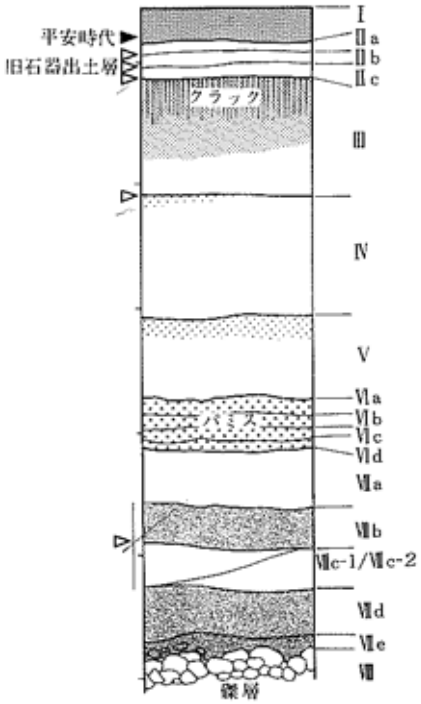
4. 層位と生活面

中峯遺跡の層位は、上位より、表土、黒色土、（Ⅰ層）、火山灰層（Ⅱ～Ⅶ層）、礫層（Ⅷ層）そして基盤である第三紀宮床凝灰岩よりなる。

表土下はシルト質の黒色土であり、漸移層を経て火山灰層にいたる。平安時代の遺構は、この黒色土中より掘りこまれている。基本層位中にはみとめられないが、遺構の覆土中には「灰白火山灰」が残存する。

中峯Ｃ遺跡の火山灰層（第５図）

火山灰層以下の層位の説明は中峯Ｃ遺跡を対象としたものである。層位区分は発掘区にあって異なる部分があり、また同じ層でも地点によって層厚・土色等にちがいがあるが、おおむね以下の基本層に対比しうる。各層の詳しい注記は第６図を参照されたい。なお、本文中の層位区分は丹羽他（1984）のそれを一部修正しているので、その対比を第７図に示した。



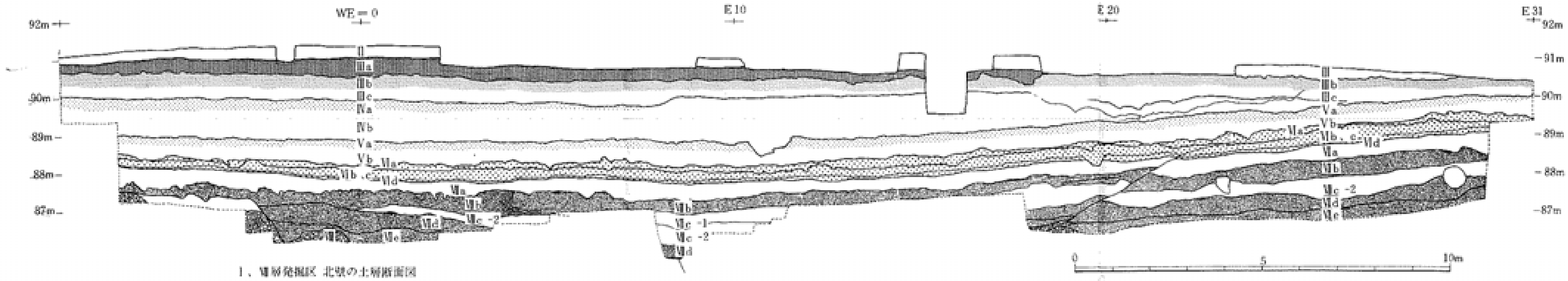
第５図　基本層位図
Fig.5 Stratigraphy of the Nakamine site

Ⅱ層は、褐色シルト質ロームであり、軟質のａ、ｂ層と硬質のｃ層に分かれる。Ⅱｂ層はⅡｃ層に比して、しまりがよく粘性がある。Ⅱｂ層上面、Ⅱｃ層上面より石器が出土している。宮城県北部の鍵層である。肘折軽石はみとめられていない。

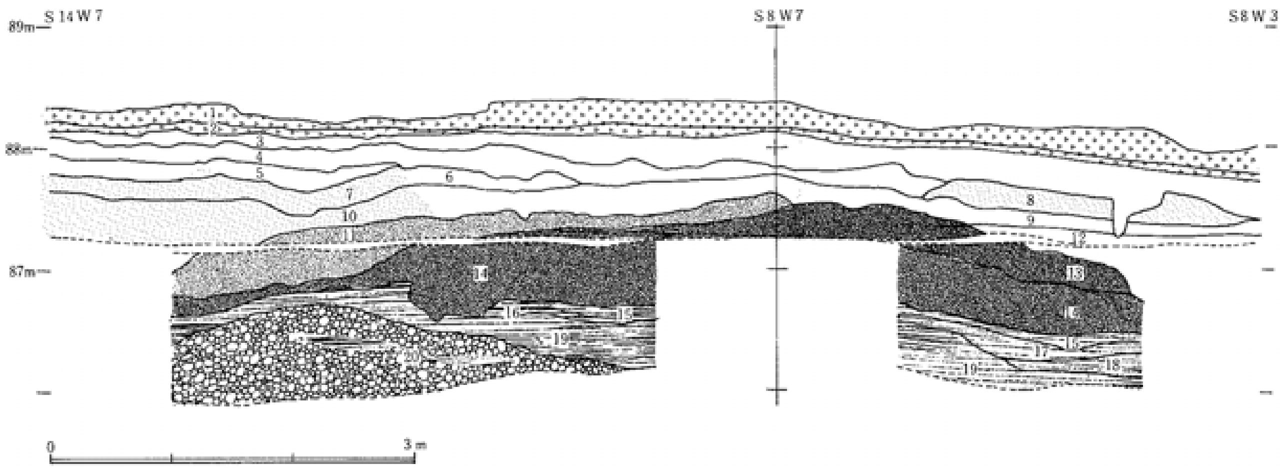
Ⅲ層は、明褐色～赤褐色の非常に粘性のつよいロームである。上部はやや砂質でたいへんに硬いが、乾燥するとクラックの発達が著しい。中部から下部にかけては赤味がつよく、この土色がⅢ層の大きな特徴となっている。Ⅲ層上面より石器が出土している。Ⅳ層は褐色の粘土質ロームで、Ⅲ層同様上部が明褐色を呈する。ただしⅣ層の赤色化はⅢ層に比して微弱であり、第６図の層位では西側でしかこれを確認できない。Ⅳ層下部はマンガン粒を多く含む。Ⅳ層上面より石器が出土している。

Ⅴ層は明黄褐色のシルト質ロームで、粘性があり、軟かく、水分を多く含む。Ⅳ層同様に上部が若干赤味をおびる。

Ⅵ層は軽石層である。堆積は一様ではなく、上位から、ガラス質火山灰をマトリックスに細粒の軽石を含む部分（Ⅵａ層）、粗粒の軽石からなる部分（Ⅵｂ層）、石英や砂粒を多く含む部分



1、Ⅶ層発掘区 北壁の土層断面図



3．第11集中地点西、北壁の土層断面図

層名	厚(cm)	土色	土質	粘性	しまり	硬さ	含有物	備考
Ⅰa	10~15	10YR3/2黒褐色	シルト	なし	弱い	軟		表土
Ⅰb		7.5YR6/8橙色	シルト質ローム	ややあり	弱い	軟	白色砂粒(Ⅰb層下部~Ⅱ層にかけて)	撹乱層
Ⅱa	10~20	10YR6/6明黄褐色	シルト質ローム	ややあり	弱い	軟	白色砂粒	
Ⅱb	10~20	7.5YR5/8明褐色	シルト質ローム	ややあり	弱い	軟	マンガン粒若干	土器を中心に石器が出土
Ⅱc	5~20	7.5YR4/4にぶい褐色	やや砂質ローム	少ない	やや強い	やや硬	マンガン粒(Ⅲ層より多い)	土器を中心に石器が出土
Ⅲa	15~50	7.5YR4.5/6褐色	砂質ローム	なし	弱い	超硬(クラック有)	マンガン粒(Ⅲ層より多い),小礫(<5mmφ)	石器出土，赤のレンズ状ブロック
Ⅲb	20~40	7.5YR5/8明褐色	粘土質ローム	あり	弱い	硬(クラック有)	マンガン粒	
Ⅲc	15~20	7.5YR5/6褐色	ローム	ややあり	やや強い	硬	マンガン粒	
Ⅳa	0~30	5YR4/6赤褐色	粘土質ローム	あり	弱い	やや硬	マンガン粒	土器を中心に石器が出土
Ⅳb	0~80	7.5YR4.5/6褐色	ローム	ややあり	やや強い	やや硬	マンガン粒(上部に大量に含まれる)	
Ⅴa	10~20	7.5YR5/6明褐色	シルト質ローム	強い	弱い	軟	砂粒(<2.3mmφ)	
Ⅴb	50~80	10YR6/6明黄褐色	粘土質ローム	あり	強い	軟	マンガン粒	
Ⅵa	5~20	10YR5/8黄褐色	シルト質ローム	ややあり	弱い	軟	マンガン粒若干，石英(<5mmφ),[illegible]	軽石層
Ⅵb	10~20	10YR6/7明黄褐色	シルト質ローム	なし	弱い	超硬	マンガン	軽石層
Ⅵc	5~20	10YR6/8明黄褐色	砂	なし	弱い	硬	マンガン	軽石層
Ⅵd	10~30	10YR6/4にぶい黄橙色	砂質ローム	ややあり	やや強い	やや硬	マンガン粒，砂粒	軽石層
Ⅶa	10~30	10YR5/6黄褐色	ローム	あり	やや強い	やや硬	マンガン粒若干	
Ⅶb	10~40	7.5YR4.5/6褐色	ローム	少ない	やや強い	やや軟	マンガン粒	茶褐色の網状斑
Ⅶc-1	10~40	10YR5/4にぶい黄褐色	ローム	ややあり	やや強い	やや硬	マンガン粒，晶質小礫がみとめられる	第5文化層
Ⅶc-2	0~60		シルト質ローム					石器が出土
Ⅶd	30~60	5YR5/8明赤褐色	シルト質ローム	少ない	やや強い	やや硬	マンガン粒	赤褐色の網状斑
Ⅶe	0~40	2.5YR5/8明赤褐色	粘土	あり	やや強い	やや硬		オレンジと白の縞状粘土
Ⅷ			砂礫(<25mmφ)				風化が著しく，断面はモザイク状を呈す。	Ⅶe層の一部と互層を成す。

第2表　1の土層注記

第6図　Ⅶ層発掘区の土層断面図

Fig. 6　Cross Section of Palaeolithic excavation area

層	基本層	土色	土質	備考
1	Ⅵ			軽石層
2	Ⅵ			軽石層
3	Ⅶa		やや砂質ローム	
4	Ⅶa	10YR5/6黄褐色	ローム	
5	Ⅶa	10YR5/6黄褐色	やや粘土質ローム	
6	Ⅶa	10YR5/6黄褐色	やや粘土質ローム	
7	Ⅶb	7.5YR4.5/6褐色	やや砂質ローム	6に網状斑が入る層
8	Ⅶb	7.5YR4.5/6褐色	ローム	網状斑(7より強い)
9	Ⅶc-1	10YR5/4にぶい黄褐色	ローム	晶質小礫あり
10	Ⅶb	7.5YR4.5/6褐色	ローム	9に網状斑の入る層
11	Ⅶd	7.5YR4.5/6褐色	ローム	網状斑(10よりあまく垂直状)
12	Ⅶc-1	10YR6/6明黄褐色	粘土質ローム	晶質小礫あり第11集中地点にあたる
13	Ⅶd	7.5YR5/6明褐色	シルト質ローム	晶質小礫、網状斑(11より赤く垂直状)
14	Ⅶd	5YR5/8明赤褐色	シルト質ローム	網状斑(13より赤く垂直状)
15	Ⅶe	5YR5/8明赤褐色	シルト質粘土	赤褐粘土
16	Ⅶe	5YR5/6明赤褐色	やや砂質粘土	
17	Ⅶe	5YR5/6明赤褐色	やや砂質粘土	
18	Ⅶe		粘土	砂礫の浮きあがりあり
19	Ⅶe	2.5YR5/8明赤褐色		
20	Ⅷ		砂礫	

第4表　3の土層注記

（Ⅵｃ層）、砂質ロームをマトリクッスに軽石を含む部分（Ⅵｄ層）に分けられる。Ⅵｂ、Ⅵｃ層はたいへんにかたく、またⅥｄ層は粘土中のハロイサイトにより青灰色を呈する。Ⅵ層の遺跡周辺における分布は不明だが層相が明瞭で石英を含む点等から、今後この地域の鍵層としうる軽石層である。

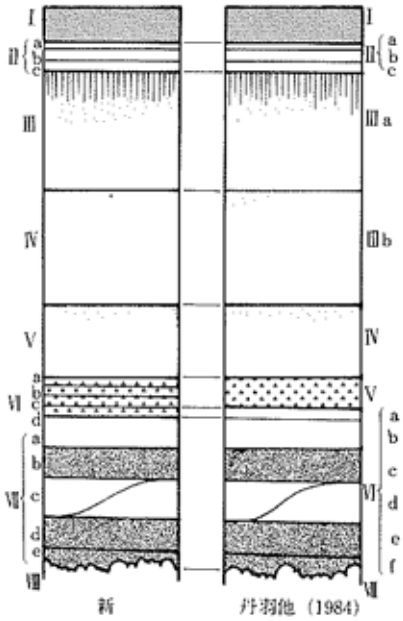
Ⅶ層は黄褐色ロームだが、部分的に霜降り状に褐色もしくは赤褐色を呈する部分があるのを特徴とする。層中に明瞭な層理面はみとめられないが、土色・土性を基準に以下の細分を行った。、Ⅶａ層は黄褐色ロームで粘性がある。Ⅶｂ層は褐色の網状斑のある部分で、Ⅶａ層より若干粘性は少ない。Ⅶｃ層はにぶい黄褐色～黄褐色ロームで、粘性ある部分（Ⅶｃ－1 層）とシルト質で粘性の少ない部分（Ⅶｃ－2 層）がある。第 6 図にあるように、Ⅶｃ－1、Ⅶｃ－2 層は上下関係にあるというより、分布域を異にする層である。Ⅶｄ層は明赤褐色の網状斑を呈するシルト質ロームである。Ⅶｅ層は明赤褐色と白色の部分が縞状になる粘土層であり、一部は下位の礫層と互層をなす。Ⅶ層中より石器が出土している。

Ⅷ層は礫層である。数 cm から 20cm 程の円礫からなり、礫はいずれも風化が著しく、軟かい。

赤色風化と網状斑（虎斑）について

中峯遺跡のⅢ層の赤褐色を呈する部分は、座散乱木遺跡 2～15 層と類似する。座散乱木遺跡の場合、これは、温暖な環境下で長期にわたる風化をうけた結果とされている（庄子他 1983）が、中峯遺跡Ⅲ層もこれと同様に本来は褐色の火山灰が風化して赤色化したものと考えられる。風化はⅢ層の上面からであるが、クラックの発達する状部は赤色化が明瞭ではない。座散乱木遺跡では 12 層上面でインボリューションが確認されたが、中峯遺跡のⅢ層上面は安定しておりインボリューションはみとめられない。Ⅳ層、Ⅴ層上部も微弱ではあるが赤色化がみとめられており、各層の堆積の間に風化のおこるような環境があったものと考えられる。

Ⅶｂ、Ⅶｄ層の赤色部は網状斑になる点でⅢ、Ⅳ、Ⅴ層のそれと異なる。虎斑もしくは網状斑とよばれるこの赤色化は高位段丘の礫層直上にみとめられるもので、赤色土中の酸化鉄が滲透水の移動により還元、溶脱された結果生じた模様であり、基本的には温暖風化によって生じたものと考えられている（松井（1979）。第 6 図をみるとわかるように、Ⅶ層中には、黄、赤、黄、赤という各層のセットが、おお



第７図　基本層位新旧対応図
Fig.7 Comparison of the old and revised division of strata

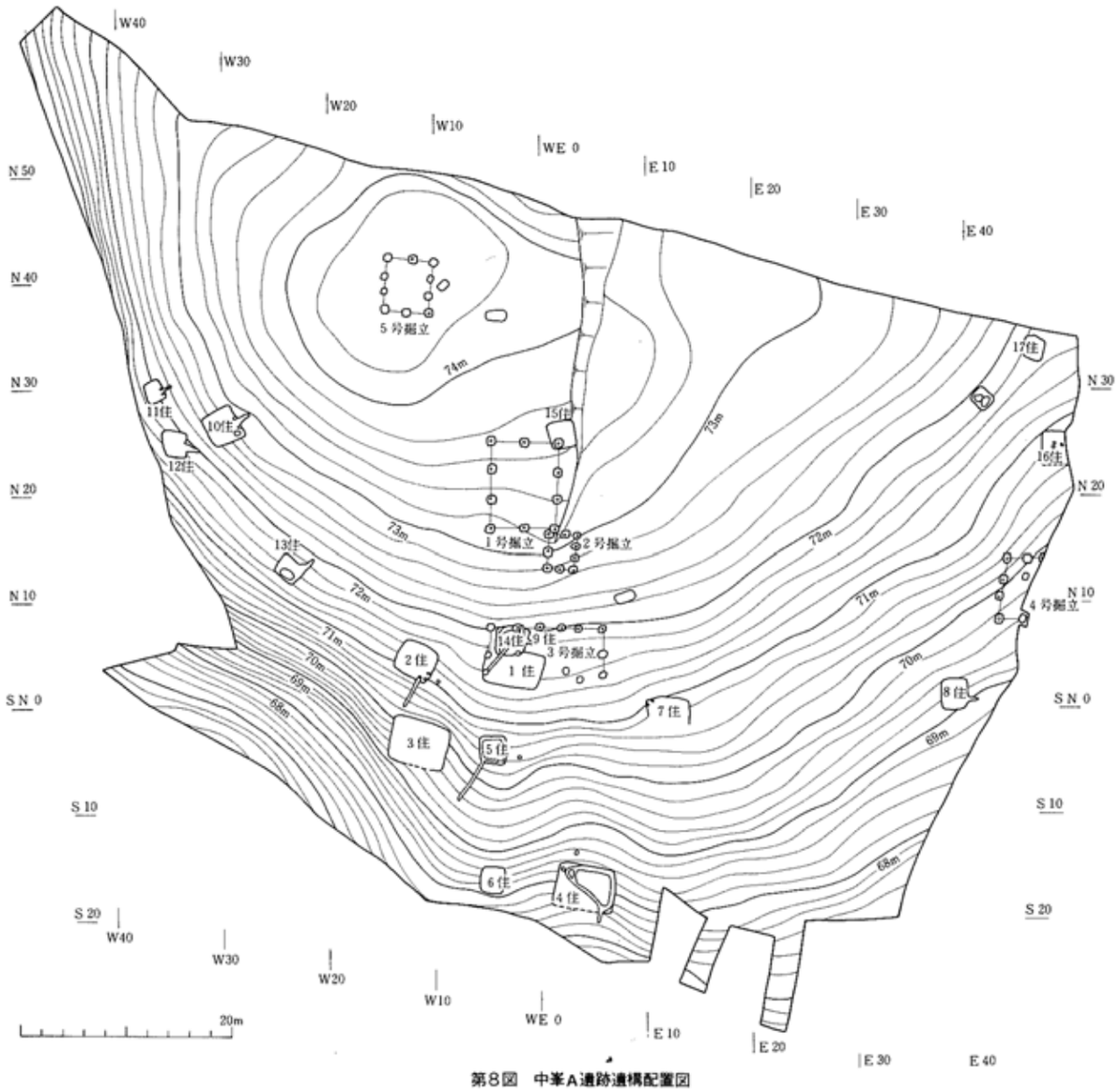
むね発掘区内の東西にわたってみとめられることからこれを堆積層と解したが、第6図ー3の断面のように網状斑が複雑にからみあう地点の層位では、堆積層中の一部だけが赤色化している可能性もある。石器の分布する生活面の南北で、網状斑のある部分とない部分があらわれていた場合もあり、網状斑を基準に厳密な層位区分や生活面の対比を行うことには問題がのこる。

〔 引 用 文 献 〕

庄子貞雄・山田一郎・高橋　正（1983）「座撒乱木遺跡を中心とした遺跡土壌の土壌学的研究」『座散乱木遺跡』PP. 80～94

丹羽　茂・菊地逸夫・小川　出（1984）「中峰遺跡調査概報」『考古学ジャーナル』No.233

松井　健（1979）「赤黄色土と古土壌学」『ペドロジーへの道』PP. 109～148



第8図　中峯A遺跡遺構配置図

6. 平安時代の遺構と遺物

発見された平安時代の遺構には、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、焼土遺構、土壙があり、住居および土壙等からは、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄滓、羽口等の遺物が出土している。以下、中峯Ａ遺跡、Ｃ遺跡の順に記述していく。

＜1＞中峯Ａ遺跡

1）竪穴住居跡

第１号住居跡（第９図）

〔平面形・重複・規模〕第１号住居跡は第 14 号住居跡・第３号掘立柱建物跡と重複し、前者を切り、後者に切られている。平面形は、長方形と考えられる。規模は東西軸約 5.2m、南北軸約 3.2m ある。

〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上る。床面は地山面と一致し、ほぼ平坦で、北西から南東に向かってゆるやかに傾斜する。

〔堆穫土〕堆積土は３層に大別され自然流入土である。第Ⅰ層は黒色のしまりのないシルトである。第Ⅱ層は、灰黄褐色のシルトで、灰白火山灰が混入している。第Ⅲ層は褐色のシルトで壁ぎわに堆積している。

〔出土遺物〕図示したものは６点である。その内、床面から須恵器坏１点、堆積土中から、赤焼土器坏３点、灰釉陶器皿１点、緑釉陶器坏１点が出土している。灰釉陶器は皿型のもので、口縁部から高台脇にかけての破片である。口縁端部がわずかに外反する。内外面ともにオリーブ色の釉が漬け掛けされている。

緑釉陶器は、坏の小片である。軟質で、内外面ともミガキをしたのち釉を施している。

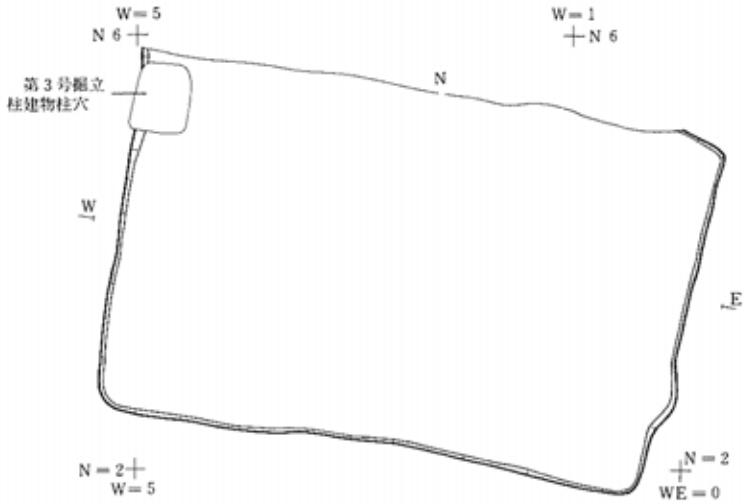
第２号住居跡（第 10、11 図）

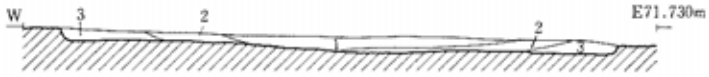
〔平面形・規模〕第２号住居跡は、一辺約 3.4m の隅丸の正方形である。

〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上り、壁高は遺構確認面から 20～60 cmある。床面は、北から南に向かってゆるやかに傾斜するがおおむね平坦で、地山面と一致している。

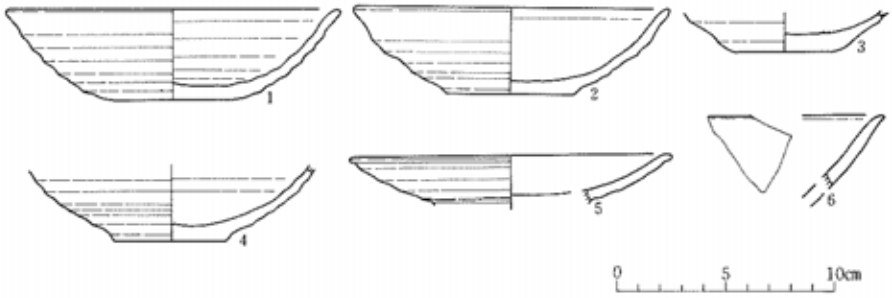
〔施設〕施設には床面から円形のピット４個と住居外へと延びる暗渠が検出された。円形ピットは径 60～80cm、深さ 15～20cm で、いずれも柱痕跡は認められなかった。暗渠はカマド燃焼部前の落ち込み付近と住居南壁の約 1.2m 離れた地点の２方向から掘り込まれ、さらに南側には、溝状になって延びる。長さ約 3.4m 巾 15～20cm あり、斜面にそっている。

〔カマド〕住居東壁南寄りに付設されており、熱焼部と煙道部からなる。焚口付近の床が、若干掘り込まれている。天井部はすでに崩落しているが側壁は比較的保存がよい。粘土を積みあ



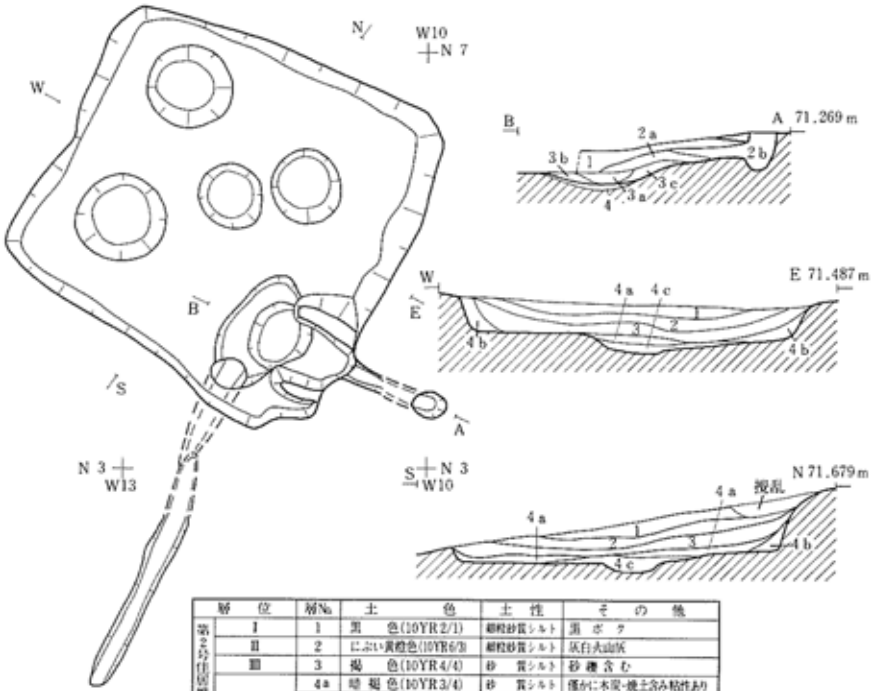


層　位	層No	土　　色	土　性	そ の 他
Ⅰ	1	黒　色(10YR7/1)	シルト	キラキラ光る白い砂粒含む（黒ボク）
Ⅱ	2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	キラキラ光る白い砂粒含む
Ⅲ	3	褐　色(10YR4/6)	砂質シルト	キラキラ光る白い砂粒含む（地山ローム層に近い層位で出土）



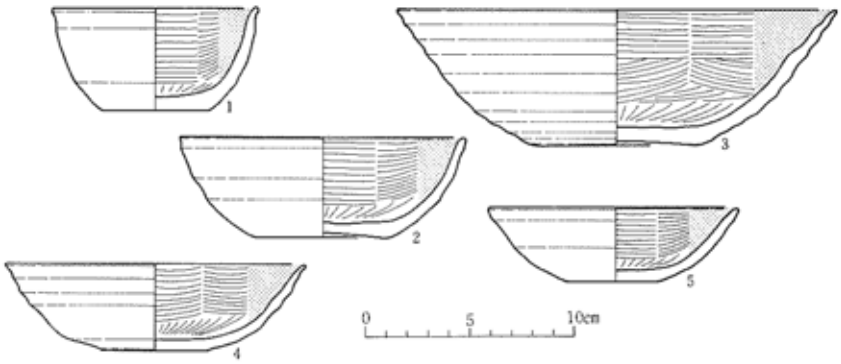
番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	須恵器	坏	15.3	5.1	4.2	ロクロ	ロクロ	回糸		床面	Ⅲ	1-5
2	赤焼土器	坏	14.6	6.0	4.0	ロクロ	ロクロ	回糸		3	Ⅱ	1-6
3	〃	〃	—	—	(4.5)	ロクロ	ロクロ	回糸		1	Ⅱ	1-7
4	〃	〃	—	—	(5.0)	ロクロ	ロクロ	回糸		3	—	1-3
5	灰釉陶器	皿	14.8			ロクロ	ロクロ			3		1-1
6	緑釉陶器	坏				ミガキ	ミガキ			1		1-2

第９図　第１号住居跡と出土遺物

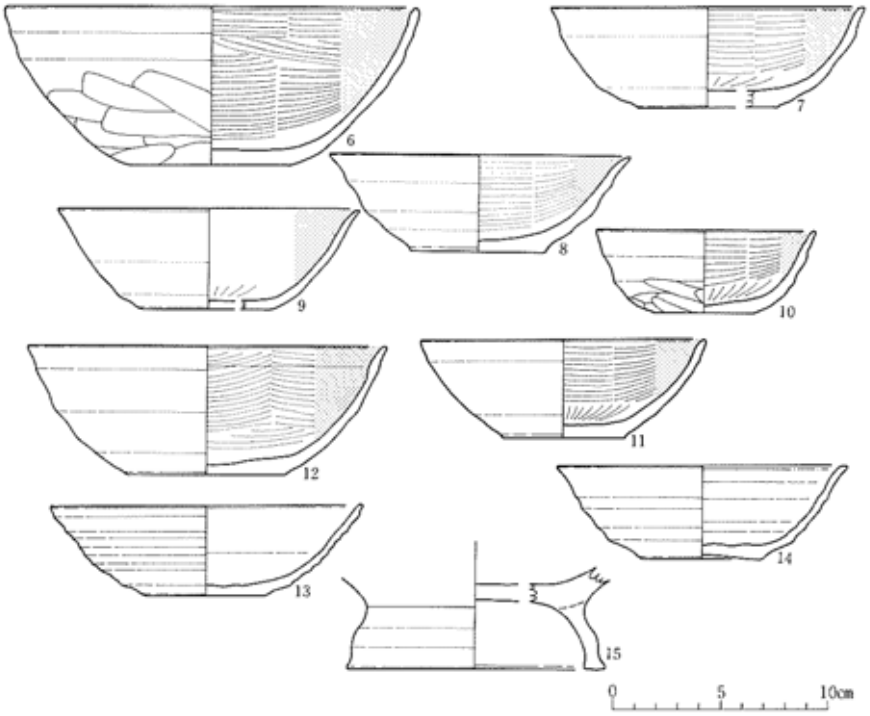


層位		層No.	土色	土性	その他
第2号住居埋積土	Ⅰ	1	黒色(10YR2/1)	細粒砂質シルト	黒ボク
	Ⅱ	2	にぶい黄橙色(10YR6/3)	細粒砂質シルト	灰白火山灰
	Ⅲ	3	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	砂礫含む
	Ⅳ	4a	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	僅かに木炭・焼土含み粘性あり
		4b	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	黄褐色(10YR5/6)土ブロック含む
		4c	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	木炭・焼土含み、粘性あり、遺物多い

層位	層No.	土色	土性	その他
第2号住居カマド埋積土	1	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	砂礫含む
	2a	赤褐色(5YR4/8)	砂質シルト	焼土ブロック(カマド崩壊土)
	2b	褐色(10YR4/4)	シルト	
	3a	黒褐色(10YR3/2)	シルト	赤褐色(5YR4/8)砂質シルト含む
	3b	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	3c	暗赤褐色(5YR3/6)	シルト	焼土ブロック
	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	掘り方埋土



第10図　第２号住居跡と出土遺物



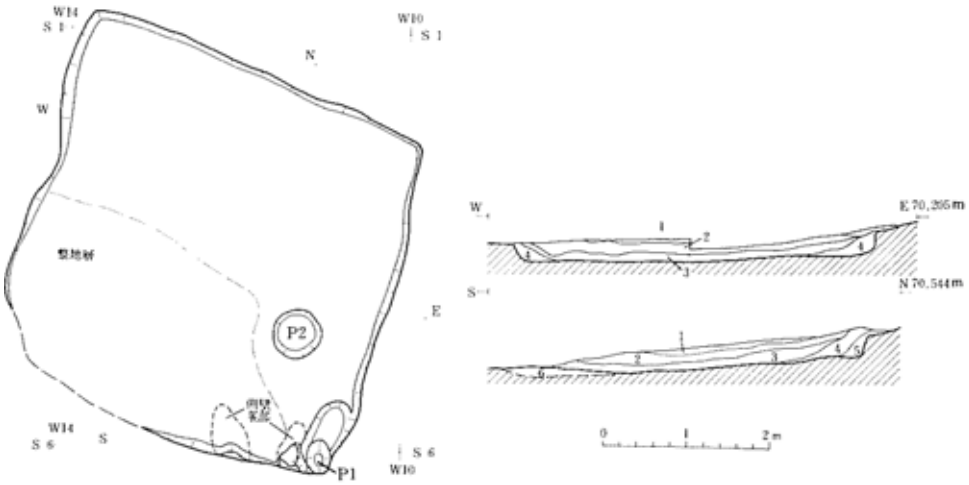
番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	9.7	5.0	4.9	ミガキ+黒	ロクロ	ヘラケズリ		床直	A	2-1
2	土師器	坏	13.6	6.4	4.7	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		［illegible］	BI	2-4
3	土師器	坏	21.0	7.9	6.5	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		床直	C	2-5
4	土師器	坏	14.3	4.8	4.1	ミガキ+黒	ロクロ	回糸	人 来	［illegible］	BIV	2-6
5	土師器	坏	12.0	4.5	3.5	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		床直	BIV	2-9
6	土師器	坏	19.2	7.4	7.4	ミガキ+黒	ロクロ+手ヘラ	ヘラケズリ		床直	C	2-11
7	土師器	坏	14.5	6.4	4.7	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		床直	BIII	2-12
8	土師器	坏	14.0	6.2	4.5	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		［illegible］	BIV	2-13
9	土師器	坏	14.1	5.8	4.7	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		［illegible］	BIV	2-14
10	土師器	坏	10.3	4.7	3.9	ミガキ+黒	ロクロ+手ヘラ	ヘラケズリ		3	A	2-2
11	土師器	坏	13.2	5.5	4.5	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		3	BIII	2-3
12	土師器	坏	16.6	7.4	6.0	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		4	BI	2-10
13	須恵器	坏	14.5	5.3	4.2	ロクロ	ロクロ	回糸		床直	III	2-8
14	須恵器	坏	14.7	5.7	4.4	ロクロ	ロクロ	回糸		4	III	2-7
15	赤焼土器	台付鉢	—	12	—	ロクロ	ロクロ	—				2-15

第11図　第２号住居跡出土遺物

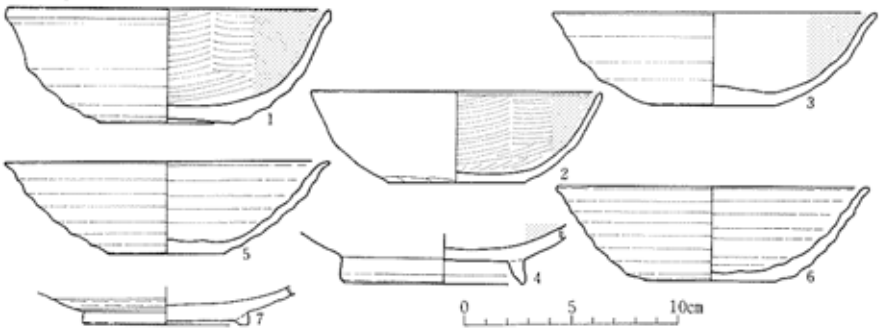
げて構築されている。煙道は地下式のもので、長さ約 70 cmあり、先端に径約 36 cm、深さ約 30 cmの煙出しピットがとりつく。

〔堆積土〕住居内堆積土は、4 層に大別され自然流入土である。第Ⅰ層は黒色のしまりのないシルトである。第Ⅱ層は灰白色の火山灰層である。第Ⅲ層は褐色のシルト層で砂、礫等を多く含む。第Ⅳ層は、暗褐～黄褐色のシルト層で、壁ぎわから住居床面を覆う。炭化物、焼土を含み、床面近くからは遺物が多く出土している。

〔出土遺物〕図示できたものは 15 点ある。その内、床面から土師器坏 5 点、須恵器坏 1 点が、



層位		層No.	土色	土性	その他
第3号住居跡埋土	Ⅰ	1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	スミ、小レキを含む
	Ⅱ	2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	スミを含むが、粗密あり、黒色土でしまりが異なる
	Ⅲ	3	浅黄色(2.5YR7/3)	シルト	灰白色のシルトで、[illegible]ブロック状に広がる
	Ⅳ	4	褐色(7.5YR4/4)	シルト	ベースが[illegible]なるシルトが多く含み、凡家をたいしめるしまりが悪い
		5	褐色(7.5YR4/6)	シルト	ブロックを含む
		6	明赤褐色(2.5YR5/8)	粘土質シルト	整地層



番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	15.0	6.4	5.4	ミガキ+黒	ロクロ	回糸			BⅠ	3-3
2	〃	坏	13.6	6.4	4.2	ミガキ+黒	ロクロ+手ヘラ	回糸+手ヘラ		Pit 1	BⅡ	3-4
3	〃	坏	15.2	5.7	4.4	ミガキ+黒	ロクロ不明	不明		4	BⅣ	3-6
4	〃	高台付坏	—	8.4	—	ミガキ+黒	ロクロ	回ケズリ		1		3-7
5	須恵器	坏	15.2	5.4	4.3	ロクロ	ロクロ	回糸		床	Ⅲ	3-2
6	〃	坏	14.7	6.0	4.4	ロクロ	ロクロ	回糸		Pit 2	Ⅱ	3-5
7	瓦類陶器	高台皿	—	7.0	—	ロクロ	回ヘラ	回ヘラ ケズリ	他はハケ目	床		3-1

第12図　第３号住居跡と出土遺物

カマド内から土師器坏4点が、堆積土中から土師器坏3点と須恵器坏1点が出土している。これらの中で、4は火熱を受けて内面の黒色処理されたものが赤変している。

第3号住居跡（第12図）

〔平面形・規模〕第3号住居層跡は、南西壁から南壁の一部にかけて削平されているが、残存部から正方形を呈すると考えられる。規模は南約4.4m、東西4.4mある。

〔壁・床面・施設〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上る。壁高は保存のよい北壁で約30㎝ある。床面は自然地形が南側に傾斜しているため、北半分は地山を削り出して南半分は盛土してから床としている。積土は最も厚い部分では約15㎝ある。床面南東部からピットが2個検出されたが、いずれも柱痕跡は認められなかった。

〔カマド〕ほとんどが削平されている。住居南壁東寄りからカマド側壁の痕跡と燃焼部底面の焼面と思われる部分が検出された。

〔堆積土〕住居内堆積土は、4層に大別され、北から南に流れ込んだ堆積状況を示す自然流入土である。第Ⅰ層は褐色のシルトで、礫を多く含む。第Ⅱ層は黒褐色のしまりのないシルトである。第Ⅲ層は灰白火山灰である。第Ⅳ層は褐色のシルトで、壁際から、床面にかけてうすく堆積している。

〔出土遺物〕図示できたものは7点ある。その内、床面及び床面のピットから土師器坏2点、須恵器坏2点、灰釉陶器高台皿1点が、堆積土から土師器坏・高台坏が各1点出土している。灰釉陶器は、高台部の破片である。付高台で、体部下端から底部にか回転ヘラケズリされている。淡青色の釉が内面にのみ刷毛塗りされている。

第4号住居跡（第13、14図）

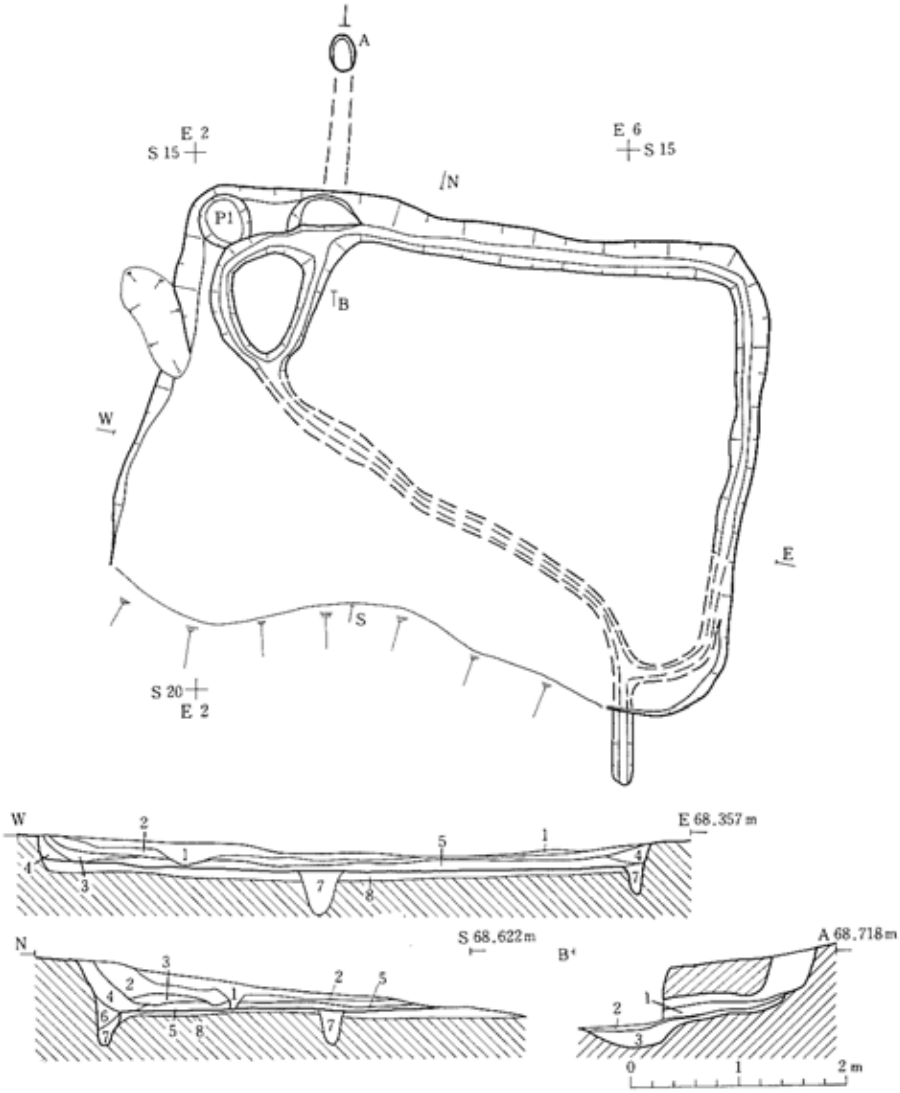
〔平面形・規模〕第4号住居跡は南側が削平されているが、残存部分から住居平面形は隅丸長方形と推定される。規模は南北4.4m、東西5.6mある。

〔壁〕検出された壁は床面から、ほぼ垂直に立ちあがる。最も保存のよい、北壁で高さ約50㎝ある。

〔床面〕床面は自然地形が南に傾斜しているため、南半分を盛土してから床としている。積土は、北壁際まであり最も厚い南側で10～12㎝ある。

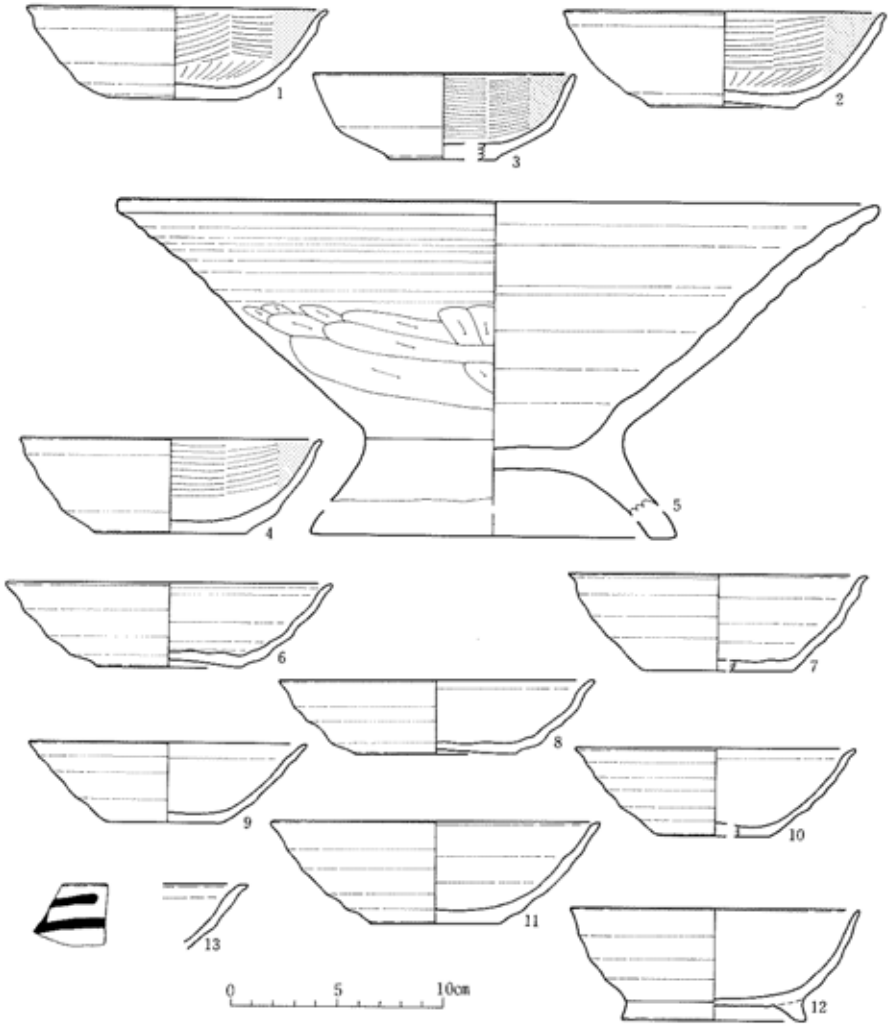
〔周溝〕北・東壁直下から周溝が、床面下から暗渠となり南東隅の部分で接続する。また北西隅の部分は2つに分かれ、1方はカマド底面に延びている。周溝は巾20～30㎝、深さ約30㎝で、断面形は「U」字形である。

〔カマド〕住居北壁の西寄りに付設されており、燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部は奥壁側半分のみ残存しており壁を掘り込んでいる。底面は僅かに掘りくぼめられている。煙道は地下式のもので長さ約120㎝、径20㎝あり、先端に径30㎝、深さ40㎝の煙出しピットがとりつく。



層位		層No.	土色	土性	その他
カマド内堆積土		1	褐色(10YR4/5)		
		2	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土、炭化物多く含む
		3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土、炭化物非常に多く含む
層位		層No.	土色	土性	その他
住居内堆積土	I	1	黒色(10YR2/1)	シルト	パサパサしてしまりなし、黒ボクト
		2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	パサパサしてしまりなし
	II	3	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	パサパサしてしまりなし、灰白火山灰ト
	III	4	褐色(10YR4/6)	シルト	遺物を多く含む
		5	黄褐色(10YR5/6)	シルト	7.5YR5/6明褐色ブロック(地山)を多く含む
周溝内堆積土		6	褐色(10YR4/4)	シルト	
		7	黄褐色(10YR5/6)	シルト	7.5YR5/6明褐色ブロック(地山)を多く含む

第13図　第4号住居跡



番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	14.0	5.8	4.3	ミガキ＋黒	ロクロ	回糸＋ヘラ		ホ$^{マド}_{2}$	BVI	4-3
2	〃	坏	15.0	6.8	4.5	ミガキ＋黒	ロクロ	回糸		ヘ$^{ヒ}_{1}$	BII	4-4
3	〃	坏	12.1	5.0	4.1	ミガキ＋黒	ロクロ	回糸		4	BIII	4-5
4	〃	坏	14.0	7.0	4.4	ミガキ＋黒	ロクロ	回糸		4	BII	4-7
5	〃	台付鉢	35.5	—	—	ロクロ	ロクロ＋ヘラ高台ナデ	不明	高台の付根部分のみの出土	周堤		4-12
6	須恵器	坏	14.9	6.6	4.0	ロクロ	ロクロ	回糸		周堤	I	4-1
7	〃	坏	13.8	6.8	4.5	ロクロ	ロクロ	回糸		周堤	IV	4-8
8	〃	坏	14.8	7.4	3.4	ロクロ	ロクロ	回糸		2	I	4-2
9	赤焼土器	坏	13.0	5.6	3.8	ロクロ	ロクロ	回糸		ヘ$^{ヒ}_{1}$	I	4-9
10	〃	坏	12.4	5.2	4.1	ロクロ	ロクロ	回糸		2	I	4-10
11	〃	坏	15.2	6.0	4.8	ロクロ	ロクロ	回糸		2	I	4-11
12	〃	高台付坏	13.4	8.6	5.2	ロクロ	ロクロ	ヤスリ？	高台	4		4-6
13	須恵器	坏	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	小片墨書あり	周堤		4-13

第14図　第４号住居跡出土遺物

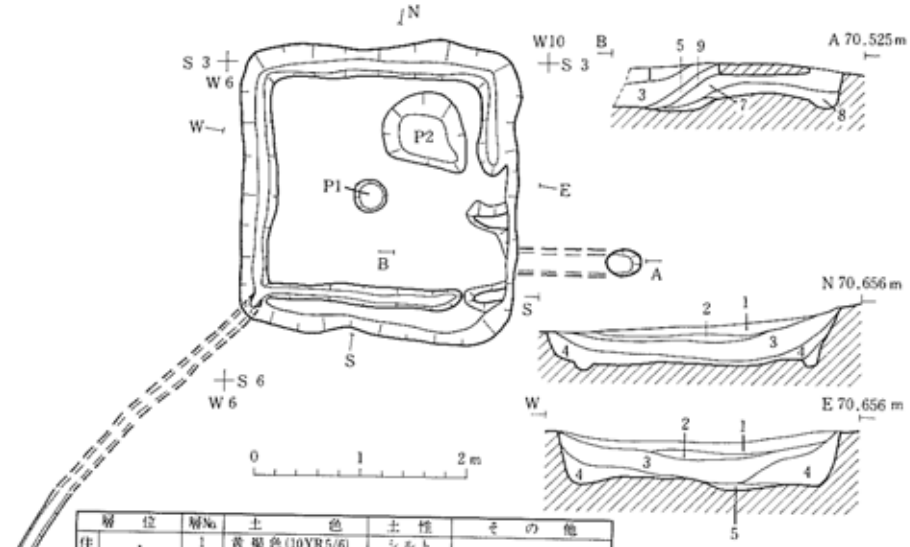
〔その他の施設〕住居北西隅に径約40cm、深さ約15cmの円形のピットがある。
〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別され、北から南に流れ込んだ堆積状況を示す自然流入土である。第Ⅰ層は、黒～黒褐色のしまりのないシルトである。第Ⅱ層は、灰白火山灰である。第Ⅲ層は、褐～黄褐色のシルト層で、炭化物や地山のブロックを多く含む。遺物はⅢ層から多く出土しており、北壁に近い所では、北側からころがり込んで堆積したような出土状態を示すものも見られた。
〔出土遺物〕図示できたものは13点ある。その内、カマド、床面ピットから土師器坏2点、赤焼土器坏1点が、周溝内堆積土、住居内堆積土から土師器坏2点、鉢1点、須恵器坏4点、赤焼土器坏3点が出土している。これらの中で第14図5は、第6号住居跡出土のものと接合関係が認められる。

第5号住居跡（第15図）

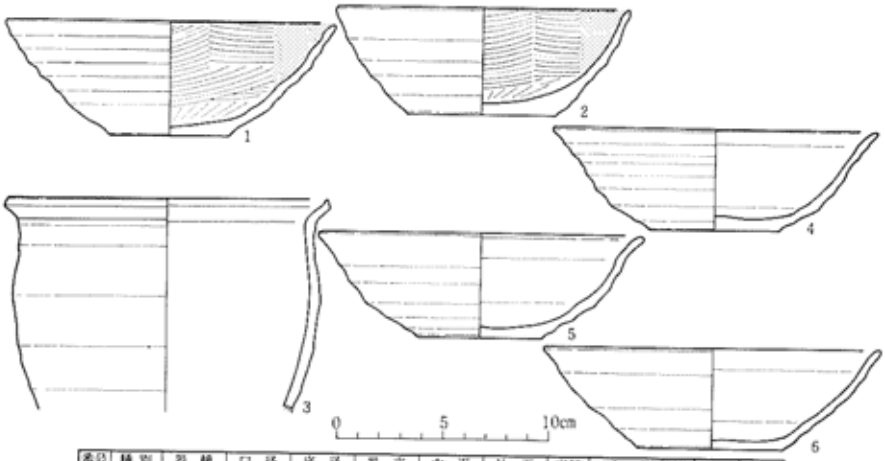
〔平面形・規模〕第5号住居跡は、一辺約2.6mの隅丸の正方形である。
〔壁・床面・施設〕検出された壁は地山で、ほぼ垂直に立ち上り、高さ30～60cmある。床面はほぼ平坦で、地山である。床面の中央部には円形のピット1(30×30×5cm)が、北東隅には不整形のピット2(80×60×15cm)があるが、いずれからも柱痕跡は検出されなかった。
〔周溝〕カマドを除く住居の壁にそって周溝が巡っている。東・北・西側は壁直下に、南側は壁と約10cmの間をもち掘り込まれている。断面形は「U」字形で巾約20cm、深さ5～10cmある。また周溝は南西隅から暗渠となり住居外へと続く。
〔カマド〕住居東壁南寄りに付設されており、燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部は底面を僅かに掘りくぼめ、中央には坏を2つかさねてふせて、支脚としている。側壁は粘土を積みあげて構築している。煙道は地下式のもので長さ約100cmあり先端に径約30cm、深さ約30cmの煙出しピットがとりつく。
〔堆積土〕住居内堆積土は4層に大別され自然流入土である。第Ⅰ層は黄褐～黒褐色のシルトで炭化物を多く含む、第Ⅱ層は、褐色のシルトで地山ブロックを多く含む、第Ⅲ層は褐色のシルトで壁際に堆積している。第Ⅳ層は黒褐色のシルトで床面を覆うように堆積しており、炭化物、焼土を多く含む、遺物は第3、4層から多く出土している。
〔出土遺物〕図示できたものは6点ある。床面から土師器坏1点、堆積土中から土師器甕1点、須恵器坏2点が出土している。また2、5はカマドの支脚として用いられていた。

第6号住居跡（第16図）

〔平面形・規模〕第6号住居跡の平面形は隅丸の方形で、南北軸約2.9m東西軸約2.5mの規模をもつ。
〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上る。壁高は保存のよい北壁で



層位		層No.	土色	土性	その他
住居内堆積土	I	1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	
		2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物非常に多い
	II	3	褐色(7.5YR4/6)	シルト	地山ブロック含む
	III	4	褐色(10YR4/6)	シルト	
	IV	5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物・焼土含む
周溝内堆積土		6	黄褐色(10YR5/6)	シルト	
カマド内堆積土		7	褐色(7.5YR4/6)	シルト	炭化物のし含む
		8	赤褐色(8.5YR4/6)	シルト	炭化物・焼土非常に多く含む
		9	暗赤褐色(5YR3/6)	シルト	焼土含む



番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	15.4	5.8	5.4	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		床	BIII	5-4
2	〃	坏	13.7	6.9	5.0	ミガキ+黒	ロクロ	回糸+ミ?	支脚	3	BIII	5-5
3	〃	甕	15.2	—	—	ロクロ	ロクロ	—		3	B	5-6
4	須恵器	坏	15.2	6.0	4.7	ロクロ	ロクロ	回糸		3	V	5-1
5	〃	坏	15.2	5.8	4.8	ロクロ	ロクロ	回糸	生[illegible]	3	V	5-2
6	〃	坏	15.6	6.7	4.3	ロクロ	ロクロ	回糸		3	II	5-7

第15図　第5号住居跡と出土遺物

約60mある。床面はほぼ平坦で地山である。

〔カマド〕住居東壁南寄りの部分に焼土、炭化物の分布が見られたが、カマドについては、不明である。煙道はない。

〔堆積土〕堆積土は4層に大別され、北側から流れ込んだ堆積状態を示めす自然流入土である。第Ⅰ層は黒色のしまりのないシルトである。第Ⅱ層は灰白火山灰である。第Ⅲ層は褐色～黄褐色のシルトで、住居全体に広がる。第Ⅳ層は明褐～赤褐色のシルトで、壁・床面を直接おおう。

〔出土遺物〕図示できたものは3点（土師器坏、台付鉢、須恵器坏）あり、いずれも堆積土中から出土している。この中で台付鉢は第4号住居跡のものと接合関係が認められた。（第14図5）

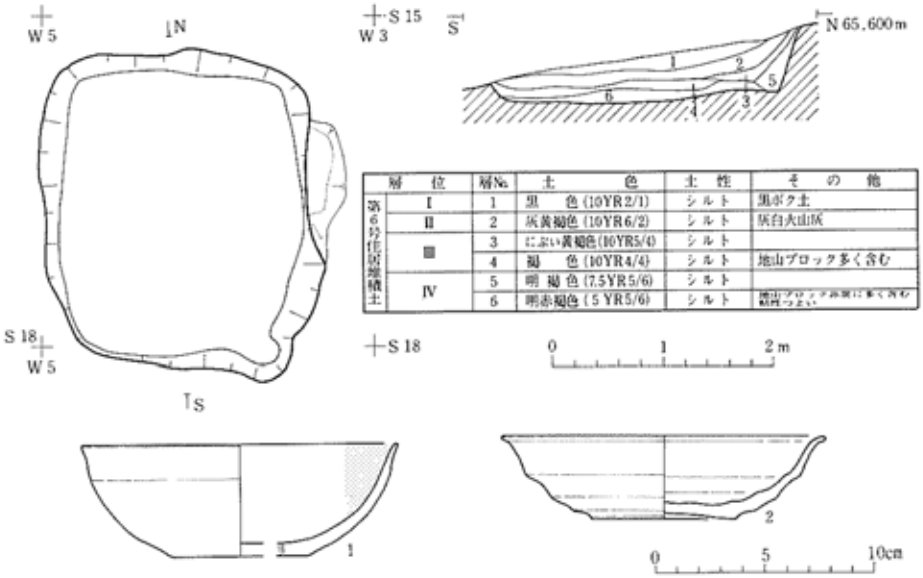
第7号住居跡（第17図）

〔平面形・規模〕第7号住居跡は南壁が削平されているが、残存部から平面形は方形を呈すると、思われる。規模は東西軸約2.9mある。

〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からゆるやかに立ち上る。壁高は保存のよい北壁で約15cmある。床面は地山でほぼ平坦で、南側に向かってゆるやかに傾斜する。

〔カマド〕住居北西隅に付設されており、燃焼部のみ残存する。傾壁は焚きに河原石をすえ、それに粘土をはりつけて構築している。底面はわずかにくぼみ、鏡面となっている。

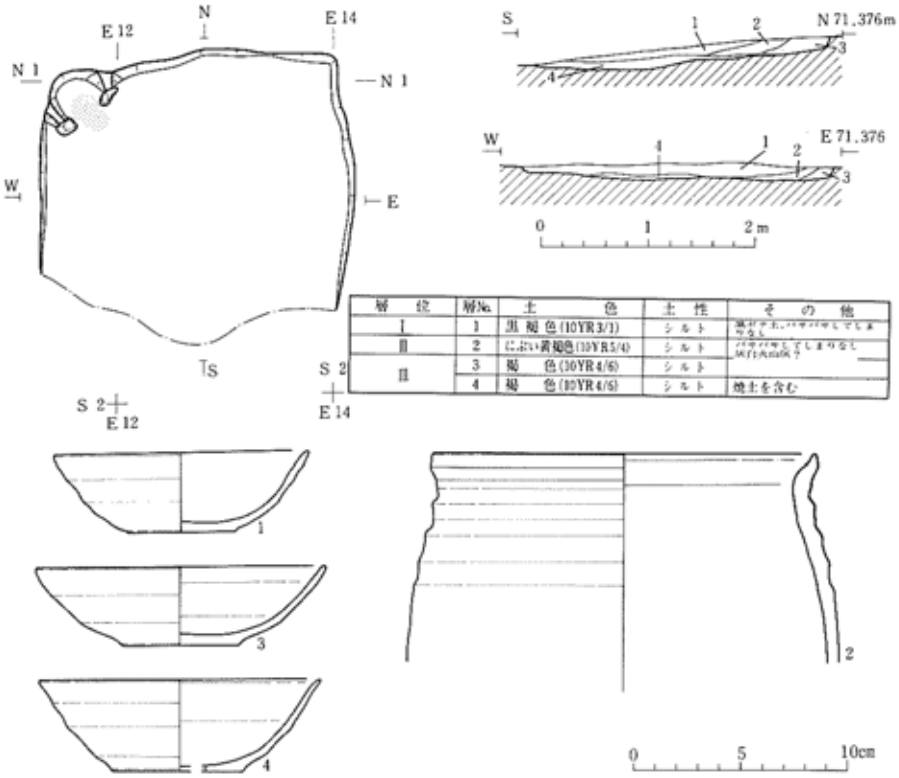
〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別され、北側から流れ込んだ堆積状態を示す。自然流入土



層位	層No.	土色	土性	その他
第6号住居跡堆積土 Ⅰ	1	黒色(10YR2/1)	シルト	黒ボク土
Ⅱ	2	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	灰白火山灰
Ⅲ	3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
	4	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック多く含む
Ⅳ	5	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	
	6	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	地山ブロック非常に多く含む 粘性つよい

番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	14.2	6.2	5.1	ﾐｶﾞｷ+黒	ﾛｸﾛ+？	手ヘラ		3	B1	6-2
2	須恵器	坏	14.6	6.8	3.8	ロクロ	ロクロ	回糸		3	1	6-1

第16図　第6号住居跡と出土遺物



層位	層No.	土色	土性	その他
Ⅰ	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	踏がため、パサパサしてしまうなし
Ⅱ	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	パサパサしてしまうなし MFLmaBK?
Ⅲ	3	褐色(10YR4/6)	シルト	
	4	褐色(10YR4/6)	シルト	焼土を含む

番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	11.8	4.9	3.7	不明	ロクロ	回糸		2	BⅣ	7-3
2	〃	甕	17.8	—	9.6	ロクロ	ロクロ	—		2	AⅢ	7-4
3	須恵器	坏	12.5	5.5	3.7	ロクロ	ロクロ	回糸		2	Ⅱ	7-1
4	赤焼土器	坏	13.0	5.8	4.3	ロクロ	ロクロ	回糸		2	Ⅰ	7-2

第17図　第７号住居跡と出土遺物

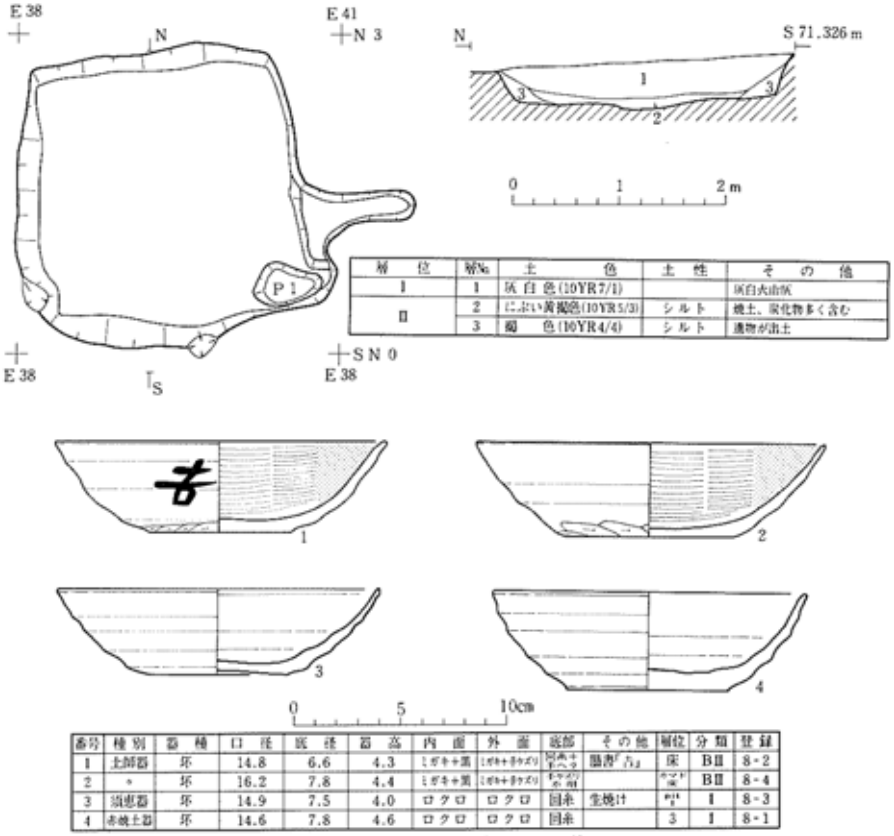
である。第Ⅰ層は黒褐色のしまりのないシルトである。第Ⅱ層は灰白火山灰である。第Ⅲ層は褐色のシルトで壁際から床面をおおう。

〔出土遺物〕図示できたものは４点あり、いずれも堆積土中から出土している。他に床面等からも出土しているが、量的にも少なく細片がほとんどである.

第８号住居跡（第18図）

〔平面形・規模〕第８号住居跡は南壁に比べ北壁も短かいやや不整の方形で、規模は東西軸約2.6m南北軸約2.8mある。

〔壁・床面・施設〕検出された壁は地山で、南壁は比較的ゆるやかに、それ以外の壁は床面からほぼ垂直に立ち上る。壁高は40～60 cmある。床面には中央部がやや落ち込み、全体的に凹凸が見られるが、本来は貼床がされていた可能性がある。床面には、カマド右側の南東隅に楕円形のピットが１個あり、土器が集中して出土した。



層位	層No.	土色	土性	その他
Ⅰ	1	灰白色(10YR7/1)		灰白火山灰
Ⅱ	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	焼土、炭化物多く含む
	3	褐色(10YR4/4)	シルト	遺物が出土

番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	14.8	6.6	4.3	ミガキ＋黑	ミガキ＋ヨコナデ	回糸＋ヘラ	脚部(?)ヨ	床	BⅡ	8-2
2	〃	坏	16.2	7.8	4.4	ミガキ＋黑	ミガキ＋ヨコナデ	ヘラ切り未調整		カマド煙	BⅡ	8-4
3	須恵器	坏	14.9	7.5	4.0	ロクロ	ロクロ	回糸	生焼け	ピット	Ⅰ	8-3
4	赤焼土器	坏	14.6	7.8	4.6	ロクロ	ロクロ	回糸		3	Ⅰ	8-1

第18図　第８号住居跡と出土遺物

〔カマド〕住居東壁南寄りに付設されており燃焼部と煙道部からなっている。燃焼部は東壁を掘り込んで構築している。底面はわずかに窪み、奥壁は不明確でそのまま煙道部へと続く、煙道部は、地下式で長さ約70cm、巾30 cmある。

〔堆積土〕住居内堆積土は、2層に大別され、自然流入土である。第Ⅰ層は灰白火山灰で、住居全体に厚く堆積しており、特に西側は厚土30～40 cmにも達し、床面の直上までおおっている。第Ⅱ層はにぶい黄褐色～褐色のシルトで、壁際から床面にかけて堆積している。

〔出土遺物〕図示できたものは4点ある。その内、床面及びカマドから土師器坏2点、床面ピットから須恵器坏1点、堆積土中から赤焼土器坏1点が出土している。

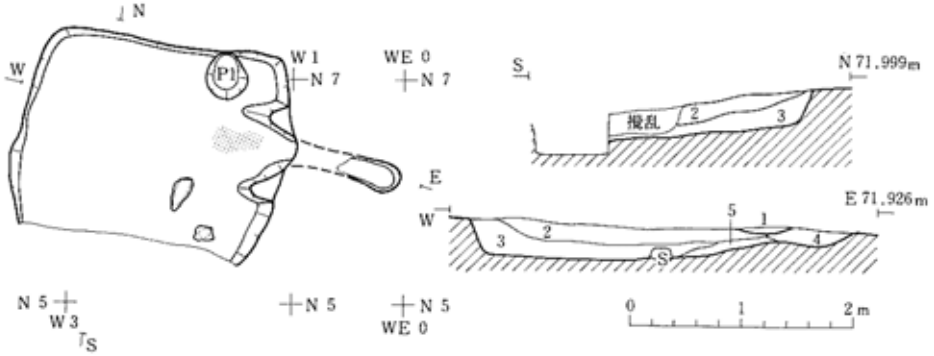
第9号住居跡（第19図）

〔平面形・規模・重複〕第9号住居跡は第14号住居跡を埋めて構築しており、これよりも新しい。平面形は南壁が掘りすぎのため不明であるが、残存部から方形を呈すると思われる。規模は東西軸約2.4m、南北軸約2.0m（推定）ある。

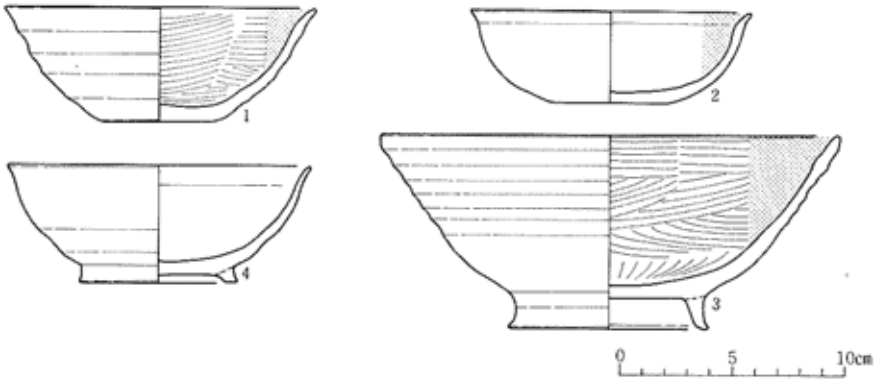
〔壁・床面・施設〕検出された壁は東壁が地山、それ以外は第 14 号住居の埋土で、床面からほぼ垂直に立ち上る。壁高は 20～30cm ある。床面はほぼ平坦で、14 号住居を埋めて床としている。施設は、住居北東隅のカマド左側に 40×50cm 程の楕円形のピットが認められた。

〔カマド〕住居東壁のほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は底面をわずかに掘り窪め、側壁は粘土をつみあげて構築されている。煙道部は地下式で、長さ約 100cm、巾 25cm ある。

〔堆積土〕住居内堆積土は 3 層に大別され、自然流入土である。第Ⅰ層は灰白火山灰である。第Ⅱ層は褐色のシルトで住居全体に堆積している。第Ⅲ層は褐色～暗褐色のシルトで、壁際か

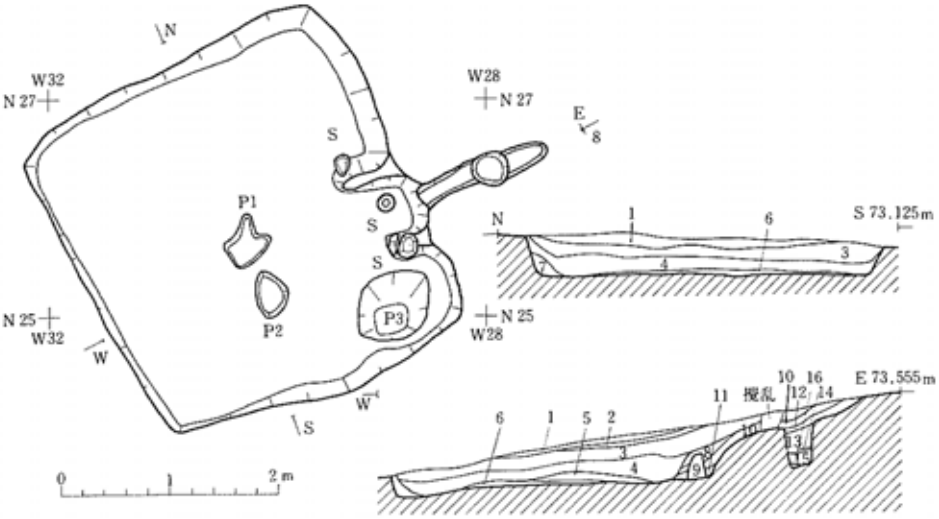


層位		層No.	土色	土性	その他
第9号住居堆積土	Ⅰ	1	にぶい黄褐色(10YR6/4)	シルト	灰白火山灰
	Ⅱ	2	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	白色砂粒スミを含む かたい
		3	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	赤分、少し粘性あり、さより強い、やわい
	Ⅲ	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	スミ、焼土少し含む
		5	赤褐色(5YR4/6)	シルト	スミ焼土塊(まっか)を多量に含む

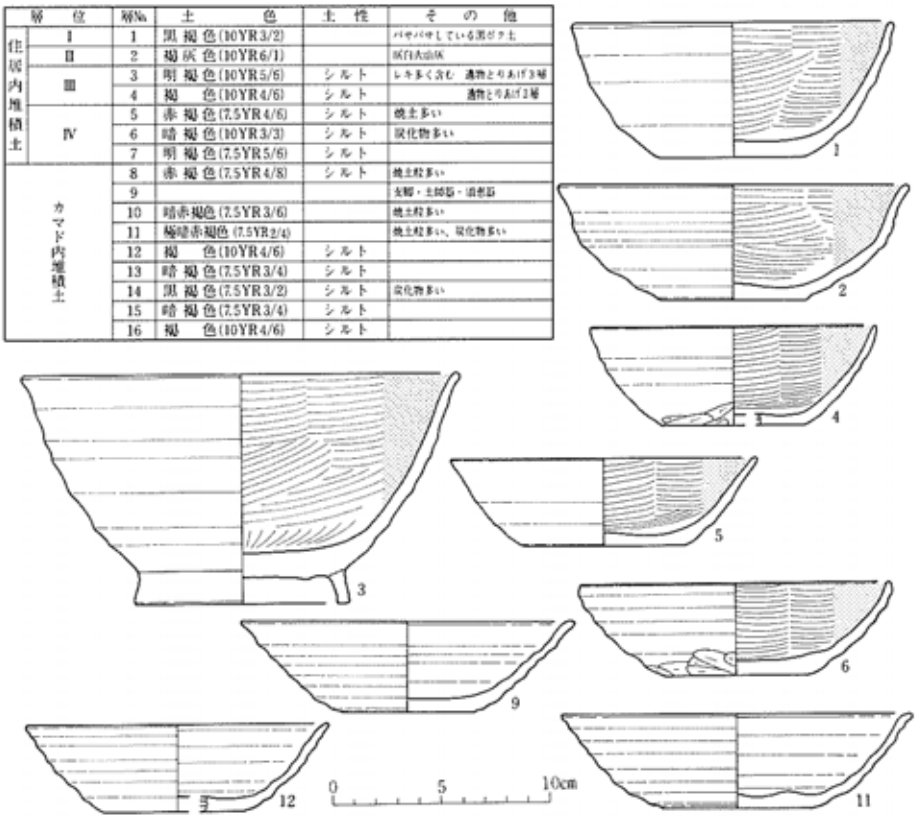


番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層No.	分類	登録
1	土師器	坏	13.8	5.2	5.1	ミガキ+黒	ロクロ	ヤナズリ不明		pit1	BⅢ	9-1
2	〃	坏	12.5	5.6	4.1	ミガキ+黒	ロクロ	不明		pit1	BⅠ	9-3
3	〃	高台付坏	20.4	9.0	8.6	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		pit1		9-4
4	赤焼土器	高台付坏	13.4	5.2	5.2	ロクロ	ロクロ	回糸		カマド		9-2

第19図　第９号住居跡と出土遺物



層位		層No.	土色	土性	その他
住居内堆積土	I	1	黒褐色(10YR3/2)		パサパサしている黒ボク土
	II	2	褐灰色(10YR6/1)		灰白火山灰
	III	3	明褐色(10YR5/6)	シルト	レキ多く含む 遺物とりあげ多層
		4	褐色(10YR4/6)	シルト	遺物とりあげ2層
	IV	5	赤褐色(7.5YR4/6)	シルト	焼土多い
		6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物多い
		7	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	
カマド内堆積土		8	赤褐色(7.5YR4/8)	シルト	焼土粒多い
		9			灰層・土師器・須恵器
		10	暗赤褐色(7.5YR3/6)		焼土粒多い
		11	極暗赤褐色(7.5YR2/4)		焼土粒多い、炭化物多い
		12	褐色(10YR4/6)	シルト	
		13	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
		14	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物多い
		15	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
		16	褐色(10YR4/6)	シルト	



第20図　第10号住居跡と出土遺物

ら床面にかけて厚く堆積する。

〔出土遺物〕図示できたものは4点ある。その内カマド内から赤焼土器坏1点が、カマド横ピットから土師器坏3点が出土している。

第10号住居跡（第20、21図）

〔平面形・規模〕第10号住居跡は、東西軸約3.1m、南北軸約3.2mの正方形である。

〔壁・床面・施設〕検出された壁は地山および段丘礫層で、床面からほぼ垂直に立ち上る。壁高は15～60 cmあり北東側の保存がよい。床面は段丘礫層で、非常に堅い。床には中央部に不整形（ピット1）と楕円形（ピット2）の、南東隅には方形のピットがある。これらの中でピット1は底面が焼け非常にかたく、埋土には炭化物が多く含まれていた。

〔カマド〕カマドは東壁南寄りに付設されており燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は、奥壁が住居東壁をわずかに掘り込んで作られている。側壁は、床面に河原石をすえ、それを、芯とし粘土を貼り付けて構築している。底面はわずかに窪み焼けており、中央部には坏9点と甕2点を伏せて重ね合わせた支脚がある。煙道部は地下式で、中央にピットがあり、それを埋めて使用している。湿気抜きの施設である可能性がある。長さ約120 cm、巾約25 cmある。

〔堆積土〕住居内堆積上は4層に大別され、東側から流れ込んだ堆積状況を示す。自然流入土である。第Ⅰ層は黒褐色のしまりのないシルトで“黒ボク土”である。第Ⅱ層は灰白火山灰で、東側にわずかに見られる。第Ⅲ層は褐色のシルトで住居全体に厚く堆積しており、礫を多く含む。第Ⅳ層は暗褐色のシルトで、壁際から床面全体を直接おおう。焼土・炭化物を多く含む。

〔出土遺物〕図示できたものは18点ある。その内カマドの支脚として土師器坏5点、甕1点、須恵器坏3点、甕1点、赤焼土器坏1点、床面から須恵器坏1点、ピット3から須恵器坏3点が、堆積土中から土師器と須恵器の坏が各1点出土している。またこの他にピット1からは炭化物に混じって鉄滓が出土している。

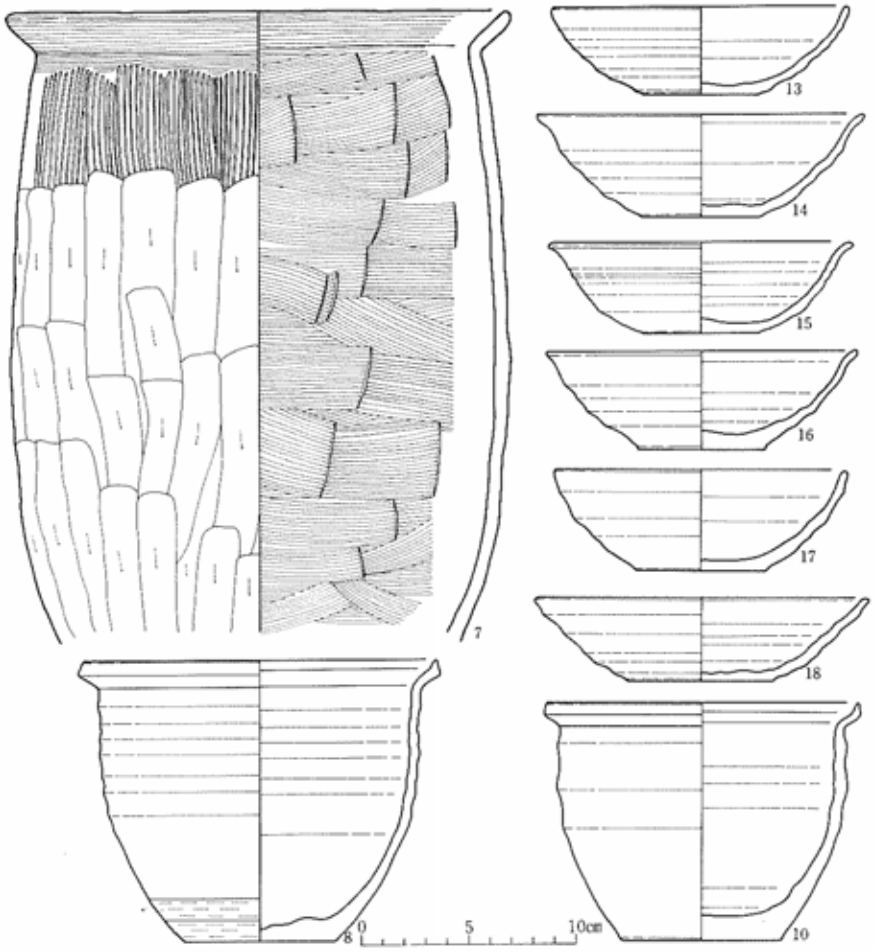
第11号住居跡（第22図）

〔平面形・規模〕第11号住居跡は方形を呈し、規模は東西軸約1.9m、南北軸約2.0mと非常に小形である。

〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上る。壁高は約15 cmある。床面は平坦で、地山である。

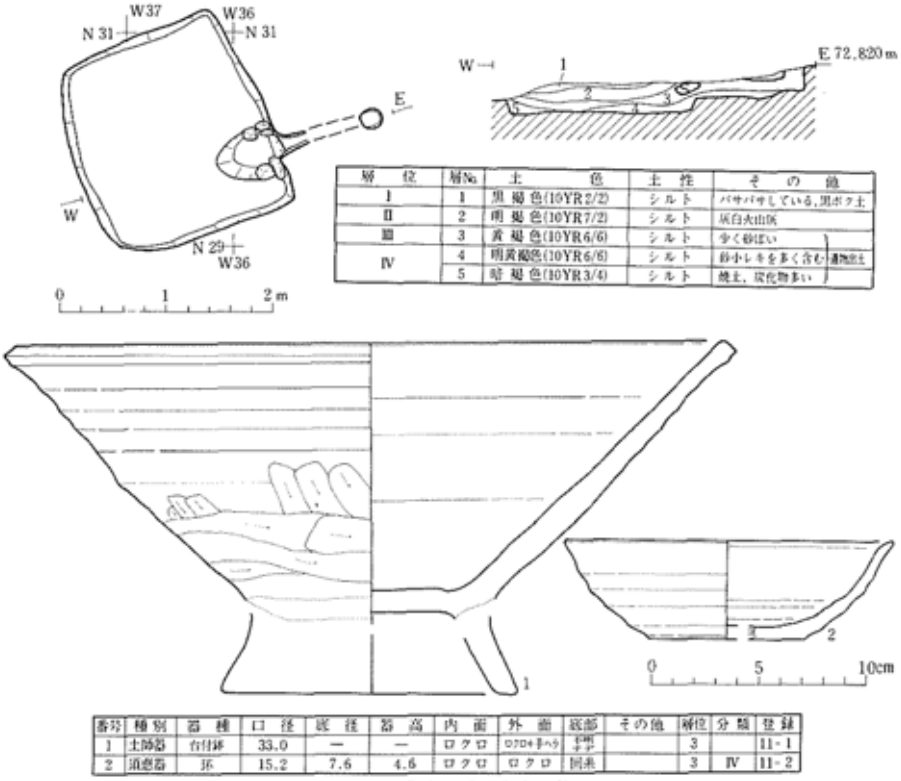
〔カマド〕カマドは東壁南寄りに付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は側壁に河原石を2～3個すえて、その上に天井石をのせ粘土をはり付けて構築している。底面はわずかに窪み、高さ約12 cmの奥壁を経て煙道部に至る。煙道は地下式で、長さ約80cm、巾約20 cmあり、先端に径20cmの深さ20cm煙出しピットがとりつく。

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に大別され、自然に流れ込んだ土である。第1層は黒褐色のし



番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	14.7	6.4	6.2	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		[illegible]	BI	10-2
2	〃	坏	16.0	6.8	5.3	ミガキ+黒	ロクロ+ヘラ			[illegible]	BI	10-3
3	〃	高台付坏	20.0	9.8	10.5	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		[illegible]		10-8
4	〃	坏	13.1	6.5	4.5	ミガキ(黒ずむ)	ロクロ+ヨコヘラ	[illegible]		カマド	BI	10-15
5	〃	坏	14.0	7.4	4.0	ミガキ+黒	ロクロ-不明	[illegible]		カマド	BIII	10-17
6	〃	坏	14.3	6.7	4.2	ミガキ+黒	ロクロ+ヨコヘラ	[illegible]		1	BIII	10-16
7	〃	甕	23.5	—	—	ヘラナデ	[illegible]	—		[illegible]	AI	10-4
8	〃	甕	16.3	7.0	13.1	ロクロ	[illegible]	回糸		カマド	B	10-18
9	須恵器	坏	15.2	6.0	4.3	ロクロ	ロクロ	回糸		Pit	II	10-1
10	〃	甕	14.4	7.5	11.1	ロクロ	ロクロ	回糸		[illegible]		10-5
11	〃	坏	16.0	6.7	4.8	ロクロ	ロクロ	回糸		[illegible]	II	10-6
12	〃	坏	13.8	5.9	4.0	ロクロ	ロクロ	回糸		[illegible]	II	10-9
13	〃	坏	13.9	5.4	4.1	ロクロ	ロクロ	回糸		[illegible]	II	10-10
14	〃	坏	15.2	5.6	4.8	ロクロ	ロクロ	回糸		床	V	10-12
15	〃	坏	14.6	5.3	4.2	ロクロ	ロクロ	回糸		カマド	III	10-13
16	〃	坏	14.4	5.7	4.7	ロクロ	ロクロ	回糸		[illegible]	V	10-7
17	赤焼土器	坏	13.6	6.0	4.7	ロクロ	ロクロ	回糸		カマド	I	10-14
18	須恵器	坏	15.5	6.6	3.9	ロクロ	ロクロ	回糸		3	II	10-11

第21図　第10号住居跡出土遺物



第22図　第11号住居跡と出土遺物

まりのないシルトで“黒ボク土”である。第2層は灰白火山灰である。第3層は黄褐色のシルトで砂、礫まじりの層である。第4層は暗褐色のシルトで、砂、礫まじりの層である。壁際と床面に薄く堆積している。

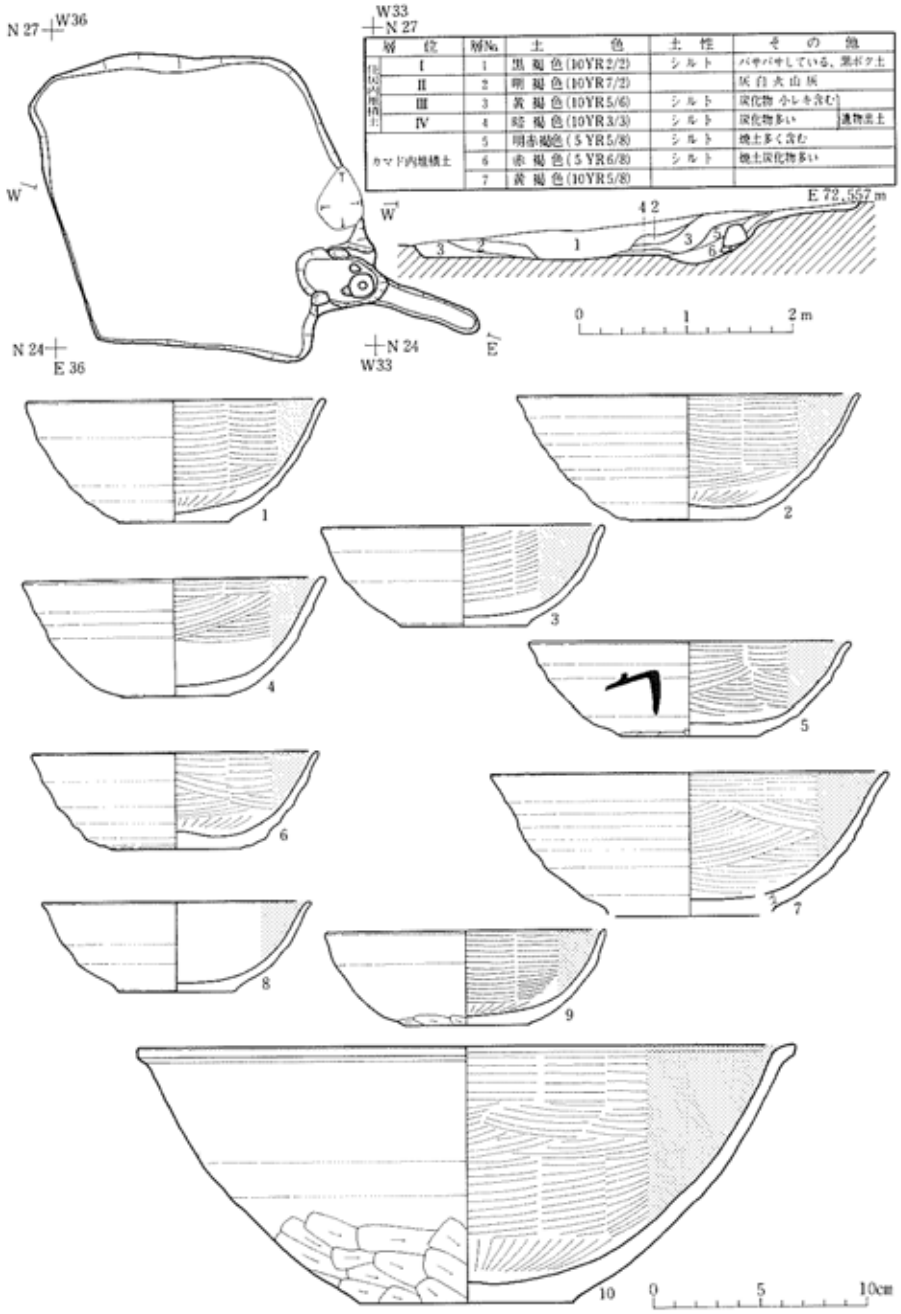
〔出土遺物〕図示できたものは3点あり（土師器甕1点、須恵器坏1点、赤焼土器甕1点）、赤焼土器は12号住居跡出土のものと接合関係がある（第25図18）。

第12号住居跡（第23、24、25図）

〔平面形・規模〕第12号住居跡は、各壁長が異なり、平行四辺形に近い不整の方形を呈している。規模は東西軸が約2.6m、南北軸が約2.8mある。

〔壁・床面〕検出された壁は地山および段丘礫層で床面からほぼ垂直に立ち上る。壁高は保存のよい北東側で20～40 cmあるが、南西半分は削平のためわずかに残存するにすぎない。床面は段丘礫層でほぼ平坦である。南東の方向にわずかに傾斜する。

〔カマド〕カマドは東壁寄りに付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の奥壁は住居東壁を掘り込んで作られている。側壁は焚口付近に河原石をすえ、それに粘土を貼り付け



層位		層No.	土色	土性	その他
住居跡堆積土	I	1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	パサパサしている、黒ボク土
	II	2	明褐色(10YR7/2)		灰白火山灰
	III	3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物 小レキ含む 遺物出土
	IV	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物多い
カマド内堆積土		5	明赤褐色(5YR5/8)	シルト	地土多く含む
		6	赤褐色(5YR6/8)	シルト	地土炭化物多い
		7	黄褐色(10YR5/8)		

第23図　第12号住居跡と出土遺物

て構築されているが、右側壁の一部は地山をそのまま削り出している。底面は奥壁から焚口にかけて舟底状に窪み、奥壁近くには伏せた甕を石で固定し支脚としている。煙道部は地下式で長さ約100㎝、巾30㎝ある。

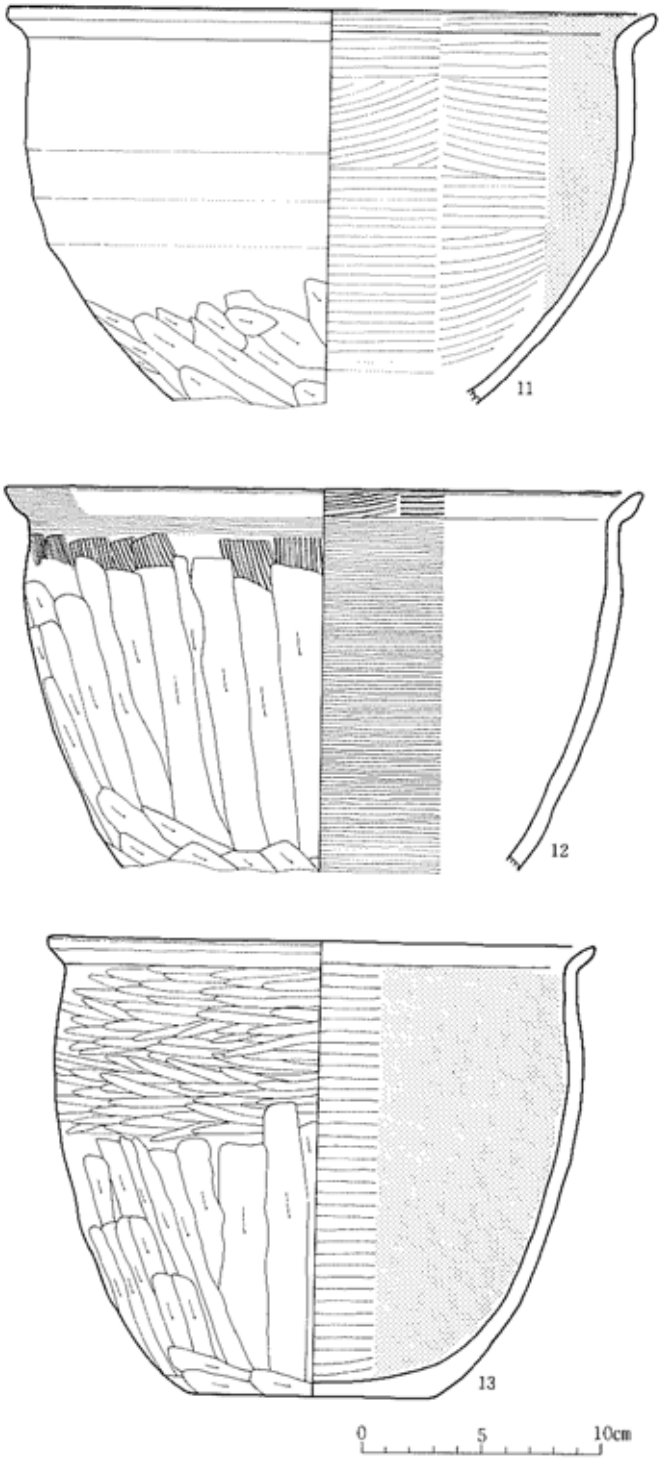
〔堆積土〕住居内堆積土は4層に大別され、自然流入土である。第Ⅰ層は暗褐色のしまりのないシルトである。全体的に厚く堆積しているが、中央部は攪乱のため床面近くまで見られる。第Ⅱ層は灰白火山灰である。第Ⅲ層は黄褐色のシルトで炭化物・礫を多く含む。第Ⅳ層は暗褐色のシルトで床面を直接おおう。

〔出土遺物〕図示できたものは18点ある。その内、床面から土師器坏4点、鉢2点、須恵器坏2点、赤焼土器甕1点出土した。この中で18は11号住居出土のものと接合関係が認められる。

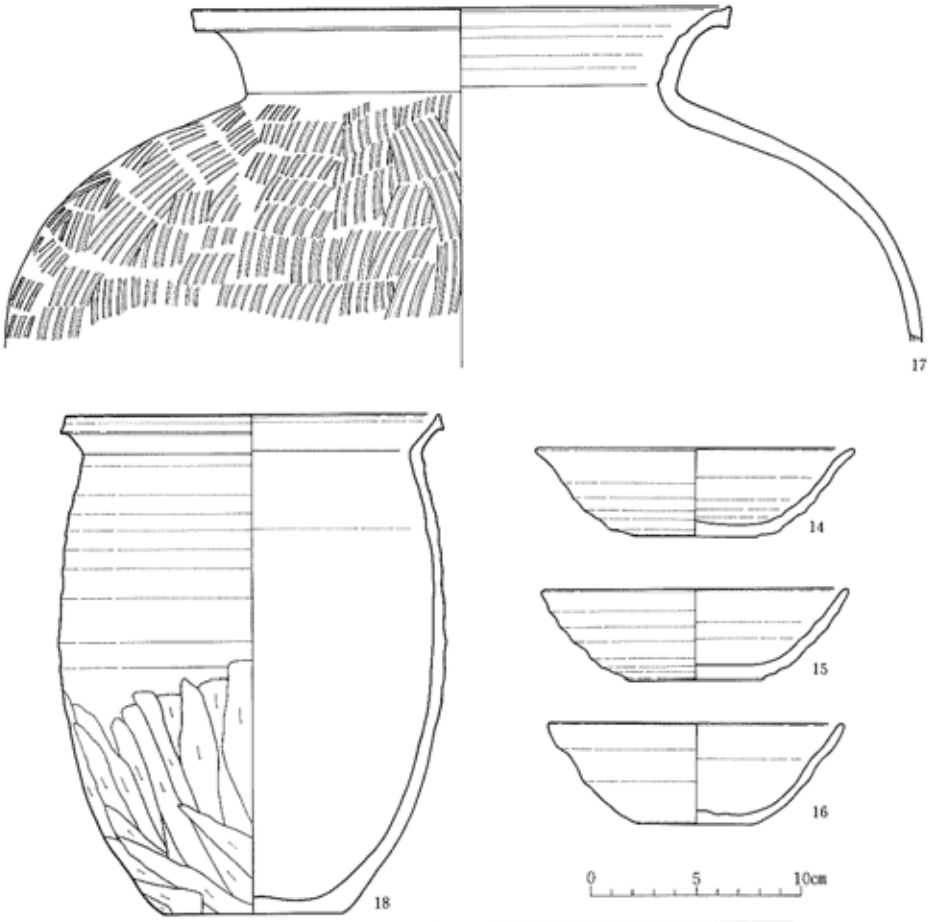
第13号住居跡（第26図）

〔平面形・規模〕第13号住居跡は平面形は隅丸の方形で、東西軸約2.0m、南北約2.0mの規模である。

〔壁・床面・施設〕検出された壁は地山で、床面からゆるやかに立ち上る。壁高は保存のよい北壁で約30㎝ある。床面はほぼ



第24図　第12号住居跡出土遺物②



番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	14.2	5.2	5.7	ﾐｶｷ+黒	ロクロ	回糸		床直	BⅢ	12-5
2	〃	坏	16.0	5.4	5.9	ﾐｶｷ+黒	ロクロ	回糸		床直	BⅣ	12-6
3	〃	坏	15.2	6.0	4.7	ﾐｶｷ+黒	ロクロ	回糸		床直	BⅢ	12-8
4	〃	坏	14.2	5.0	5.5	ﾐｶｷ+黒	ロクロ	回糸		床	BⅢ	12-10
5	〃	坏	15.0	6.5	4.4	ﾐｶｷ+黒	ｿｳﾛ+手ﾍﾗ	ｸﾞﾘｯﾄ多混	墨書有	3	BⅡ	12-4
6	〃	坏	13.4	6.0	4.5	ﾐｶｷ+黒	ロクロ	回糸		3	BⅣ	12-11
7	〃	坏	18.6	7.5	6.7	ﾐｶｷ+黒	ロクロ	—		3	BⅣ	12-12
8	〃	坏	12.6	5.4	4.2	ﾐｶｷ+黒	ロクロ	回糸		3	BⅣ	12-13
9	〃	坏	13.2	6.0	4.4	ﾐｶｷ+黒	ｿｳﾛ+手ﾍﾗ	回糸		3	BⅠ	12-14
10	〃	鉢	30.8	10.0	12.0	ﾐｶｷ+黒	ｿｳﾛ+手ﾍﾗ	手ﾍﾗ多混		床直	B	12-15
11	〃	鉢	26.6	—	—	ﾐｶｷ+黒	ｿｳﾛ+手ﾍﾗ	—		ｶﾏﾄﾞ	B	12-16
12	〃	鉢	26.5	—	—	ﾅﾃﾞｨﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ+ｹｽﾘ	—		床直	A	12-17
13	〃	甕	22.6	10.0	19.0	ﾐｶｷ+黒	ﾐｶｷ+ｹｽﾘ	無糸底		ｶﾏﾄﾞ多混	AⅠ	12-1
14	須恵器	坏	14.9	5.7	4.2	ロクロ	ロクロ	回糸		床直	Ⅲ	12-7
15	〃	坏	14.5	6.2	4.3	ロクロ	ロクロ	回糸		3	Ⅱ	12-2
16	〃	坏	14.0	5.4	4.8	ロクロ	ロクロ	回糸		3	Ⅴ	12-3
17	〃	甕	25.5	—	—	ロクロ	ｿｳﾛ+ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ	—		ｶﾏﾄﾞ		12-18
18	赤焼土器	甕	17.8	8.5	23.7	ロクロ	ｿｳﾛ+手ﾍﾗ	手ﾍﾗ多混	口縁部のみ赤彩	3		12-9

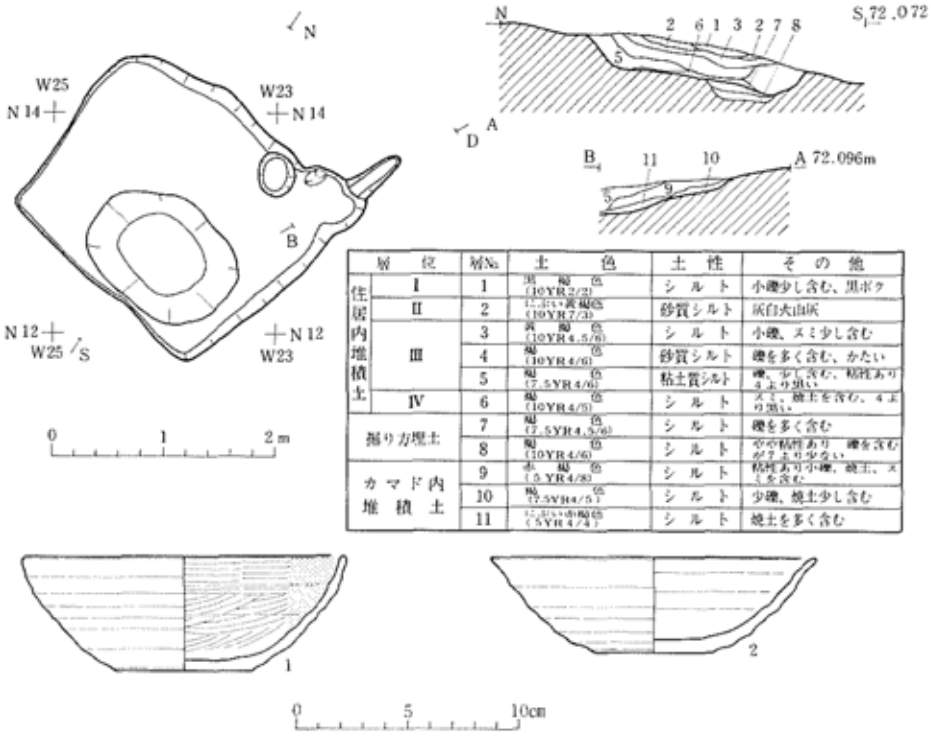
第25図　第12号出土遺物③

平坦である。床面には北壁カマド左側に径40cm深さ10cmの円形ピットがある。また、床面の下から、土壙状の落ち込みが検出された。

〔カマド〕住居北東隅に付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は北壁を掘り込んで作っており、右側壁から奥壁にかけては、地山をそのまま壁としている。左側壁は焚口付近に石の抜き取り痕跡が見られることから、石を芯として粘土を貼りつけて構築されていたと考えられる。煙道部は、地下式で長さ約60cm、巾約25cmある。

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に大別でき、自然流入土である。第Ⅰ層は黒色のしまりのないシルトである。第Ⅱ層は灰白火山灰である。第Ⅲ層は褐色のシルトで住居全体に厚く堆積し、礫を含み非常に堅い。第Ⅳ層は褐色シルトで、床面上に薄く見られる。炭化物、焼土粒を多く含む。

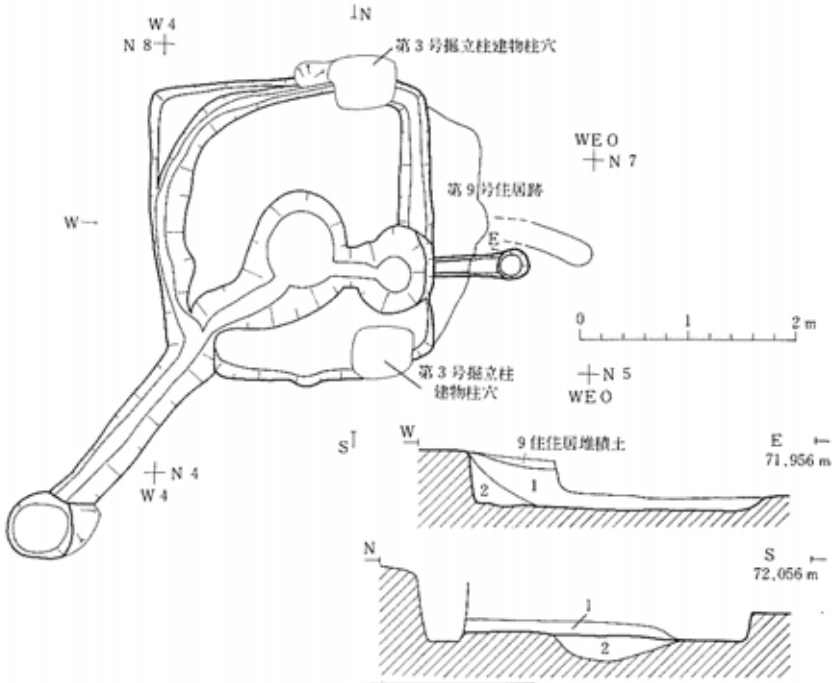
〔出土遺物〕図示できたものは2点（土師器坏、須恵器坏各1点）あり、いずれも堆積土から出土している。



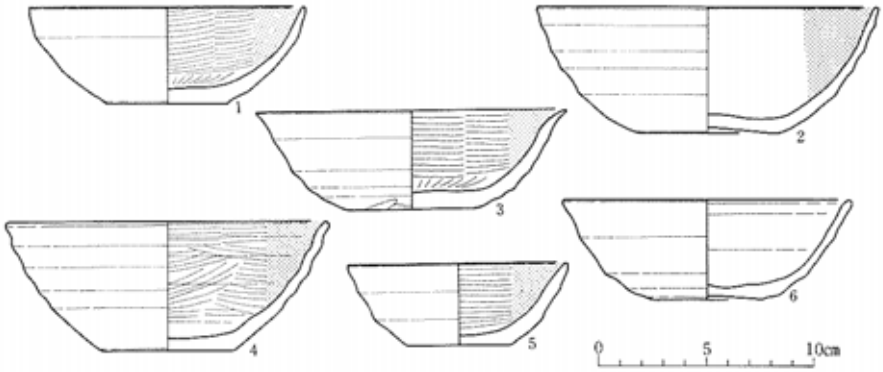
層位		層No.	土色	土性	その他
住居内堆積土	Ⅰ	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	小礫少し含む、黒ボク
	Ⅱ	2	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	砂質シルト	灰白火山灰
	Ⅲ	3	黄褐色 (10YR4.5/6)	シルト	小礫、スミ少し含む
		4	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	礫を多く含む、かたい
		5	褐色 (7.5YR4/6)	粘土質シルト	礫、少し含む、粘性あり 4より黒い
	Ⅳ	6	褐色 (10YR4/5)	シルト	スミ、焼土を含む、4より黒い。
掘り方埋土		7	褐色 (7.5YR4.5/6)	シルト	礫を多く含む
		8	褐色 (10YR4/6)	シルト	空や粘性あり 礫を含む 6より少ない
カマド内堆積土		9	赤褐色 (5YR4/8)	シルト	粘性あり小礫、焼土、スミを含む
		10	褐色 (7.5YR4/5)	シルト	少礫、焼土少し含む
		11	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	シルト	焼土を多く含む

番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	14.6	6.0	5.2	ミガキ+黒	ヨコナデ	回糸		5	BⅢ	13-1
2	須恵器	坏	14.6	5.2	4.3	ロクロ	ロクロ	回糸		3	Ⅲ	13-2

第26図　第13号住居跡と出土遺物



層位	層No.	土色	土性	その他
I	1	褐色(10YR4/4)	シルト	10YR6/6ブロック多く含む
II	2	褐色(10YR4/4)	シルト	



番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	12.8	5.6	4.5	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		床	B I	14-2
2	〃	坏	15.9	6.5	5.9	ミガキ+黒	ロクロ	不明	摩滅	床	B I	14-3
3	〃	坏	14.5	6.0	4.6	ミガキ+黒	ロクロ+ヘラ	ヘラ-不明		床	B II	14-4
4	〃	坏	15.0	6.2	6.0	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		床	B III	14-5
5	〃	坏	10.2	4.6	3.6	ミガキ+黒	ロクロ	回糸		床直	A	14-6
6	須恵器	坏	13.4	5.1	4.6	ロクロ	ロクロ	回糸		床直	V	14-1

第27図　第14号住居跡と出土遺物

第14号住居跡（第27図）

〔平面形・規模・重複〕第14号住居跡は第1・9号住居跡・第3号掘立柱建物に切られており、これらよりも古い。平面形は隅丸の方形で、規模は東西軸約2.8m、南北軸約2.6mある。

〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上る。床面ほぼ平担で、一部に貼り床が見られる。

〔周溝・施設〕周溝は住居南壁を除く壁直下に認められ、北東隅の部分のみ壁から約30cmの間隔をおいて巡る。さらに床面下で暗渠が検出された。暗渠はカマド燃焼部の掘り方から、床面中央のピットを経て南西隅で前述した周溝と接続し、住居外へと延び先端部にはピットがとりつく。形状は共通し断面形は「U」字形である。前者は巾約30㎝、深さ2～5㎝ある。後者は巾約30㎝深さ約10㎝ある。

〔カマド〕住居東壁南寄りに付設されており、煙道部の一部と燃焼部奥壁の部分のみ残存する。燃焼部は中央部に径約80㎝の暗渠に接続するピットがあり、その上に粘土を貼り底面としている。煙道は地下式で長さ約60㎝、巾約25㎝あり、先端に径約30㎝の円形ピットがとりつく。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層に分けられる。第Ⅰ層は人為的な埋土で、壁際の褐色シルト（第Ⅱ層）が堆積した後、埋められている。

〔出土遺物〕図示できたものは6点あり、いずれも床面から出土している。

第15号住居跡（第28図）

〔平面形・規模・重複〕第15号住居跡は堆積が完了した後、第1号掘立柱建物の柱穴が掘られており、これより古い。東西軸約2.7m、南北軸約2.4m隅丸の方形である。

〔壁・床面・施設〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上る。壁高は保存のよい北壁～西壁で約30㎝、それ以外では15～20㎝ある。床面はほぼ平坦で、地山である。床面には南東隅の部分に方形のピットが認められた。住居との新旧関係は不明である。

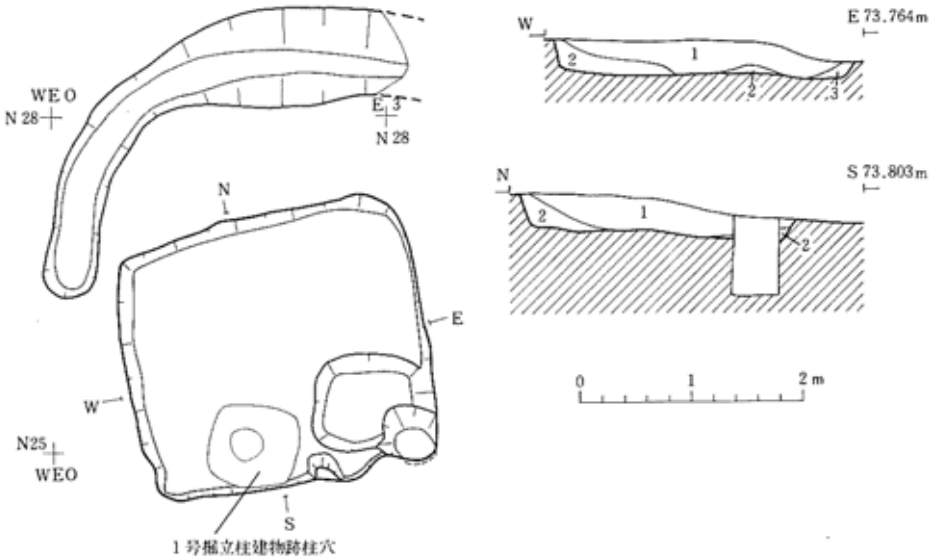
〔カマド〕南壁東寄りに付設されており、燃焼部のみ残存する。側壁は右側が粘土を積み上げ、内面を土器で補強して、左壁は地山を削り出して構築している。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層に大別され、自然流入土である。第Ⅰ層は褐色のシルトで住居全体に厚く堆積している。第Ⅱ層は褐色～黄褐色のシルトで壁際から床面にかけて見られる。

〔出土遺物〕遺物はカマド構築に使われた土師器甕以外は、堆積土から土師器・須恵器の細片がわずかに出土しているにすぎない。

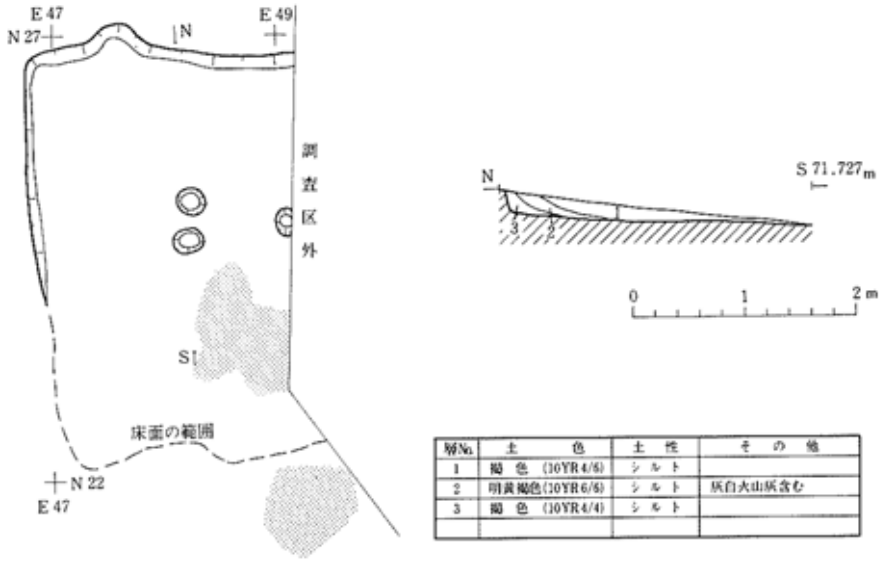
第16号住居跡（第28図）

〔平面形・規模〕第16号住居跡は、東側部分は調査区外へ延び、また南側は削平によって失われており、西壁から北壁西側部分が検出された。平面形は検出部分から方形と推定されるが、規模等は不明である。



層位	層No.	土色	土性	その他
1	1	褐色 (7.5YR4/6)	シルト	
II	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	
	3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	

第15号住居跡



層No.	土色	土性	その他
1	褐色 (10YR4/6)	シルト	
2	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	灰白火山灰含む
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	

第16号住居跡

第28図　第15・16号住居跡

〔壁・床面〕検出された壁は地山で床面からほぼ垂直に立ち上る。床面はほぼ平坦で南に向かってゆるやかに傾斜する。床面からは3個の円形ピットと不整形の焼面がみられた。またこの焼面の約1m南側の住居外と思われる地点にも、同様の焼面が認められた。

〔堆積土〕堆積土は3層に分けられ、自然流入土である。第Ⅰ層は褐色のシルト層で住居残存部分のほぼ全体に分布している。第Ⅱ層は灰白火山灰である。第Ⅲ層は褐色のシルトで壁際に分布している。

〔出土遺物〕遺物は床面の焼面近くから土師器片が少量出土したにすぎない。

第17号住居跡（第29図）

〔平面形・規模〕第17号住居跡は西壁と南壁が他の壁に比べて短かい不整の隅丸方形で、東西軸約2.1m、南北約2.2mの規模である。

〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からゆるやかに立ち上る。壁高は保存のよい、北壁でも5cmほどである。床面の壁際は平坦で、中央がやや凹凸である。

〔カマド〕住居東壁南寄りに焼面が検出され、位置等からカマド底面である可能性がある。

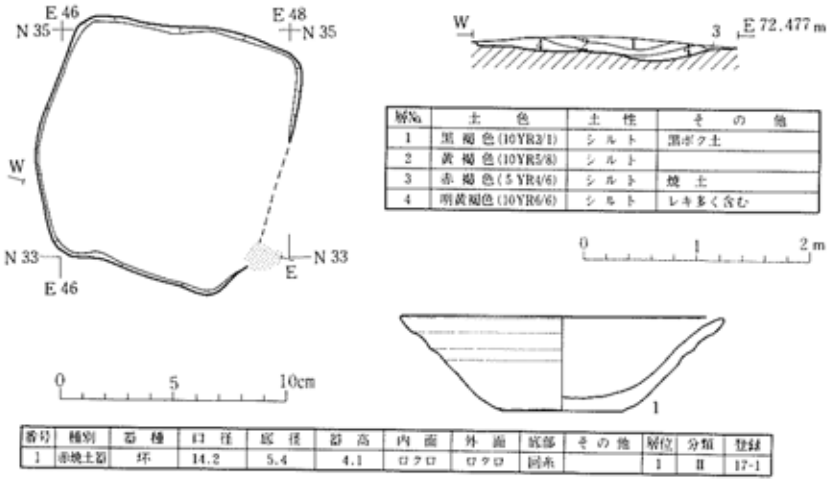
〔堆積土〕住居内堆積土は3層認められ、自然流入土である。第Ⅰ層は黒褐色のしまりのないシルトで“黒ボク土”である。第Ⅱ層は黄褐色のシルトで住居中央部に堆積する。第Ⅲ層は明黄褐色のシルトで壁際から床面に見られ、礫を多く含む。

〔出土遺物〕図示できたものは赤焼土器坏1点で、堆積土から出土している。

2）掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第30図）

〔重複・規模〕第1号掘立柱建物跡は、第15号住居跡、第2号掘立柱建物跡をそれぞれ切って



層No.	土色	土性	その他
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	黒ボク土
2	黄褐色(10YR5/8)	シルト	
3	赤褐色(5YR4/6)	シルト	焼土
4	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	レキ多く含む

番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	赤焼土器	坏	14.2	5.4	4.1	ロクロ	ロクロ	回糸		1	Ⅱ	17-1

第29図　第17号住居跡と出土遺物

おり、これらより新しい。南北 3 間×東西 2 間である。規模は北側柱列では 6.2m（東側から 3.1m＋3.1m）西側柱列では 8.3m（北側から 2.7m＋2.8m＋2.8m）である。

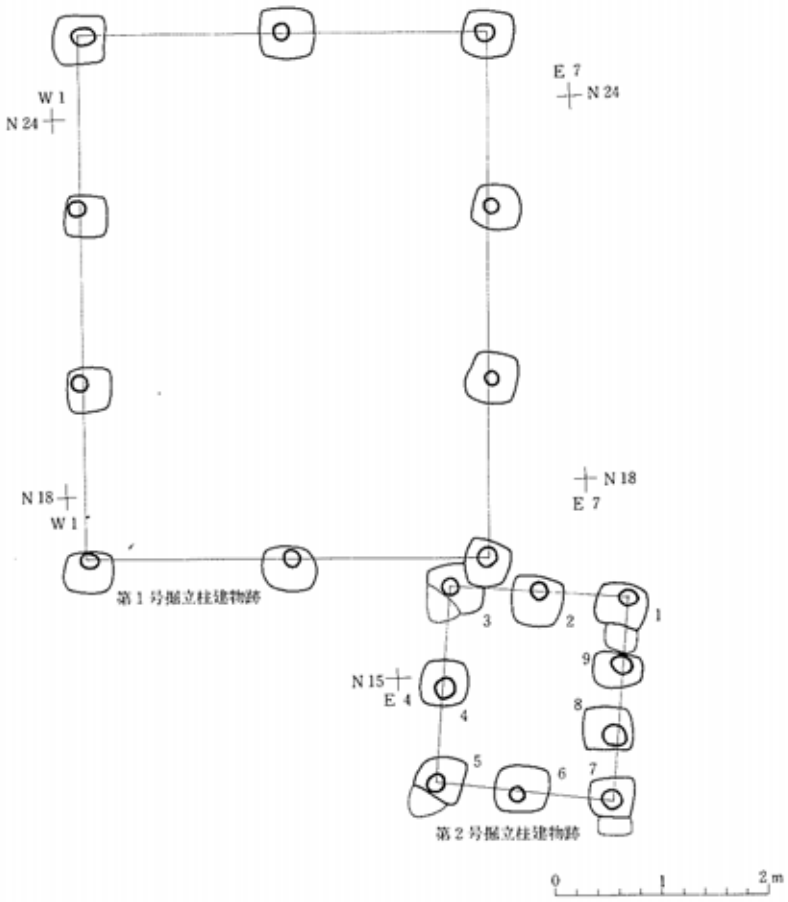
〔方向〕西側柱列においてはN－1°－Eである。

〔柱穴〕柱穴掘り方は一辺 60～80cm の正方形で、深さ約 70cm ある。すべてから径約 25cm の柱痕跡が認められた。

〔出土遺物〕掘り方埋土から、土師器の細片が出土したがいずれも図示できるものではない。土師器はすべて製作にロクロを使用したものである。

第 2 号掘立柱建物跡（第 30 図）

〔重複・規模〕第 2 号掘立柱建物跡は、第 1 号掘立柱建物跡に切られており、これよりも古い。東西 2 間、南北は西側柱列が 2 間東側柱列は 3 間になっている。規模は北側柱列で、2.7m（



第30図　第 1 ・ 2 号掘立柱建物跡

東から 1.3m＋1.4m）、西側柱列では 3.1m（北から 1.5m＋1.6m）東側柱列では 3.2m(北から 1.0m＋1.1m＋1.1m)である。

〔方向〕西側柱列においてはＮ－6°－Ｅである。

〔柱穴〕柱穴 9 は 60 cm×80 cmの長方形の掘り方で、それ以外のものは一辺約 70 cmの正方形のものである。すべてに径約 30 cmの柱痕跡が認められた。

〔出土遺物〕掘り方の埋土から土師器の細片が出土したが、いずれも図示できるものではない。土師器ははすべて製作にロクロを使用したものである。

第 3 号掘立柱建物跡（第 31 図）

〔重複・規模〕第 3 号掘立柱建物跡は、第 14 号住居跡を切っており、これよりも新しい柱列は北・東側・西側のみ確認され、その部分は東西 5 間、南北 2 間以上である。南側については傾斜のため、確認できなかった。規模は北側柱列では、11.4m（東側から 2.5m＋2.2m＋2.4m＋2.0m＋2.5m）で、東側柱列では 4.4m（北側から 2.3m＋2.1m）である。

〔方向〕東側柱列においてはＮＳ－0°である。

〔柱穴〕柱穴掘り方は一辺約 60 cmの方形で、柱穴 2.3 のみ楕円形を呈する。柱穴 3.4.5.6.7.8 から（径約 25 cmの）柱痕跡が認められた。

第 4 号掘立柱建物跡（第 31 図）

〔規模〕第 4 号掘柱建物跡は、西半のみ検出され東半はさらに、調査区外へと延びる。確認された部分は東西 2 間以上、南北 3 間で東西軸と南北軸とは直交せず、ひずんだ形状を呈する。また西側柱列においても、組み合わない柱穴もあり、不明な点が多い。規模は北側柱列で 3.6m（東側から 2.1m＋1.5m）西側柱列で 5.6m（北から 1.9m＋1.7m＋2.0m）である。

〔方向〕西側柱列においてＮ－6°－Ｅである。

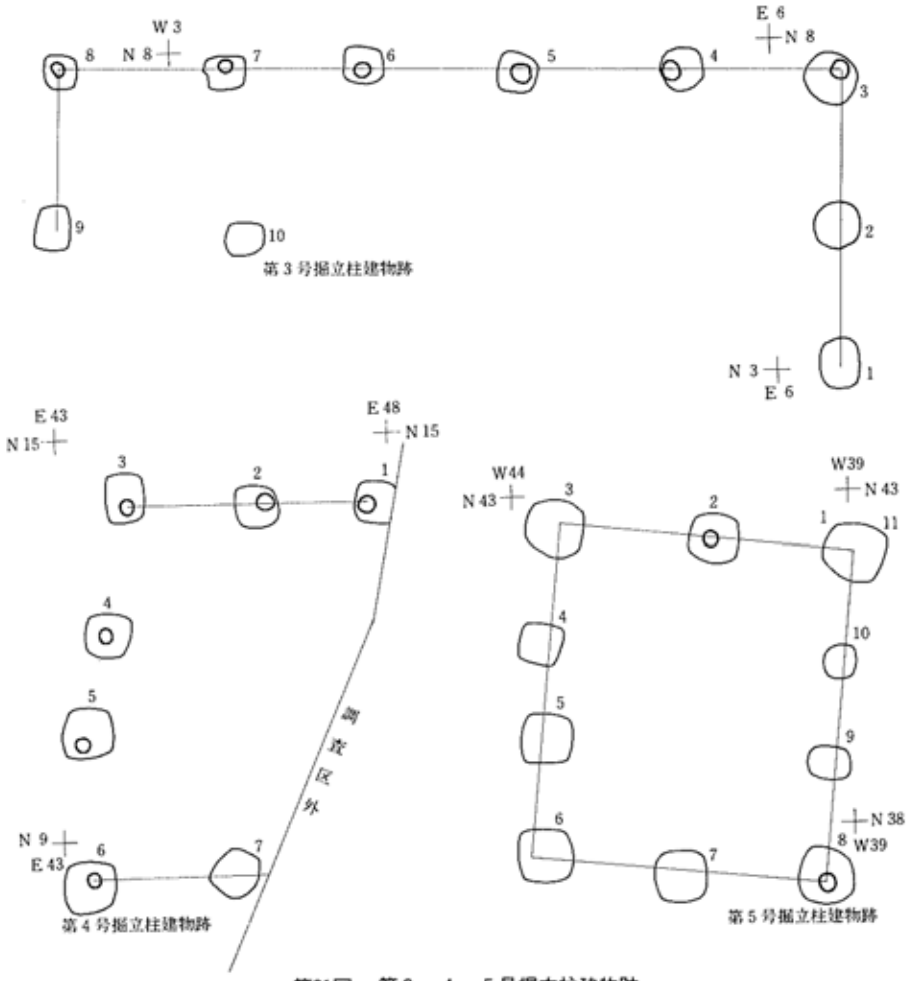
〔掘り方・柱痕跡〕掘り方は一辺 70～80 cmの方形で、柱穴 7 以外からはすべて径約 20 cmの柱痕跡が認められた。

第 5 号掘立柱建物跡（第 31 図）

〔規模〕第 5 号掘立柱建物跡は東西 2 間×南北 3 間の建物で、規模は北側柱列では 4.5m（東から 2m＋2.3m）西側柱列では 5.0m（北から 1.7m＋1.5m＋1.8m）である。

〔方向〕西側柱列においてＮ－3°－Ｅで南北棟である。

〔柱穴〕掘り方はいずれも方形で、一辺 80 cm程のものと、60 cm程のものがあり、東西柱穴の中の 2 個は小さい。柱穴 2.8 から径約 25cm の柱痕跡が認められた。



第31図　第３・４・５号掘立柱建物跡

0　1　2m

3) 考　　察

出土土器の特徴と分類

今回の調査における出土土器には、土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。本項では、これらの土器について特徴を述べ分類を試みたい。

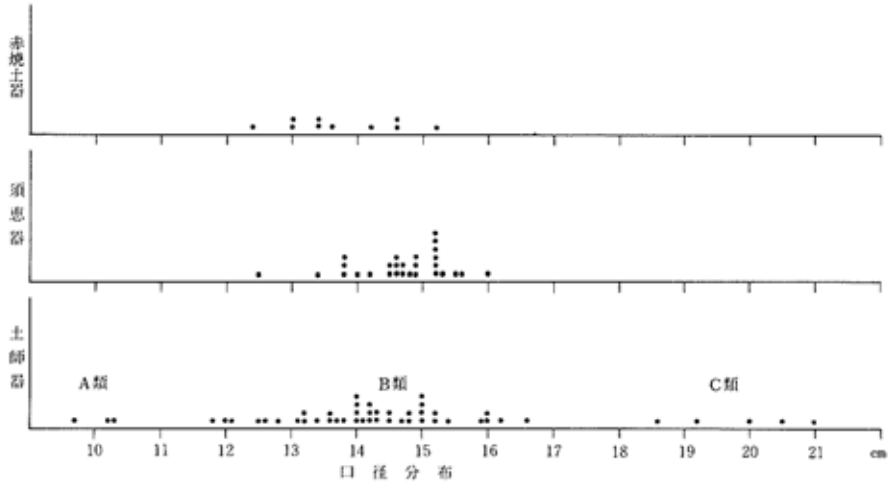
土師器

坏・高台付坏・鉢・高台付鉢・甕等の器種がある。これらの土器は、鉢・甕の一部を除き総て製作にロクロを使用している。以下器種ごとに記していく。

＜坏＞　ロクロを使用しており、底部切り離し技法は、再調整等により不明なものを除けば総て回転糸切りによるもので、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。口径の大きさから 3 つのグループに分れ、さらに器形等から細分できる。（第 32 図）

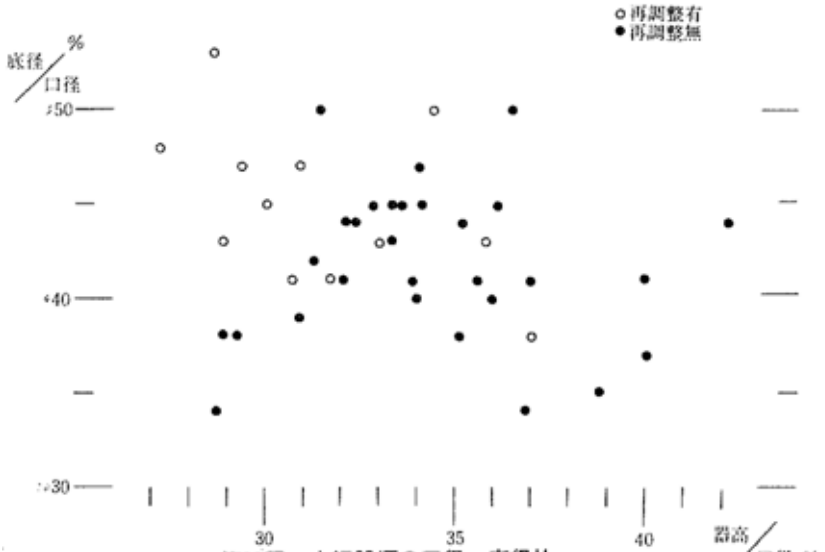
A類：3 個体ある。口径が 10 cm前後の小形のもので坏の巾では最も小さい。口径に対して底径が大きく体部が直線的に外傾するものと、丸味をもって外傾するものとがあり、後者には口縁部が外反するものと、そうでないものがある。器外面の採集調整として体部下半や底部に手持ちヘラケズリが施されているものが 2 点ある。

B類：40 個体ある。口径が 13～16 cmのもので 14～15 cmにピークをもち坏の主体を占める。器形は、体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾するものと、直線的に外傾するものとがあり、後者には口縁端部の外反するものが多い。ロクロからの切り離しは総て回転糸切りによるもので、切り離し後体部下端や底部に再調整を加えたものが 12 個ある。再調整をもつ土器は総て手持ちヘラケズリによるもので、それらは口径に対して底径の大きなものに多く含まれる傾向が見ら



第32図　坏類の口径分布

C類：口径 19～21cm と大形のものである。形状は坏形を呈しているが、用途としては、浅鉢に近いのではないかと考えられる。体部から口縁にかけては、直線的に外傾するものと丸味をもって内弯するものとがある。体部下端に手持ちヘラケズリが施されているものがある。



第33図　土師器坏の口径・底径比

＜高台付坏＞　3個体あり、その中で器形のわかるものは2点である。いずれも口径が約20cmと大形のもので、法量的には坏C類と類似する。高台部はいずれも付高台で端部が尖るものと角ばるものとがある。

＜鉢＞　3個体あり、ロクロを使用しないもの（A類）と使用したもの（B類）とがある。

A類：1個体のみである。口径に対して器高が大きく甕に近い形状を呈する。体部から口縁にかけては丸味をもって外傾し、口縁部が外反する。器外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部は刷毛目調整後ヘラケズリされている。内面はヨコナデである。

B類：2個体あり、器高の大きい甕状のものと、器高の小さい坏状のものとがある。前者は底部から体部にかけて丸味をもって立ちあがり、口縁部近くでほぼ直立する。後者は底部から口縁部にかけて直線的に開くもので、口縁部はいずれも外反する。器外面の調整として、体部下半にヘラケズリが加えられている。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

＜台付鉢＞　2個体ある。体部から口縁にかけては直線的に外傾し、口縁部が大きく開く朝顔形を呈する。高台は体部下端に付けられており、端部に向かって「ハ」状に開く。体部下半に手持ちヘラケズリが施されている。

＜甕＞　5個体ある。法量的に大形で長胴形を呈するもの（A類）と小形のもの（B類）とがある。

A類：製作にロクロを使用したものとしないものとがある。前者は胴部が丸味をもって立ち上がり、しかもわずかに膨らむ。口縁部は外反端し部は丸くおさまる。調整は、外面に刷毛調整後ヘラケズリを加えているものと、ヘラミガキしているものとがある。内面はヘラナデである。

後者は、体部上半の破片で全形態については不明である。
Ｂ類：2 個体ある。小形のもので口径と底形がほぼ等しい。胴部は丸味をもって立ちあがり、上半はほぼ直立する。口縁部は外反し端部が上方につき出ている。体部下半に回転ヘラケズリが加えられているものもある。

須恵器

坏、甕の器種がある。その中で出土量が多いのは坏である。以下それぞれの特徴を述べていく。
＜坏＞　28 個体ある。口径が 13～16 ㎝の範囲に収まり、15㎝前後のもの主体を占める。（第 32 図）器形は、体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾するものと、直線的に外傾するものとがあり、後者には口縁部が外反するものが多い。ロクロから切り離しは総て回転糸切りによるもので、切り離し後再調整を加えたものはない。
＜甕＞　2 個体ある。小形のものと大形のものとがある。前者は口径と器高がほぼ等しく、土師器甕Ｂ類のものとよく類似する。体部は丸味をもって立ち上がり上半はほぼ直立する。口縁部は外反し、端部は上方に突き出している。後者は最大径が体部中央にあり、球形を呈する。分類では甕としたが、器形的には壺近い。頸部から口縁部にかけては外反し、端部は上下に突き出ている。また、図示できなかったが同一個体と思われる底部破片があり、それは平底を呈している。体部外面には平行叩き目の痕跡が見られ、底部付近には手持ヘラケズリが加えられている。

赤焼土器

坏、高台付坏、台付鉢、甕等の器種がある。以下器種毎に記していく。
＜坏＞　8 個体ある。口径が 12～15㎝ の範囲に収まり、土師器坏Ｂ類、須恵器坏らとほぼ同じ大きさである（第 32 図）。器形は、内弯気味に外傾するものと直線的に外傾するものとがあり、後者には、口縁端部の外反するものが多い。ロクロからの切り離しは総て回転糸切りによるもので、切り離し後再調整を加えたものは見られない。
＜高台付坏＞　2 個体ある。口径に対し底部・器高が大きくとっぷりした感じがする。体部から口縁にかけては、丸味をもって内弯し、口縁部は外反気味である。高台は付高台で端部に向かってわずかに開く。高台の付け方には、糸切り後そのまま付けているものとケズリを加えてから付けているものがある。
＜台付鉢＞　1 個体のみである。高台部の破片で全体形については不明である。高台は、付高台で内弯気味に開き端部は肥厚する。
＜甕＞　1 個体のみである。長胴形の甕である。底部から体部にかけては丸味をもって立ち上がりそのまま直立する。口縁部は外反し、端部は上下に突き出ている。体部下半及び底部にヘ

ラケズリの再調整が加えられている。

灰釉陶器

2 点のみである。第 1 号住居から出土したものは皿形で、口縁から高台脇までの破片である。体部から口縁にかけては内弯気味に外傾し、口縁端部は外側に折れる。釉薬は内外面とも掛けられ淡緑色を呈する。漬け掛けである。第 3 号住居から出土したものは、皿の高台部の破片である。高台は角高台で端部は「L」状を呈する。体部下端、底部は回転ヘラケズリされている。釉薬は暗緑色を呈し内面のみ刷毛塗りされている。

緑釉陶器

第 1 号住居から坏の小片が出土している。軟質の胎土で、内外面をヘラミガキした後釉薬が施されている。

2　出土土器の共伴関係と住居間の比較

前項の様に各土器は分類された。これらの土器は総て住居内から出土したもので、その出土状態を示したのが第 3・4 表である。これを見ると各種類・器形毎に分類された土器群の中には、その結果土器間の組合わせが考えられるものもある。しかし、各住居からの土器の出土数を見ると全体的に少なく、これらだけから住居間の比較や土器の共伴関係・組合わせを考えていくのは困難である。ここでは、遺跡内では遺物量が多く比較の可能な第 2 号住居・第 10 号住居・第 12 住居について検討を加えていく。なお、住居内出土土器には、遺構に伴う状態で出土したものと堆積土から出土したものがあり、一括して級うのは困難であるが、堆積土出土の遺物は殆とが灰白火山灰下から出土したもので比較的短期間に堆積したものであり、遺物間には大きな相違は見られない。ここでは時間的な隔たりがある灰白火山灰堆積後の遺物を除き考えていきたい。

ー各住居間の比較ー

3 住居間の土器のあり方から、これらの住居について共通する要素と相違する要素をあげ検討してみたい。

＜共通する要素＞

○土師器坏は総て製作にロクロを使用して内面をヘラミガキ、黒色処理している。ロクロからの切り離しは総て回転糸切りで、切り離し後の再調整として、手持ヘラケズリを加えたものとそうでないものの両者が存在する。

○共伴する須恵器坏は総て回転糸切りによるもので、再調整等を加えたものはない。

○何れの住居からも赤焼土器が出土している。

＜相違する要素＞

○出土した土師器坏のＢ類の口径・底径比について見ると第 10 号住居では 0.42～0.53 と口径に

対し底径の大きいものが多いが、第2号・第12号住居では、どちらも0.33〜0.47の範囲に収まり底径の小さいものが多い。

○坏の種別についてみてみると、10号住では土師器5、須恵器7、赤焼土器1と土師器に対して須恵器の比重が高いが、2号住では土師器8、須恵器2、赤焼土器0、また12号住では、土師器8、須恵器3、赤焼土器0という様に須恵器に対し土師器の比重が高い。

○土師器坏の切り離し後の再調整を持つものの割合を見ると（A、B、C各種）10号住居では、5個中4個に手持ちヘラケズリが施されたものがあるが、第2号住居では12個中2個、第12号住居では9個中2個と少ない。

この様に出土遺物の多い3住居を比べると、それぞれの住居間は類似する点を持ちながらも

第3表　遺構に伴う遺物

		第1号住居	第2号住居	第3号住居	第4号住居	第5号住居	第6号住居	第7号住居	第8号住居	第9号住居	第10号住居	第11号住居	第12号住居	第13号住居	第14号住居	第15号住居	第16号住居	第17号住居
土師器	坏A		1												1			
	坏B		6	2	2	2			2	2	4		4		4			
	坏C		2								○							
	坏調整無		1															
	坏調整有					1							1					
	高台付坏									1	1							
	鉢A												1					
	鉢B												2					
	台付鉢																	
	甕A									○	1		1		○	○		
	甕B										1							
須恵器	坏	1	1	2	2	1			1		7		1		1			
	甕										1		1			○		
	壺										○							
赤焼土器	坏				1						1							
	坏(破片)									○								
	台付鉢		1															
	甕																	
灰釉陶器				1														
緑釉陶器																		

＊　○は図示できないが、破片の出土しているもの

細かい点では異なるが、第 2 号住居と第 12 号住居には共通する点が多く見られ、これらの住居と第 10 号住居を比べると相違する点が多い。

このような差異を単に住居間の個性に起因すると考えるより、時期差・時間差と考えた方がより妥当で、第 10 号住居と第 2･12 号住居間には時間差があると考えられる（隔絶するという意味ではなく）。次項では、これらの住居がどのような編年的位置付けになるのかを考えていく。

3　出土土器の年代と問題点

以上のように出土土器から住居間には、2 時期があると考えられる。ここでは、これらの住居の土器年代について検討を加える。この場合、各時代を通して形態等の変化が他の器種と比

第 4 表　堆積土出土遺物

		第1号住居	第2号住居	第3号住居	第4号住居	第5号住居	第6号住居	第7号住居	第8号住居	第9号住居	第10号住居	第11号住居	第12号住居	第13号住居	第14号住居	第15号住居	第16号住居	第17号住居
土師器	坏A		1															
	坏B		1	1	2		1	1			1		4	1				
	坏C												1					
	坏調整無	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○					
	坏調整有			○	○				○		○		○					
	高台付坏			1	○													
	鉢A																	
	鉢B																	
	台付鉢				1							1						
	甕A							1			1		1			○		
	甕B					1					1							
須恵器	坏		1		1	1	1	1			1	1	1	1				
	甕		○	○														
	壺										○							
赤焼土器	坏	2			2				1									1
	坏(破片)									○								
	台付鉢																	
	甕												1					
灰釉陶器		1																
緑釉陶器		1																

＊　○は図示できないが、破片の出土しているもの。

較して極めて特徴的な土師器坏を中心に考えていきたい。

これらの坏は、製作にロクロを使用、内面がヘラミガキ後黒色処理されているという点で共通している。この様な特徴を持つ土師器は、東北地方南部の土師器編年では表杉ノ入式に位置づけられており、平安時代の所産と考えられている（氏家：1957）。その後、表杉ノ入式は、製作技法（桑原、岡田：1974）や形態的変化（森：1982）等の面から再検討が加えられ細分が試みられた。宮城県南部では、器形・器面調整の変化から次の様な変遷が指摘されている（丹羽：1983）。

宮前遺跡第20号住居⇒青木遺跡第21号住居⇒東山遺跡土器溜⇒家老内遺跡第2号住居⇒安久東遺跡第2号住居

また、加美郡、栗原郡を中心とした宮城県北部では、次の様な変遷が指摘されている。（森：1983、古川：1984）

西手取遺跡第3、4号住居⇒色麻遺跡第25号住居⇒（色麻遺跡第31号住居、五輪C遺跡第5号住居）⇒手取遺跡第3号住居

本項では、宮城県の中央部に位置する中峯A遺跡出土の土師器坏をこれらの遺跡のものと比較することにより、編年的位置づけを考えていく（第34図）。

＜第10号住居出土土器と東山遺跡土器溜、家老内遺跡第2号住居出土土器との比較＞

○口径と底径の比では、中峯10住のものは0.43～0.53で東山遺跡の主たる部分0.40～0.54の範囲内に収まり、家老内のもの（0.35～0.46）よりも大きい。

○糸切り後再調整を施したものは、中峯10住では5個中4個に認められ、その割合は東山遺跡のもの（45個中40個）よりも小さく、かつ家老内遺跡のもの（14個中9個）より大きく、これらの中間に位置づけられる。

○再調整の技法を見ると中峯10住・家老内2住のものは手持ちヘラケズリに限定されるのに対して、東山遺跡のものは手持ちヘラケズリに加え回転ヘラケズリによるものが含まれる。

○共伴する須恵器は、中峯10住のものは総て回転糸切りによるものであるが、東山遺跡のものは回転糸切りと回転ヘラ切りのものからなる。なお、家老内2住からは須恵器の出土がなく不明である。

○共伴する土器群は、住居と土器溜というように比較は困難な点を含むが、中峯10住では土師器坏、長胴甕、小形甕、須恵器坏、赤焼土器坏で東山遺跡の土師器坏、長胴甕、小形甕、高台付坏、須恵器坏、蓋、長頸壺、灰釉陶器坏と共通する部分が多い。家老内からは土師器坏の他に遺物が少なく比較は困難である。

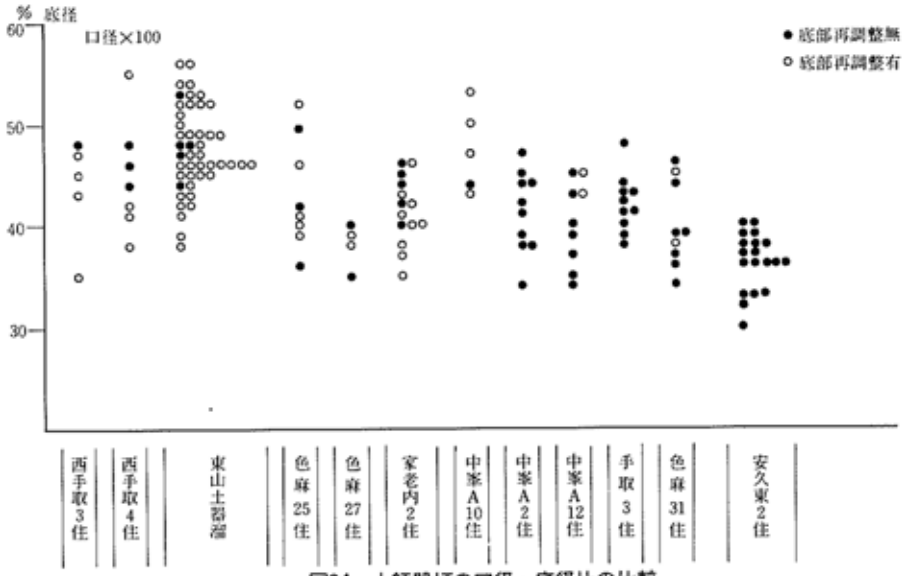


図34　土師器坏の口径・底径比の比較

＜中峯10住の土器と西手取3、4住、色麻25、27住の比較＞

○口径と底径の比では、3遺跡間では明確な差異は認められず、0.40～0.55の範囲内に収まる中峯10住のものがやや大きい部分に集まる。

○再調整が施されたものは、中峯10住では5個中4個あり、西手取3、4住の12個中8個、色麻27住の12個中8個とほぼ同程度である。

○調整技法は、中峯10住、色麻25、27住のものは総て手持ちヘラケズリなのに対して西手取3、4住のものは手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリのものからなる。

○共伴する須恵器坏の底部切り離しは3遺跡とも回転糸切りである。

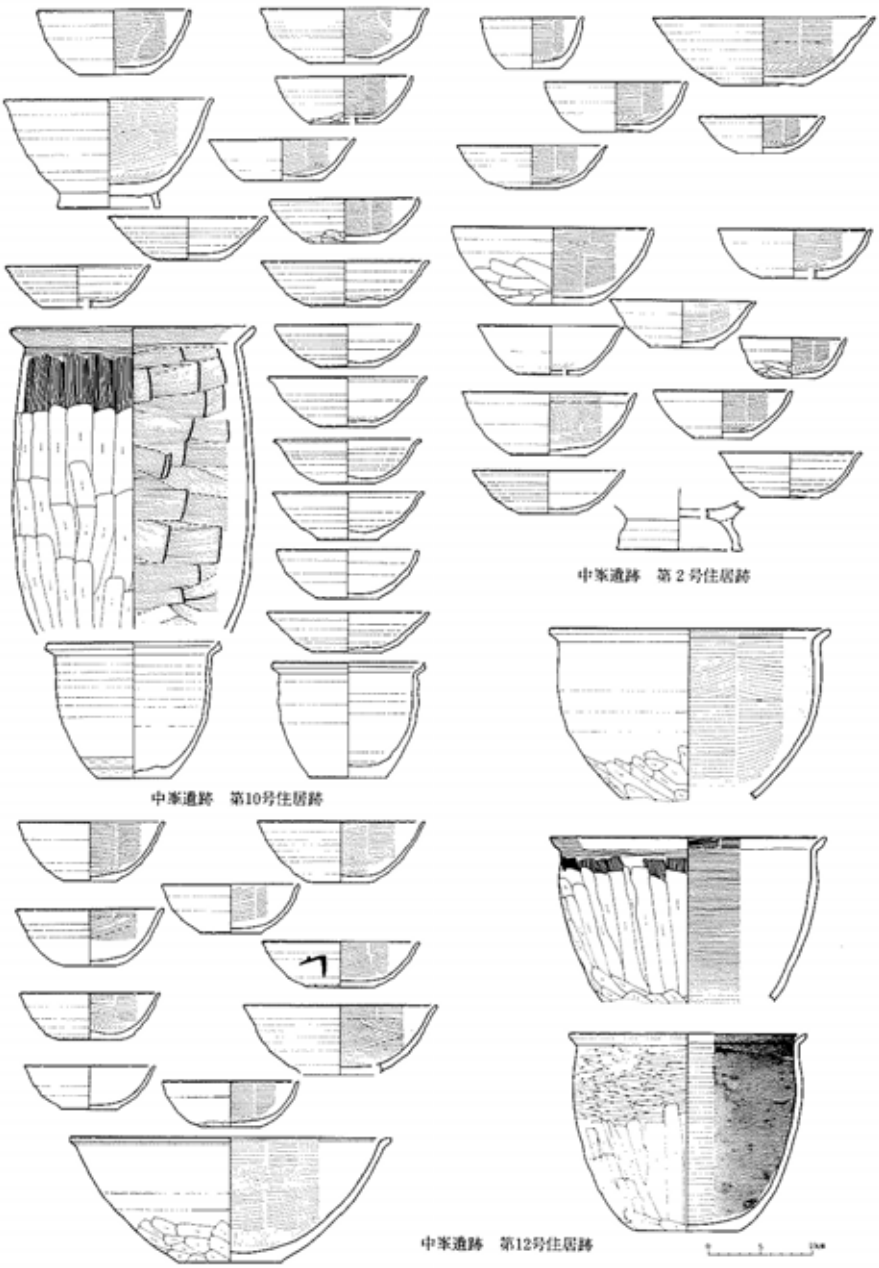
○共伴する土器群は、西手取では土師器坏、長胴甕、小形甕、高台付坏、鉢（甕状のもの）須恵器坏、甕があり、色麻では土師器坏、長胴甕、小形甕、須恵器坏があり、共通する部分は多いが、中峯以外からは赤焼土器の出土は見られない。

＜中峯2、12住と家老内2住、安久東2住との比較＞

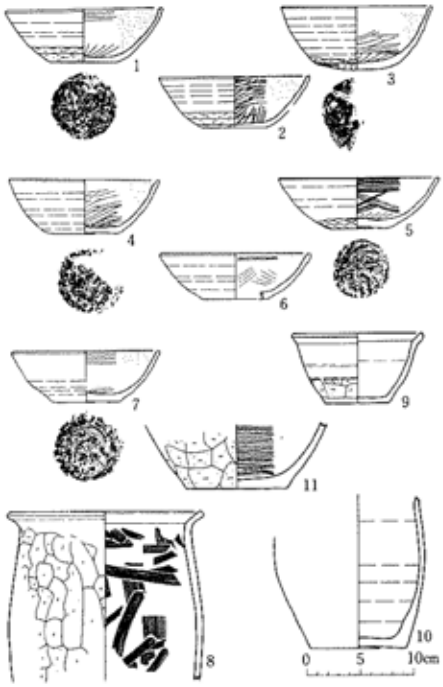
○口径と底径の比では、中峯2、12住のものが0.35～0.50と家老内2住とほぼ同程度であるが安久東2住の0.30～0.40より大きい。

○再調整を施したものは、中峯2住ではB類では8個中0個であるが、A類のものには2個中2個、C類では2個中1個ある。中峯12住では、8個中2個と量的に少ないが、家老内では半数以上に見られる。安久東では再調整が施されたものはない。

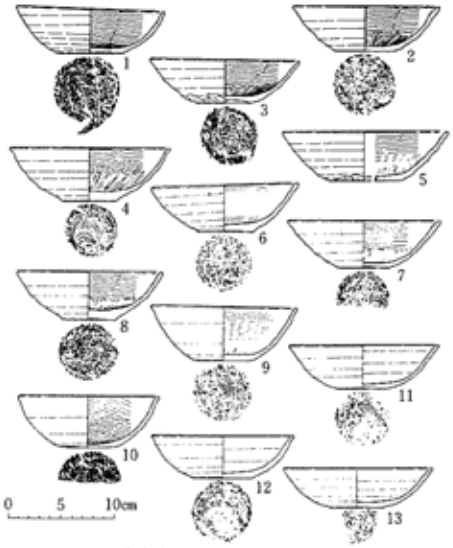
○調整技法は総て手持ちヘラケズリである。



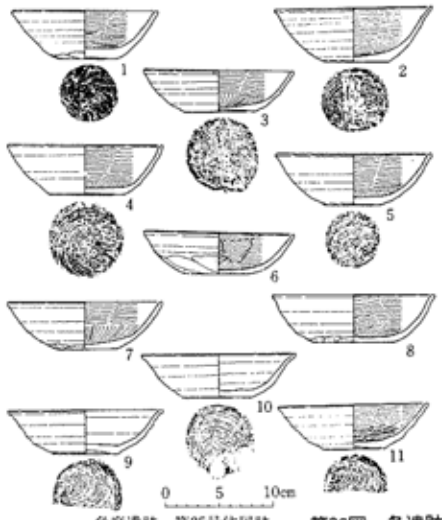
第35図　各遺跡出土土器の比較(1)



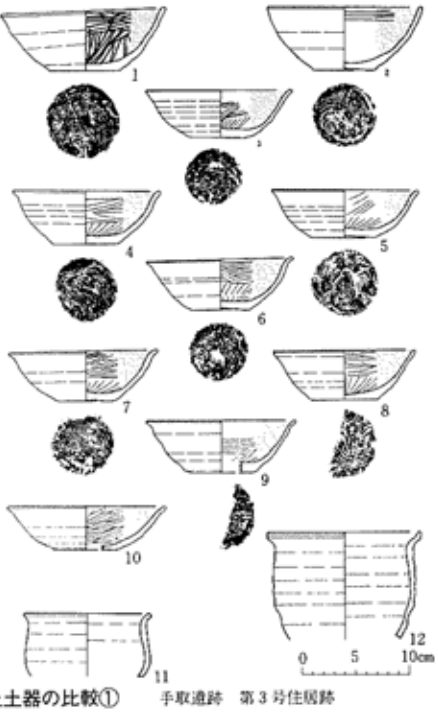
西手取遺跡　第４号住居跡



色麻遺跡　第31号住居跡



色麻遺跡　第25号住居跡



手取遺跡　第３号住居跡

第36図　各遺跡出土土器の比較①

○全体的な器形についてみると中峯2、12住、家老内のものが体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾するものと、外反するものとから成るのに対し、安久東では殆どのものが外反気味に開く。

○共伴する土器群は、中峯2、12住では土師器坏、高台付坏、鉢、長胴甕、須恵器坏、甕があり安久東では土師器坏、長胴甕、須恵器坏、赤焼土器坏、高台付坏、灰釉陶器坏、長頸壺がある。2遺跡を比較すると、器種には大きな相違はないが、坏の種別では中峯が、土師器16、須恵器5、赤焼土器0であるのに対し、安久東では土師器19、須恵器5、赤焼土器18というように土師器に対し須恵器の割合が低く、赤焼土器の割合は高い。家老内からは遺物が少なく比較はできなかった。

＜中峯2、12住と色麻31、手取3住との比較＞

○口径と底径の比では、総て0.33～0.50の範囲に収まり、分布の偏りも特に見られない。

○再調整を持つものは、中峯（前述）、色麻31住（9個中2個）と若干含まれるが、手取3住のものには再調整が施されたものはない。

○全体の器形についてみると、中峯2、12住のものが体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾するものと外反するものが半々であるのに対し、手取3住では口縁端部が外反するものが殆どである。

○共伴する土器群は、手取3住では土師器坏、小形甕、長胴甕、赤焼土器坏、高台付坏が、色麻31住では土坏、高台坏、赤焼土器坏、高台坏、台付鉢？、縁釉陶器稜碗がある。これらを比較すると、器種間には大きな相違はないものの、種別では手取3住、色麻31住のものが土師器、赤焼土器のみであるのに対し、中峯では須恵器の量も多い。

住居の編年的位置と年代

各住居の土器と他遺跡出土土器との比較は以上のとおりである。これらをまとめると、口径底径比では、中峯10住の土器が東山、西手取3、4、色麻25住と同程度なのに対し、家老内2住、手取3住よりも大きい。一方中峯2、12住の土器の口径底径比は、家老内2住、手取3住、色麻31住と同程度であるが、安久東よりも大きい。

次に再調整の含まれる割合を見ると東山、西手取3住⇒（色麻25、27住）⇒家老内2住⇒（中峯2、12住、色麻31住）⇒(安久東2住、手取3住)の順で減少する。また、再調整の技法について見ると、東山・西手取のものが回転ヘラケズリと手持ヘラケズリから成るのに対し中峯各住居、家老内、色麻25、27、31のものは手持ケズリのみである。

共伴する土器群の中で坏についての種別を見ると、東山、中峯2住、色麻25、27住では土師器に対し須恵器の割合は高いが、中峯2、12住では須恵器の割合が減少し、手取3住、色麻31住、安久東2住では須恵器は全く含まれない場合もあり、それに代わり赤焼土器の割合が増加して

いる。

さらにこれらの中の須恵器坏の底部切り離し技法について見ると、東山のものは回転ヘラ切りと回転糸切りがあるが、その他のものは総て回転糸切りである。また、全体的な器形では、東山、西手取3、4住、中峯10住、色麻25、27住のものが体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾するものが多く、外反するものは少ない。それに対し中峯2、12住、色麻31住、手取3住、安久東では口縁端部が外反するものが多くなる。

口径底径比は年代が下がるにしたがって小さくなるという傾向性（森：1983）や、再調整を含む割合についても製作技術の簡略化（岡田、桑原：1974）が指摘され、再調整の多いものから含まないものへという推移が知られており、再調整の技法についても、回転ヘラケズリは古い要素であると考えられている。また、須恵器・赤焼土器の量的変化では、須恵器生産が律令体制の崩壊に伴い減少し（小笠原：1976）、赤焼土器の占有率は時代が下るほど高率になると指摘されている（佐々木：1984）。

以上のことから、各住居の土器群は表杉ノ入式の土器変遷の中で次の様な位置づけになると考えられる。

西手取4住、東山土器溜⇒（中峯2住、色麻25、27住）⇒家老内2住⇒（中峯2、12住、色麻31住）⇒（安久東2住、手取3住）

また、これらの他の住居についてであるがいずれの住居からも出土土器が少なく比較が困難であった。ここでは、前述した各住居ではどちらのパターンに近いかを基準にしてその帰属を考えたい。なお、第15、16号住居からは、遺物が出土しておらず不明である。

第10号住居に近いもの　第3、第8住居跡【第一段階】

第2、12号住居に近いもの　第1、4、5、6、7、9、11、13、14、17号住居跡【第二段階】

次に、これらのグループの土器の実年代について検討したい。この場合・土師器の編年からのみでは実年代を推定することは困難である。ここでは、灰釉陶器の編年を参考にしてその年代を考えていきたい。

＜第一段階の土器群の年代＞

第一段階では、基準となった10号住居からの灰釉陶器はないが、このグループに属すると考えられる第3号住居の床面から皿の高台部が出土している。ここでは、この灰釉陶器をもとに年代を考えていきたい。この灰釉陶器の特徴は、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施され台部を削り出したもので、内面は刷毛塗りによって施釉されている。この様な特徴をもつ灰釉陶器は、愛知県猿投窯においては黒笹14窯式のものに類例が見られ、9世紀の後半に位置づけられている（楢崎：1983）。しかし、灰釉陶器の編年における絶対年代の同定に関しては論議が繰りかえされており、黒笹14窯式の実年代を825年とする意見（吉田：1982）もあ

る。また、土師器編年上からは明らかに古い要素を持つ東山遺跡からは平城京出土のＳＤ650A様式に対比され9世紀中葉と考えられる灰釉陶器が出土しており（真山：1981）、それぞれに微妙なくいちがいがある。また、灰釉陶器等の日常雑器とは考えられない高級品は伝世品である可能性もあり、土器群の代表として扱うことには問題が残る。ここでは、東山との対比を重視し、広い幅をもつ9世紀中葉以降であると考えたい。

＜第二段階土器群の年代＞

第二段階からも、基準となった2、12住からの灰釉陶器の出土はないが1住の堆積土から皿の口縁部から体部にかけての破片が出土している。これの口縁端部の特徴は、黒笹90号窯式の黒笹21号窯出土のものと類似しており、10世紀前半（楢崎：1983）もしくは、900年前後と考えられている（吉田：1982）。また、総ての住居からは広く宮城県北部に分布する灰白火山灰【10世紀初頭降下（白鳥：1980）】が堆積していることから、実年代は900年に近いものである可能性がある。

遺構の検討

ここでは各遺構、特に竪穴住居跡、掘立柱建物跡についてその年代、構造等を中心として検討を加えたい。

＜竪穴住居跡（第37、38図）＞

竪穴住居は全部で17軒発見された。これらの住居は出土土器により、10号住と類似する土器群を出土する住居（第一段階）と2、12住と類似する土器群を出土する住居（第二段階）とに分けられる。ここでは、竪穴住居の各要素について検討を加える。

〔平面形〕　平面形は、すべての住居跡が、隅の丸い方形を呈し段階毎の格差は見られない。次に長軸と短軸との比を見ると、計測の可能な15軒中13軒までが1.0（正方形）～0.85（ほぼ正方形）の範囲内におさまり、ほとんどが正方形を基調としていたと考えられる。また他の2軒についてみるとこれらの住居はいずれも長軸が5mを越える大形のものであるという点で共通する。長軸・短軸の比は各口0.79・0.63と正方形に近い長方形である。

〔規模〕　規模は一辺約2.0mのものから5mを越えるものまで、広い範囲で分布するが、長軸3m以下のものが15軒中10軒あり、全体的に小形のものが多い。中でも第11号住居跡は長軸

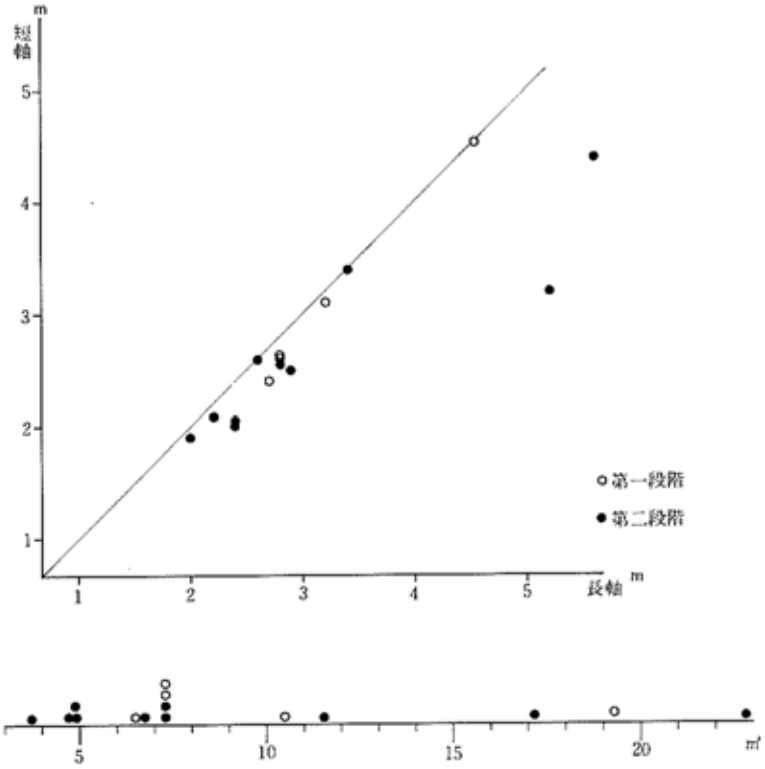
2.0m 短軸 1.9m と非常に小さい。これについて県内で調査された平安時代の住居跡（第 38 図の 3 遺跡）と比べると各遺跡の住居は平面規模が一辺 3m～5m の範囲に集中（66%）しており、3m 以下のものが大部分を占める本遺跡は特徴的であると言える。

次に床面積について見ると、小形のものから大形のものへと連続的に分布するのではなく、5 ㎡以下のもの、7 ㎡前後のもの、11 ㎡前後のもの、17 ㎡以上のものという様に段階的に分布しており、住居構成員との関連が考えられる。

〔壁〕　検出された壁は、すべて地山で、床面、周溝底面から、垂直もしくは垂直気味に立ち上る。

〔床面〕　床面は、掘り方面をそのまま床面としている例、地山面を整地した後床面としている例、床面下に施設をもうけその上に貼床を施している例とがある。地山を整地した後住居構築しているのは第 3 号住居跡と第 4 号住居跡で、両住居とも遺跡内では急斜面の部分に立地する点で共通する。これらの住居では、地山の標高差が北側と南側では 1m にも達しており、地山面を削り出して、その上で低い部分を整地し平坦面を作った後に住居を構築している。床面下に施設をもうけた後貼床をしている例については後述する。

〔カマド〕　カマドは 17 軒中 12 軒から検出された。カマドは、ほとんどが北壁及び東壁に付設されており、煙道は斜面の上方に延びる（第 4、7、10、11、12、13 号住居跡）か、東側へと延びる（第 2、5、8、9、14 号住居跡）。なお、特異な例としては第 3 号住居跡があり、この住居ではカマドが南壁に付設され、煙道は斜面の下方に向かって延びる。



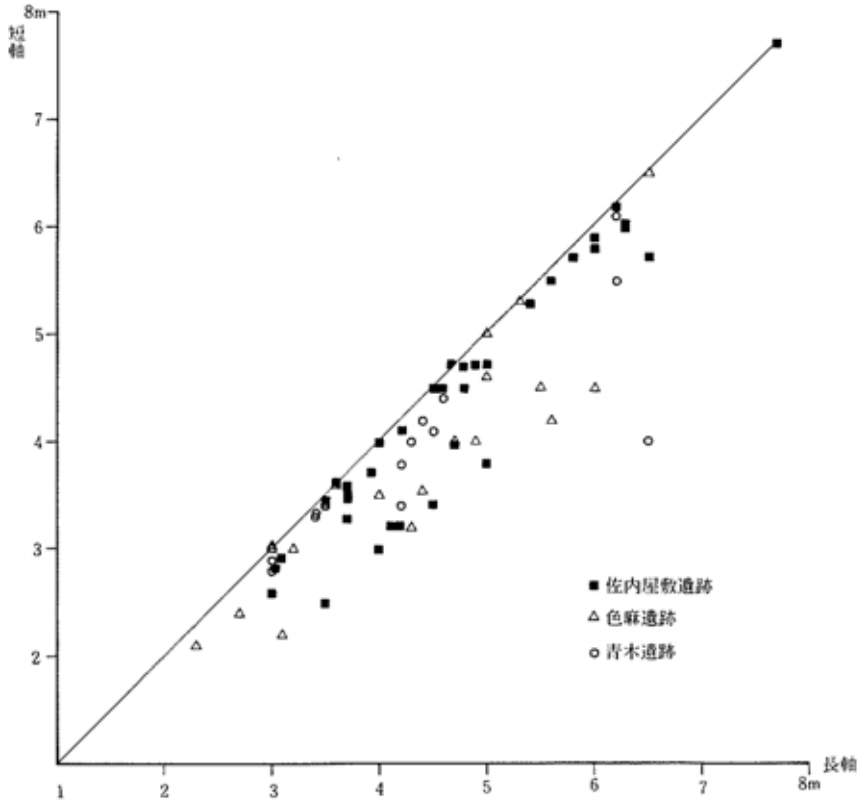
第37図　中峯遺跡住居跡の平面規模

次にカマドの構築方法について見る。側壁は、粘土のみで構築している例（第2・3・4・5・8・9・14号住居跡）と燃焼部の両側に石を据え、それを芯として粘土を貼り付けている例（7・10・11・12・13号住居跡）とがあるが、段階による相違は見られなかった。支脚は（第5・10・12号住居跡）から認められた。いずれの住居も土器を逆さに伏せたものである。

〔その他の施設〕　その他の施設としては貯蔵穴状ピット、火熱をうけて底面が硅質化したピット、周溝や外延溝などがある。以下これらについて各々述べていく。

貯蔵穴状ピットは（第4・8・10号住居跡）から検出され、いずれもカマドの右あるいは左側の隅の部分に掘られている。形状は円形もしくは方形を呈している。

火熱を受けたピットは第10号住居跡から検出され、住居堆積土からは鉄滓が出土している。ピットは住居のほぼ中央部に位置し、形状は北側と東がとび出した不整の方形を呈している。底面は火熱のため硅質化しており、その上には木炭が堆積していた。同様の施設は中峯C遺跡第1号住居跡、豊里町沼崎山遺跡第2号住居跡（遊佐：1980）からも認められており、小鍛冶遺構と考えられる。



第38図　表杉ノ入期の住居跡の平面規模

周溝は第4・5・14号住居跡から検出され、これらの住居の周溝からはさらに住居外へと外延溝が延びる。また第2号住居跡からは、周溝は検出されず、カマド底面下から延びる外延溝のみが検出された。さらに

第4・14号住居跡からは床面下から周溝の対角をむすぶ形で溝が検出され、そのまま外延溝へ続いている。住居内で検出された溝の中で、第2・4・14号住居跡のものは、溝を掘った後その上を貼床しており、溝は床面下で機能する状態で存在していたと考えられる。さらに、これには外延溝がとりつき、住居外へと延びる同様の施設は、古川市藤屋敷遺跡（加藤：1980）、瀬峯町大鏡山遺跡（阿部他：1983）、松島町山下遺跡第3号住居跡（菊地：1982）で知られており、排水施設であったと考えられる。

＜掘立柱建物跡＞

掘立柱建物跡は5棟検出された。この中で第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡には切り合い関係が見られる事から、これらの遺構は同時存在したのではなく、時期差が考えられる。年代は、掘り方埋土内から土師器が出土しているのみで、これらの建物跡の周辺はもちろんのこと、今回の調査を実施した範囲内からは他時代の遺物が全く出土していない事から、竪穴住居と同時代に存在していたと考えられる。

これらの建物の中で全体形が分かるものは3棟あり、平面形は、長軸と短軸の比が0.75～0.90といずれも正方形に近い長方形を呈している。規模は3.1×2.7mのもの、4.5×5.0mのもの、8.2×6.2mのものと不整である。方向は、建物の南北軸で見ると、いずれも東側に振れているが、最も東にずれている第2・4号掘立柱建物跡でもＮ－6°－Ｅにすぎず、ほぼ真北を基調としている。柱間距離は、第1号掘立柱建物の北側柱列では3.1m＋3.1mとほぼ10尺を、西側柱列では1.7m＋1.8m＋1.8mとほぼ6尺を基調としている。第2号掘立柱建物跡では、北側柱列が1.3m＋1.4mと4.5尺を、西側柱列では1.5m＋1.6mとほぼ5尺を基調としている。第3・4・5号掘立柱建物跡は、柱間距離がまちまちで不揃いである。柱穴掘り方は、すべて方形を呈し、大きさは一辺60～80cmある。柱痕跡はすべて円形で、20～30cmあった。

集落の構成と地形について

中峯Ａ遺跡は、一つの独立した舌状台地に立地しており、今回調査した部分はこの台地の南斜面及び西斜面である。台地の東斜面は調査対象区外のため、また台土也がさらに続く北側はすでに削平が及んでいるため不明であるが遺跡はこの地域にまで広がっていると考えられる。

次に発見された遺構が台地上でどのような分布を示し集落を構成していたか考えていきたい。

竪穴住居は、合計17軒発見されたがこれらの中で台地の頂部から検出されたのは第15号住居のみで他の16軒は、台地の両縁や斜面に分布している。第一段階の住居は3軒あり、台地の南斜面に東西に離れて2軒が、西斜面にもう1軒がある。

第二段階の住居は12軒あり、その内9軒が南斜面に、2軒が西斜面に、1軒が台地頂部東端に分布している。住居間の距離をみると第一段階では、それぞれ住居間にはかなりの隔たりがあるのに対し、第二段階では1、2、5、14号住居、そして11、12号住居というように隣接した住居

がひとつのまとまりを作っている。また、二時期を通じて、竪穴住居の台地における空間占有のありかた・立地には明確な差異は認められなかった。

次に掘立柱建物について考えてみる。掘立柱建物跡は合計5棟検出された。これらの建物は竪穴住居が台地の周縁部や斜面に立地しているのに対して、すべてが台地の頂部近くに分布している。また、この5棟の中で1号建物と2号建物の間には重複が見られる他、1号建物は15号住居を、3号掘立は1、9、14号住居を切っており、これらすべての遺構が同時に存在したとは考えられない。しかし、当遺跡内からは既述した遺物の他に他時代の遺物は出土しておらず、これらの掘立柱建物もこれらの遺物と同時代の所産であると考えるのが妥当である。しかし、建物は同時に存在したのではなく、同一時期には1棟か2棟だけが存在していたと考えられる。

以上のことから、遺跡内で同時に存在した遺構は竪穴住居が数軒と1〜2棟の掘立柱建物であり、集落は、台地の頂部付近に掘立柱の建物が立ちそれらをとり囲むように台地の周縁や斜面に竪穴住居が分布するといった構成であったと考えられる。

＜2＞中峯C遺跡

1）竪穴住居跡

第1号住居跡（第39図）

〔平面形・規模〕第1号住居跡は隅丸の正方形で、一辺約3.4mある。

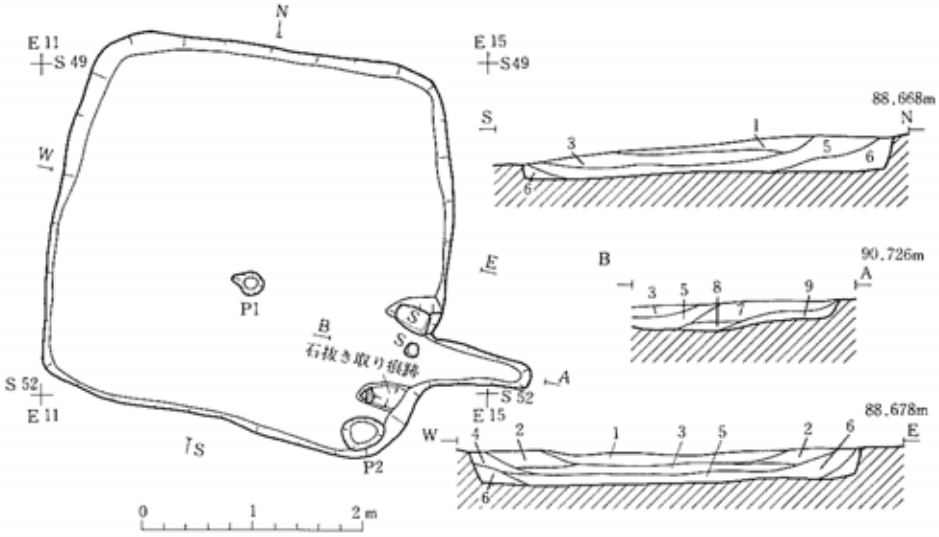
〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からはほぼ垂直に立ち上る。壁高は保存のよい東〜北壁で約30㎝、それ以外では10〜20㎝ある。床面はほぼ平坦で、掘り方面と一致する。

〔施設〕床面中央部（ピット1）と南東隅（ピット2）にピットがある。ピット1は径約20の円形のピットで東側がつき出した柄鏡状を呈する。底面は火熱を受け非常に堅く焼け硅質化している。ピット2は径約30㎝の円形ピットである。

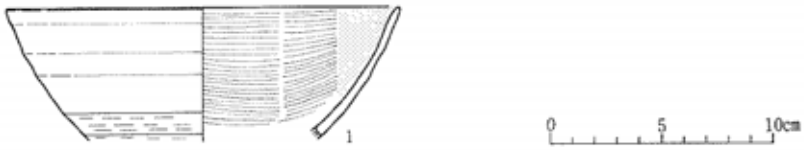
〔カマド〕東壁南寄りに付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部側壁は石をすえてそれを芯とし粘土を貼り付けて構築されている。底面はほぼ平坦で中央に石を立て支脚としている。奥壁の段は明確でなく、緩やかな傾斜をもって煙道部へとつづく。煙道部は地下式で、長さ約90㎝、巾約30㎝ある。

〔堆積土〕住居内堆積土は5層に大別され、自然流入土である。第Ⅰ層は黒色のしまりのないシルトである。第Ⅱ層は褐色シルトで壁近くに堆積している。第Ⅲ層は灰白火山灰である。第Ⅳ層は褐色のシルトで住居全体に分布し床面を直接おおう。第Ⅴ層は壁際から床面を直接おおう黄褐色のシルト層である。

〔出土遺物〕図示できたものは1点のみで、カマド煙道部から出土している。またこの他に床面・ピット1から鉄滓が出土している。



層位		層No.	土色	土性	その他
住居内堆積土	I	1	黒褐色(10YR2/1)	シルト	黒ボク
	II	2	褐色(10YR4/6)	シルト	
	III	3	にぶい黄褐色(10YR4/4)	シルト	灰白火山灰
	IV	4	褐色(10YR4/4)		
		5	褐色(10YR4/6)	シルト	炭化物含む
	V	6	黄褐色(10YR5/6)	シルト	粘性強い
カマド内堆積土		7	褐色(10YR4/6)	シルト	炭化物・焼土含む
		8	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物・焼土含む
		9	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土多く含む



番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	土師器	坏	17.6	—	—	ミガキ+黒	ロクロ+指ヘラ	—		カマド堆積		1-1

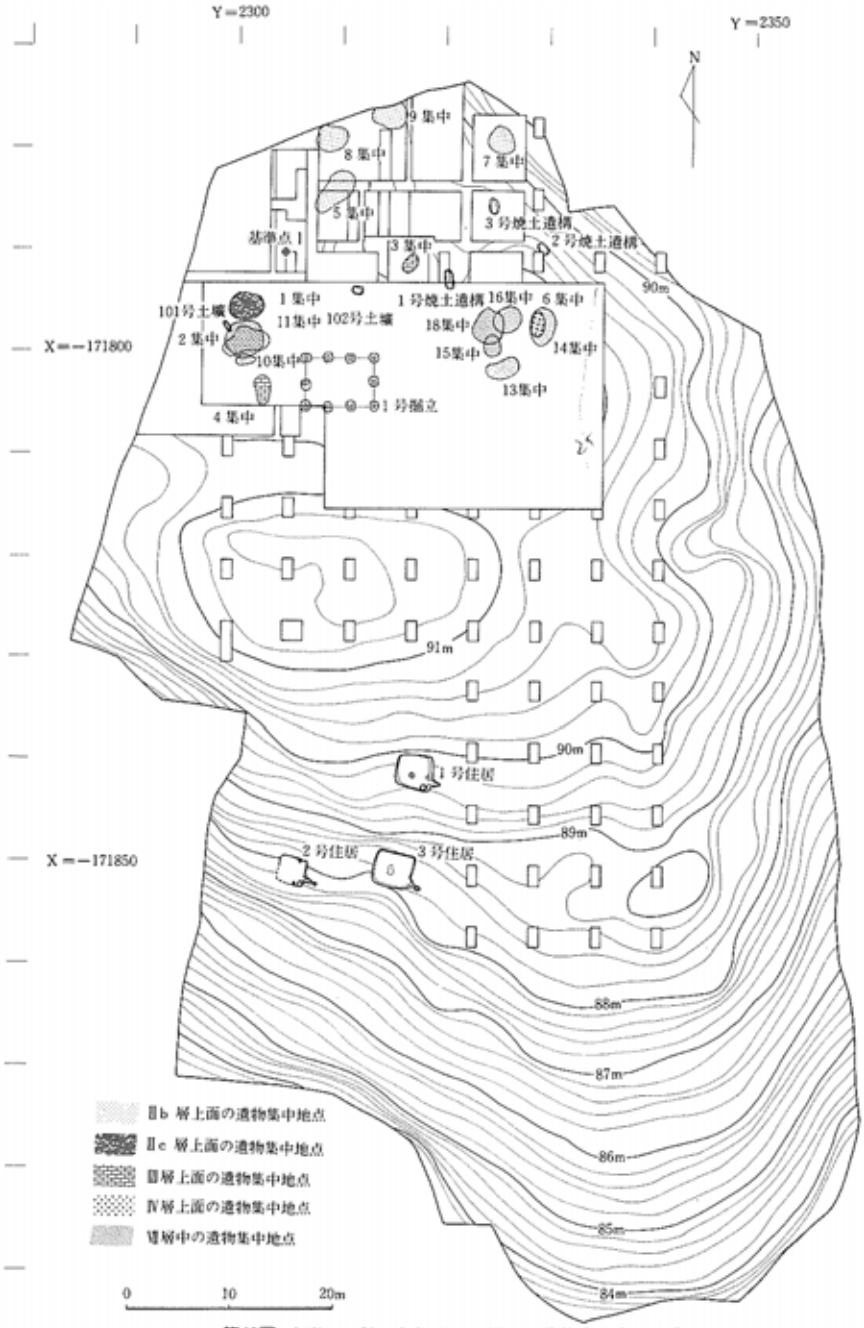
第39図　第１号住居跡と出土遺物

第２号住居跡（第 41 図）

〔平面形・規模〕第２号住居跡は南壁から西壁の一部が削平を受けているが、残存部から隅の丸い方形を呈すると推定される。規模は東西面約 2.8m 南北面約 3.0m ある。

〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からゆるやかに立ち上る。壁高は保存のよい北壁で約 20 cmある。床面はほぼ平坦で掘り方面と一致する。

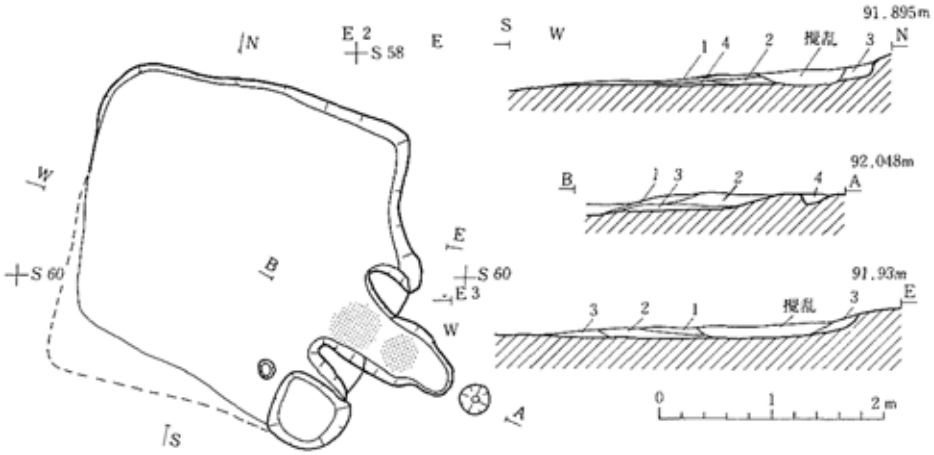
〔施設〕住居南東隅に一辺約 20cm の方形のピットがある。中からは須恵器坏、甕等が一括して出土しており、貯蔵穴状のピットと考えられる。



第40図 中峯C遺跡の発掘区と遺構、遺物集中地点の分布

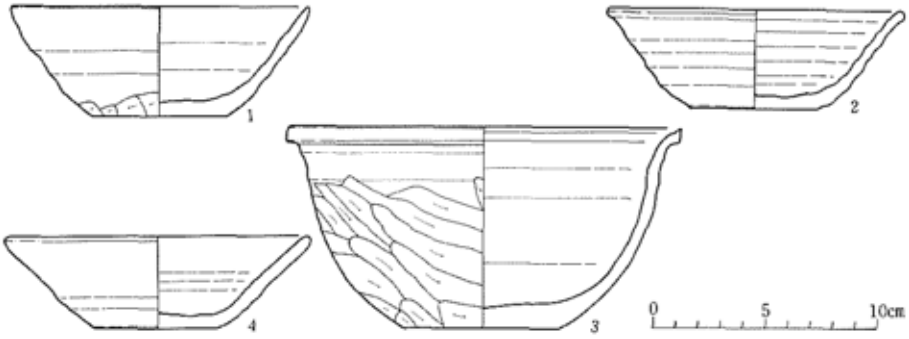
Fig.40 Distribution of palaeolithic concentrations
(Dwellings belong to Heian Period)

〔カマド〕東壁のほぼ中央にあり、燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部は、奥壁が住居東壁を掘り込んで、それに粘土で側壁を付けたものである。底面はほぼ平坦でゆるやかに煙道へと続く。煙道部は先端が削平されている。長さ約 40 cmで、先端には径 30 cmの煙出しピットがとりつく。



	層No.	土色	土性	その他
カマド内堆積土	1	灰白色(5YR7/1)	シルト	均質な灰白火山灰
	2	にぶい黄褐色(10YR7/3)	シルト	僅かに炭化物含む
	3	褐色(10YR4/6)	シルト	
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼け焦げ灰の掻出し焼け土ブロック含む

層位		層No.	土色	土性	その他
住居内堆積土	I	1	褐色(10YR4/6)	シルト	住居内第3層に同じ
	II	2	赤褐色(5YR4/8)	シルト	明赤褐色(5YR5/8)焼土ブロック含む
		3	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	木炭・炭化物多量含む。カマドや南から住居中央にかけて分布
	III	4	にぶい赤褐色(5YR4/3)	シルト	焼け焦げ灰の掻出し焼け土

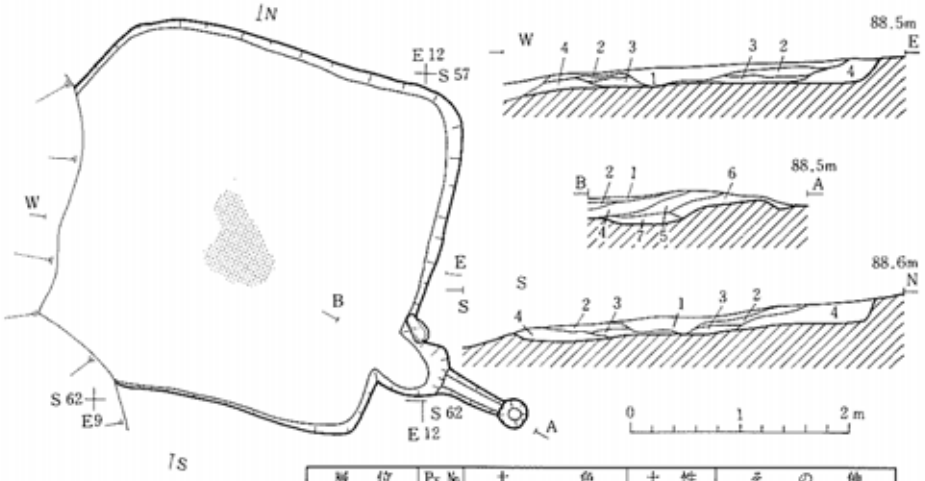


番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	層位	分類	登録
1	須恵器	坏	13.3	6.0	4.9	ロクロ	ロクロ+ケズリ	回糸+ヘラ		カマド粒炭		2-3
2	〃	坏	13.2	5.6	4.4	ロクロ	ロクロ	回糸		床		2-5
3	〃	甕	17.5	6.9	9.1	ロクロ	ロクロ+ケズリ	回糸		カマド粒炭		2-2
4	〃	坏	13.7	5.3	4.1	ロクロ	ロクロ	回糸		—		2-1

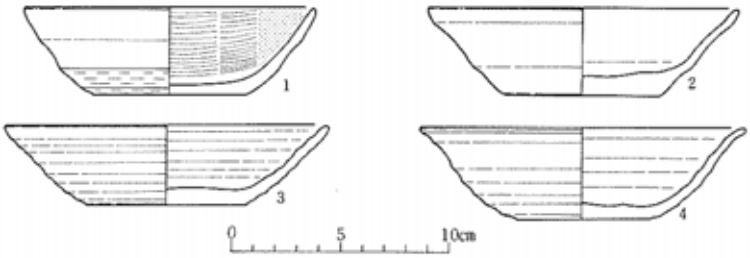
第41図　第２号住居跡と出土遺物

〔堆積土〕住居内堆積土は３層に大別され、北から流れ込んだ堆積状況を示す。自然流入土である。第Ⅰ層は灰白火山灰である。第Ⅱ層は黄褐色のシルトで住居全体に堆積している。第Ⅲ層は黒褐色のシルトで、住居中央の床面に薄く分布し、炭化物を多量に含む。

〔出土遺物〕図示できたものは４点ある。その内、床面から須恵器１点、貯蔵穴状ピットから土師器坏１点、甕１点、須恵器甕１点、堆積土中から須恵器坏１点が出土している。



層位		Py No.	土色	土性	その他
住居内堆積土	Ⅰ	1	黒色 (10YR2/1)	シルト	
	Ⅱ	2	にぶい黄橙 (10YR6/3)	シルト	灰白火山灰
	Ⅲ	3	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	やや粘性あり、床面直上を中心に多量のスミ・炭化した木片を含む
	Ⅳ	4	褐色 (10YR4/6)	ローム	粘性あり、スミを含む 農物のほとんどを含む
カマド内堆積土		5	褐色 (10YR4/6)	ローム	粘性あり、スミ・焼土のブロックほりを含む
		6	暗赤褐色 (5YR 3/4)	シルト	やや粘性あり、多量のスミ・焼土ブロックを含む
		7	極暗赤褐色 (5YR 3/4)	シルト	やや粘性あり、多量のスミ・焼土ブロックを含む



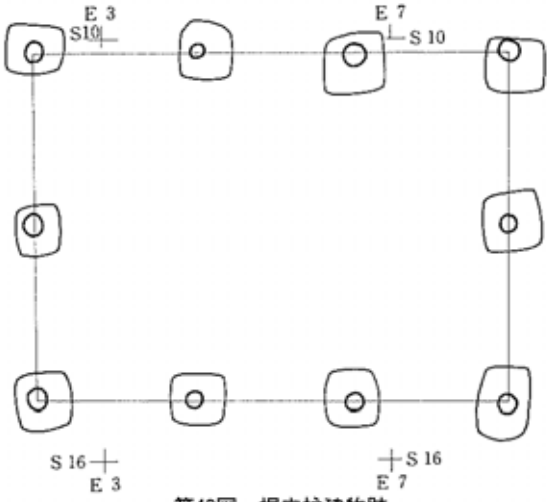
番号	種別	器種	口径	底径	器高	内面	外面	底部	その他	Py位	分類	登録
1	土師器	坏	13.4	7.0	4.0	ミガキ+黒	ロクロ+回ヘラ	回ヘラケズリ	漆付着	4		3-2
2	須恵器	坏	14.2	4.0	7.0	ロクロ	ロクロ	ヘラ切		4		3-1
3	〃	坏	14.8	7.2	3.6	ロクロ	ロクロ	ヘラ切		4		3-3
4	〃	坏	14.8	6.0	4.7	ロクロ	ロクロ	回糸		4		3-4

第42図　第３号住居跡と出土遺物

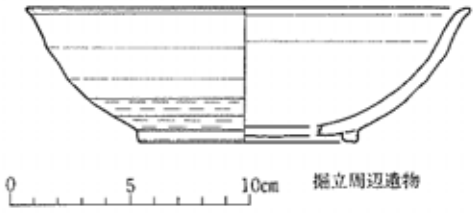
第３号住居跡（第 42 図）

〔平面・規模〕第 3 号住居跡は西～南壁の一部に攪乱を受けているが、残存部から隅丸の正方形を呈すると推定され、一辺約 3.4m ある。

〔壁・床面〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は保存のよい北壁で約 20cm ある。床面はほぼ平坦で、南西隅に向かってゆるやかに傾斜する。床面の中央部には 60×80 cmほどの焼面の広がりが見られる。



第43図　掘立柱建物跡



第44図　掘立柱建物跡周辺遺物

〔カマド〕東壁南寄りに付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は住居東壁を掘り込んでおり、側壁は地山を削り出し、それに石をすえ粘土を貼りつけたと考えられる。底面はわずかに窪み、約 20 cmの段（奥壁）をへて煙道部へと続く。煙道部は地下式で長さ約 60cm、巾約 25cm あり、先端に径約 30cm の円形の煙出しピットをもつ。

〔堆積土〕住居内堆積上は 4 層に大別され自然流入土である。第Ⅰ層は黒色のしまりのないシルトである。第Ⅱ層は灰白火山灰である。第Ⅲ層は褐色シルトで住居中央の床面をおおう。第Ⅳ層は褐色のロームで壁際の堆積土である。

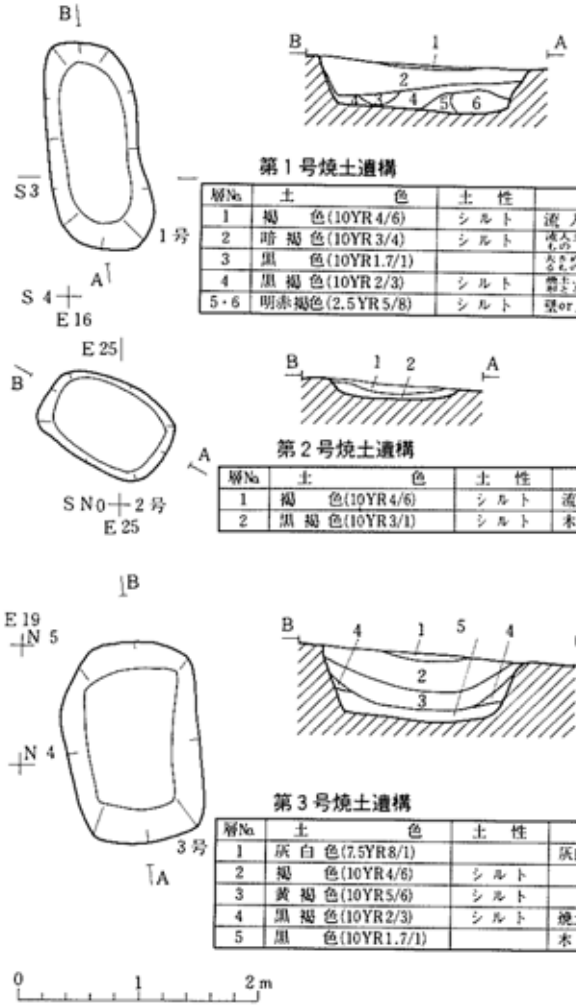
〔出土遺物〕図示できたものは 4 点あり、いずれも堆積土中から出土している。

2）掘立柱建物跡（第 43、44 図）

住居群から北方約 36m 離れたＥ5－Ｓ13 区付近で確認された。東西 3 間、南北 2 間の建物跡で規模は北側柱列で 6.6m（2.1m＋2.1m＋2.1m）西側柱列では 4.8m（2.4m＋2.4m）ある。方向は西側柱列でＮＳ－0°と真北方向と一致する。掘り方は一辺 70～80 cmの方形で、深さは確認面から約 1m あった。柱痕はすべて円形で径は約 30 cmある。建物周辺の表土から灰釉陶器が出土している。

3）焼土遺構

第１号焼土遺構（第 45 図）



第1号焼土遺構

層No.	土色	土性	その他
1	褐色(10YR 4/6)	シルト	流入土
2	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	流入土に焼土・木炭混じたもの
3	黒色(10YR 1.7/1)		大きめの木炭層(細形とどめるものもある)
4	黒褐色(10YR 2/3)	シルト	焼土、木炭層(細かく崩け細形とどめない)
5・6	明赤褐色(2.5YR 5/8)	シルト	壁or上部構造の崩壊焼土

第2号焼土遺構

層No.	土色	土性	その他
1	褐色(10YR 4/6)	シルト	流入土
2	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	木炭多量に含む

第3号焼土遺構

層No.	土色	土性	その他
1	灰白色(7.5YR 8/1)		灰白火山灰
2	褐色(10YR 4/6)	シルト	
3	黄褐色(10YR 5/6)	シルト	
4	黒褐色(10YR 2/3)	シルト	焼土・炭化物含む
5	黒色(10YR 1.7/1)		木灰層

第45図 焼土遺構

平面形は長軸約1.8m、短軸約0.8mの隅の丸い方形を呈し、深さは約40 cmある。壁の全面が焼けており、底面には約10cmの木炭層が認められた。堆積土は6層に細分され、最上層は、灰白火山灰である。出土遺物はない。

第2号焼土遺構（第45図）

平面形は長軸約1.1m、短軸約0.7mの方形を呈し、深さは約15 cmある。西壁を除くすべての壁が焼けており、底面には約5cmの木炭層が認められた。堆積土は2層で最上層には灰白火山灰がまじる。出土遺物はない。

第3号焼土遺構（第45図）

平面形は長軸約1.7m、短軸1.1mの方形を呈し、深さは約60cmある。壁・底面の全面が焼けており、底面には約10cmの木炭層が認められた。堆積土は5層に細分された。最上層は灰白火山灰である。出土遺物はない。

4）出土土器の考察

出土土器には、土師器・須恵器・灰釉陶器がある。ここではこれらの土器の特徴を述べ、編年的位置づけと年代について考えてみたい。

〔土師器〕土師器は図示できたものは坏2点のみであるが、その他には長胴形の甕があり、こ

れらはいずれも成形時にロクロを使用している。

坏は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、その端部は丸くおさまる。調整は、外面にはロクロ調整後体部下半に回転ヘラケズリを、内面にはヘラミガキの後黒色処理が施されている。底部まであるものは、1 個体のみだが回転ヘラケズリの再調整が加えられており、切り離し技法については不明である。

〔須恵器〕須恵器には坏と甕がある。

坏は 6 点図示できた。体部から口縁部にかけてはいずれも直線的に外傾するもので、口縁端部には、そのまま丸くおさまるもの 2 点、薄くなるもの 3 点、外反気味のもの 1 点がある。底部切り離し技法は、回転ヘラ切りによるものと回転糸切りによるものとがあり、後者の中には、切り離し後体部下端に手持ちヘラケズリの再調整が施されたものもある。

甕は鉢形の小形のもの 1 点である。体部は丸味をもって外傾し、口縁部は外反する。端部は上方に若干突き出ている。底部切り離しは回転糸切りで、切り離し後体部下半に手持ちヘラケズリが加えられている。

〔灰釉陶器〕高台付坏が 1 点ある。体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾し、口縁端部は外反する。体部下半から底部全面に回転ヘラケズリが施され、底部には角高台が付けられている。

釉は内面に刷毛塗りによって施釉されている。

これらの土器の中で土師器と須恵器は竪穴住居内において、共伴関係にある。灰釉陶器については掘立柱建物跡周辺の表土から出土したもので、これらの土器と遺構内での共伴関係にあると言えないが、調査区内において他時代の遺物は旧石器と少量の縄文土器を除けば出土しておらず、これらの遺構は独立して存在したと考えるより、同時期のものと考えた方がよいと思われる。

次に出土土器の年代について考えてみたい。出土土器の中で土師器坏は、製作にロクロを使用し、内面をヘラミガキ・黒色処理しているという特徴をもつもので、東北地方南部の編年では表杉ノ入式（氏家：1957）に位置づけられている。その後、表杉ノ入式は製作技法、形態的変化等の面から検討が加えられ細分が試みられている。

県内の表杉ノ入式期の遺跡で土師器坏が本遺跡から出土したものと同様な回転ヘラケズリの再調整をもつもので、共伴する須恵器坏が回転ヘラケズリによるものと、回転糸切りによって構成されている例としては、佐内屋敷遺跡第 28 号住居跡・東山遺跡土器溜出土のものがあり、表杉ノ入式期の中でも古い時期に位置づけられている。灰釉陶器は、愛知県猿投古窯群において黒笹第 5 号窯出土（楢崎：1983）のものに類似するものがあり、黒笹 14 号窯式に相当すると考えられる。灰釉陶器の絶対年代については、いくつかの見解が分かれ、論議されているが、黒笹 14 号窯式のものは 825 年前後（吉田：1982）とする意見と 9 世紀後半とする意見があり、その

実年代については確定していない。

〔引用・参考文献〕

阿部正光・赤沢靖章（1983）『大鏡山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集

氏家　和典（1957）「東北土師器の型式分類と編年」『歴史』第14輯

岡田　茂弘・桑原滋郎（1974）「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所

小笠原好彦（1976）「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会

加藤道男・佐藤好一（1980）「藤屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅱ　宮城県文化財調査報告書』第63集

菊地　逸夫（1982）「山下遺跡」『松島有料道路関連調査報告書』Ⅰ　宮城県文化財調査報告書第87集

小井川和夫（1981）「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集

佐々木和博（1984）『鹿島・竹之内遺跡』宮城県文化財調査報告書第101集

白鳥　良一（1980）「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所

土岐　山武（1980）「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅵ　宮城県文化財調査報告書第72集

楢崎　彰一（1983）「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査報告書』3

丹羽　　茂（1983）「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集

早坂春一・阿部　恵（1979）「西手取・手取遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅱ　宮城県文化財調査報告書第63集

古川　一明（1984）「色麻古墳群」『宮城県営圃場整備等関連遺跡群細分布調査報告書（昭和58年度）宮城県文化財調査報告書第100集

真山　　悟（1981）「家老内遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅴ　宮城県文化財調査報告書第81集

真山　　悟（1981）「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅴ　宮城県文化財調査報告書第81集

森　　貢喜（1982）『水入遺跡』宮城県文化財調査報告書第84集

森　　貢喜（1983）「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅷ　宮城県文化財調査報告書第93集

遊佐　五郎（1980）『沼崎山遺跡』　豊里町文化財調査報告書第2集

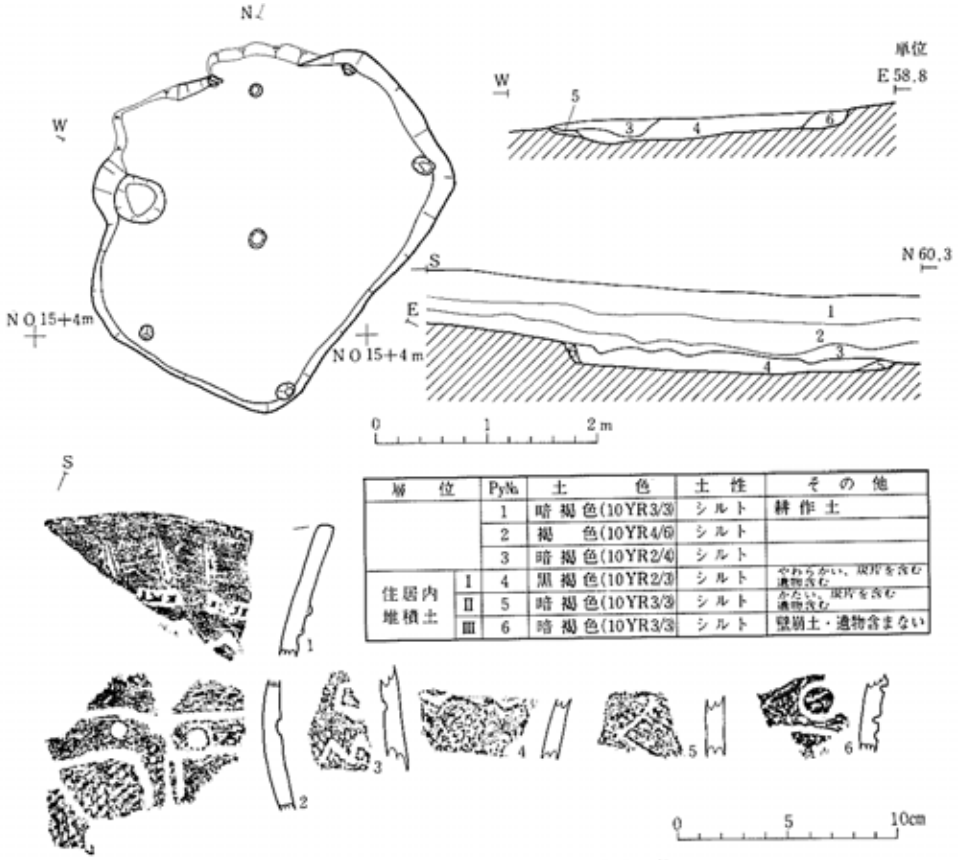
吉田　恵二（1982）「緑釉陶と灰釉陶と相関関係とその編年」『考古学ジャーナル』211
ニューサイエンス社

7. 縄文時代の遺構と遺物…中峯Ｂ遺跡…

中峯Ｂ遺跡は、調査区を地形によって２つに分け、それぞれＡ区・Ｂ区とした。発見された遺構には、Ｂ区からは竪穴住居が１軒検出されたのみで、Ａ区からは遺構は検出されなかった。遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、石器があるが、これらは層位的に出土したものでなく、いずれも混在した状態で出土している。しかし、これらの土器の型式毎の分布を表採を参考に見ると時期的に差異が認められる。以下、遺構、遺物の順で記述する。

竪穴住居跡と出土遺物（第 46 図）

〔平面形・規模〕　西壁の一部が攪乱を受けており、平面形については不明な点が多いが、方形を基調とすると考えられる。しかし西壁は、住居北西隅と南西隅をむすぶ線から西側に大



層位		Py№	土色	土性	その他
		1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	耕作土
		2	褐色(10YR4/6)	シルト	
		3	暗褐色(10YR2/4)	シルト	
住居内堆積土	Ⅰ	4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	やわらかい、炭片を含む 遺物含む
	Ⅱ	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	かたい、炭片を含む 遺物含む
	Ⅲ	6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	壁崩土・遺物含まない

第46図　第１号住居跡と出土遺物

きく張り出していることから、五角形に近い形をしていた可能性がある。規模は南北軸約3.4m東西軸約2.4mである。

〔壁・床面〕　検出された壁は地山で、床面から緩やかに立ち上がる。壁高は保存のよい北壁～東壁で約15㎝ある。床面はほぼ平坦で掘り方面と一致する。

〔施設〕　西壁際から径約50×40㎝で深さ約4㎝の楕円形の落ち込みが、また住居床面中央と各隅壁際から径15～20㎝深さ10～15㎝の円形のピット（ピット1～5）が検出された。これらのピットからは柱痕跡等は検出されなかったが、配置から柱穴である可能性がある。

〔炉〕　床面からは炉・焼面等は検出されなかった。

〔堆積土〕　堆積土は3枚に細別され、いずれも自然流入土である。第Ⅰ層は黒褐色のシルトで、床面を直接おおう、第Ⅱ、第Ⅲ層は暗褐色のシルトで壁際にのみ堆積する。壁の崩落土であると考えられる。

〔出土遺物〕　堆積土中から縄文土器、石器が出土している。

縄文土器（第46図1～6）

すべて深鉢形土器である。1は口縁部に、刻目の施した横位の粘土紐を貼付し、その上方に短い縦位沈線が、下方には横位山形沈線文が施されている。2は体部破片で、太い2本の沈線文によって無文部と地文部に区画し、無文部にさらに曲線的な沈線を加えている。4には横位山形沈線文が、5には横位の粘土紐（剥落痕のみ認められる）に接して菱形文が施されている。6は、地文部を2本の沈線で区画して、その間に円形竹管文を加えている。これらの土器と同様な特徴をもつ土器としては、名取市宇賀崎貝塚C群土器CⅠ類があり、大木3式に位置づけられている（阿部　1980）。

遺構外出土の土器

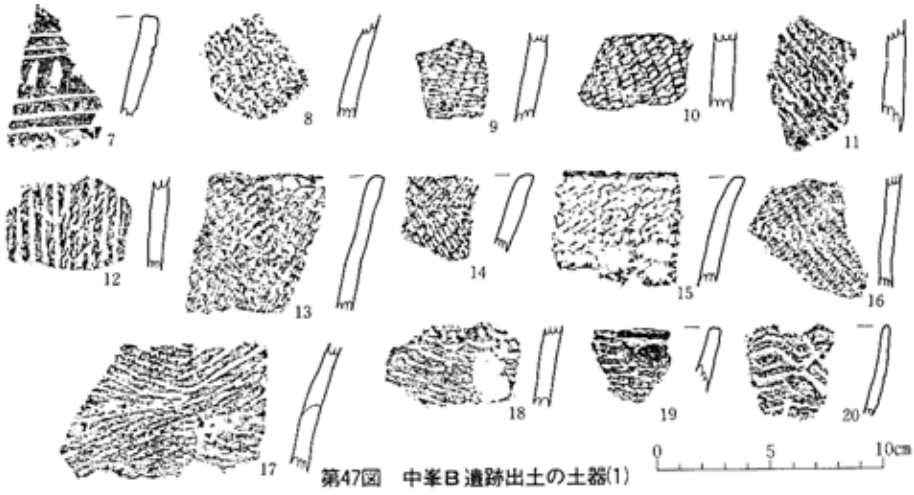
遺構外の出土遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、石器がある。これらの遺物は、調査区内の基本層位第1、2層から混在して出土したもので、層位によって分類することはできなかった。ここでは、これらの遺物について時代、時期別に特徴を述べていく。なお土師器については、細片のみで図示できるものはなかったが、坏はすべてロクロを使用し、内面をヘラミガキ、黒色処理したもので、表杉ノ入式（氏家　1957）と考えられる。

縄文土器　　縄文土器は早期～中期のものまで広い時間巾の遺物が出土している。ここではいくつかの時期に区切って記述する。

＜早期～前期前葉の土器＞（第47図）　7は口縁部から斜行する3本組の沈線を施し、間に連続する刺突を加えている。田戸下層式に位置づけられる。8～20の土器は何れも深鉢形土器

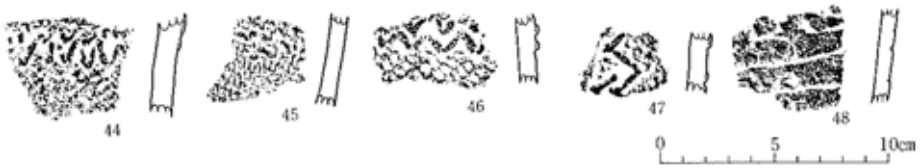
で胎土に繊維を含む。13～15、19、20 は口縁部資料でそれ以外は体部資料である。8 は結束のない羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）が、9 はＬＲの、10 にはＲＬの斜縄文が施されている。11、12 には縦位の撚糸文が施されている。9～12 の土器は、胎土中の繊維量が非常に多く、いずれも、もろく、スカスカした感じがする。早期末の所産と考えられる。13～15 は口縁部破片で、いずれも口縁上端から施文されている。13、16 は斜縄文（ＲＬ）が施され、13 には結束が見られる。14 には結束のない羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）が、15 にはループ文が施されている。これらの土器は宇賀崎貝塚Ｂ類、蔵王町欠遺跡第 1 土器群に類似するもので、前期初頭のものと考えられる。17～19 は撚糸文の施文されている土器群である。17 は、撚糸原体（単軸結条体）向を違えて施文しているもので、菱形のモチーフを作り出している。18、19 は葺瓦状撚糸文が施文されている。20 は波状口縁で、半截竹管によって横位の波状沈線か施文されている。17～19 は類似する土器には欠遺跡第 2 群土器、20 に類似する土器には欠遺跡第 5 群土器があり、大木 2ａ式に位置ずけられている。

＜前期中葉～後葉の土器＞（第 48・49 図）　21～25 は粘土紐の貼付による文様で、粘土紐にはすべて刻目が施されている。26～32 は沈線と竹管によって施文されている。21、22、23、24、26、27 は口縁部資料で刻目をもつ横位の 1 条～3 条の粘土紐、あるいは横位山形沈線文により地文部と無文部を区画している。22 は横位の粘土紐から下方に、25 では上方にさらに粘土紐が延びる。26、27 はいずれも口縁部に横位の山形沈線文をもつが、26 は地文部と無文部を区画しない。27 は地文部に縦位の短かい沈線文が加えられている。28、29 は体部資料で、28 は横位と縦位の山形沈線文、29 は横位の平行沈線文と山形沈線文の組み合わせによって施文されている。30～32 は口縁部資料で、32 は折りかえしの口縁である。30、31 は半截竹管による曲線の沈線文が施され、30 には竹管の円形文が加えられている。32 は、直線と弧線の組み合わせからなる沈



第47図　中峯Ｂ遺跡出土の土器(1)

第48図　中峯B遺跡出土の土器(2)



第49図　中峯Ｂ遺跡出土の土器(3)

線文が施されている。21～32 はＢ区から出土したものであるが、その範囲は竪穴住居周辺に限定される。

特徴等も竪穴住居出土のものと同様で、大木３式に位置づけられる。

３は口縁部破片で小突起の部分である。口唇部の内外面にそれぞれ鋸歯状に細い粘土紐を貼付し、外面には渦巻文が加えられている。34 は曲線的な文様が縦位に展開している。35 は口縁部に平行して刻目をもつ太い粘土紐を貼り付け、それに斜位の梯子状文が接続する。36、37 は横位と縦位に鋸歯状の粘土紐を貼付し、36 では菱形のモチーフを作っている。33～37 は字賀崎貝塚ＣⅡ類、迫町糠塚貝塚出土の土器に類似したものがみられ、大木４式に位置づけられている。38、39 は口縁部に平行して、連続する刺突をもつ太い粘土紐を貼り付け、38 ではさらにその下に横位の鋸歯状の粘土紐と、平行する粘土紐を 2 条づつ加えている。40、41 は口縁端部に粘土紐を貼付し肥厚させ、上下から刺突を加えて鋸歯状の装飾帯を作り出している。42 も粘土紐を貼付したもので、口縁端部に近い部位と考えられる。43～46 は横位の鋸歯状粘土紐が 1～3 段貼付されており、歯と歯の間が弧状を描くもの 43、平行する粘土紐を加えたもの 45 もある。47 は縦位に展開する。48 は製作時の粘土紐のつみ上痕を外面にそのまま残すもので、内面はミガキ調整されている。38～48 に類似する特徴をもつ土器群としては、糠塚貝塚のものがあり、大木５式と考えられる（興野　1969）。

第50図　中峯Ｂ遺跡出土の土器(4)

弥生土器（第50図）

49、53、54は鉢形土器、50～52は高坏形土器である。49～52は工字文の施文されている土器で、49、50は口唇部に、49、51、52では口縁内側にも沈線が加えられている。50、52は口縁部が波状を呈する。53ａｂ、54 は口縁部に列点刺突が施され、それ以下には縄文が施文されている。

弥生時代初頭のものと考えられる。

中峯Ｂ遺跡出土の石器（第51、52図）

1・2は石鏃である。有茎の1は基部にアスファルトの付着した痕跡がある。3、7は石匙である。縦形の3の刃部は右側が急角度であるのに対し、左側縁は鋭角的である。6は箆状石器で腹面に光沢を伴う著しい摩滅がみとめられる。また、一部に火をうけて弾けたような部分がある。5、9はスクレイパーである。9は珪化凝灰岩の剥片の周囲を加工したものでステップフラクチュアがめだつ。4、8は住居跡の覆土、床面より出土した剥片である。

10～14は石英安山岩の礫石器である。10、12は磨石である。10は厚手の素材の周囲に大小5面の磨面がある。長軸の一端には剥離された痕跡があるが、この面も研磨されている。12は住居跡床面から出土した。石器には3つのフラットな面があるが、主に使用されているのは図示した1面である。11、13、14は凹石である。11は薄手の礫の両面に2個単位の窪みがある。背面側には研摩されてかなりフラットになった部分がある。13 はやや厚手の礫の両面に浅い窪みがある。14 は細長い礫の両面に長軸にそって窪みが並ぶ。石器は全体が研摩によって整形されている。研摩は窪みより新しい可能性がある。

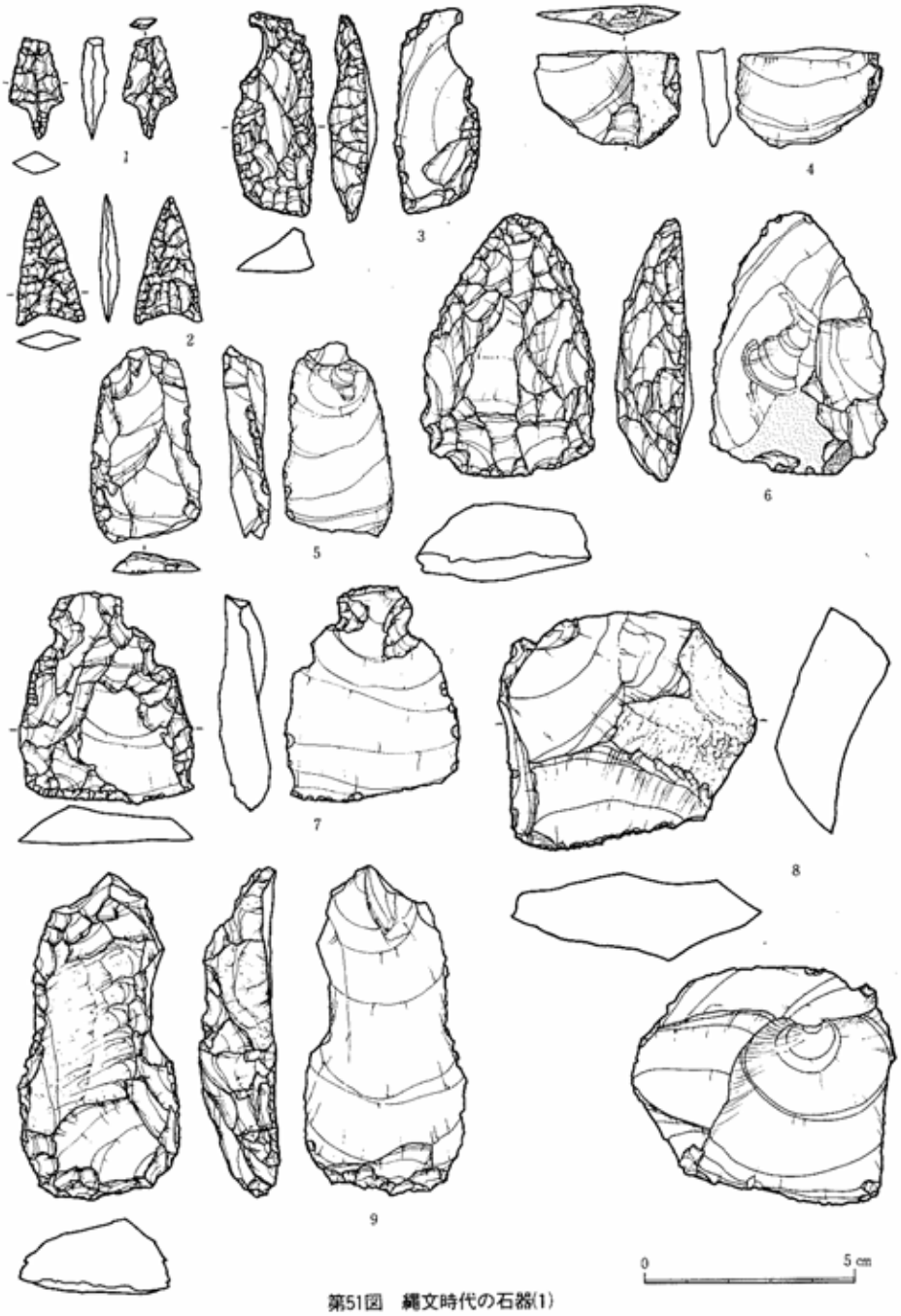
〔 引 用 文 献 〕

阿部　恵　1980　「宇賀崎貝塚」『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎1号墳他』
宮城県文化財調査報告書第67集

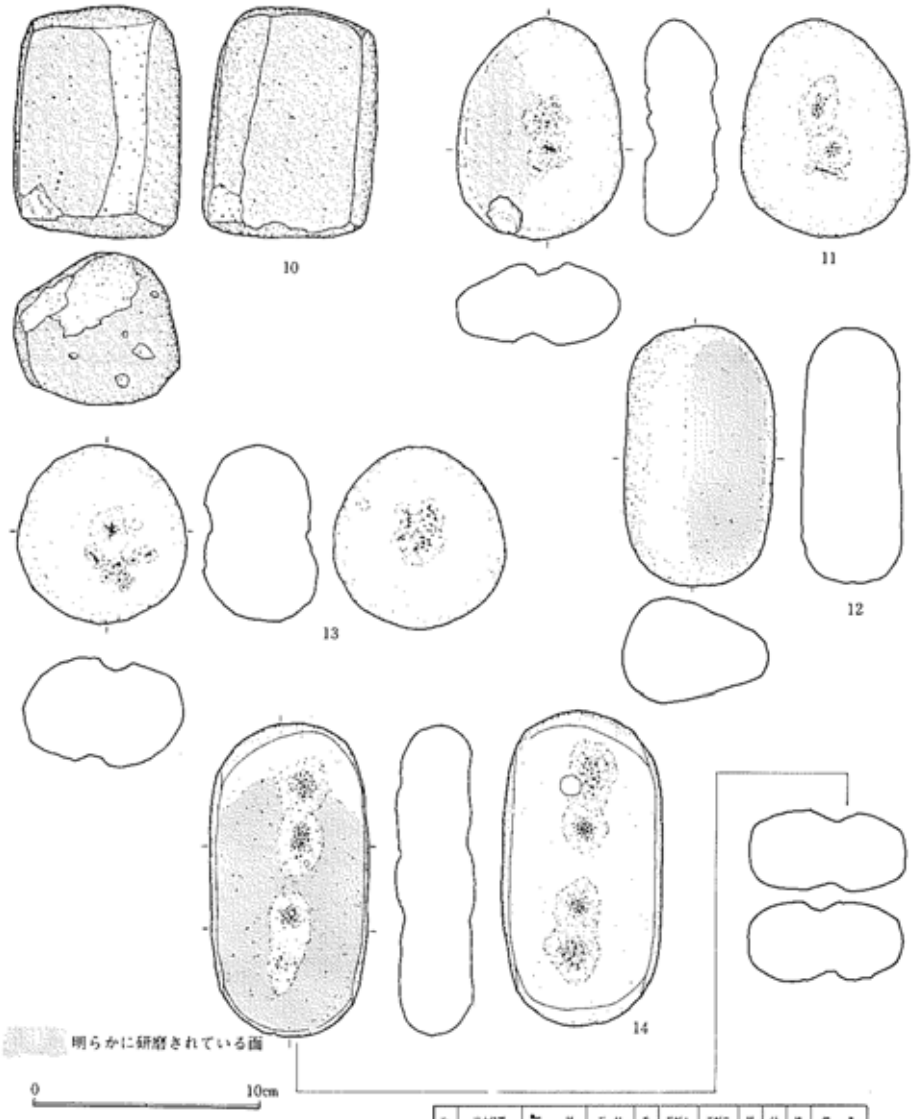
氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

菊池淳一　1981　「欠・持長寺遺跡」『仏南・仏塩・広域水道関係遺跡調査報告書』Ⅰ
宮城県文化財調査報告書　第79集

興野義一　1967～70「大木式土器理解のために」（Ⅰ）～（Ⅵ）
『考古学ジャーナル』第13.16.18.24.32.48号　ニューサイエンス社



第51図　縄文時代の石器(1)



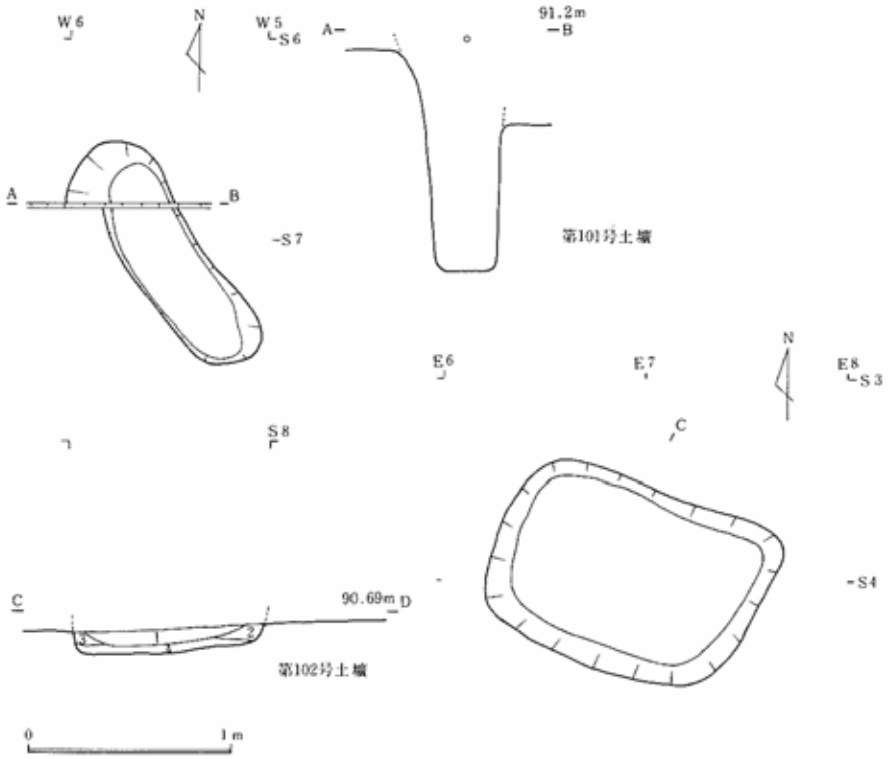
No	出土位置	器種	石材	重	長幅A	長幅B	厚	付	後	備考
1	包含層	石鏃	黒玉	1.1			5	▲	△	アスファルト
2	包含層	石鏃	粗黒鉄石	2.5	20×16		5	△	△	
3	包含層	石鏃	粗黒鉄石	9.2		50×19㎡	9	△	△	
4	AFG33-1.2層	スクレイパー	粗黒鉄石	5.7		35×23㎡	5	△	△	
5	住居2層	スクレイパー	粗化凝灰石	9.6		61×26	8	△	△	
6	AFG23-2層	石鏃	粗黒鉄石	47.6	62×41		17	△	▲	製品に帰属
7	表面	石鏃	粗黒鉄石	20.6		49×40	10	△	△	
8	住居床面	剥片	粗黒鉄石	74.2		58×60	23	△	△	二次加工有
9	BF30-1層	スクレイパー	粗化凝灰石	50.4	78×37		16	△	△	
10	BD28-3層	磨石	石英安山石	800	102×73		68	△	△	
11	BD14-3層	閃石	石英安山石	339	97×73		37	△	△	
12	住居床面	磨石	石英安山石	325	125×65		49	△	△	
13	BD26-1.2層	閃石	石英安山石	332	78×73		47	△	△	
14	BD29-1層	閃石	石英安山石	490	130×70		36	△	△	

第52図　縄文時代の石器(2)

8. 旧石器時代の遺構と遺物

<1>旧石器時代の遺構（第 53 図）

火山灰層発掘中に検出された落ちこみのうち、遺構の可能性がある 2 基について紹介する。第 101 号土壙としたものは第 2 集中地点の西北に位置する（第 40 図）。Ⅱｃ層上面で検出されたが、断面観察から掘りこみ面はⅡａ層中と推定される。平面形は長楕円形で確認面から約 110 ㎝の深さがある。覆土は 10ＹＲ4/6 褐色のシルト質土で軟らかく粘性があり、基本層位のⅡａ層に類似する。遺物の出土はない。遺構はあたかも縄文時代のＴピットをひとまわり小さくしたような特殊な形態であり、自然に形成されたものとは思われない。また、覆土の状態から縄



第102号土壙土層注記

層	土色		土性	含有物等
1	75YR56	明褐色	シルト質ローム	軟らかい,炭化物を含む,基本層Ⅱb層に類似
2	75YR54	にぶい橙色	シルト質ローム	やや硬い
3	75YR54	にぶい橙色	シルト質ローム	やや硬い
4	75YR56	明褐色	砂質ローム	やや硬い、礫粒、マンガン粒を含む。基本層　層に類似。

第53図　第101、102号土壙
Fig.53 Pit No. 101, 102 in stratum Ⅱ

文時代のＴピットとも考えられない。詳細は不明だが、最近調査された村田町支倉遺跡、仙台市青葉山東北大学構内遺跡でも、火山灰層中から、同様の大きさ、形態の土壙が発見されており、今後こうした遺構の存在に注意する必要がある。

第 102 号土壙は、丘陵頂部からやや東側へ下ったところに位置する（第 40 図）。検出面はⅢ層上面だが更に上部で確認している。平面形は隅丸長方形で検出面からの深さは約 10 ㎝と浅い。覆土は 4 層からなり、うち第 1、4 層は基本層位のⅡｂ、Ⅱｃ層に類似する。遺物の出土はない。覆土各層の土を採取して水洗したところ、極細かい炭化物がかなりみとめられたが、炭化物はⅡａ、Ⅱｂ層に含まれるものなので、土壙の性格に関係するものかわからない。

＜3＞Ⅱｃ層上面出土の石器

出土状況

Ⅱｂ層上面で発見された遺物には斜めになっているものがあり、石器の出土レベルにも 10 ㎝程の巾がある。Ⅱａ、Ⅱｂ層は表土から植物根等が入りこんでおり、遺物はそれらの影響で多少上下に二次的な移動をうけている。

第 54 図に遺物の平面分布を示した。丘陵頂部付近に一群のまとまりがあり、その一方で頂部から北東へ下る斜面上の広い範囲にやや散漫な遺物の分布がある。この中にも遺物の偏在する部分が何ケ所か認められる。以下においては、遺物がのこされた当時の状況を反映していると考えられる。これらのまとまりに対して、第 2、5、7、8、9 の各遺物集中地点を設定し、集中出地点毎に遺物を紹介してゆく。ただし、各集中地点から分布が離れる 7 点については遺物集中地点外として扱う。

接合資料・母岩別資料とその分布

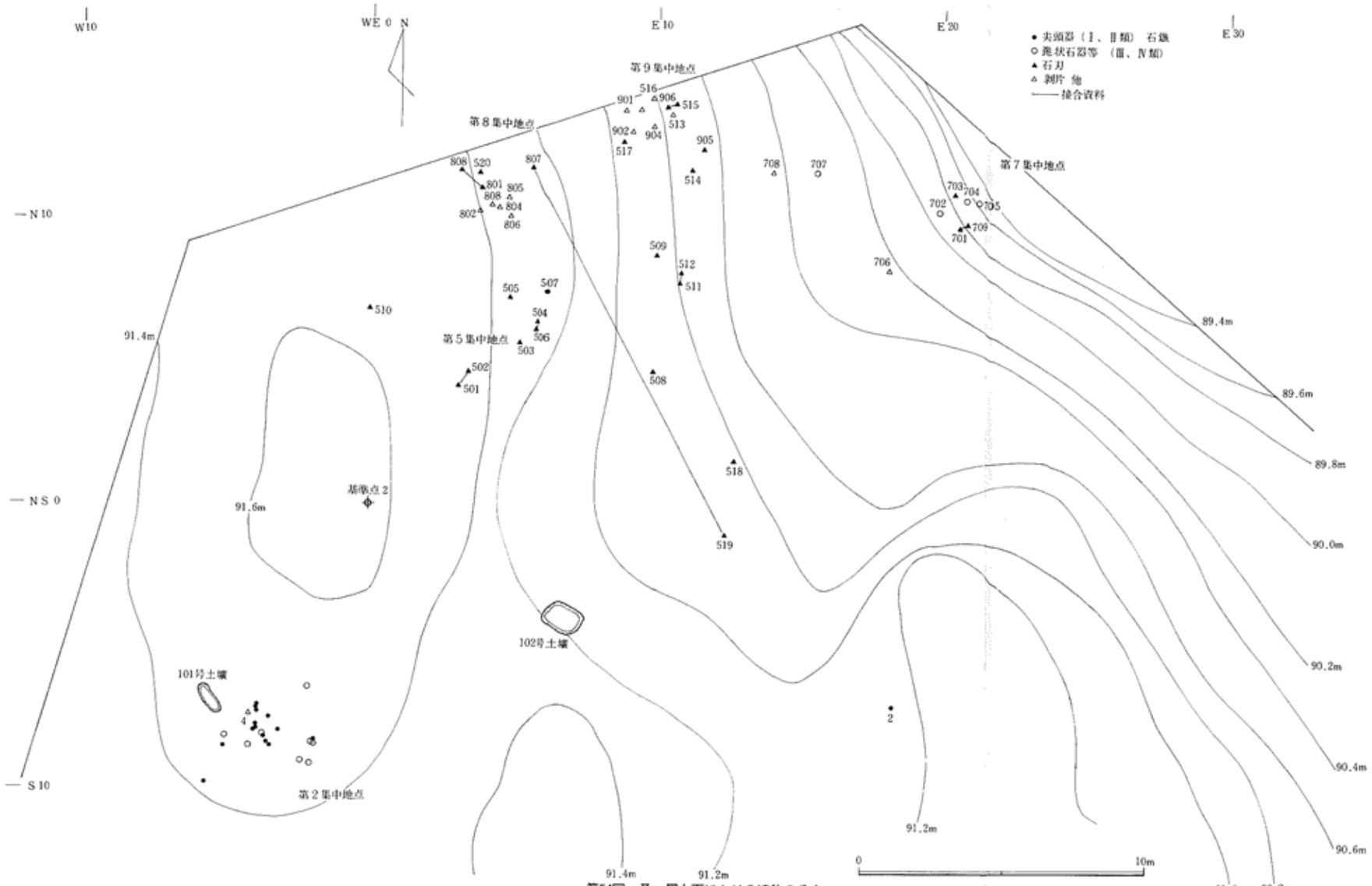
接合資料は 6 点ある。そのうち 5 点は折れた石刃が接合したものであり、残りの 1 点も「折れ」の可能性がある。石器のほとんどは異なる母岩から得られており、種数の石器からなると認められた母岩は 3 点にすぎない。接合資料の分布はその多くが近接しており、1 点だけが約 15m 離れて接合している（第 54 図）。

第 2 集中地点の石器（第 55、57、58 図）

石器 22 点が出土している。その際、微細遺物の検出を目的として石器の周囲の土約 15l を採取し水洗したが、炭化物若干を除いてチップ等の出土はなかった。

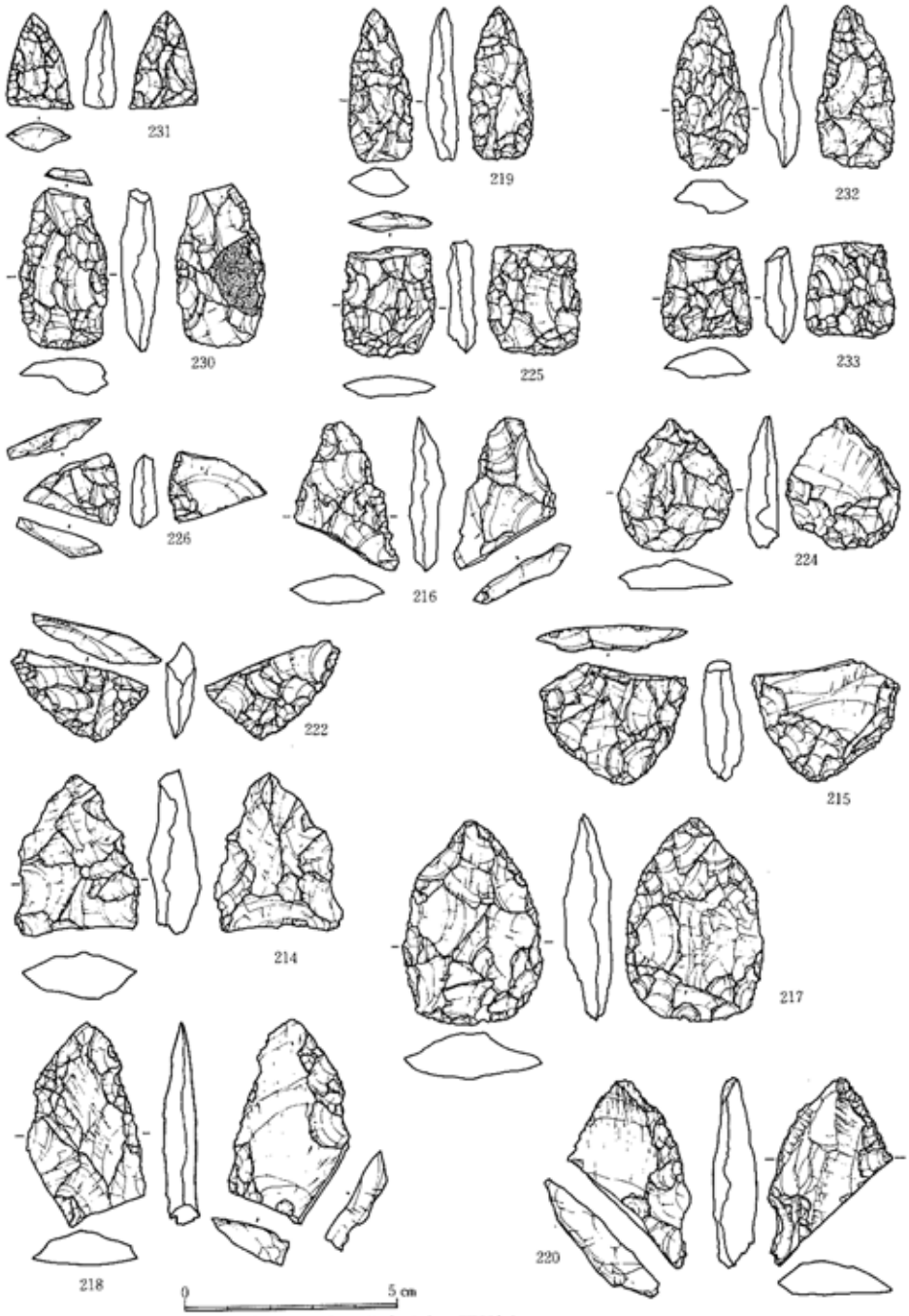
22 点の石器はすべて二次加工のある「トゥール」であり、尖頭器とそれ以外の石器に大別される。

尖頭器には、細身で基部が直線状になるもの(1 類)、幅広で基部が丸みをもつもの(Ⅱ類)と



第54図　Ⅱb 層上面における遺物の分布

Fig.54　Distribution of artifacts on stratum IIb



第55図　第2集中地点の石器(1)
Fig.55 Lithic artifacts of concentration 2, stratum IIb(1)

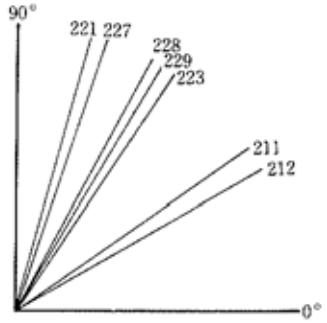
それ以外の一群がある。Ⅰ類にはややこぶりのもの（219、232）とひとまわり大きなもの（230）がある。231, 225, 233 は形態、大きさから考えて、Ⅰ類の破損したものである。230 は火をうけて「焼けはじけ」した部分がある。Ⅱ類には 217, 224 がある。215, 222 はⅡ類の先端部か、あるいは幅広の別形態の尖頭器の基部と考えられる。226 はこれら幅広の尖頭器の側縁ぶであろう。「その他の一群」には完形資料がないが、216 は細身で大形の尖頭器の端部と思われる。220 も同様だが二次加工は部分的でしかない。214 の基部は破損ではなく剥離によってこのように整形されている。218 の腹面 (註) 1右側縁にみられるのは折れ面ではなく素材（剥片）の一部である。従って 218 は当初から左右非対称であった。

製作技術の点からこれらの石器をみると、まず、石材は珪質頁岩、黒色頁岩、珪化凝灰岩が用いられており、かなり粗粒のものから珪質細粒のものまで多様である。素材の面を残している資料から、石器のほとんどは剥片素材と確定される。二次加工は 225, 233, 222 のように整ったものから、219, 232, 214 のように粗くステップフラクチュアのめだつものまで様々である。二次加工の精粗は、石器の形態、大きさに拠るというよりは、むしろ多様な石材にその原因が帰せられそうである。

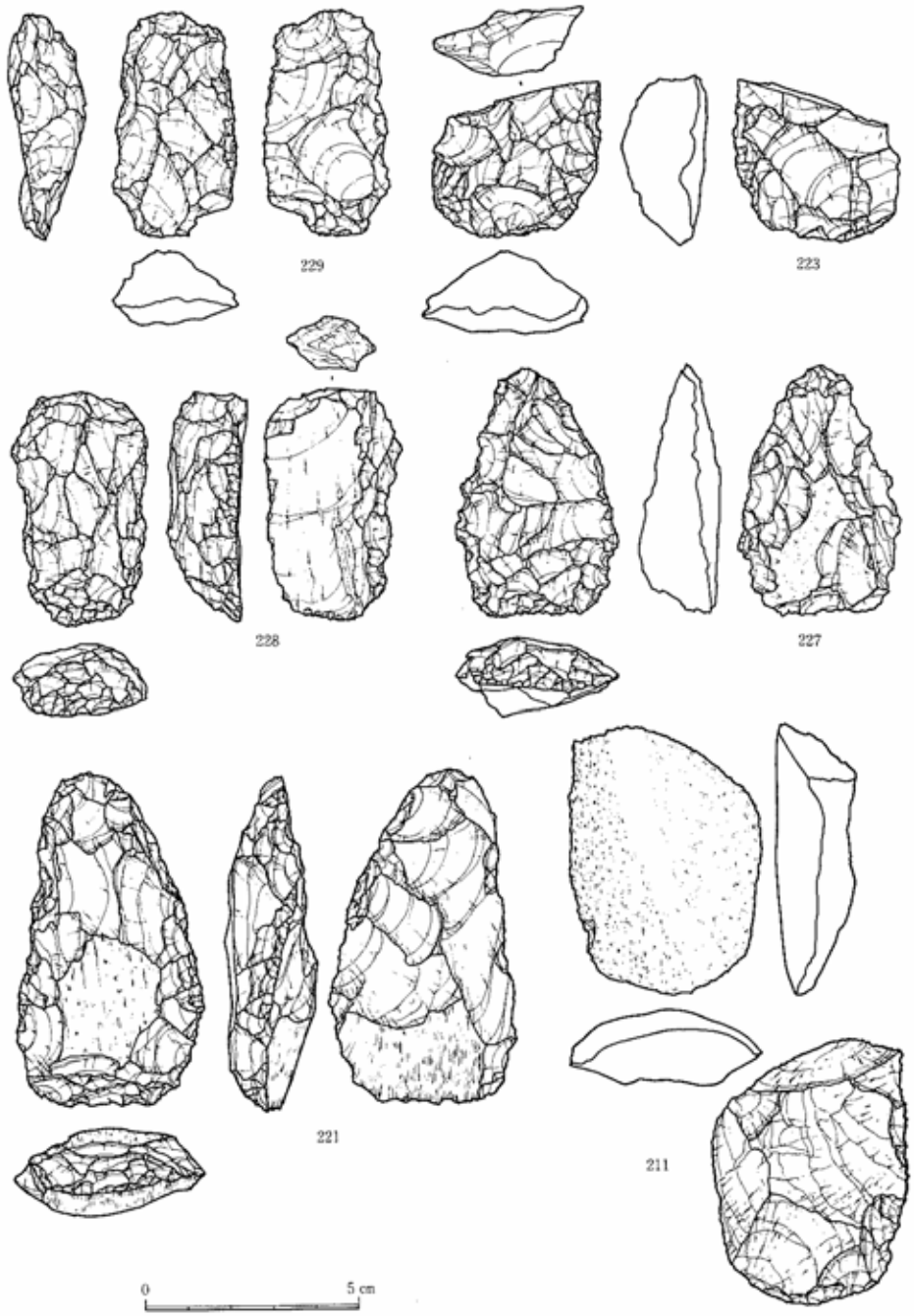
尖頭器以外の石器は、長さが 8 ㎝以下の小形のもの（Ⅲ類）と 8 ㎝を超える大形のもの（Ⅳ類）からなる。Ⅲ類のうち、227, 223 の形態は縄文時代の「箆状石器」そのものである。227 は腹面側 (註) 1にフラットな自然面を残している。221 は左右非対称だが、基部の窄む形態は 227, 223 に類似する。221 の腹面 (註) 1の広い範囲には光沢のある摩滅痕と石器長軸に沿った線状痕がみとめられる。228, 229 は両側縁の平行する蒲鉾形の石器で、幅の狭い割に厚みがある。228 は腹面にフラットな素材の面を残しており、荒割り礫のような素材を用いている。基部に残るごく初期の加工には両極打法が認められる。211 は破損しているが、その最大幅から大形のⅣ類に含まれると考えられる。背面にはほとんど加工がなく素材の形態をそのまま利用している。腹面のみに加工があることから、刃部 (註) 2正面観は円のみ状を呈する。212 は短冊形で扁平な打製石斧？である。背面側には刃部を形成する縦長の剥離がみられる。

刃部再生について

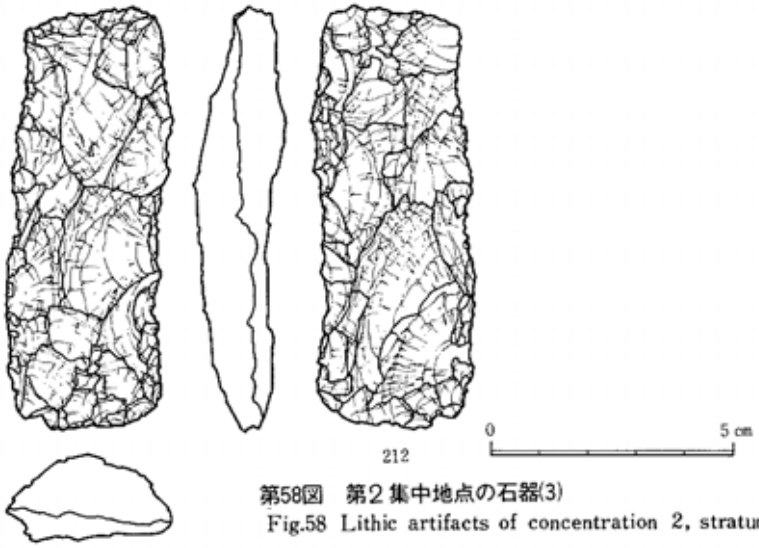
第 56 図は尖頭器以外の石器の刃部 (註) 2角度を示したものである。石器には刃部の鋭いものとやや鈍いものの 2 群があり、それがⅣ、Ⅲ類と対応する。227、221 はⅢ類の中でも 70 度をこえる大きな刃角をもつが、これらの石器を観察すると、刃部背面側 (註) 1に一連の急角度の剥離が特徴的にみとめられる。221 の場合、腹面に整形後の摩滅



第56図　Ⅲ、Ⅳ類石器の刃部角度
Fig.56 Edge Angles of lithic tools



第57図　第２集中地点の石器(2)
Fig.57　Lithic artifacts of concentration 2, stratum IIb(2)



第58図　第2集中地点の石器(3)
Fig.58 Lithic artifacts of concentration 2, stratum IIb(3)

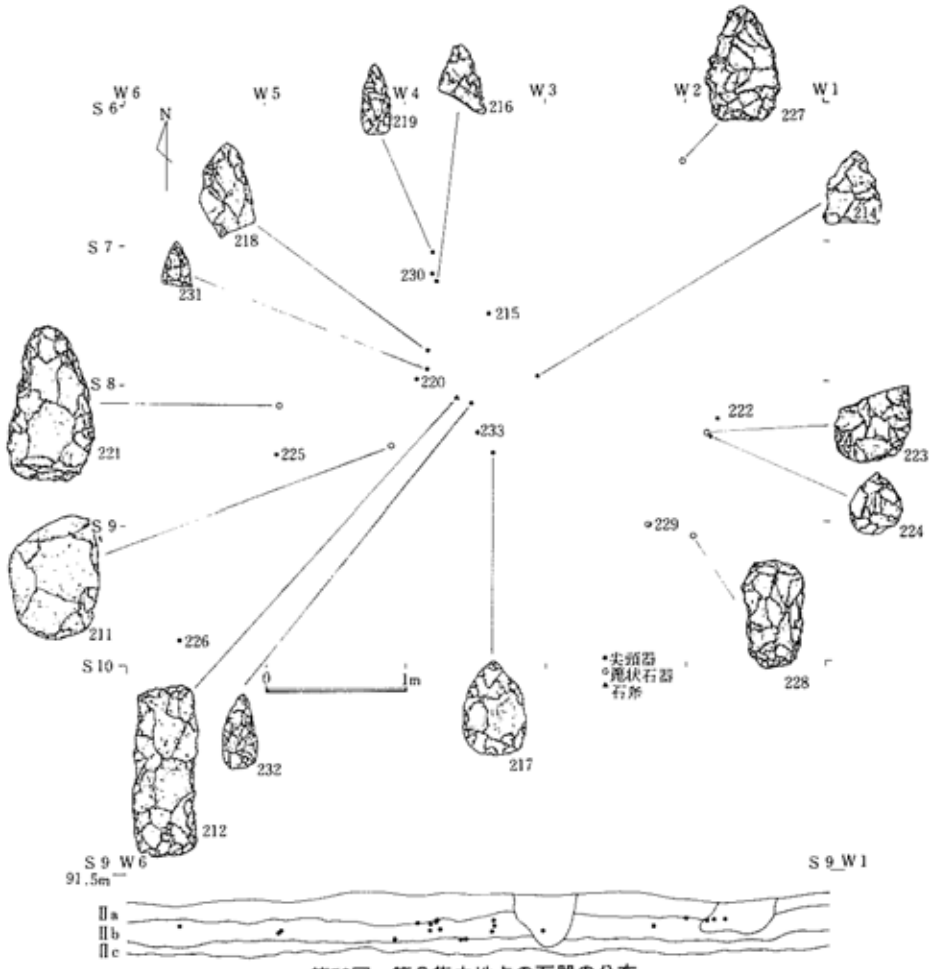
痕があるが、刃部背面側の剥離はこの使用痕ともとれる磨痕を切っている。
また227はこの一連の剥離によって刃部が直線状を呈する。227とよく類似した223の刃部形態は丸みがあり、227は223の刃部中央をあたかも削りとったかのような形になっている。これらの点から、Ⅲ類中にみられる刃部角度の違いは、石器の使用の過程で刃部再生が行われていることを反映しているものと考えられる。

第2集中地内点の石器の分布

第2集中地点内の石器の分布を第59図に示した。これをみると、石器の分布は一様ではなく、中央に集中する傾向にあるものと周辺にやや離れて分布するものがある。そして、それらの中に、さらに3、4点を単位とした小さな石器のまとまりがみとめられる。石器の各類型との対応では、Ⅰ類を含む細身の尖頭器は中央に集まる傾向があり、これに対して尖頭器以外の石器は周辺部に位置するものが多い。例外はⅡ類とⅣ類であり、尖頭器の中でも幅広でずんぐりした形態のⅡ類は周辺部に分布する。また打製石斧を含む大形のⅣ類は尖頭器の分布域に位置している。形態、大きさから分類された各類型は分布の上でも異なった場と結びついているわけである。中央分布域の西北辺には、216,219,230と218,220,231の3点づつの小さなまとまりがあり、これらは細身の尖頭器のみで構成される。こうした特徴的な分布は座散乱木遺跡6ｃ層上面出土石器群に類例がある（石器文化談話会1981）。同層では2ケ所の遺物集中地点が検出されており、1ケ所は住居跡の可能性のあるピット群を伴っているが、第2集中地点に類似するＢ－3、Ｂ－4区の場合はこうした遺構は検出されていない。

第5集中地点の石器（第60図）

第5集中地点は丘陵頂部のやや東側にあり、5×2m程の範囲に7点が分布しており、接合

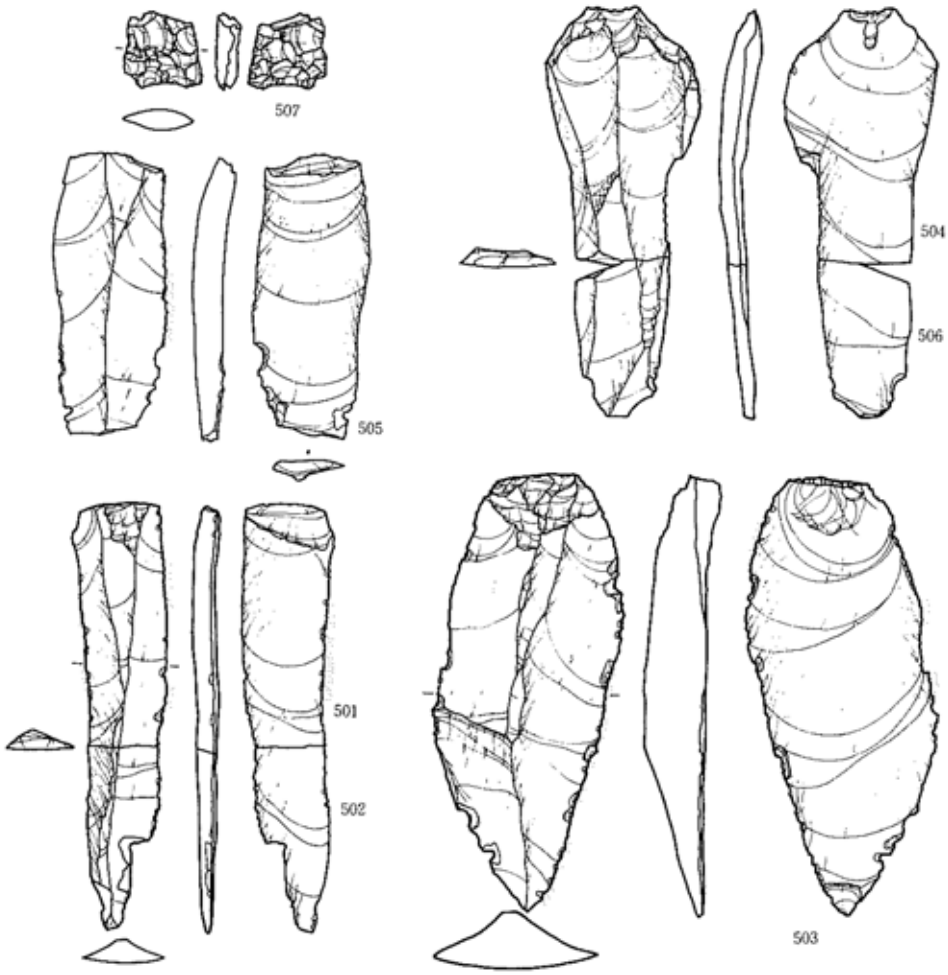


第59図　第2集中地点の石器の分布
Fig. 59　Distribution of lithic artifacts of concentration 2

資料が 2 点ある（第 54 図）。507 は破損した石鏃である。精査したが石器の周囲に攪乱はみとめられなかった。他の 4 点は石刃である。505, 504, 501＋502 はおそらく石核から剥離される時点で打面部が破砕している。石刃は長さが 10 cm近い大形のもので、縁辺には散漫な剥離あるいは微細剥離痕 (註) 3がみとめられる。

第７集中地点の石器（第 61 図）

第 7 集中地点は北東方向へ下る斜面の下部に位置し、2×3m程の範囲に接合資料 1 点を含む石器 6 点が分布する（第 54 図）。701＋709, 703 は石刃であり、703 は打面部が加撃時に破損している。704 は基部の窄むばち形の石器である。背面側は面的剥離によって覆われるが、腹面側はフラットな自然面をそのまま利用している。刃部の腹面側 (註) 1に線状痕がみとめられる。素

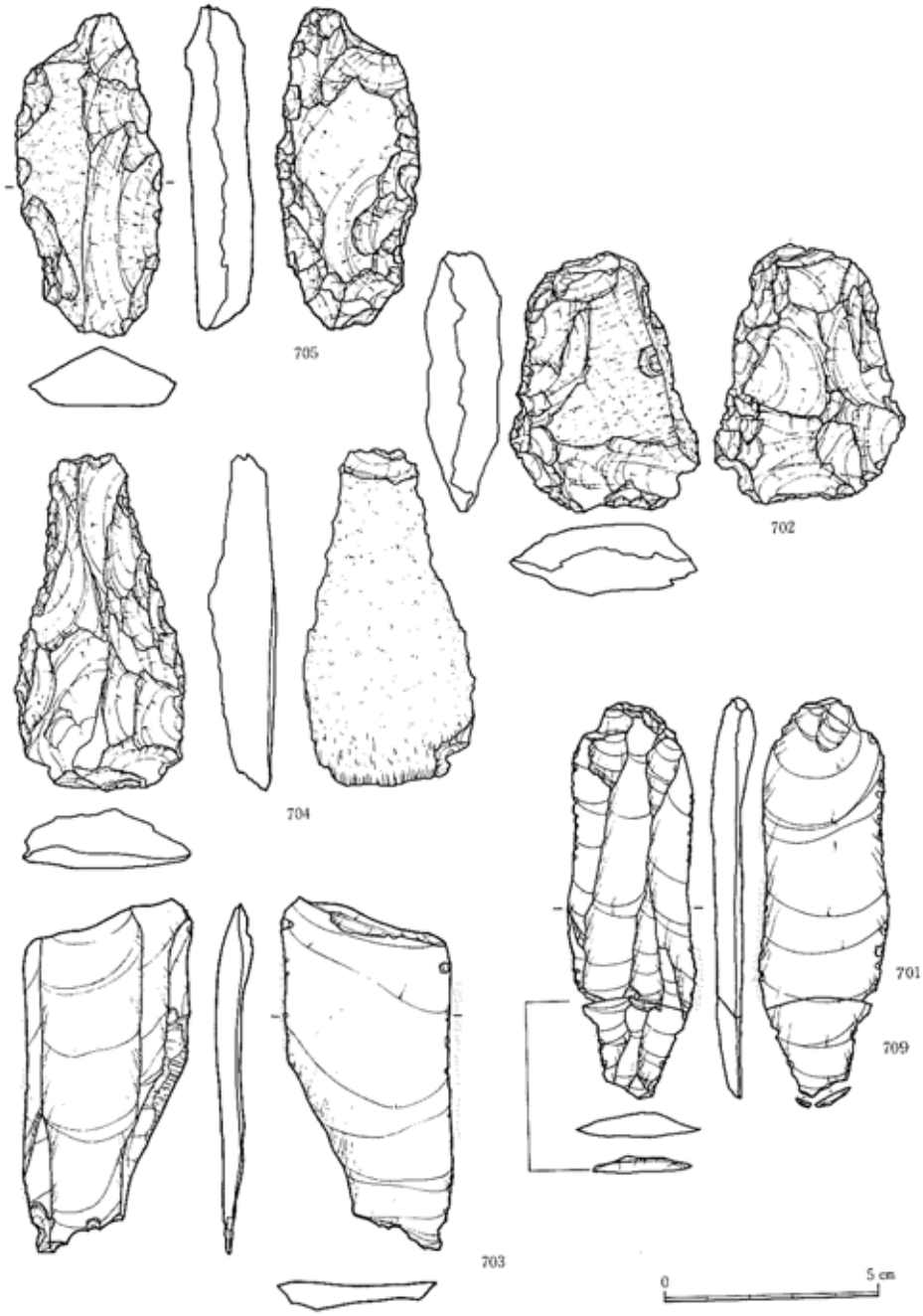


第60図　第５集中地点の石器
Fig.60　Lithic artifacts of concentration 5, stratum IIb

材の用い方、形態に第２集中地点Ⅲ類と共通点がある。705 は背面に自然面のある横長剥片を素材に、両面に二次加工を加えた石器である。702 も両面に加工のある石器で、背面側に自然面を残している。石刃が珪質頁岩を用いるのに対して 702, 704, 705 は凝灰岩が使用されており、石材の選択に違いがみられる。

第８集中地点の石器（第 62 図）

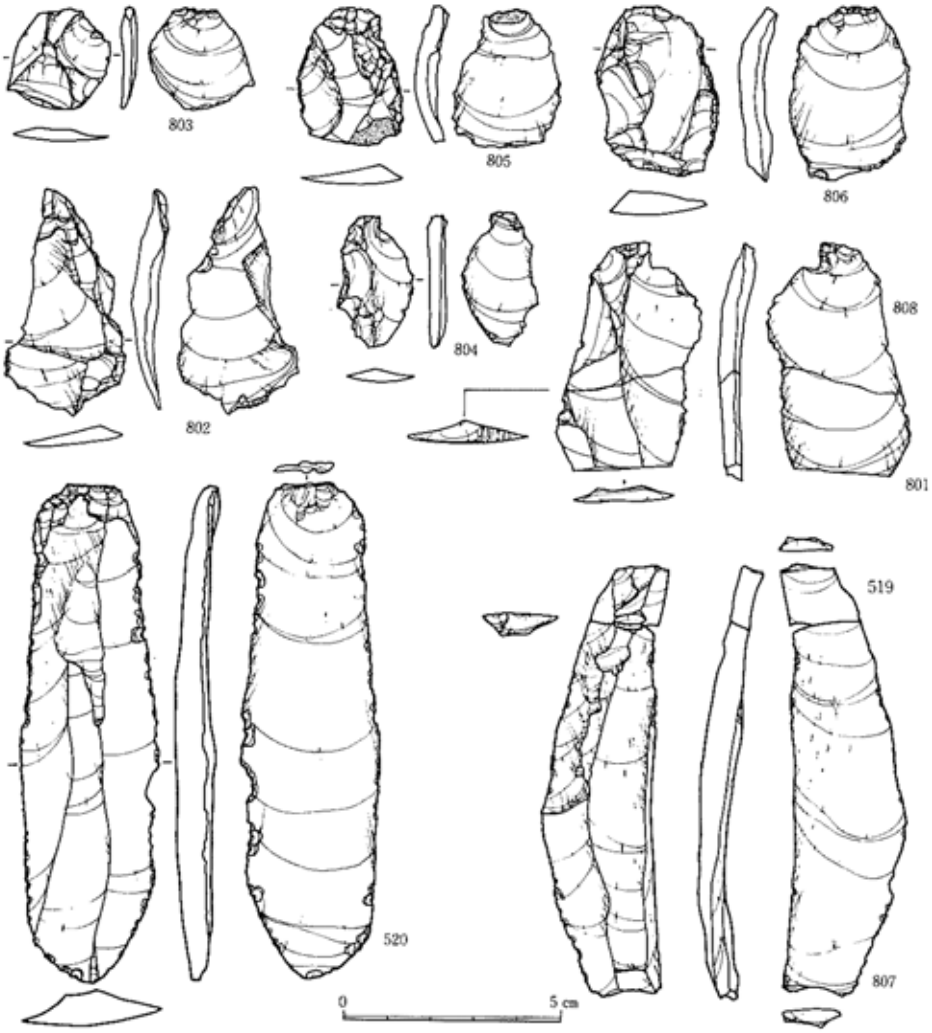
第８集中地点は第５集中地点の北的 2m に位置し、2×3m 程の範囲に接合資料２点を含む９点が分布する（第 54 図）。807 と接合する 519 は約 15m 離れた集中地点外に単独で分布する。微細遺物の検出を目的として同地点の土約 ℓ5　を水洗したが、細かい炭化物を除いてチップ等



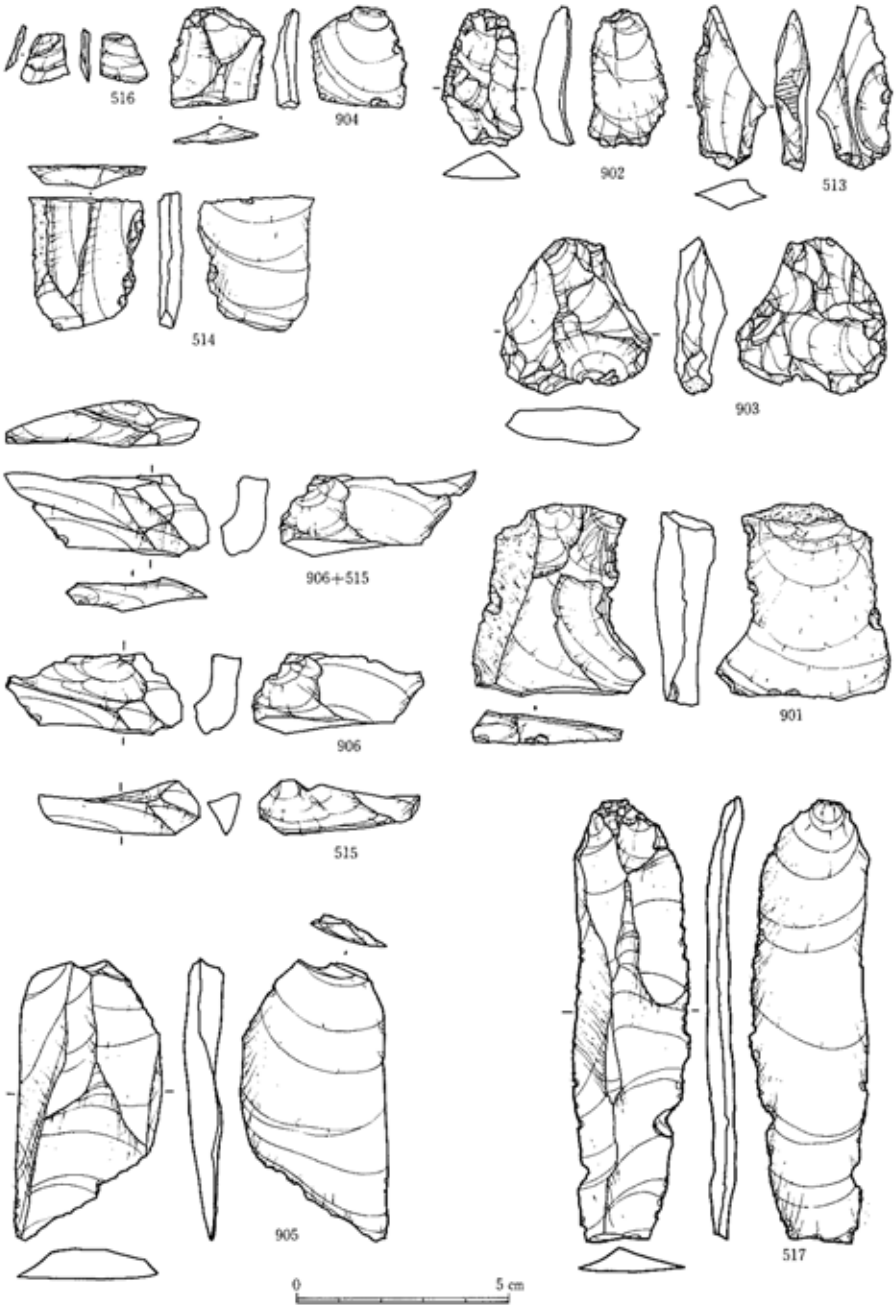
第61図　第７集中地点の石器
Fig.61　Lithic artifacts of concentration 7, stratum IIb

はみとめられなかった。炭化物は第２集中地点の水洗でも検出されたが、発掘時に炭化物の集中するような状況は確認していない。

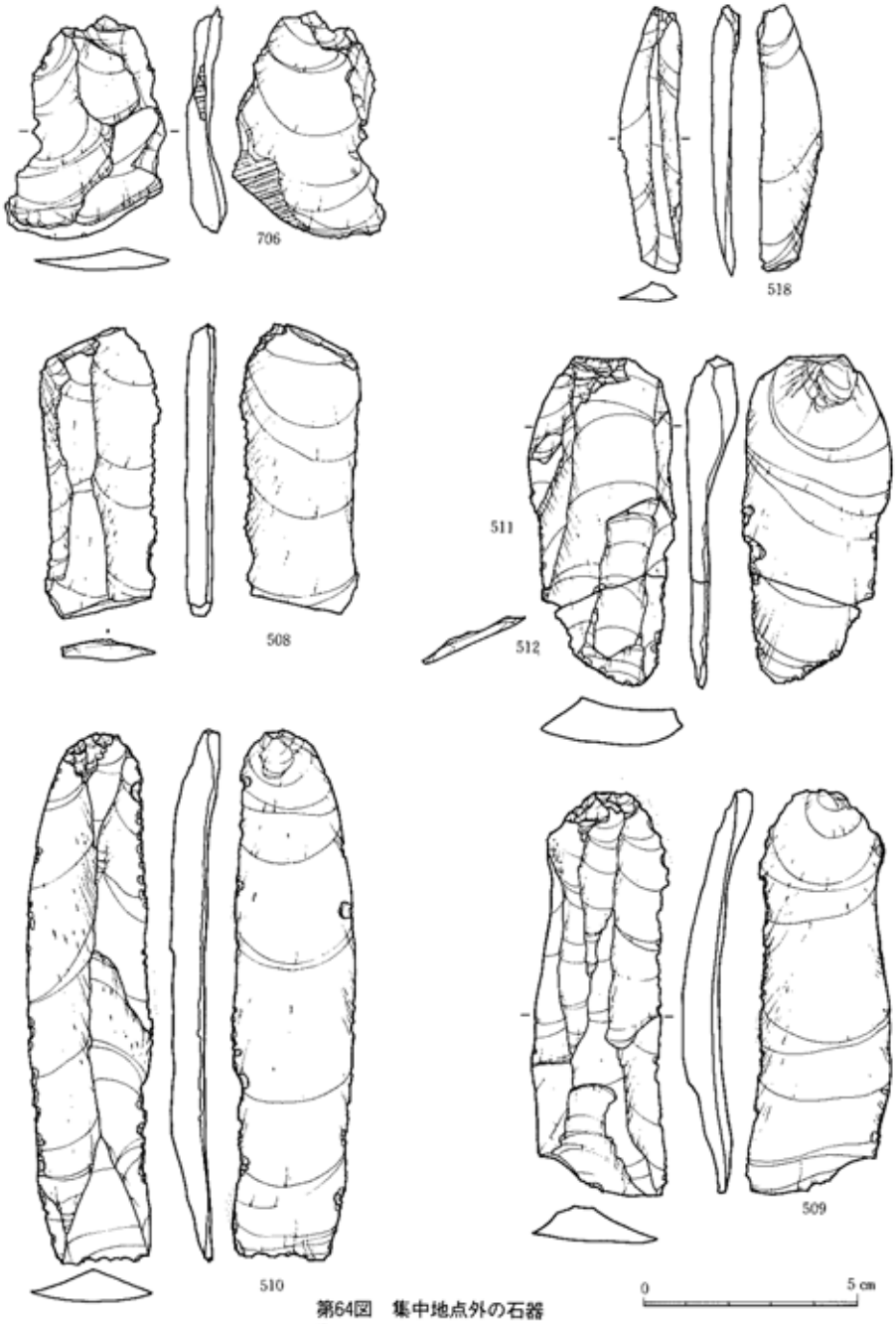
520, 519＋807, 801＋808 は石刃である。520 は腹面左側縁にノッチ状の加工があるがパティナはやや新しい。802～806 は剥片だが、形態は多様であり、両面加工石器の調整時に生じる砕片（チップ）；いわゆるポイントフレイクの特徴を示す。806 は背面にポジティブな面がある。802 は打面部が加撃時に破砕している。805 には焼けはじけがあり、803 も火をうけている可能性がある。ポイントフレイクにも二次加工や微細剥離痕がみとめられる。



第62図　第８集中地点の石器
Fig.62　Lithic artifacts of concentration 8, stratum IIb



第63図　第９集中地点の石器
Fig.63　Lithic artifacts of concentration 9, stratum IIb



第64図　集中地点外の石器
Fig.64　Lithic artifacts out of concentration

第9集中地点の石器（第63図）

第9集中地点は第8集中地点から3m程東へ下ったところにあり、接合資料1点を含む石器11点からなる。516,904,902,514,906＋515,901は剥片である。902,514の縁辺には連続する細かい剥離があり、他の4点にも散漫な剥離あるいは微細剥離痕がみとめられる。906＋515は、上部の折れ面が形成された際に515が同時に剥離したものであろう。903は両面加工石器だが、剥離は不規則で特定の形態や刃部を指向していないので石核かもしれない。905,517は石刃である。905は打面部が破砕している。石刃の縁辺には、散漫な剥離、微細剥離痕(註)[3]のほか光沢のみとめられる部分がある。石材は、石刃には珪質頁岩を用いるが、他の剥片には黒色頁岩、珪化凝灰岩、細粒石英安山岩質凝灰岩、玉髄が使用されている。

集中地点外の石器（第64図）

遺物集中地点の周辺に単独で分布する石器である（第64図）。706はポイントフレイクで第7集中地点の西側に位置する。518,508,511＋512,510,509は石刃である。511＋512は接合資料であり、706,519,508は打面部が加撃時に破砕している。

Ⅱb層上面出土石器群の石刃

Ⅱb層上面出土石器群には石核あるいは石器製作の過程を示すような接合資料がないので、石器製作技術の詳細を知ることはできない。しかしながら、剥片生産技術中の石刃技法に関しては、16点の石刃の観察から次のような特徴を指摘できる。

・石刃はおおむね長さ10㎝、幅3㎝で、形態は510,509にみられるように両側縁が平行し、頭部が丸みをもち、末端は尖らない。側面からみると薄手でやや彎曲するものがある。

・剥離角は平均105度ほどである。

・石材は508を除いて細粒の珪質頁岩が用いられる。

・背面構成をみると38%に対面方向からの剥離痕があり、両設打面石核が存在する。

・打面が観察可能なものは16点中8点であり、そのすべてが1面の剥離面から構成される。すなわち打面調整がない。

・16点中観察可能な10点には、すべて、剥離前に打面上から細かい作業面の調整；頭部調整が行われる。

打面が小さく、頭部の丸い石刃の形態は、頭部調整が頻繁であることの結果である。16点の半数が加撃時に破砕していることもこうした頭部形態と関連があろう。

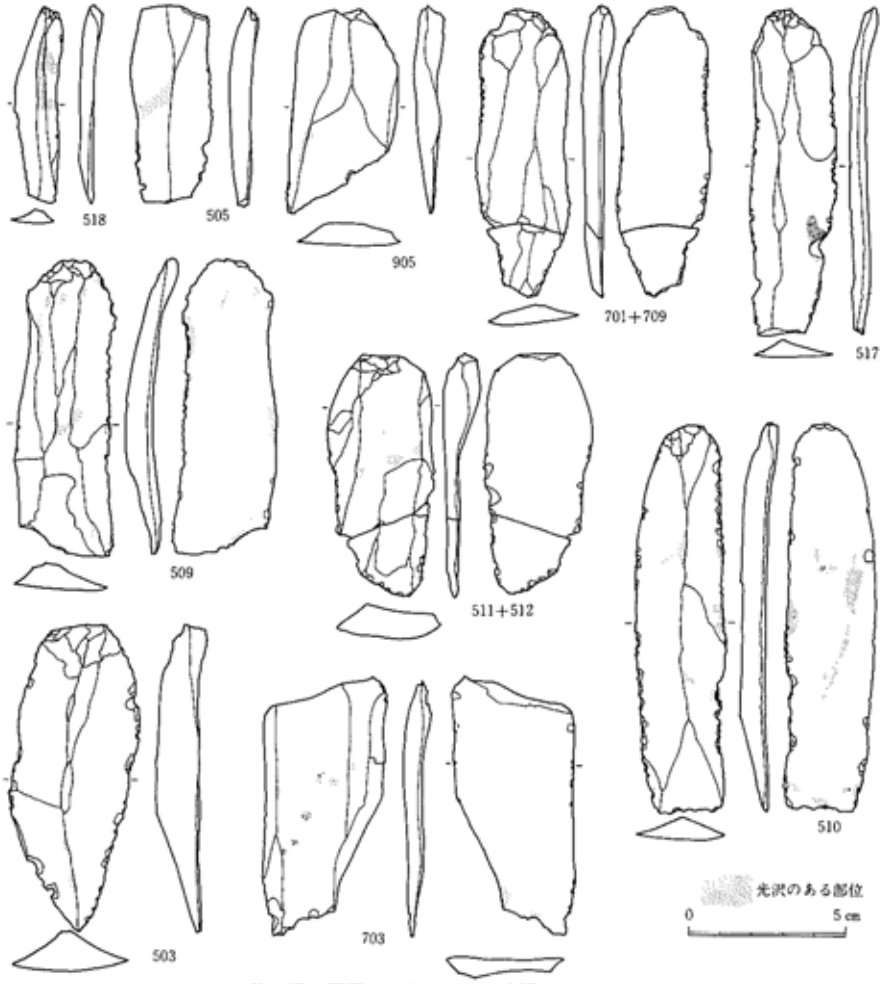
石刃にみとめられる光沢（第65図）

石刃の縁辺にはしばしば不連続な剥離や微細剥離痕がみとめられる。これらには使用痕が含まれると考えられるが、石刃の中には更に、コーングロスのような肉眼で確認しうる光沢のみとめられるものがある。第65図にその石器表面における分布を示した。光沢の程度には変異が

あり、微弱な場合には照明の角度を調整して漸く確認できる。また517右側縁や509腹面左側縁のように著しい場合には、光沢は彗星状の線状痕？を伴い、表面は滑らかになっている。光沢の部位にはしばしば微細剥離痕等がみとめられる。しかしながら、光沢には縁辺から離れた背腹面の中央や打面上にみとめられる例もあり一概にこれらを使用痕とも考えられない。

考察…Ⅱｂ層上面における２石器群とその位置づけ

第５表はⅡｂ層上面出土各集中地点の石器組成を示したものである。これをみると、Ⅱｂ層上面出土石器群は尖頭器等からなる第２集中地点と石刃を共有する第5,7,8,9集中地点に大別さ



第65図　石刃にみとめられる光沢
Fig.65 Polish on blades trom stratam IIb

集中地点／石器	Ⅰ、Ⅱ類	Ⅲ、Ⅳ類	石鏃	石刃	不定形石器	剥片等	計
2	15	7	0	0	0	0	22
5	0	0	1	4	0	0	5
7	0	1	0	2	2	0	5
8	0	0	0	3	0	5	8
9	0	0	0	2	2	6	10
集中地点外	0	0	0	5	0	1	6
計	15	8	1	16	4	12	56

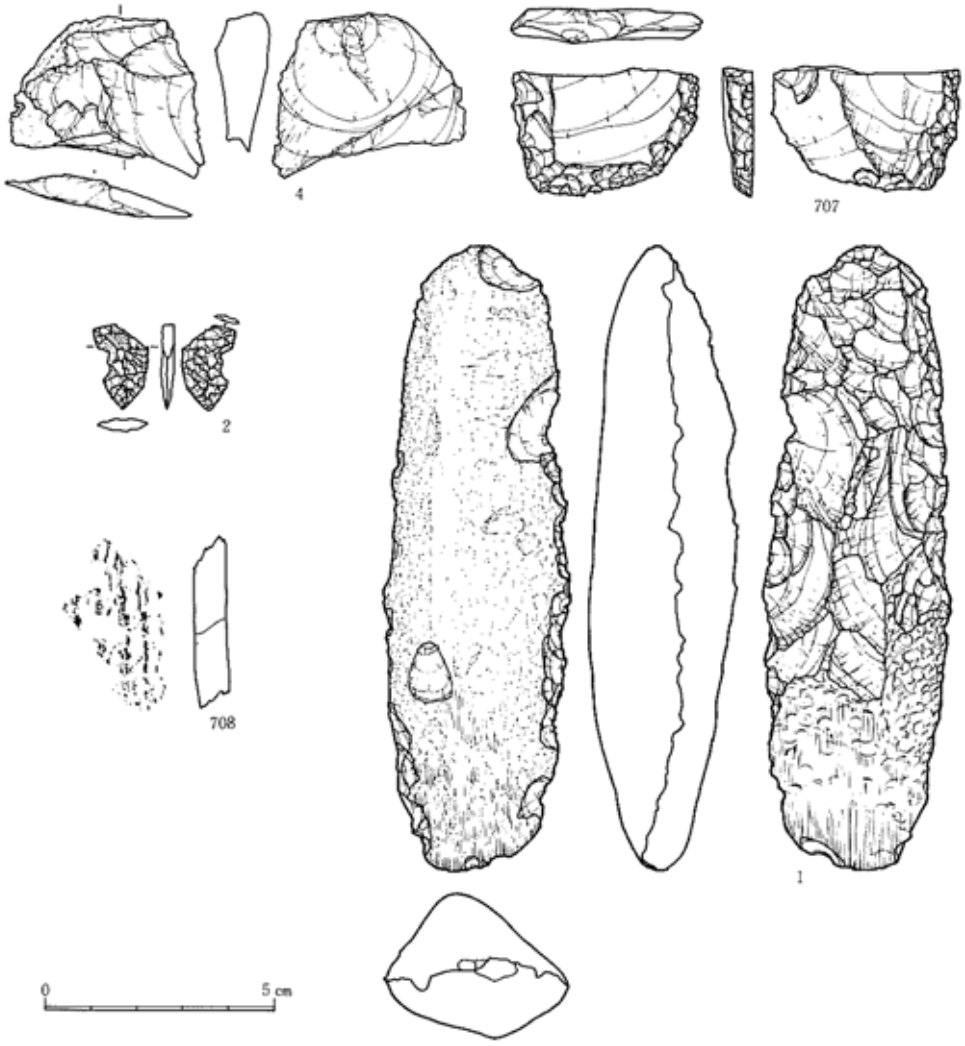
第５表　Ⅱb層上面の石器組成

れる。2 群は分布のうえでも明瞭にわかれており、第 2 集中地点が丘陵頂部に位置するのに対し第 5～第 9 集中地点は北東の斜面上の広範囲に分布する。そこでⅡｂ層上面における 2 群は一応別の石器群としてその位置づけを考えることとする。

第 2 集中地点出土石器鮮は宮城県内の諸遺跡に類例がある。岩出山町座散乱木遺跡、村山遺跡、新堤上遺跡、岩出山牧場遺跡、古川市馬場壇壇Ｃ遺跡、小野田町鹿原Ｄ遺跡、小梨沢遺跡、色麻町大原Ｂ遺跡、大衡村金谷遺跡、多賀城市志引遺跡といった諸遺跡では、肘折軽石層（約 1 万年前）直下からソフトローム中にかけて多様な形態の尖頭器や箆状石器を含む石器群が出土している（岡村・鎌田 1980 他）。これらの石器は宮城県北半における後期旧石器時代の新しい段階の指標となるものであり、石器と層位の双方から第 2 集中地点出土石器群が上記のグループに入ることはまちがいない。更に細かくこれらの石器群をみると、尖頭器の 1 形態である所謂「鏃状の尖頭器」は座散乱木遺跡 6 ｃ層上面、新堤上遺跡 6 層中のような小形でずんぐりしたものにはじまり、新しい段階になると小梨沢遺跡肘折軽石層直下のような大形でやや細身のものが加わるようになる（石器文化談話会 1981、小野田町教委 1980）。第 2 集中地点出土石器群のⅠ類はちょうど鏃状の尖頭器のこの新しい段階にあたる。Ⅰ類類似の尖頭器がみとめられるのは先の小梨沢遺跡の他、大原Ｂ遺跡 5 層上面、多賀城市志引遺跡 3 層上面（多賀城市 1984）等、約 1 万年前の土器を伴うような旧石器時代終末の時期にほぼ限定される。旧石器時代終末は宮城県に限らず尖頭器の形態が多様化するが、Ⅱ類にみられる基部の丸い幅広い尖頭器もこの形態の多様化の中で現れるものである。さらに 212 の短冊形の打製石斧はやや扁平だが、新潟県田沢遺跡、愛知県酒呑ジュリンナ遺跡等、隆線文土器に伴う例がある（芹沢・須藤 1968、澄田・大参 1967）。こうした点から第 2 集中地点出土石器群は旧石器時代終末に位置づけられ、その組成には本来土器が含まれる可能性があると考えられる。

第 5, 7, 8. 9 集中地点出土石器群は第 2 集中地点と同じⅡｂ層上面にある点から、これと大きな時間差はないであろう。704 が第 2 集中地点出土石器群Ⅲ類に含まれることもこの推測を支持する。旧石器時代終末に属する、大形の石刃を含む組成には所謂″神子柴・長者久保石器群″がある。第 5～9 集中地点出土石器群は、同石器群に特有な石斧、尖頭器、彫掻器等を欠くがこの石器群に含まれるものと考えられる。型式学的には、第 2 集中地点の 212 は神子柴・長者久保石器群の中でも最も新しい形態の石斧とされ、石刃を含む第 5～9 集中地点出土石器群は第 2 集中地点より時間的に古いものとなる。すなわち第 2 集中地点と第 5～9 集中地点の違い

は時間差を示すという説明ができる。しかしながら、周辺遺跡をみると、第2集中地点出土石器群が宮城県北半の旧石器時代終末に一般的な組成であるのに対し、大形の石刃が同時期の宮城県で確認された例はない。第2集中地点と第5〜9集中地点の石器組成が全く異なることからも双方の石器群の間に単純な時間的変遷を考えるわけにはいかない。石材の選択という点からみると、石刃に用いられる石材はそのほとんどが細粒の珪質頁岩であり、他の石器の場合と全く異なる。宮城県内の石器群は概して石材が多様であり、良質の珪質頁岩はむしろ日本海側



第66図　表採資料等
Fig.66 Other lithic artifacts

一般的な石材である。こうした点を考えると、第 5〜9 集中地点出土石器群は、旧石器時代終末においてかなり特殊な地域性をもっていたと思われる宮城県北部に、周辺地域の石刃石器群が一時的に進入した結果のこされたものか、石刃のみが持ちこまれたことが推測される。

表採資料等　（第 66 図）

2、4 はⅡａ層中出土石器である。位置は第 54 図に示した。Ⅱａ層は表土からの植物根の侵入等があり、また石器が単独で分布するため表土からの混入の可能性もある。4 は剥片、2 は珪質頁岩製の尖頭器の基部と思われる。精巧な押圧剥離によって薄手にしあげられている。

707, 708 はⅡｂ層上面出土だが遺物の周囲に攪乱があったためⅡｂ層上面出土遺物の中に含めなかった。707 は一部両面加工のスクレイパーで、折れ面には両極剥離の痕跡がある。708 は撚糸文の施文された土器で繊維を含む。縄文時代早期末であろうか。

1 は表採資料だがロームの付着があった。珪化凝灰岩の荒割り礫もしくは大形剥片を素材とした石斧で、背面側は素材の形態を利用し腹面側を主に加工している。刃部を中心として敲打痕があり、さらにそれより新しい磨痕がみとめられる。磨痕に伴って長軸に沿う線状痕がある。石斧の形態は第 5〜9 集中地点出土石器群との関係を考えさせるものだが、この時期の石斧で敲打による加工がなされる例はない。

＜3＞Ⅱｃ層上面出土の石器

出土状況　（第 40、70 図）

丘陵頂部付近の 2.5×3m 程の範囲に 107 点が集中して出土した（第 1 集中地点）。個々の石器はおおむね水平であったが、石器の出土レベルには 5 cm程の幅がある。微細遺物の検出を目的として、同集中地点の土を 3 ケ所に分けて各々約 1ℓ 採取し、そのうち 2 点を水洗したところチップ 2 点を検出した。

接合資料・母岩別資料

Ⅱｃ層上面出土資料中に接合資料はない。同一母岩の可能性のある資料が 5 点あるが、全体の 10%にすぎず、ほとんどの石器は母岩が異なる。

第１集中地点の石器（第 67、68、69 図）

石器組成は、尖頭器 1, 石錐 1, エンドスクレイパー1, スクレイパー8, 両極剥離痕ある石器 4, 同スポール 1, 石刃 7, 石核 3, 剥片 81 (註) 4である。石材は珪質頁岩、黒色頁岩、珪化凝灰岩、玉髄、碧玉、黒曜岩が用いられる。少数であるがⅡｂ層上面にない玉髄、碧玉、黒曜岩がみとめられる。

61 はやや大形の尖頭器の破損したものである。55 は玉髄製の錐である。剥片の一端を折りとり、細かい剥離によって先端部をつくっている。42, 43, 132 は両極剥離痕ある石器である。いずれも石盤長軸の両端に潰れがある。剥離面はフラットで、リング・フィッシャーが発達し、

第67図　第１集中地点の石器(1)
Fig.67　Lithic artifacts of concentration 1, stratum IIc(1)

剥離面によっては一面の中に異なる方向からの加撃痕がみとめられるものがある。剥離角は90 度に近い。これらの特徴は石器が両極打法によって剥離されていることを示している。43, 132 は両極剥離前にあらかじめ両端に打面を設定している。両極剥離痕ある石器はいずれも黒曜岩製と判定されたが、43, 132 は透明なガラス質ではない。43 腹面側中央は焼けはじけの可能性がある。37 は黒曜岩製のエンドスクレイパーである。背面に自然面をもつやや厚手の剥片を素材としており、腹面の一部にも加工がある。37 も焼けている可能性がある。106, 119, 124, 48, 116, 56, 35, 38 はスクレイパーである。といってもスクレイパーエッヂといえるような斉一性のある剥離が連続するのは 56, 38 のみで他の 6 点は加工の状態が様々である。119 は打面部に折れ面があり、急角度の剥離が加えられる。124, 48 はやや厚手の剥片を素材とする。二次加工は 124 のように奥行のある剥離がある一方で、48 の背面左側縁はステップフラクチュアを呈し、同じ 48 の下縁は鋸歯状になる。35 は薄手の剥片の周辺に連続する細かい剥離があり、一部は錐状の尖頭部を形成する。

109, 39, 49, 84, 59, 31, 45 は石刃である。石材は珪質頁岩、珪化凝灰岩、玉髄が用いられる。大きさは最大の 45 でも長さ 5.8 cmとⅡb 層上面に比してかなり小さい。石刃の縁辺には不連続な剥離や微細剥離痕がみとめられる。45 の側面は折れ面ではない。109 は節理のある部分で折れており、腹面はほとんど焼けはじけている。

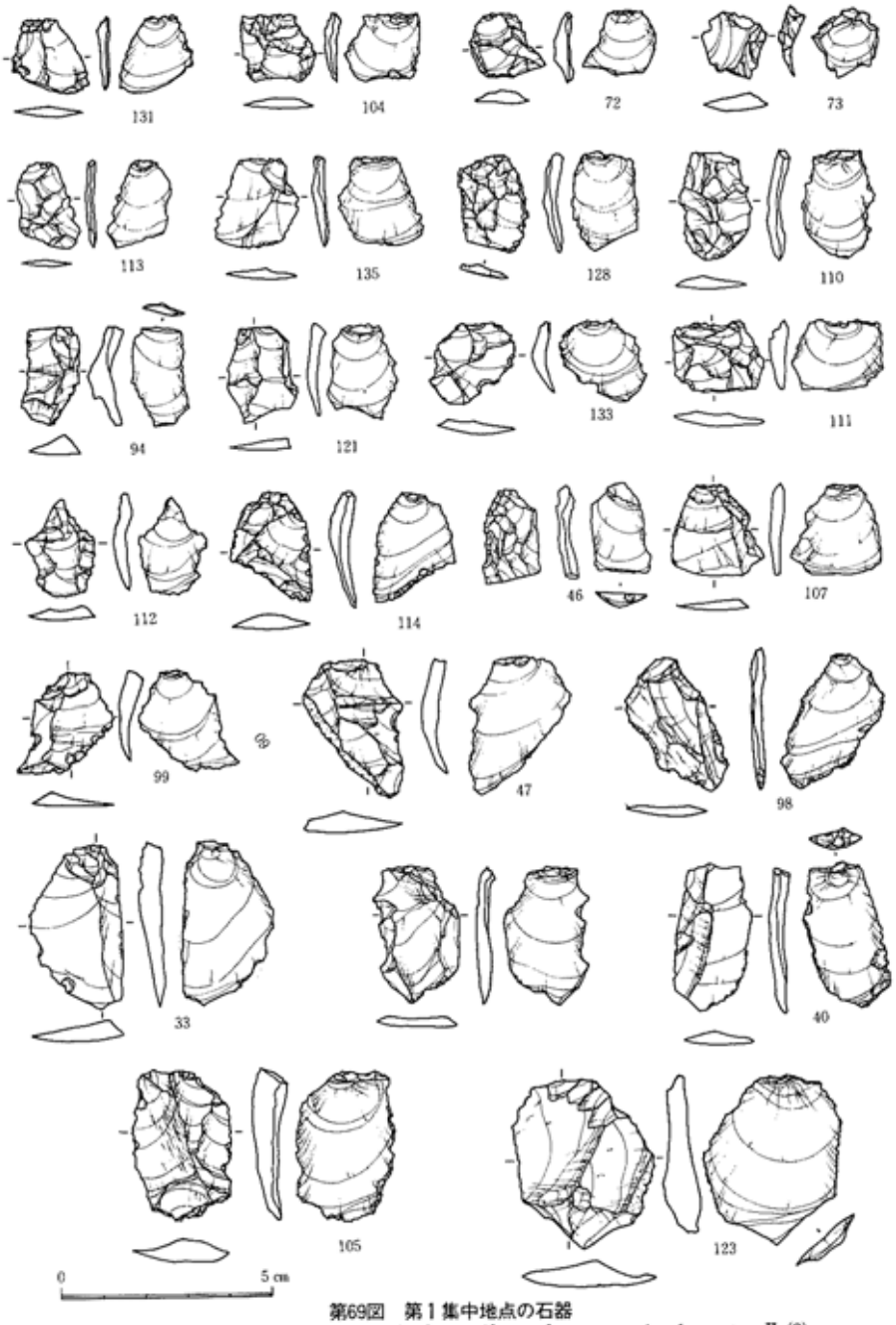
34, 118, 134, 41, 97, 89, 32, 54. 77, 36 は剥片であり、縦長で両側縁の平行する形態、長さ 2〜3 cmとある程度規格性がある。細石刃のような形態だが、背面構成をみると同様な剥片が連続して剥離されているわけではない。34, 89, 32, 77, 36 等に微細剥離痕がある。136, 44, 125 は二次加工ある剥片である。51, 52 は石核である。51 は剥離作業後の残核にみえる。複雑な剥離面構成から頻繁な打面転移が繰りかえされたことがわかる。52 も同様だが、最も新しい正面を作業面とする一連の剥離と、この作業面に連続する右側面の下方よりの剥離は、先の小形剥片に近い大きさの剥片を剥離している。

第 69 図はⅡc 層上面出土の剥片 (註) 5の一部である。剥片の大きさは様々だが、以下の諸点に共通する特徴がある。

・剥片は薄手で、やや彎曲がある。
・バルブは平坦で、所謂ディフューズバルブもみられる。
・剥離角が概して大きい（第 72 図）。
・打面は小さく、多くは調整打面である。
・背面構成は複雑で、腹面と異なる方向からの剥離がみとめられる。

Ⅱb 層上面第 8 集中地点、Ⅱc 層上面の多くの剥片にみとめられるこうした特徴は、両面加工石器製作時に生じる“チップ”にしばしばみとめられるものである。両面に作業面を設定する扁

第68図　第1集中地点の石器(2)
Fig.68　Lithic artifacts of concentration 1, stratum IIc(2)



第69図　第1集中地点の石器
Fig.69　Lithic artifacts of concentration 1, stratum IIc(3)

平な石核からも同様な剥片は生産されうるが、大きさに変異のあるこの種の剥片が大量にみとめられる場合は、先のチップの可能性が高い。こうした両面加工石器製作時のチップを「ポイントフレイク」とよぶ場合もある。第1集中地点の剥片には幾つか目的剥片と思われるものがあるが、多くはこのポイントフレイクである。

73, 113, 94, 114, 105, 123 等の背面には反対の縁辺からの剥離面がある。73 は石器の端部近くを加工した際のものである。112 のように剥離の時点で打面部が破砕しているものもある。128, 133, 114, 99, 47, 98, 60, 40, 105 等、多くの資料に不連続の剥離や微細剥離痕がみとめられる。

第1集中地点内の石器の分布（第 70 図）

第1集中地点は中央に分布の希薄な部分がある。しかしながら、全体に石器の分布は均質であり、等間隔にならぶような感をうける。石器は器種毎に分布が異なるわけではない。

第1集中地点は 107 点からなり、中峯遺跡では最大の石器集中地点であるが、石器の多くは母岩を異にしており、分布に集中性がないことからも、少なくとも石器製作が行われた場所ではない。

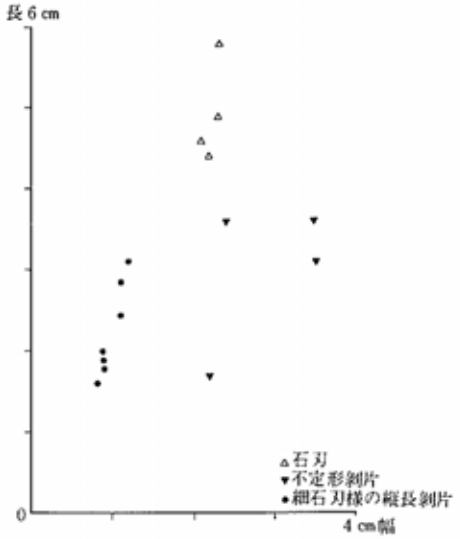
Ⅱc層上面出土石器群の剥片生産技術

石器の製作過程とりわけ剥片生産技術を知る最も良い資料は接合資料であり、ついで石核、個々の石器となる。Ⅱc層上面出土石器群には接合資料はなく、石核は3点にすぎない。従って、二次加工技術はともかく剥片生産技術の理解には限界がある。

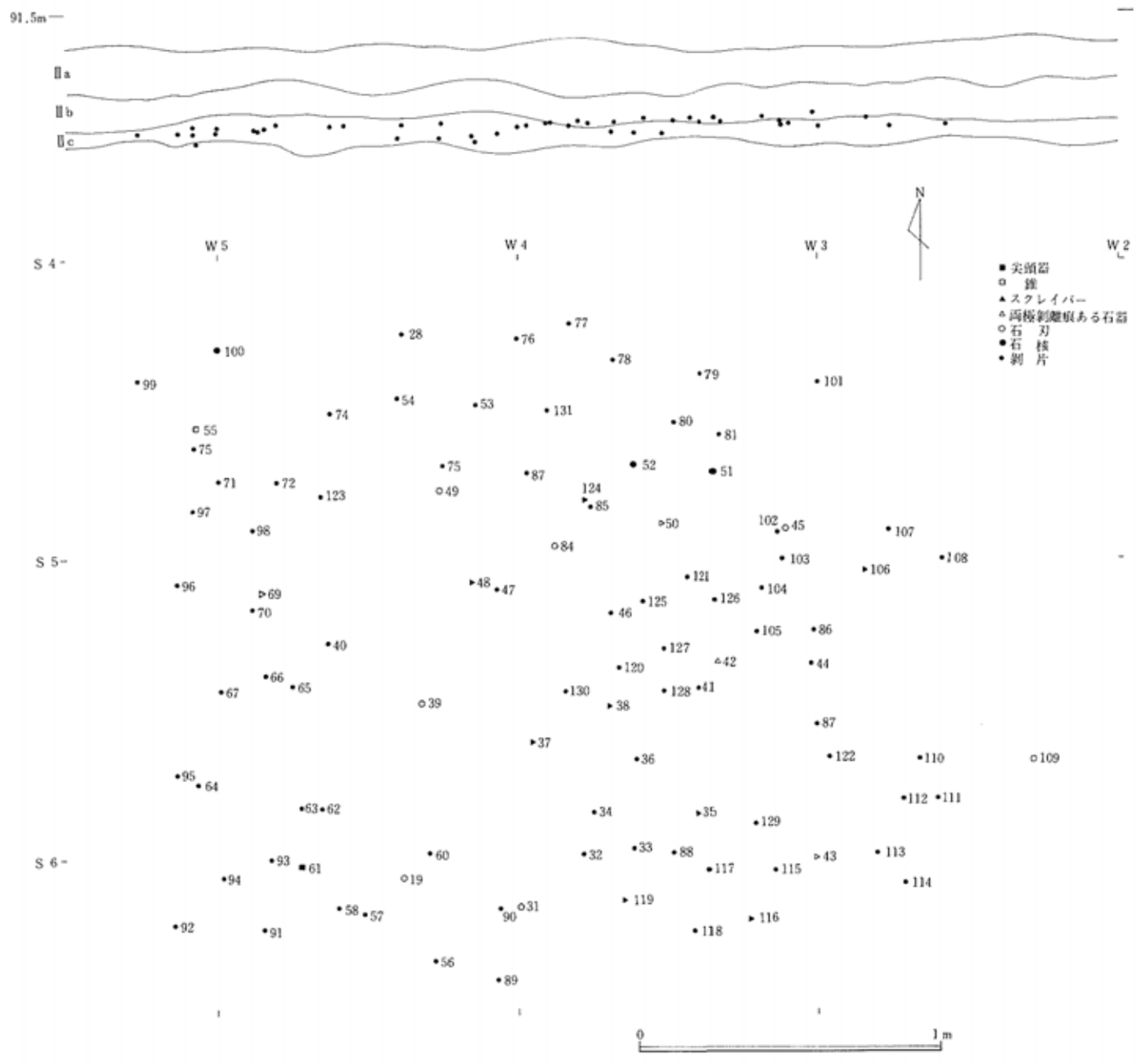
Ⅱc層上面出土の剥片はポイントフレイクを除くと、石刃、細石刃様の小形剥片、石器の素材に用いられている不定形剥片がある。

石刃は固定的な打面、作業面から連続的に剥離される縦長剥片である。Ⅱb層上面出土の石刃に比べて長さは 4〜6 cmと小形であり、剥離角はやや大きい（第 12 図）。打面調整、頭部調整はみとめられない。背面構成には両設打面の存在を示す証拠はないが、一部に自然面や横方向からの剥離がみとめられる。

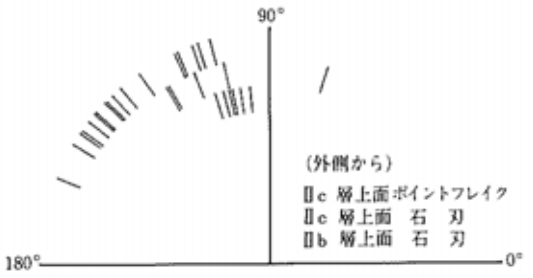
細石刃様の縦長剥片は第 71 図のように大きさ形態にまとまりがあるが、この図にポイントフレイクをおとせばすべてその分布の中に含まれてしまうものである。個々の背面構成、バルブをみてもポイントフレイクの特徴をもつものがあり、両者の識別はむずかしい。ただ、52 のよ



第71図　Ⅱc層上面出土剥片の長幅分布
Fig.71 Distribution of length and width of flakes from stratum Ⅱc



第70図 第1集中地点の石器の分布
Fig.70 Distribution of lithic artifacts of concentration 1.



第72図 Ⅱb層、Ⅱc層上面出土石器の剥離角分布
Fig.72 Distribution of flaking angle of flakes from stratum Ⅱb, Ⅱc

うな石核が存在することから、これらのなかに目的剥片が含まれるものと考えられる。作業面に対して打面を固定し連続的に剥片を剥離するような技術的特徴はみとめられないので、厳密な意味での細石刃ではない。

その他の剥片も多くは大きさ、形態がポイントフレイクと重複する。しかしながら二次加工された石器の素材のなかには56, 38のようにポイントフレイクの規格をこえた大形のものや48のように厚手のものがある。錐、両極剥離痕ある石器、エンドスクレイパーは石材の選択がポイントフレイクと異なっており、こうした点から石器の素材は先の石刃、細石刃様の縦長剥片とはまた異なった剥片剥離技術によるものと考えられる。

Ⅱc層上面出土石器群の位置づけ

Ⅱc層上面出土石器群は、石刃、尖頭器、エンドスクレイパー等の存在から、後期旧石器時代も後半の時期に含まれる。宮城県内で類似する資料は、岩出山町座散乱木遺跡 6c層上面、8層上面出土石器群があげられる（石器文化談話会1981）。座散乱木遺跡8層上面石器群は石刃と多くのスクレイパーを含む点でⅡc層上面出土石器群と共通する。しかし、石刃技法の技術的特徴は全く異なっており、座散乱木遺跡8層上面には中峯遺跡にないナイフ形石器が伴う。一方、座散乱木遺跡6c層上面石器群は、石刃、尖頭器が中峯遺跡と共通するが、尖頭器は所謂「鏃状の尖頭器」でⅡc層上面のそれとは形態が異なる。

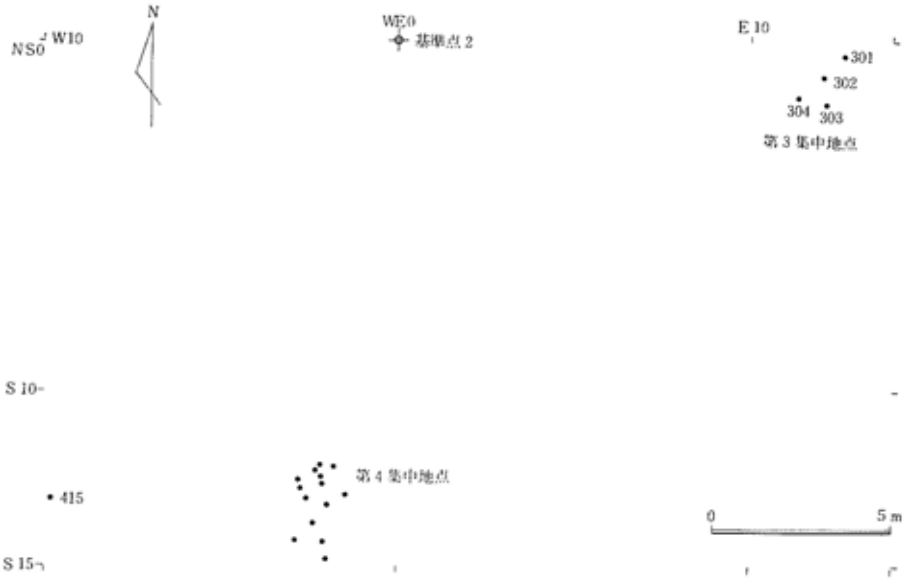
座散乱木遺跡8層上面のナイフ形石器が中峯遺跡にない古い要素であり、座散乱木遺跡6c層上面の尖頭器は、尖頭器の中でもごく新しいタイプのものであることを考えれば、中峯遺跡Ⅱc層上面出土石器群は、両石器群の中間に位置づけられよう。

<4>Ⅲ層上面出土の石器

出土状況（第40、73図）

Ⅲ層はⅡ層に対して非常に硬く、層理面は明瞭に識別できる。Ⅲ層上面に限らないが、石器は層理面からやや潜ったような位置にあり、発掘時には、層理面の検出後、何回かダメ押しをしている過程で初めて石器が発見されるケースが多い。

石器の出土位置はおおむね水平で安定しておりレベル差はほとんどない。Ⅲ層上面出土石器群の分布は2群にわかれる。1ケ所は丘陵項部のやや南にあり（第4集中地点）、もう1ケ所は丘陵を東にやや下ったところに位置する（第3集中地点）。そしてこれから離れて415がある。



第73図　Ⅲ層上面の石器の分布
Fig.73　Distribution of lithic artifacts from stratum Ⅲ

接合資料・母岩別資料

接合する資料はない。401 と 411 は同一母岩の可能性があるが、他は 1 母岩 1 点から構成される。

第 3 集中地点の石器　（第 74 図）

石器 4 点からなる。301 は碧玉製の錐である。やや厚手の素材を用いており、浅く奥行のある剥離が素材のほぼ全面を覆う。左側面は節理を含む古い剥離面であり、右側面の折れ面は一

第74図　第３集中地点の石器
Fig.74　Lithic artifacts of concentration 3, stratum Ⅲ

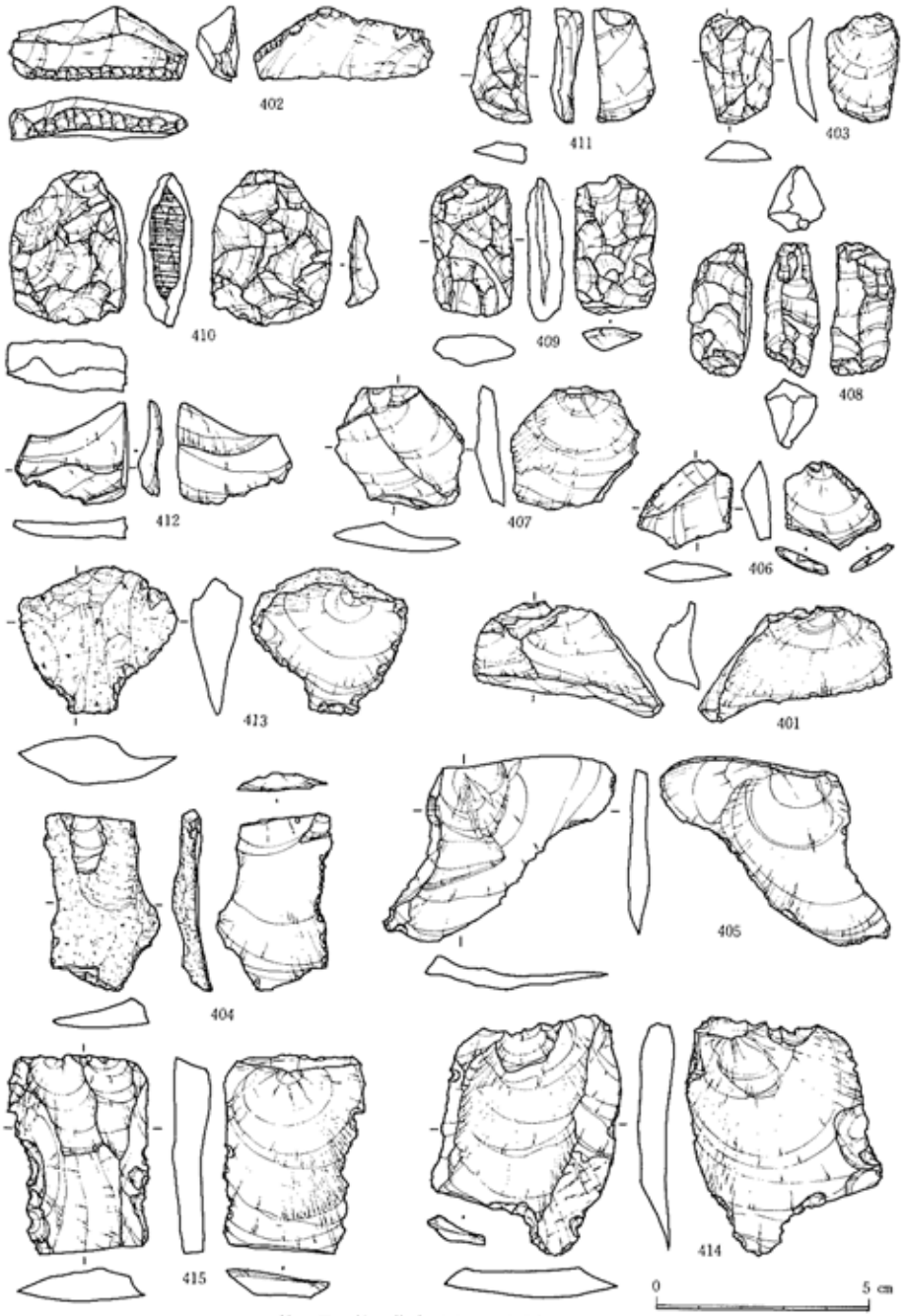
部の二次加工に切られる。302 は碧玉の両面加工石器である。尖端部はなく縁辺の側面観は鋸歯状を呈する。腹面に素材（剥片）の面を残している。303 は剥片だが収斂する二縁辺に二次加工があり、素材の形態を利用した錐とも考えられる。303 は火をうけている可能性がある。304 は厚手の剥片で末端の縁辺に連続する細かい剥離がある。下部、やや鋸歯状を呈する縁辺の凸部に摩耗がみとめられる。303, 304 の二次加工の中にはパティナが他と異なるものがある。

第４集中地点の石器　（第 75 図）

3×2m 程の範囲に 14 点が分布する。402 は珪質頁岩のスクレイパーである。素材は縦長の剥片で、その直線的な縁辺に連続する斉一な剥離がある。剥離は浅く平坦なもので、一見して縄文時代の石器の刃部にみられるような加工である。腹面の縁辺にも細かい加工が連続し、また両端にも加工がある。410 は両面加工石器であり縁辺の側面観は鋸歯状を呈する。両側面に折れ面がある。409 も両面加工石器だが、石英安山岩製で全体に摩滅している。408 は両極剥離痕ある石器である。背面側に両極剥離面のフリー・フレイキングによる加工がある。406, 413, 404 はいずれも珪質頁岩の剥片であり、縁辺に細かい剥離がみられる。二次加工によって 413 は鋸歯状の、404 は浅いノッチ状の部位がつくられている。406, 404 には折れ面があり、406 の折れは二次加工に切られるようである。414 はやや大形の剥片である。縁辺には大まかな剥離によって形成された凸部やノッチがある。411, 403, 412, 401, 405 は凝灰岩、石英安山岩の剥片でやや摩滅している。405 の打面は自然面である。

415 は第４集中地点の西約 7m の地点に単独で分布する。石英安山岩

第75図　第４集中地点の石器の分布
Fig.75 Distribution of lithic artifacts of concentration 4.



第76図　第4集中地点の石器(1)
Fig.76 Lithic artifacts of concentration 4, stratum Ⅲ

の縦長剥片を素材とし、両側縁に深い剥離による鋸歯状の加工部位がある。

Ⅲ層上面出土石器群の石器製作技術

石材には、珪質頁岩、珪化凝灰岩、碧玉、細粒石英安山岩質凝灰岩、石英安山岩がある。Ⅱｃ層上面にあった黒曜岩は存在せず、凝灰岩質の石材が増えている。

剥片生産技術は接合資料、石核が存在しないので詳らかでない。しかしながら、剥片を観察すると、大きさ・形態にまとまりがなく、背面構成が複雑であるので、規格性のある剥片を連続して剥離する技術があるとはいえない。402, 404, 415, 414 は縦長剥片だが、幅広であり、背面構成が多様であることから、石刃技法によるものではないと考えられる。

二次加工技術には、通常のフリー・フレイキングの他に両極打法があり、折断も行われている可能性がある。フリー・フレイキングには 302, 410 そして 301 の一部にみられるような、石器の中央にいたる浅く奥行のある剥離と、縁辺部に広がりが限られる大小の剥離がある。後者の剥離は 402 のように浅く面的なもの、413 のように小さいもの、414 のように深く抉るもの等様々であり、それらが石器の加工部位の形態の違いと結びつくような傾向にある。

資料が少ないので詳細は不明だが、石器の素材に規格性がなく、二次加工に際しては局部的な剥離によって必要な刃部形態のみを設ける、というのがⅢ層上面出土石器群の技術的特徴といえるかもしれない。

Ⅲ層上面出土石器群の位置づけ

Ⅲ層上面出土石器群には後期旧石器時代の指標となる石器が存在しない。先述の石器製作技術の大枠も後期旧石器的ではない。石器に用いられる凝岩質の石は宮城県北部では前期旧石器時代に特徴的な石材の一つである。個々の石器のレベルで比較の対象としうるのは 301, 302, 410 程度にすぎないが、302, 410 は 1 昨年調査された馬場壇Ａ遺跡 7 層上面出土石器群に類似する石器があるようである。同層は柳沢凝灰岩（約 5〜6 万年前）の一部が変化したと考えられている白色粘土層の上位にある。また 402 のように剥離の整ったスクレイパーは、宮城県北部では柳沢凝灰岩より古い層序ではあまりみとめられない。以上の点を考慮すれば、Ⅲ層上面出土石器群は前期旧石器の中でもごく新しい時期に位置づけられる。

石器のあるⅢ層上面は明瞭な風化面であり、Ⅲ層の上部は赤色化が著しい。これは座散乱木遺跡や宮城県北の赤褐色火山灰に類似する特徴である。山田・庄子（1985）の指摘するように、座散乱木遺跡 12〜15 層の赤色化が温暖環境下での風化によるものであるとすれば、これらの層は対比しうる可能性がある。

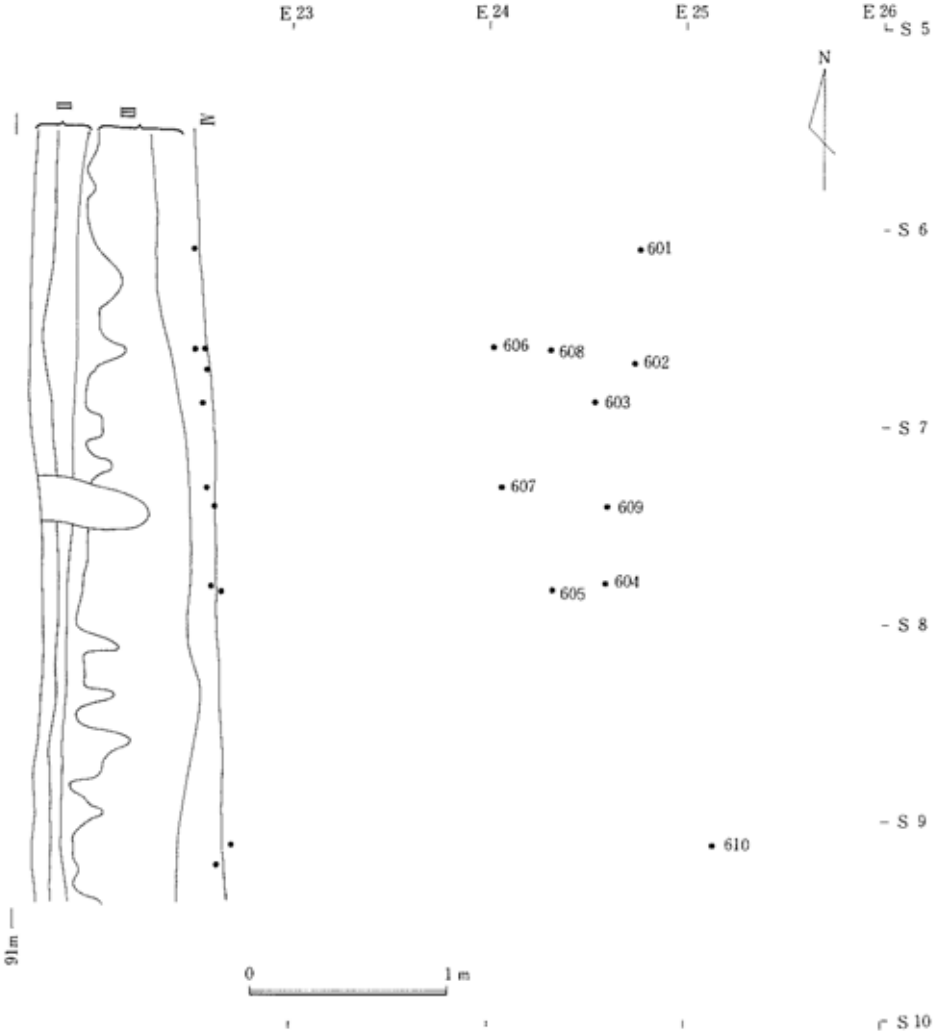
この層位の対比は先の大まかな編年的位置づけとよく一致しており、仮に層位の対比が正しいものであれば、中峯遺跡Ⅲ層上面出土石器鮮は座散乱木遺跡 12 層上面程度（第 4 万年前）に位

置づけられよう。

<5>Ⅳ層上面出土の石器

出土状況（第 40、77 図）

Ⅳ層上面では丘陵頂部からやや東へ下ったところで、2×3m 程の範囲に 10 点がまとまって出土している（第 6 集中地点）。石器の出土レベルには若干上下がある。同地点の石器の周囲の土を他地点と同様に採取し水洗したが、微細遺物等は検出されなかった。



第77図　第６集中地点の石器の分布
Fig.77 Distribution of lithic artifacts of concentration 6, stratum Ⅳ

接合資料・母岩別資料

Ⅳ層上面出土石器中には接合資料、同一母岩に属する資料はない。

Ⅳ層上面出土の石器　（第 78、79 図）

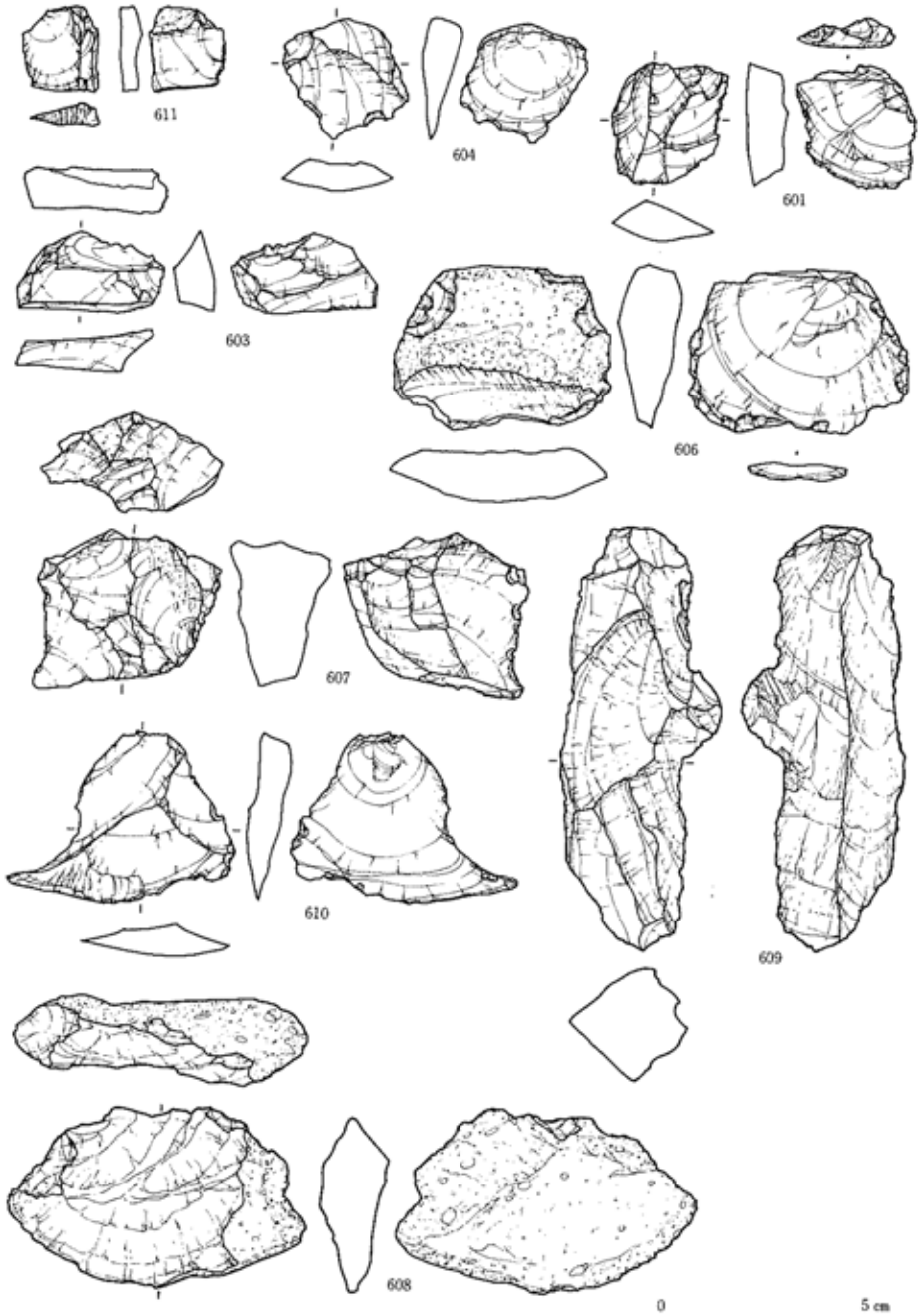
611，607 は石核と考えられる。611 は小さい。扁平な素材の両面を作業面として、背面側⇒腹面側⇒背面側と推移している。607 は 1 つの打面に対して両側に 2 作業面を設定し剥片を剥離している。しかし、本来は大形の石核であり、剥離の状況も異なっていたものと思われる。603 は素材不明。両面に二次加工がある。609 は石英安山岩質凝灰岩の大形石器で素材は不明である。背面側に右からの連続する階段状剥離があり、その後腹面側の縦長の剥離で石器はこのような形に整形されている。後の剥離はフラットでバルブもはっきりしないことから両極打法によっている可能性がある。608 は石英安山岩の扁平な礫の両側に加工を加えている。604，601，606，610 は剥片であり、縁辺に不連続な剥離がみとめられる。602 は背面に自然面のある扁平な素材を両極打法によって折断し、その後この面を打面とし、方向をかえて再び両極打法により加工している。石核の可能性があるが、背面側の側面には彫刻刀面のような剥離面がある。605 は石核である。角錐状の形態で、実測図の上面と下 3 面が作業面の 2 群をなしている。剥離作業は原則としてこれらの間で打面と作業面の関係を交代する形で進められる。剥離された剥片は大きさ・形態とも多様だが、打面部が幅広で厚手になる、逆三角形のものがめだつようである。

Ⅳ層上面出土石器群の石器製作技術

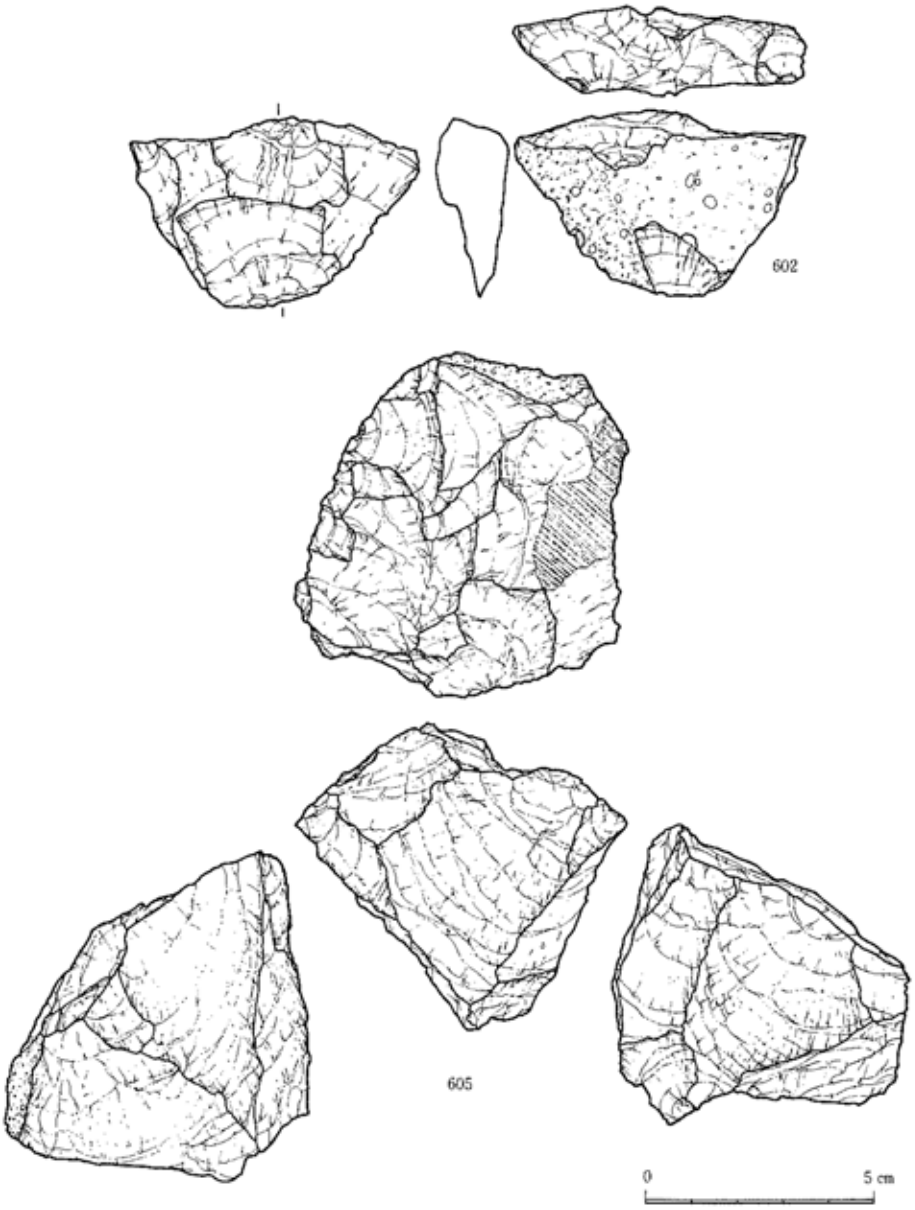
石材には珪質頁岩、玉髄も含まれるが、主は細粒な珪化凝灰岩、細粒石英安山岩質疑灰岩･、流紋岩である。Ⅳ層上面石核は、多面体石核と扁平な 2 作業面石核であり、規格性のある剥片を剥離するような技術はみとめられない。両極打法が整形に頻繁に用いられるが、加工されている石器は形態にまとまりがないので、剥片生産技術の一部に含めるべきかもしれない。全体に二次加工は少なく、定形的と思える石器がみとめられない。

Ⅳ層上面出土石器群の位置づけ

Ⅳ層上面出土石器群は数が少なく、しかも定形石器がない。剥片生産技術にめだった特徴がないことも含め、他の石器群と比較しうる情報に乏しい。ただし、Ⅲ層上面出土石器群の下位にあり、後期旧石期時代の指標となる石器がないので、Ⅳ層上面石器群が前期旧石器時代に含まれることはまちがいない。宮城県北部で、安山岩質の石材が主体を占め、602, 609 のように大形の石器に両極剥離が用いられるのは、馬場壇Ａ遺跡ＢＰ層以下（6～7 万年前）にみとめられる特徴であり（石器文化談話会 1983）、Ⅳ層上面出土石器群もおおむねこのあたりに位置づけられるものと考えられる。



第78図　第6集中地点の石器(1)
Fig.78 Lithic artifacts of concentration 6, stratum Ⅳ(1)



第79図　第6集中地点の石器(2)
Fig.79　Lithic artifacts of concentration 6, stratum Ⅳ(2)

<6>Ⅶ層中出土の石器

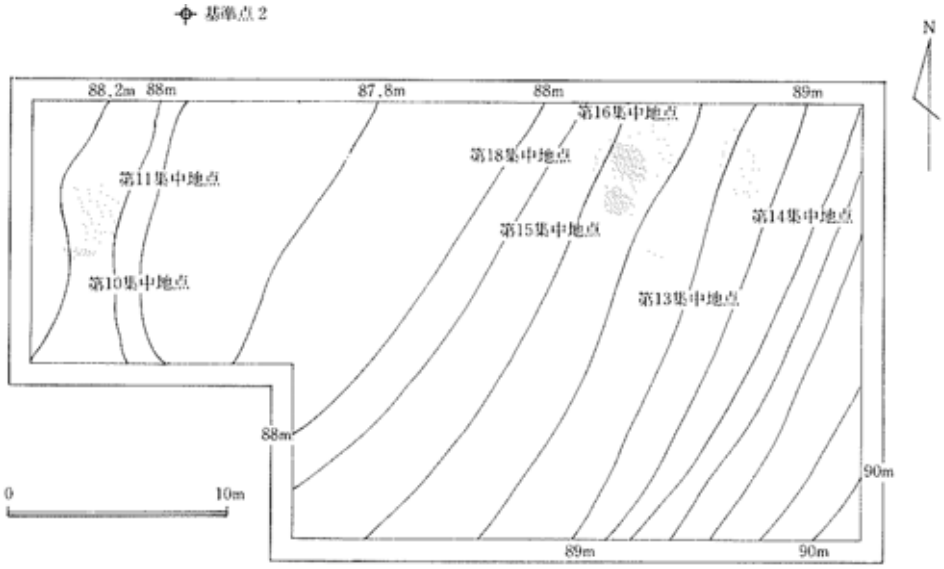
1）各集中地点の石器

出土状況

Ⅶ層中で発見される石器は、はっきりした層理面上にあるわけではない。しかしながら、石器は層中にランダムに含まれるものではなく、1つの面を成して分布する。発掘調査時には石器が1点発見されると、その周囲を精査することによって十数点の石器が1時間足らずの間に次々に出土し、その後はだめ押ししてもほとんど石器がみつからないということがしばしばあり、また、その過程で微妙な土の違いを再検討して層位を区分していくことにもなった。従って、Ⅶ層は層理面の認識が難しい層ではあるが、石器の分布は上層と同様に、これらが当時の地表面上にのこされた、という状況を示している。

Ⅶ層発掘区は「発掘調査の経過」でふれたように、丘陵頂部の　形の範囲約730㎡に限られる。Ⅶ層は深いところでは地表から5m以上になり、その起伏は現地形とは随分異なる。第80図はⅥb層上面のレベルをもとにした等高線の分布だが、これをみてもわかるように、発掘区内は中央がやや窪み、東西南にむかって緩やかにのぼる斜面になっている。石器はこの窪地を挟む東西の緩斜面上に大きく2群のまとまりをもって出土している。こうした立地は後期旧石器時代の石器が台地上もしくは台地縁辺に分布するのと非常に対照的な選地である。

出土した石器の総数は106点であり、他に加工のない礫4点がある。



第80図　Ⅶ層発掘区中の微地形と集中地点の分布（等高線はⅥd層上面のもの）
Fig.80 Distribution of concentrations from stratum Ⅶ

石器の分布を調査の経過に従って西側からみてゆこう。西側の分布域は第10,11の2集中地点からなる。2地点の石器は垂直分布図にするとほとんどレベル差がないが、発掘時の所見では、はっきり生活面を異にしており、第10集中地点がⅦｃ－1層上面にのるのに対して、第11集中地点はⅦｃ－1層中に含まれる。すなわち第10集中地点は第11集中地点の上位にあるわけである。第10集中地点はわずか3点だが、第11集中地点は加工のない礫を含め35点が4×4m程の範囲に分布する。

東側も同様に上下関係にある2枚の生活面が存在する。第13，14，15，16の各集中地点はⅦｂ層上面にあり、第18集中地点はⅦｃ－2層上面に位置する。第13,14.15,16集中地点は加工のない礫を含め、それぞれ15，23，8，8点の遺物からなり、集中地点全休を俯瞰すると南東にむかって開く半円形の配置になる（第80図）。第18集中地点は18点からなり平面分布が一部第15,16集中地点と重複する。第13～18集中地点の分布が斜面上の割合広い範囲に及ぶため垂直分布の一点がばらつくが、実際には近接する石器の出土レベルの差は大きくても10㎝程度である。

それぞれ2枚の生活面からなる東西の集中地点の関係は基本層位の対比からいえば、Ⅶｃ－2層上面（第18集中地点）⇒Ⅶｃ－1層中（第11集中地点）⇒Ⅶｃ－1層上面（第10集中地点）⇒Ⅶｂ層上面（第13，14，15，16集中地点）という順になる。しかしながら「基本層位」でふれたように、Ⅶｃ－1層とⅦｃ－2層は分布域を異にする層であり、網状斑の入り方は地点によって様々なので、細かい層位の対比は困難である。従って、Ⅶ層中で確かな新旧関係としてとらえられるのは、第11集中地点⇒第10集中地点そして第18集中地点⇒第13,14,15,16集中地点という変遷のみである。

第11集中地点⇒第10集中地点、第18集中地点⇒第13,14，15，16集中地点の間にそれぞれどれ程のギャップがあるかは不明だが、双方の集中地点間に大きなレベル差がなく、また、生活面が風化のみとめられる確かな層理面ではないことから、大きな時間差はないと思われる。そこで本文では、これら一連の集中地点から出土した石器を総てⅦ層中石器群として一括して扱う。将来的に周辺遺跡の調査が進み、この地域の層位と細かい石器の変遷が明らかになってきた場合は、これらの集中地点間の時間的変化を再検討する必要があるが、現時点では比較的可能な資料も数少ない状況なので、Ⅶ層中石器群という大まかな枠ぐみを設けてその位置づけを考えてゆくこととする。

接合資料・母岩別資料について

Ⅶ層中石器群には接合する資料はない。複数点の石器からなる母岩別資料が数点あるが、ほとんどの石器は母岩が異なる。

第10集中地点の石器（第81図）

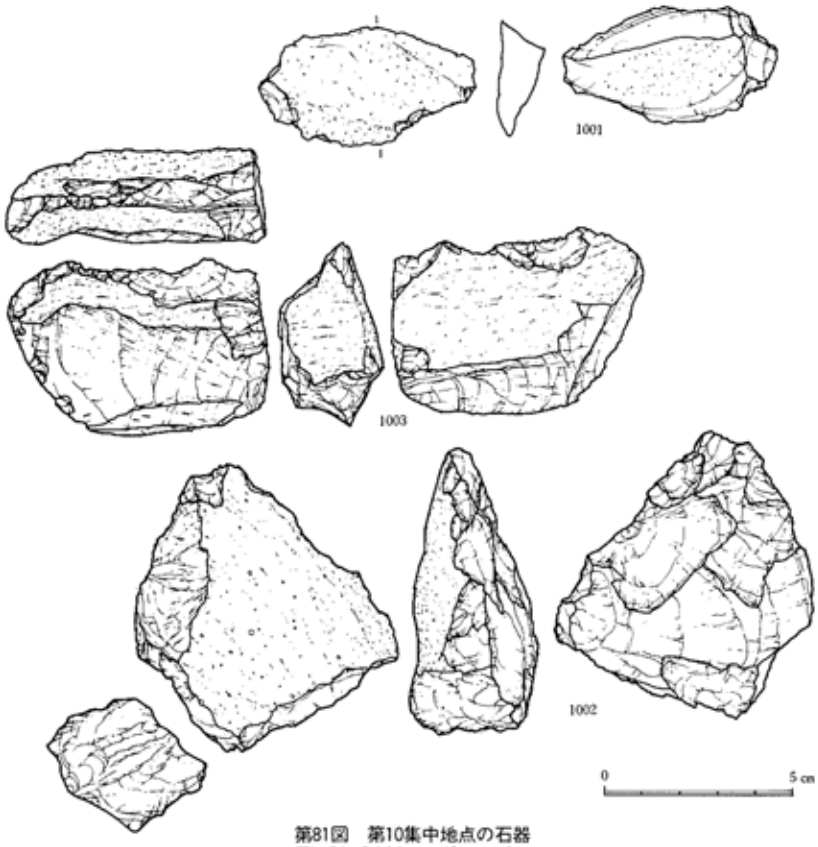
第10集中地点は石英安山岩質の石器3点からなる。石英安山岩は非常に粗粒で、剥離面にリ

ング・フィッシャー等の特徴があらわれにくい。石器によっては自然面と剥離面の識別が困難な場合もあり、剥離面の微妙な切り合い関係等の観察には限界があることを事前に記しておく。

1001 は背面に自然面のある剥片である。打面部は折れ面によって失われているようである。背腹面の縁辺のやや薄い部分に二次加工がある。

1003 はチョッピング・トウールである。角礫素材であり、二次加工はまず長軸方向の両極打法によって素材を整形することから始まり、その後、一端を折断し、最も鋭い縁辺には交互剥離で刃部をつくりだしている。背面側 (註) 1の左辺にも二次加工があり、両極剥離によって生じたかなり純角の稜上にも剥離がある。

1002 は粗割り礫素材のピックである。二次加工は 1003 と同様、まず両極打法で、石器の大まかな形態が規定され、その後、腹面を主に広がりのある面的な剥離によって先端部がつくりだされている。



第81図　第10集中地点の石器
Fig.81　Lithic artifacts of concentration 10, stratam Ⅶ

第 11 集中地点の石器（第 82, 83, 84 図）

35 点あり、うち 3 点は加工の痕跡のない礫と思われるが、これらも火山灰中に含まれるものではないので集中地点に伴うものであろう。

1122, 1127, 1120, 1121 は、剥片を折断もしくは二分剥離後、縁辺に連続する剥離を施して、非対称な三角形、切出状の形態をつくりだしている点で共通する石器である。

1122 は碧玉製で、腹面側 (註) [1]左上に素材の剥片のバルブが一部残っている。素材は腹面側の大剥離でほぼ二分された後、両軸に二次加工されている。背面側の左側縁がやや鋭い縁辺になっていて、微細剥離痕がある。

1120 は腹面側に素材となった剥片の打面、腹面が残る。二次加工は背面側の左に折れ面があり、その後で二縁辺に比較的急角度の剥離がなされる。

1121 はやや小形だが同様の特徴がみられる。図右は素材となった剥片の腹面である。側面にみえる折れ面によって剥片は斜位に分割され、素材の打面にあたる部分は急角度の剥離によって除かれている。

1109 は玉髄製の石器で、四角形を呈する。3 cm弱と小さく幅の割にやや厚手である。両側面は折れ面であり、背腹面と折れ面上のすべてに二次加工がある。

1119, 1134, 1103, 1107 は剥片を素材とし、折断と剥離によってこれを二次加工している石器である。

1119 は図左が素材である剥片の腹面にあたる。左側面に折断に近い剥離があり、素材の打面部と末端にも二次加工がある。

1103 は珪化凝灰岩の剥片で、末端に折れ面があり、また腹面を中心に浅い面的な剥離がある。

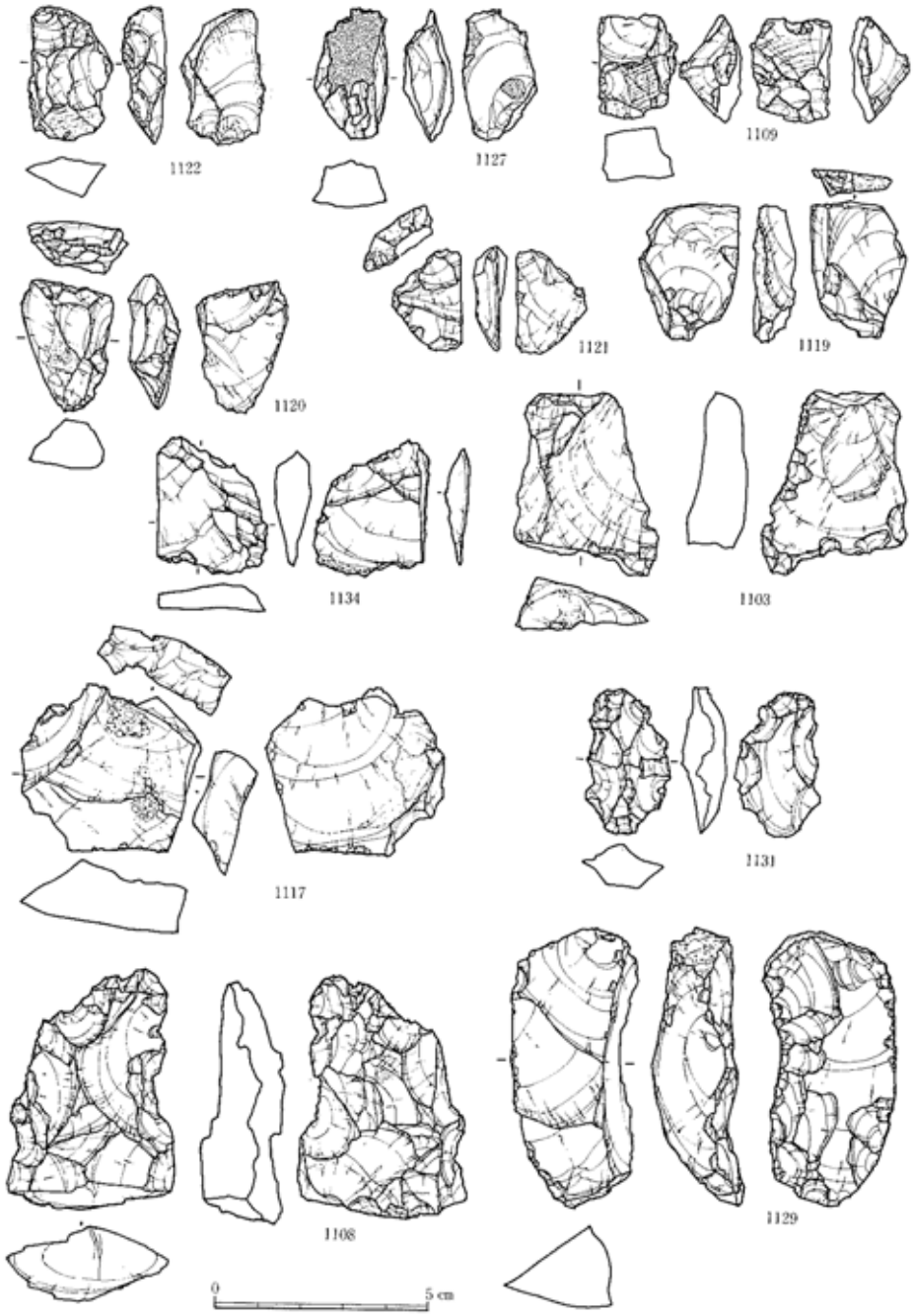
1117 は剥片の周囲全体がこのように二次加工されている。剥離面は急角度でありフラットでバルブ・打点がはっきりしないことから、通常の剥離というより折れ面の範疇に入るべきものである。

1131, 1108, 1129 は 1 ないし 2 側縁の背腹面に奥行のある平坦な剥離が連続してみとめられる石器である。

1108 は珪化凝灰岩の両面加工石器である。非対称で左右に外彎、内彎する側縁がある。基部は折れ面であり、先端には特に細かい調整はない。縁辺にそった剥離は比較的抉りの深いタイプのものであり、側縁の側面観は鋸歯状を呈する。

1131 は剥片素材の半両面加工石器である。腹面⇒背面の順に二次加工されている。剥離面はバルブの発達する抉りの深いものであり、石器の側縁線は鋸歯状を呈する。

1129 は玉髄製のやや大形の石器である。側面に腹面側からの大きな剥離があり、これを打面として腹面に連続する剥離がある。加工部位の側面観はこれも鋸歯状を呈する。背面左の鋭い縁辺にも細かい剥離がある。



第82図　第11集中地点の石器(1)
Fig.82 Lithic artifacts of concentration 11, stratum Ⅶ(1)

第83図　第11集中地点の石器(2)
Fig.83 Lithic artifacts of concentration 11, stratum Ⅶ(2)

1118，1107 は両極剥離痕ある石器である。

1118 は縦長の石器で、長軸方向に両極剥離がなされる。側面には両極剥離前のフリー・フレイキングによる加工がある。

1107 もフリー・フレイキングによる剥離後、両極打法が用いられる。両極剥離はまず横方向で、次で 90 度打面を転位して行われる。腹面側右上のやや鋭い縁辺にも細かい剥離がある。

1123, 1126 も両極剥離に依っている可能性がある。

1123 は四辺を折れ面や自然面に囲まれていて鋭いエッヂがない。剥離は 3 方向からなされるが、潰れがみられる。石器が約 2 ㎝と小さく、通常、剥離が困難な面構成である点から、両極剥離に拠っていると思われる。

1126 は両面加工石器だが、縁辺のあちこちに顕著な潰れがある。

1110，1136，1135，1111，1106 は剥離もしくは折れ面によって、尖端部をつくりだしている石器である。

1110 は節理面や潜在的な割れ面を多くもつ玉髄で、たいへんに観察が難しい。2 側面に折れ面があり、折れ面上から背腹面に二次加工がなされる。背面右側縁にも剥離があり、これらによって鈍い突起部がつくりだされている。

1135 は玉髄の剥片である。折れ面と連続する剥離によって 90 度位の角が形成されている。

1111 はやや厚手の剥片を素材とする。左側面の 2 回の剥離によって素材の打面部を除いた後この剥離面と縁辺の交叉する角に細かい剥離による調整を加えている。

1106 は交差する 2 つの折れ面によって約 60 度の尖端部が形成される。背面には折れ面を打面とした二次加工がある。この尖端部と他の一端に摩滅がみとめられる。

1136 も同様に 2 面の折れ面によって 90 度近い角がつくられる例である。先端部を形成する折れ面には微細剥離痕が著しい。

1132, 1113 は内彎する加工部位；ノッチのある石器である。

1132 は厚手の剥片の縁辺に細かい剥離が連続する。1 側縁が内彎し、その一端が尖端部を形成している。

1113 では珪化凝灰岩の横長剥片の下縁に斉一な細かい剥離によってノッチがつくられている。

1130 は剥片の末端に細かい剥離があり、外彎する加工部位がつくられる。打面部は折れ面によって失われている。

1133 は剥片で、末端に折れ面がある。

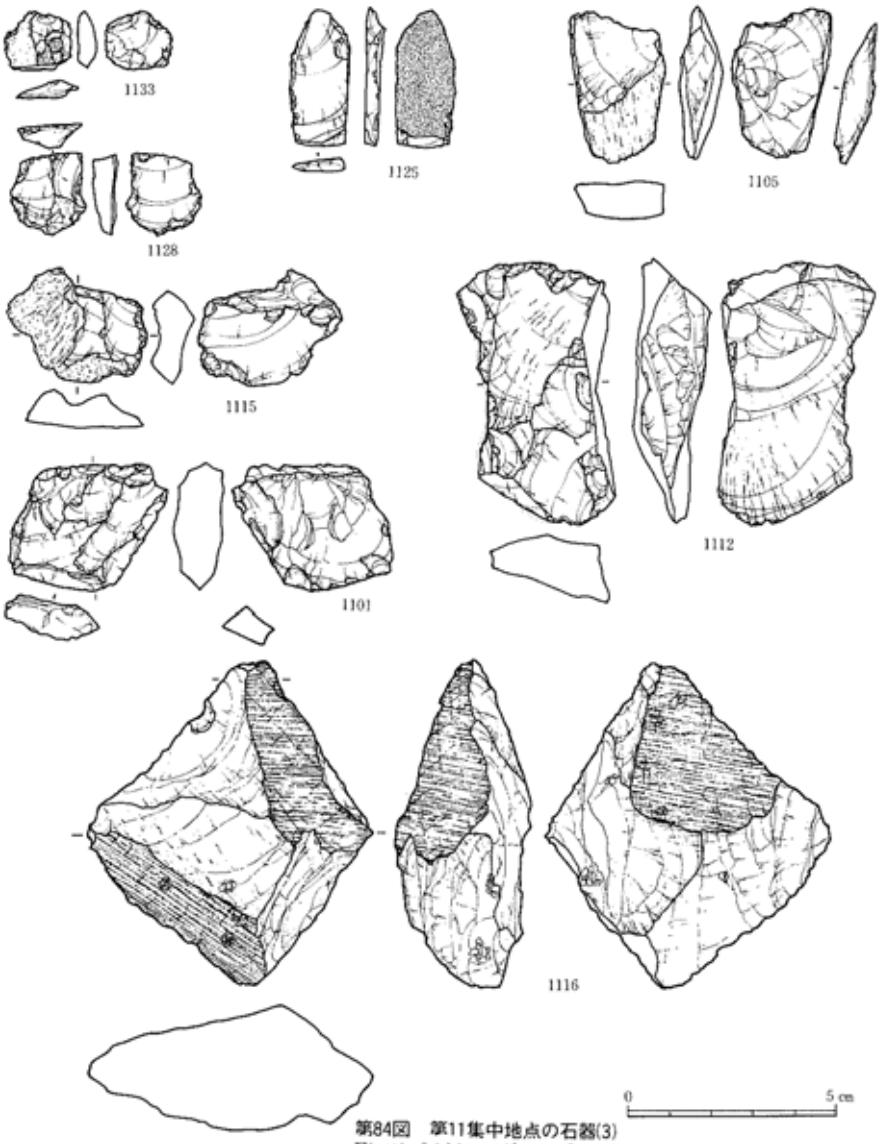
1105 は流紋岩の剥片で、折れ面によって二分されている。折れ面上には打点がみとめられる。

1128 は碧玉の剥片である。折れ面によって打面部は失われている。縁辺や折れ面上に散漫な剥離がある。

1115 も上部は折れ面である。右側縁には細かい斉一な剥離が連続する。

1101 は石英安山岩質疑灰岩の剥片である。末端に折れ面があり、背腹面に剥離ががみとめられる。

1112 は大形の剥片である。側面は折れ面であり、折れ面上から背面に大小の剥離がなされる。



第84図　第11集中地点の石器(3)
Fig.84　Lithic artifacts of concentration 11, stratum Ⅶ(3)

折れ面にも微細剥離痕があるが、鋭いエッヂののこる2縁辺には微細剥離痕が著しい。

1116は石英安山岩の石器である。素材は不明。背腹面に節理面を含む剥離がある。腹面横方向からの剥離はフラットで両極剥離の可能性がある。これを切る背面側の大きな剥離によって四角形に整形されている。

第11集中地点内の石器の分布（第85図）

第11集中地点は4×4m程の範囲に35点が分布する。1134，1135，1136は分布がやや離れるが、これらはダメ押しの時点で発見されたもので、出土レベルも他の石器より若干下がる。従って生活面を異にするものかもしれない。

第85図に示したように、石器は集中地点内でも北東と南西に偏り、中央は分布がやや希薄である。1114，1104，1102は加工のない礫なので、これを分布からはずして考えれば、その傾向はさらに明瞭になる。集中地点内における石器の分布も一様ではなく、最初に紹介した1127,1121,1120，1122といった切出状の石器はすべて北東の一群に含まれる。一方、1114，1106，1111の尖端部のある錘状の石器は南西に分布するか、1135，1136のように周辺部にある。1132、1113のようなノッチそして1131，1129，1108の両面加工石器は、これらとは異なった集中地点内でも中央やや西側に位置する。これらのことから、集中地点内は、特定の石器の存在と結びついた、さらに細かいいくつかの空間によって構成されていることが推測される。

第13集中地点の石器（第87図）

第13集中地点は発掘区東側の一群の中でも最も南に位置する。3×2m程の分布域の中央には明瞭な空白部があり、これを囲むように15点の石器が分布する。（第86図）

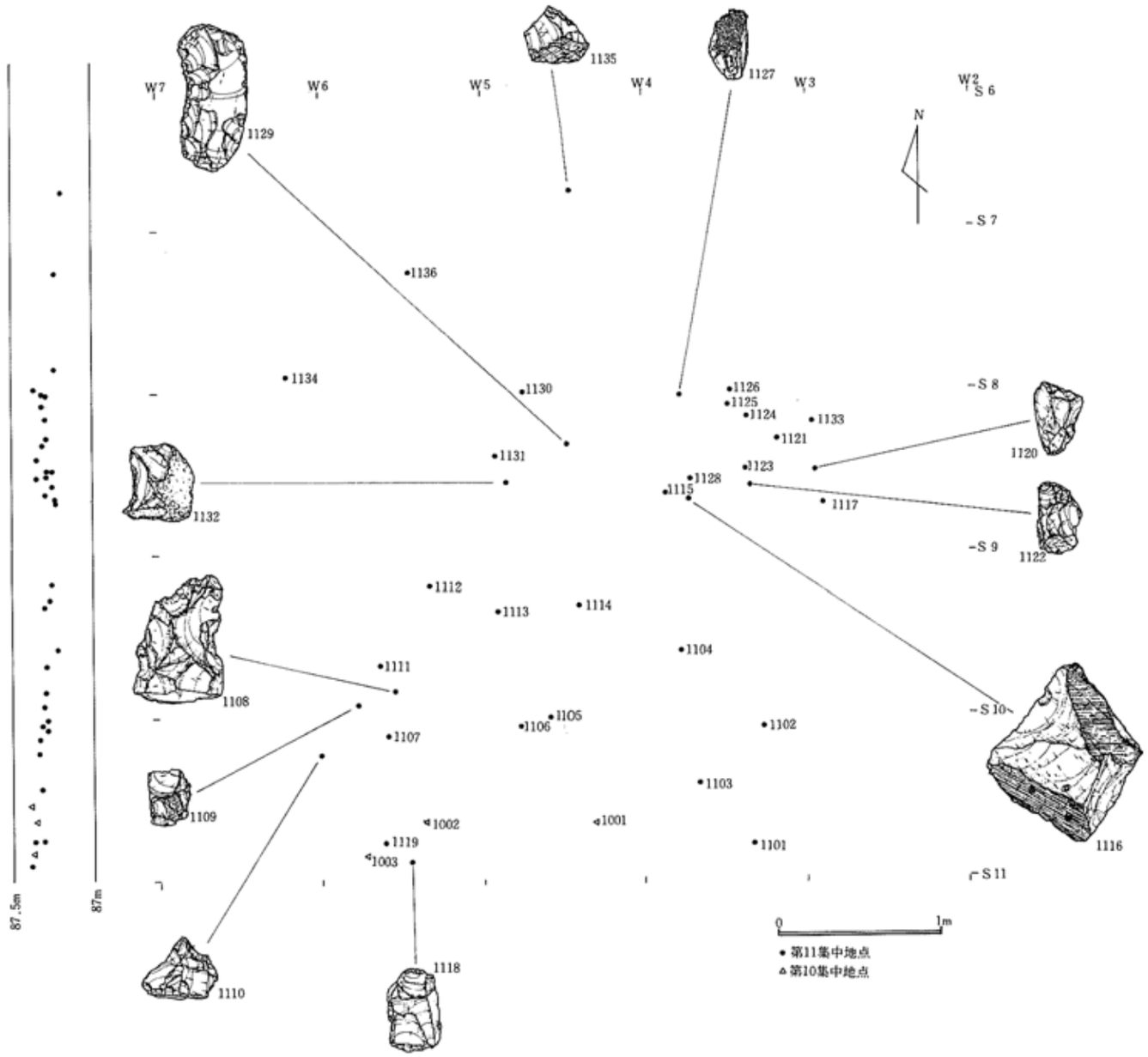
第13集中地点には玉髄、碧玉を用いた小形の石器が多い。

1307は赤い碧玉の石器である。二次加工は背腹面上の平坦な剥離がある。また、背面側の二縁辺には、急角度の剥離がなされ、切出状に整形されている。二次加工のない1側面は節理面で構成されている。

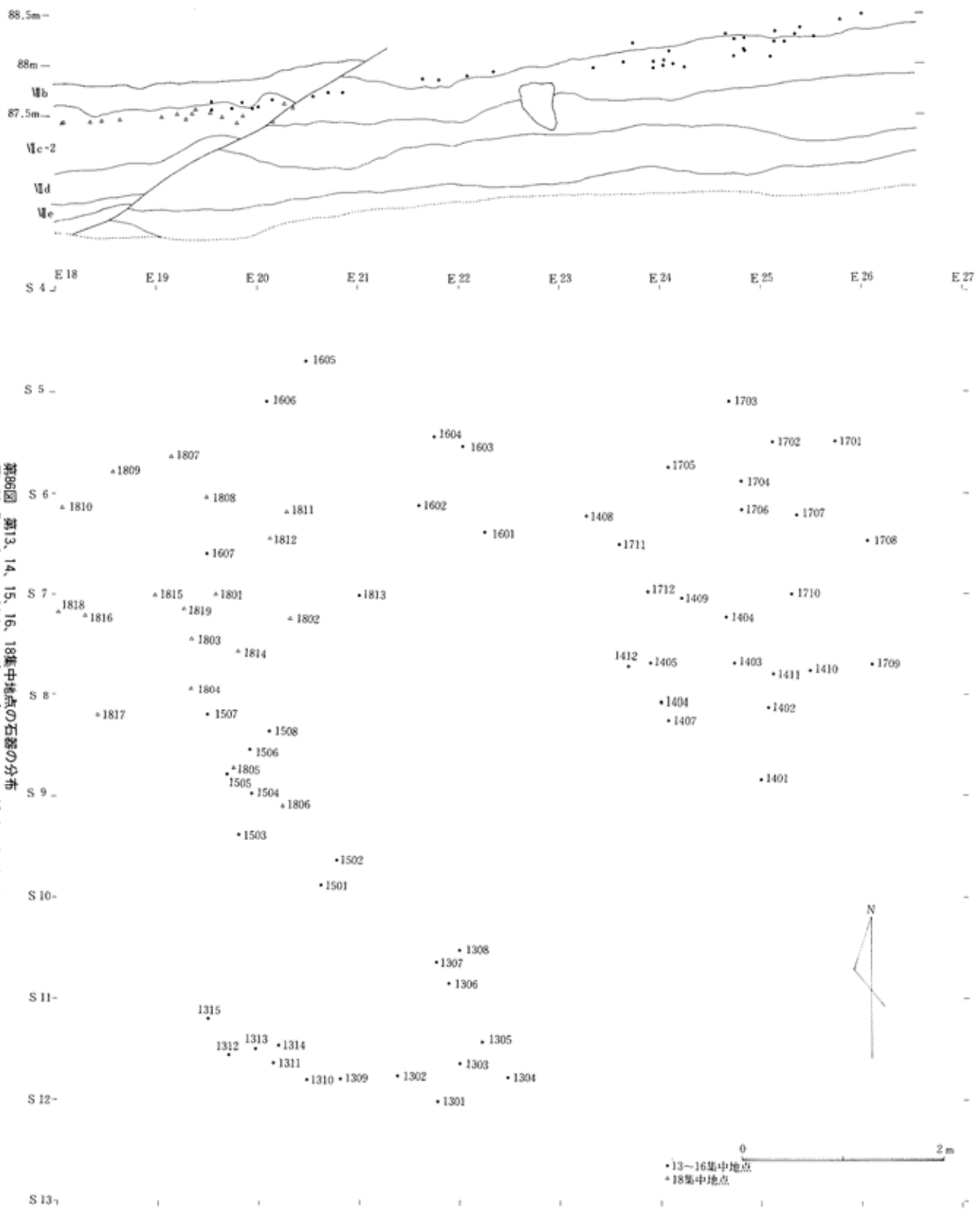
1310は碧玉の剥片である。二次加工には、まず腹面右の剥離（？）があり、これに接する腹面上に平坦な剥離がなされる。次に先の折れ面を打面として背面側に深い剥離が連続してなされ、その過程で剥片が二分されている。石器の鋭い縁辺には微細剥離痕がみとめられる。

1305は玉髄の半両面加工石器である。石材には節理面が多く剥離面の観察が難しい。横長剥片素材で側面に打面の一部を残している。先端部に折れ面があるが、二次加工によって切られるようである。縁辺の側面観は鋸歯状を呈する。

1303は玉髄製の彫刻刀形石器？である。横長剥片の1側縁に90度近い急角度の剥離が連続してあり、この加工部を打面として交叉する縁辺上に細長い剥離が2回なされている。彫刻刀面上やこれに接する背面上に細かい剥離がみられる。



第85図　第10、11集中地点の石器の分布
Fig.85　Distribution of lithic artifacts of concentration 10.11



第86図 第13, 14, 15, 16, 18集中地点の石器の分布
Fig.86 Distribution of lithic artifacts of concentration 13, 14, 15, 16, 18.

第87図　第13集中地点の石器
Fig.87　Lithic artifacts of concentration 13, stratam Ⅶ

1308 は素材不明。上下に折れ面があり、背面側右側縁には折れ面と剥離面によって鈍い突起がつくられている。左側縁には縁辺にそった細長い剥離があるが、その綾の二次加工によって打点の有無ははっきりしない。

1309 は玉髄の小形の石器である。横長剥片の末端に大小の剥離によって鈍い突起部をつくっており、粗形の錐と考えられる。

1306 も小形の剥片石器で、交叉する 2 つの折れ面がある。

1304 は剥片素材だが折れ面によって大きく形態が変えられている。折れ面と縁辺の交叉する角を中心に細かい剥離がある。

1312, 1313 は玉髄製の両極剥離痕ある石器である。

1313 は縦長の形態の石器で、側面には両極剥離前の調整痕がある。両極剥離は長軸方向が主だが、90 度角度をかえて剥離されている可能性がある。

1311，1301，1315，1302，1304 は剥片だが、いずれも折れ面と二次加工の剥離がある。

1311 の末端の折れ面は両極剥離の特徴を示す。剥片の鋭い縁辺には細かい剥離があり、加工部位は鋸歯状を呈する。

1315 の側面は折れ面ではない。腹面右側縁には細かいが急角度の剥離が連続する。

1314 は石英安山岩の剥片だが、周辺は打面部を除いて、7 面の折れ面もしくは折れ面に近い剥離によって構成されている。

第 14 集中地点の石器（第 88、89、90 図）

第 14 集中地点は加工のない礫 1 点を含め、23 点からなる。発掘時には第 17 集中地点としてあげていた 1700 番台の石器があるが、これらは第 14 集中地点と分布が連続するため第 14 集中地点に含めた。

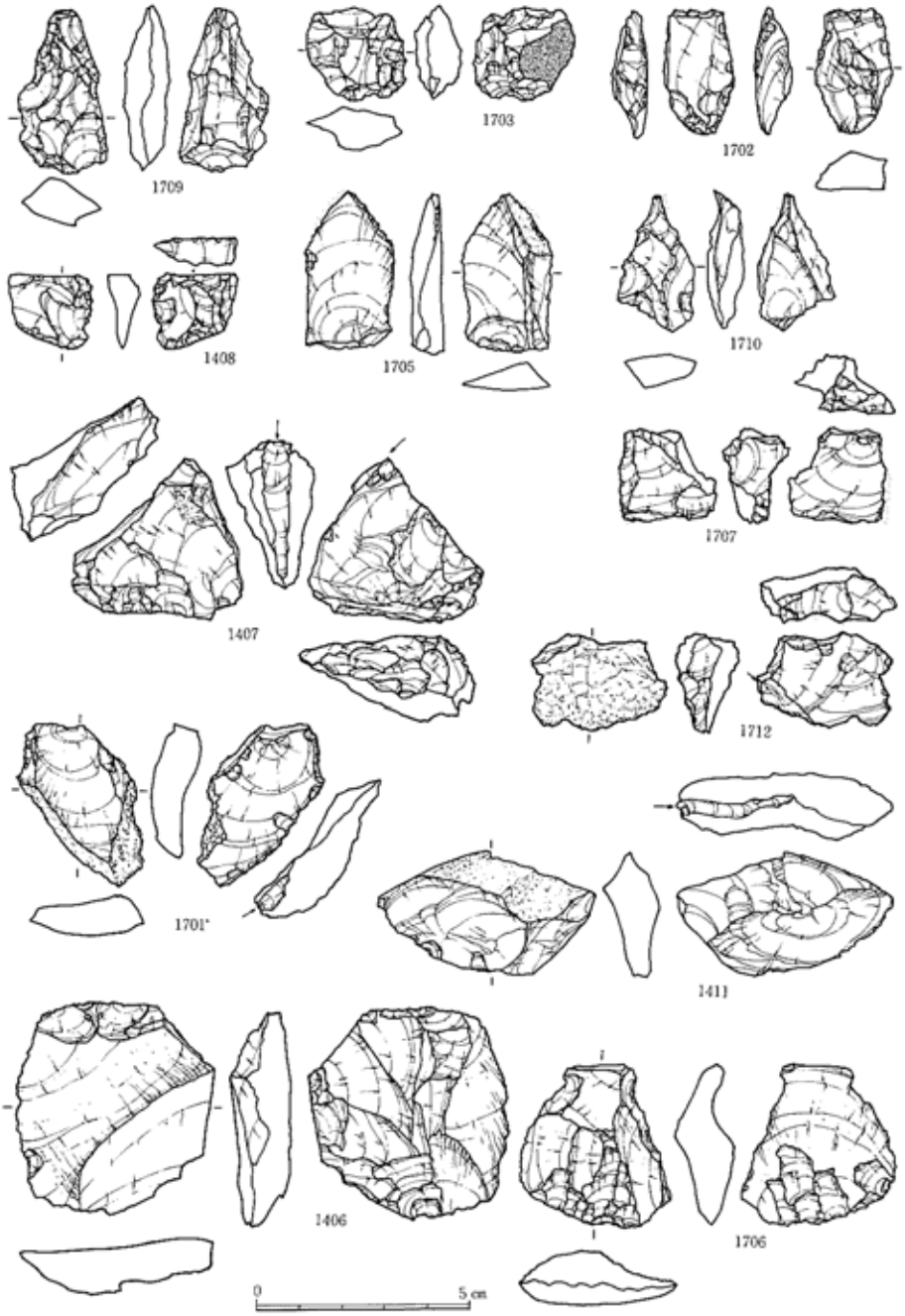
1709，1703 は両面加工石器である。

1709 は玉髄の細長い形態の石器である。二次加工は、まず腹面側に平坦な剥離があり、次で背面側に抉りの深い剥離がなされ、その結果、縁辺の側面観は鋸歯状を呈する。尖端部をつくるような細かい調整はない。

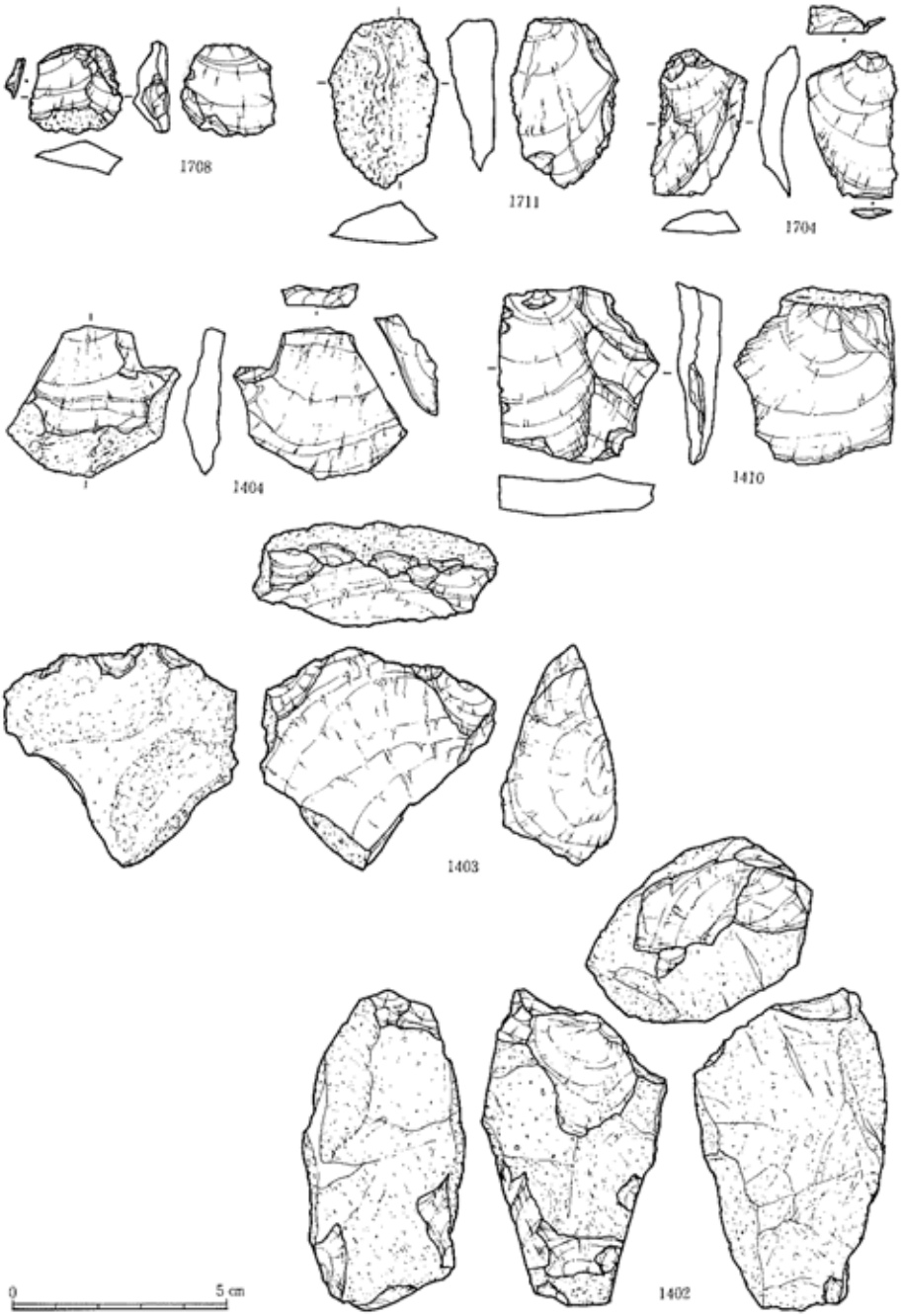
1703 は火をうけて焼け弾けた部分があるが、二次加工の中にはこれを切っているものがある。

1702 は玉髄化した珪化凝灰岩の剥片を素材とする。二次加工は、まず左側面に折れ面があり、次でこれを打面として背面から腹面へ抜ける大きな剥離によって素材の打面部が除かれる。これで石器のおおまかな形が決定し、その後は先端や基部、側面に比較的小さな剥離がなされている。

1408 は両極剥離痕ある石器である。玉髄の剥片素材であり、まず横方向で両極剥離痕が行われ、次に 90 度角度をかえてこれが繰りかえされる。上部のフラットな面も両極剥離時に生じて



第88図　第14集中地点の石器(1)
Fig.88 Lithic artifacts of concentration 14, stratum Ⅶ(1)



第89図　第14集中地点の石器(2)
Fig.89　Lithic artifacts of concentration 14, stratum Ⅶ(2)

いる可能性がある。

1710 は碧玉の剥片石器である。折れ面と抉りの深い剥離によって、ややカギ状に勾がった尖端部がつくりだされており、この部分に微細剥離痕がある。

1705 は珪化凝灰岩の剥片石器である。末端の 1 縁辺に細かい剥離が連続してあり、これと交叉する縁辺との間で尖端部を形成しており、この部分に微細剥離痕がみとめられる。

1707 は玉髄の剥片である。打面部が非常に厚く、やや鋭い 2 縁辺に微細剥離痕がみとめられる。側面の剥離は二次加工ではない。

1407, 1702, 1701, 1411 は彫刻刀面ともとれる細長い剥離が単独でみとめられる石器である。

1407 は黒色の碧玉の分厚い剥片を素材とする。左側面は折れ面であり、これを打面として交叉する縁辺に彫刻刀面が形成されている。ただし背腹面にこの面を切る剥離がある。

1712 もやや厚手の剥片を素材とする。2 縁辺に折れ面があり、その一方を打面として樋状剥離がある。

1701 の剥片の末端にも彫刻刀面のような剥離があるが、事前の調整はない。腹面の側縁に細かい剥離がある。

1411 は碧玉化した珪化凝灰岩の剥片を素材とする。図右下部が剥片の腹面と考えられる。樋状剥離は腹面との切り合い関係がないが、この剥片の背面構成からこのような剥離が入る余地はあまりないので、二次加工に含まれるものと思われる。

1406 は石英安山岩質凝灰岩の剥片石器である。素材の腹面には薄い広がりのある剥離が重複する。背面の一部にも剥離があり、打面部が除かれている。剥片素材の石核の可能性があろう。

1706 も石英安山岩質角礫凝灰岩の剥片で、打面部の背腹両面に、浅く奥行のある剥離がなされる。

1708, 1711, 1704, 1404, 1410 は剥片で、二次加工の剥離あるいは折れ面がみとめられる。

1708 は両側縁に折れ面がある。

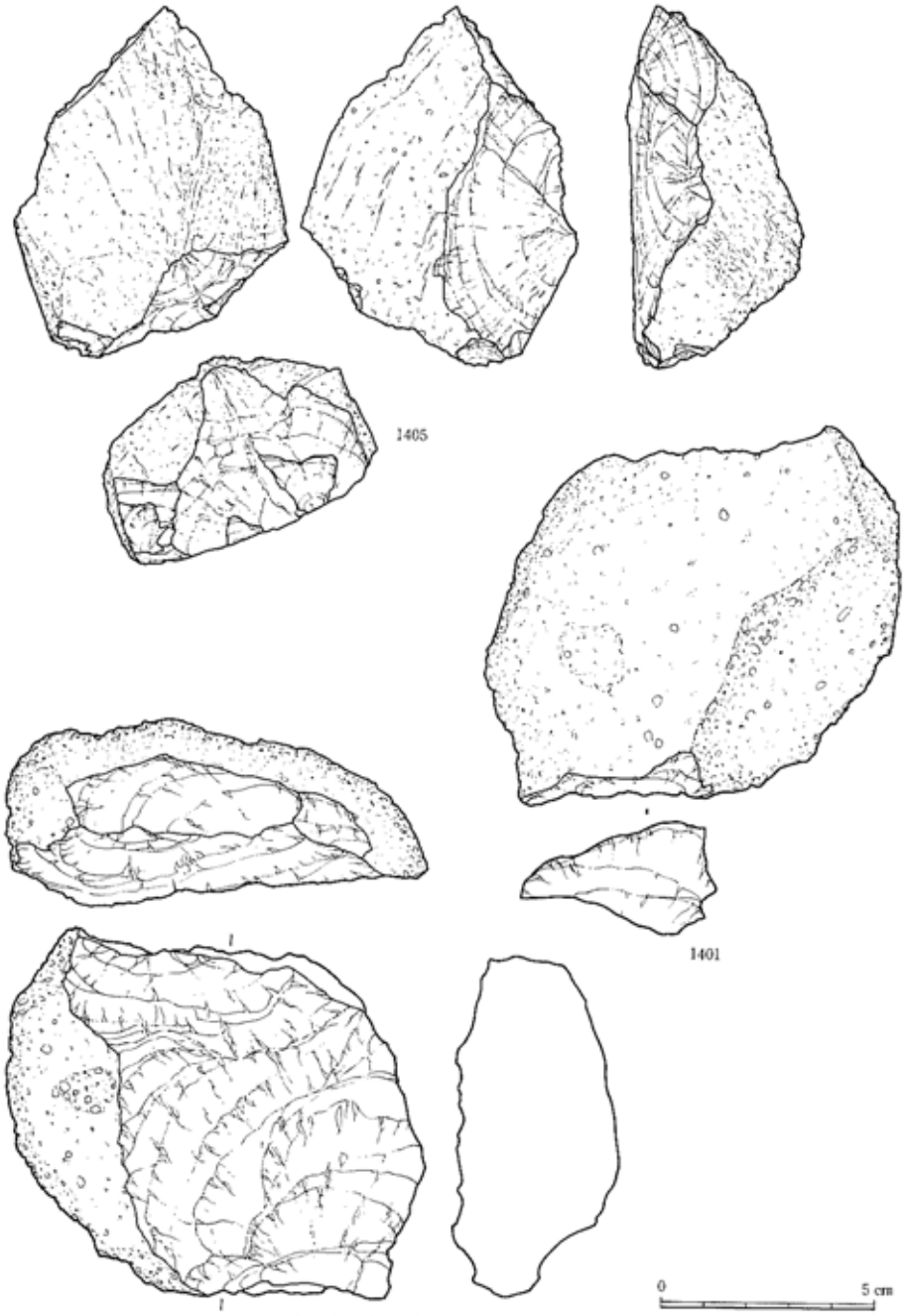
1404 は背面に自然面のある剥片で、打面部付近に 3 面の折れ面がある。

1410 も打面から側面にかけて自然面がのこる剥片である。側縁に折れ面があり、背面に散漫な剥離がみとめられる。

1403, 1402, 1405, 1401 は石英安山岩等、粗粒の石材を用いた比較的大形の石器である。

1403 はチョッピング・トゥールだが、脈状石英を用いており剥離面の観察が難しい。素材は荒割礫のようであり、二次加工は腹面右の大きな剥離で整形後、上部の鋭い縁辺の背腹面に交互剥離を行っている。

1402 は細粒の流紋岩製のチョッピング・トゥールである。石器には、自然面、剥離面とはっきりわかる面の他にどちらともつかない部分がある。これらの不明瞭な面は剥離面に比して摩滅



第90図　第14集中地点の石器(3)
Fig.90　Lithic artifacts of concentration 14, stratum Ⅶ(3)

が著しい。また、剥離面の一部に含めた場合、二次加工に全く規則性がみとめられない部分がでてくることから、自然面の一部と考えた。観察の結果、石器は礫素材で、剥離面と考えられる面は意外に少ない。二次加工は長軸の両端にあり、特に素材の上部の稜線上からは交互剥離が加えられている。

1405 は粗粒の石英安山岩を用いたピック？である。素材は分厚い角礫であり、背面側が山形であるのに対し腹面側は平坦面になる。石器は素材の形態をいかしてつくられていて、二次加工は決して多くない。基部の整形には両極打法が用いられる。一縁辺の背腹面にやや抉りの深い剥離があり、側面観は鋸歯状になっている。

1401 は粗粒の石英安山岩の扁平な礫を用いた石核？である。礫の二端に打面を設定し、大きな剥片を剥離している。剥離は両極打法によっている可能性がある。

第 14 集中地点の石器の分布（第 86 図）

第 14 集中地点は発掘区東側分布域の中でも東側に位置する。石器は 4×3m 程の範囲に均一に分布している。4 点の大形の礫石器は第 14 集中地点内の中でも南に集まる傾向があるが、剥片石器の分布には大きな偏りはみとめられない。

第 15 集中地点の石器（第 91 図）

第 15 集中地点は発掘区東側分布域の中でも西側に位置し、2×1m 程の範囲に 8 点が分布する（第 86 図）。

1508，1502 は切出状に整形された石器である。

1508 は碧玉製の石器で、剥片をまず背面左の大きな剥離で分割している。その後冶縁辺に沿って連続する急角度の剥離がなされる。加工部位を構成する剥離面は多様で、ナイフ形石器のブランティングとは特徴が異なる。背面左は先の分割面と素材の腹面のなす鋭いエッヂがあり細かい剥離がみとめられる。

1502 は素材不明。断面矩形で幅に比してやや厚めだが、上部には比較的鋭い縁辺がある。側面は一面が自然面、一面が折れ面からなり、折れ面と背腹面が構成する稜のあたりに剥離が連続する。

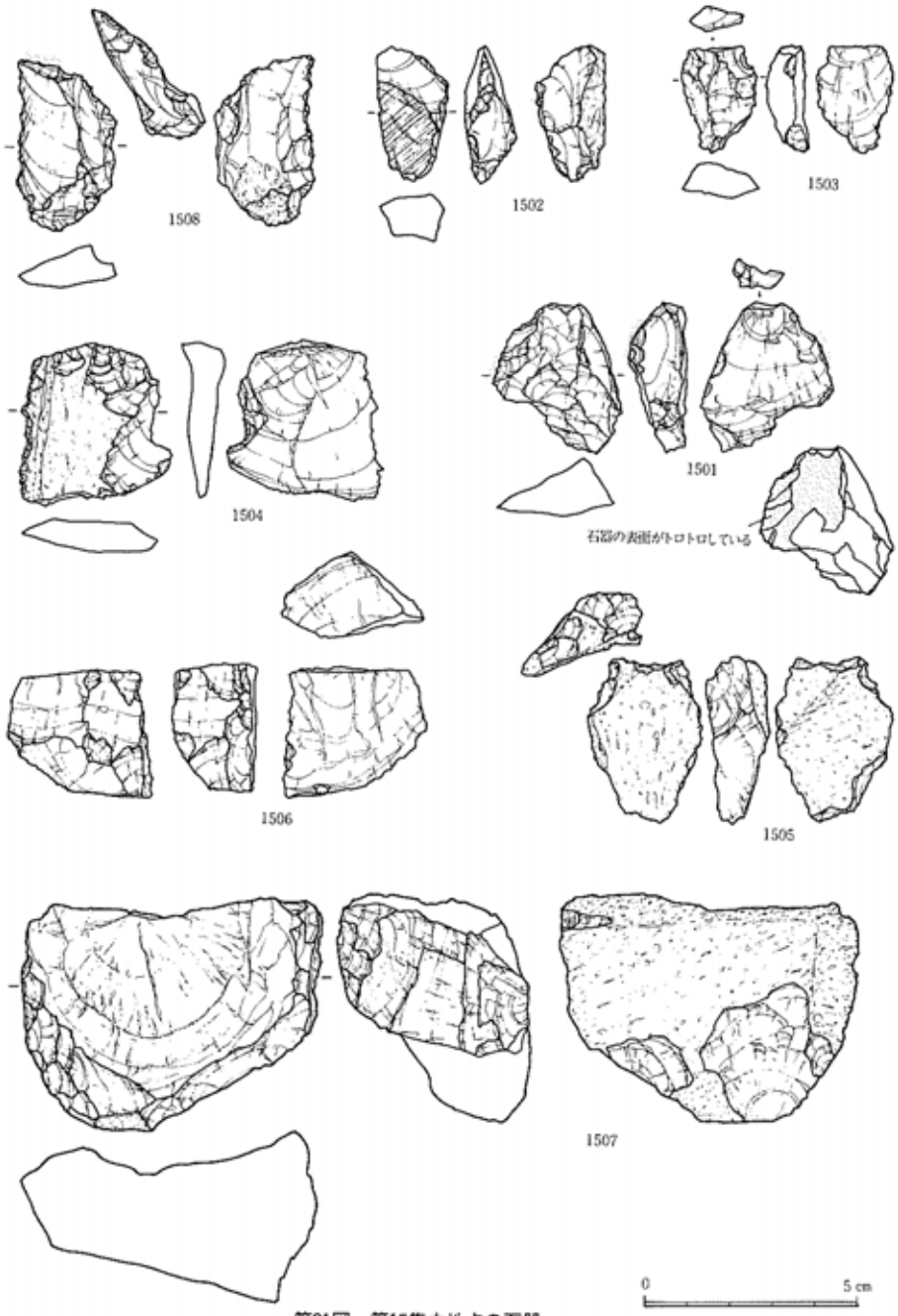
1504 は碧玉の薄手の剥片で背腹面の左側縁に連続する細かい剥離があり、ノッチとやや鋸歯状の加工部位が形成されている。

1501 は玉髄の剥片である。側面は折れ面であり、折れ面と背面のなす稜を中心に剥離や潰れがみとめられる。背面左はやや鋭い縁辺になっていて微細剥離痕がある。

1503，1506，1505，1507 は石英安山岩、流紋岩等のごく粗粒の石材を用いた石器である。

1503 は剥片で、縁辺に散漫な剥離がある。

1506 も厚手の剥片で背面に自然面がのこる。背面右側縁に連続する急角度の剥離がある。



第91図　第15集中地点の石器
Fig.91　Lithic artifacts of concentration 15, stratum Ⅶ

1505 は小さいが礫素材の石器である。側面は折れ面状の剥離からなり、長軸の一端には背腹面からの急角度の剥離で突起部をつくりだしている。

1507 の素材も角礫である。二次加工は、まず背面側 (註) 1の大きくて深い剥離の後、横方向からの剥離があり、次に下から急角度の剥離がなされる。この時同じ部位の腹面側にも剥離面が形成されているようである。次に素材の最も厚い部分を取り除くべく両極打法が用いられる。素材の背面側左側縁は右側と逆にやや鋭いエッヂになっており、この部分に連続する階段状の剥離がある。これは二次加工の中でも比較的新しい。背面の大きな剥離をみると石核ともとれるがそれ以降の一連の加工から粗製のスクレイパーと考えられる。

第 16 集中地点の石器（第 92、93 図）

第 16 集中地点は発掘区東側分布域の中でも最も北側に位置する。2×3m 程の範囲に 8 点が散漫に分布する（第 86 図）。

1602 は玉髄の剥片を素材とした半両面加工石器である。背面左側面は素材の一部だが、右側面には折れ面が部分的にのこっている。二次加工は背面にまず浅い面的な加工があり、次で腹面に同様に剥離が繰り返される。腹面側の最終加工はやや抉りの深い剥離で加工部位の側面観は鋸歯状を呈する。

1603，1601 は珪化凝灰岩の剥片である。末端に折れ面があり、縁辺に剥離がみとめられる。二次加工の剥離面の中には一部パティナが異なるものがある。

1813 は碧玉製の剥片石器である。打面部は折れ面によって失われ、分厚い末端部には急角度の剥離がある。折れ面と剥離面の交叉する角の辺りに微細剥離痕がみとめられる。

1604 は厚手の剥片で打面は平坦な自然面である。縁辺には散漫な剥離がある。

1605 は背面に平坦な自然面のある剥片である。幅広の打面は節理面を含んでおり、腹面は奇妙な彎曲を示す。

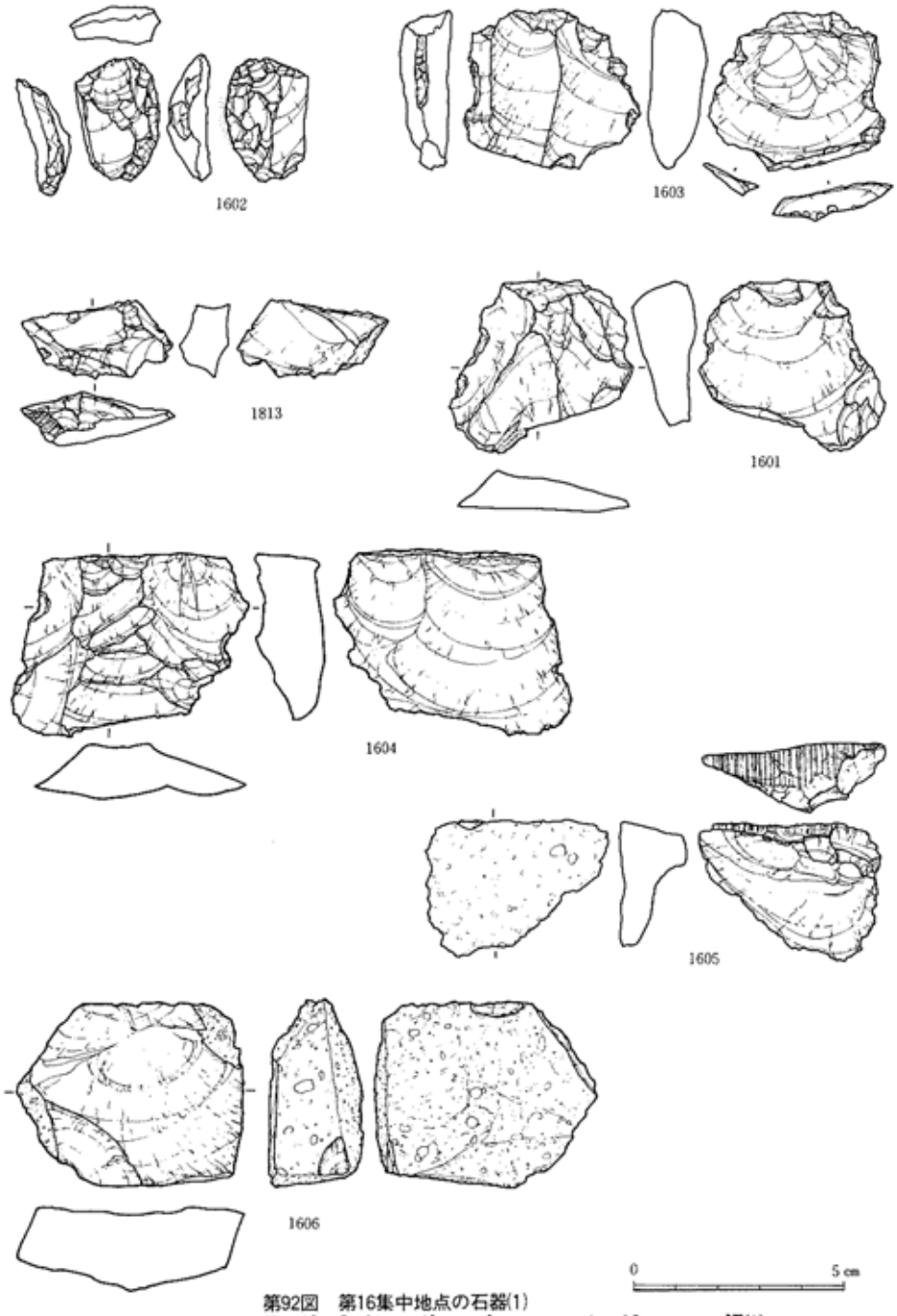
1606 は石英安山岩の礫石器である。表面に茶褐色の鉄分の付着が著しい。扁平な礫の一面に大小の剥離がある他、縁辺に散漫な剥離がみとめられる。

1607 は流紋岩の大形剥片である。打面、背面は自然面であり、バルブが平坦なことから、荒割礫に近いものかもしれない。縁辺に幾つか抉りの深い剥離がある。

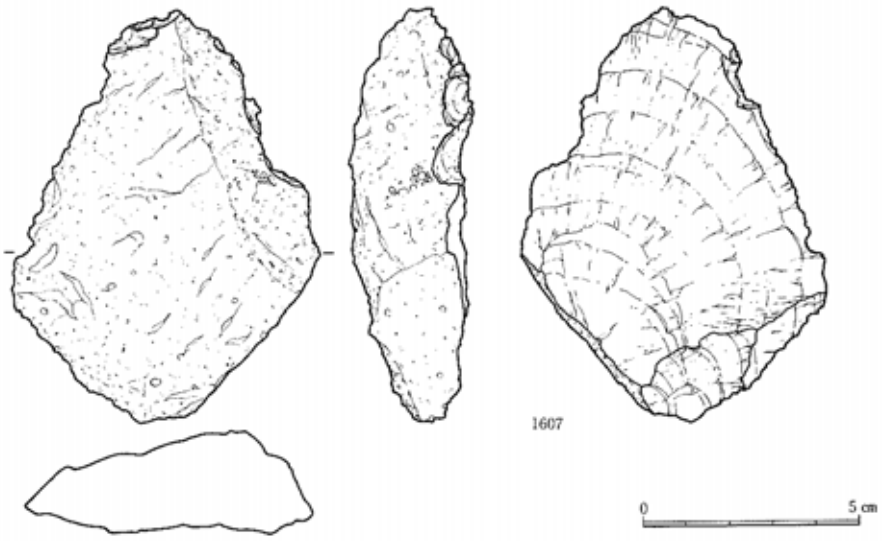
第 18 集中地点の石器（第 94、95、96 図）

第 18 集中地点は一部、第 15，16 集中地点と重複しながら、発掘区東側分布域の北西に位置する。石器 18 点からなり 2×3m 程の広がりをもつ（第 86 図）。

1819 は碧玉の剥片素材の両面加工石器である。一縁辺の背腹面に広がりのある剥離がある。個々の剥離は背腹面で打点をずらして配置されているので、加工部位は鋸歯状を呈する。石器の両端に節理面を含む折れ面があり、折れ面と縁辺の剥離の交叉する尖端部に微細剥離痕がみ



第92図　第16集中地点の石器(1)
Fig.92　Lithic artifacts of concentration 16, stratum Ⅶ(1)



第93図　第16集中地点の石器(2)
Fig.93　Lithic artifacts of concentration 16, stratum Ⅷ(2)

とめられる。

1816，1809，1802 は折れ面もしくは細かい剥離面の連続によって錐状の尖端部をつくっている石器である。

1816 は剥片の打面部を折れ面によって除き、これと接する一縁辺に細かい連続する剥離をいれて尖端部をつくっている。

1809 は玉髄の剥片石器で二側面は折れ面である。折れ面が交叉して構成する尖端部の稜線上に微細剥離痕がみとめられる。

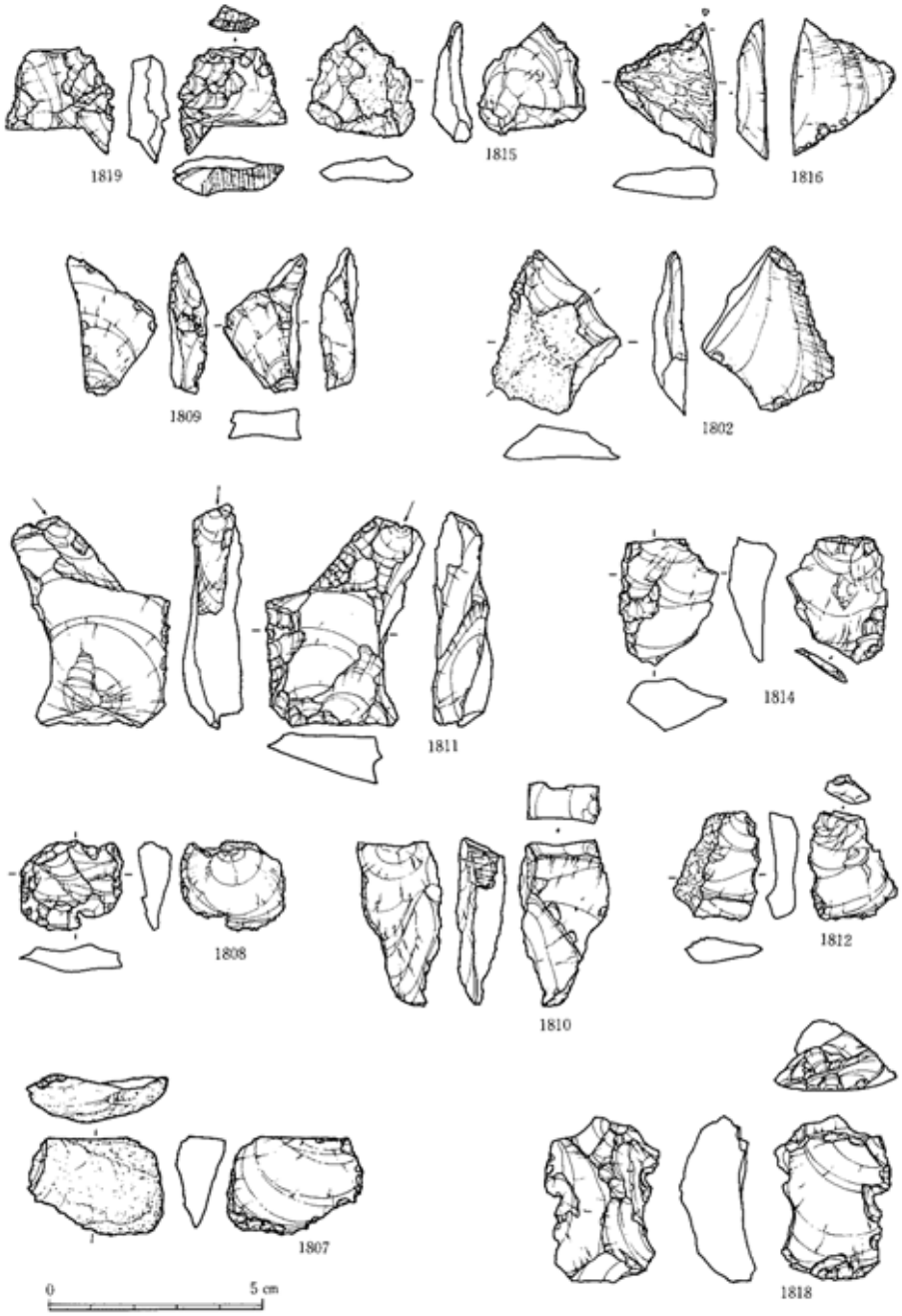
1802 も同様で、剥片に折れ面と連続する剥離面によって構成される尖端部がある。折れ面の一端には打点らしき特徴がある。

1815 は玉髄の剥片で、末端に細かい剥離がある。

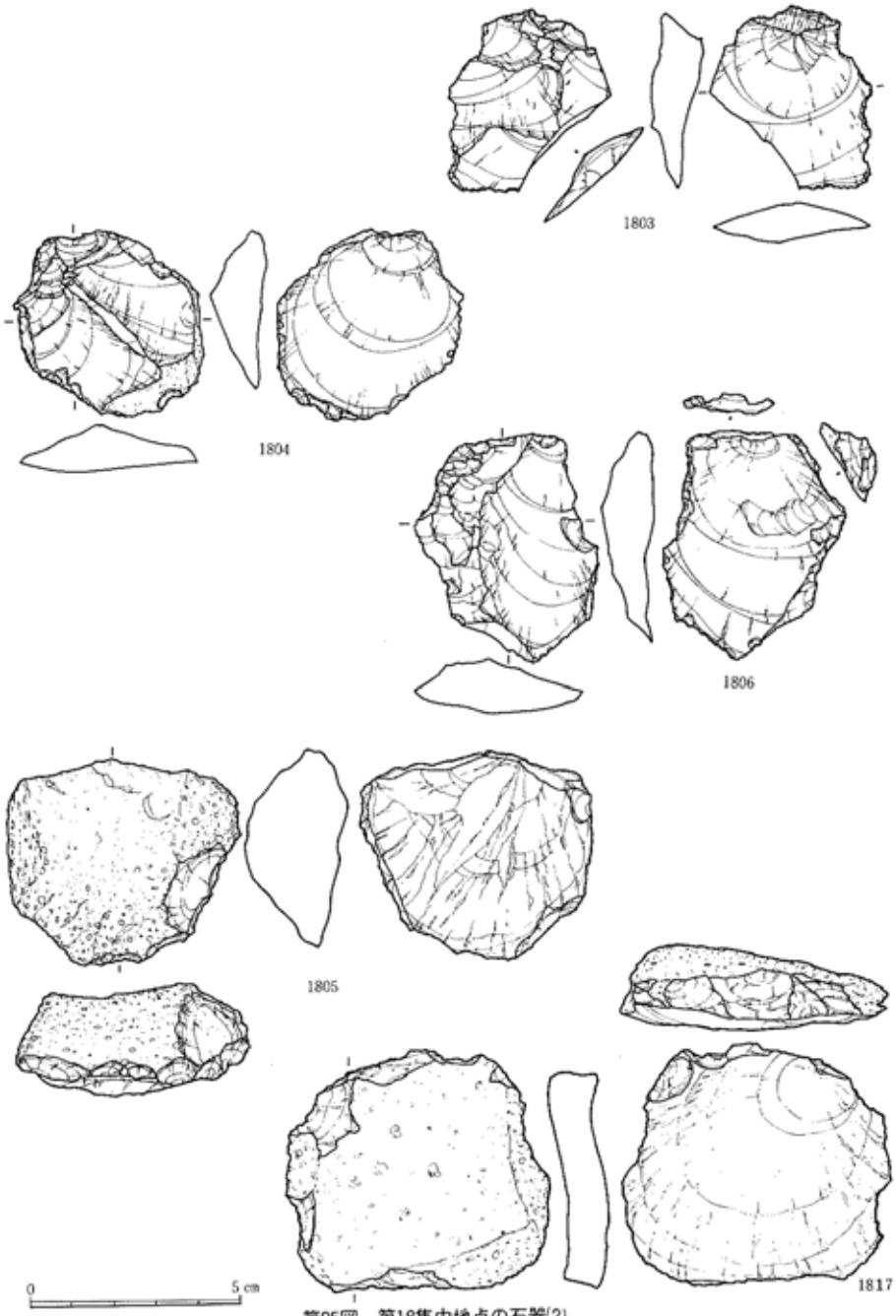
1811 は碧玉の剥片石器で、二次加工は次のような過程をとる。まず素材である剥片の腹面左に打面方向からの遠い剥離がある。次で二縁辺に大きな折れ面が形成される。末端の折れ面を打面として背面と側面に 2 面の樋状剥離があり、その後、背面上に連続する平坦な剥離がなされる。樋状剥離の存在は彫刻刀形石器を想起させるが、側面にみえる剥離面はポジティブ・バルブであり、また樋状剥離が最終加工というわけでもない。

1810 にはポジティブな面がなく、図左を最終剥離面とする石核の可能性がある。

1808，1812，1807，1818，1803，1804，1806 は剥片であり、二次加工のみとめられるものが多い。



第94図　第18集中地点の石器(1)
Fig.94　Lithic artifacts of concentration 18, stratum Ⅶ(1)



第95図　第18集中地点の石器(2)
Fig.95 Lithic artifacts of concentration 18, stratum Ⅶ(2)

1808 は玉髄製の剥片である。打面は自然面で、縁辺に不連続な細かい剥離がある。

1812 も玉髄の薄い剥片で、一側縁に浅い鋸歯状の加工部位がある。

1807 は珪化凝灰岩の剥片で、打面、背面は自然面からなる。腹面上に細かい剥離がある。

1818 は碧玉の剥片石器である。打面部は節理を含む折れ面で階段状になっており、その折れ面上に二次加工があるため、実測図のような複雑な構成になっている。側縁には不連続だが、抉りの深い剥離があり、ノッチを形成している。

1803，1804，1805 はやや大形だが薄めの剥片である。打角が大きく、打面は小さめで、背面構成が複雑である点から、円盤状（？）の扁平な石核から剥離されたものと考えられる。打面構成は単純で自然面をのこすものもある。二次加工の剥離は縁辺にそって連続する細かいものが多い。

1803 は碧玉の剥片で腹面右側縁に不規則な鋸歯状の加工がある。

1806 は赤い碧玉の剥片で、腹面を主に小さな剥離が連続する。

1805，1817，1801 は脈状石英、安山岩、石英安山岩といった粗粒な石材を用いた石器である。

1805 は背面自然面の剥片である。打面は剥離面によって構成されており、下端のやや鋭い縁辺には二次加工がある。

1807 の腹面はネガティブ・バルブで、石核の可能性がある。打面は調整打面であり、縁辺の薄い部分には散漫な剥離がある。

1801 はⅦ層中石器群の中では最大の石器である。素材は亜角礫で背腹面に自然面がのこる。整形は主に両極剥離によるが、背面側左には両極剥離前の剥離がある。両極剥離はまず背面側(註)1の横方向、次で腹面側で約 70 度角度をずらして行われる。その後、上部の鋭いエッヂに浅い剥離がいれられている。

地点不明の石器（第 97 図）

1901，1902 は出土地点が不明の石器である。

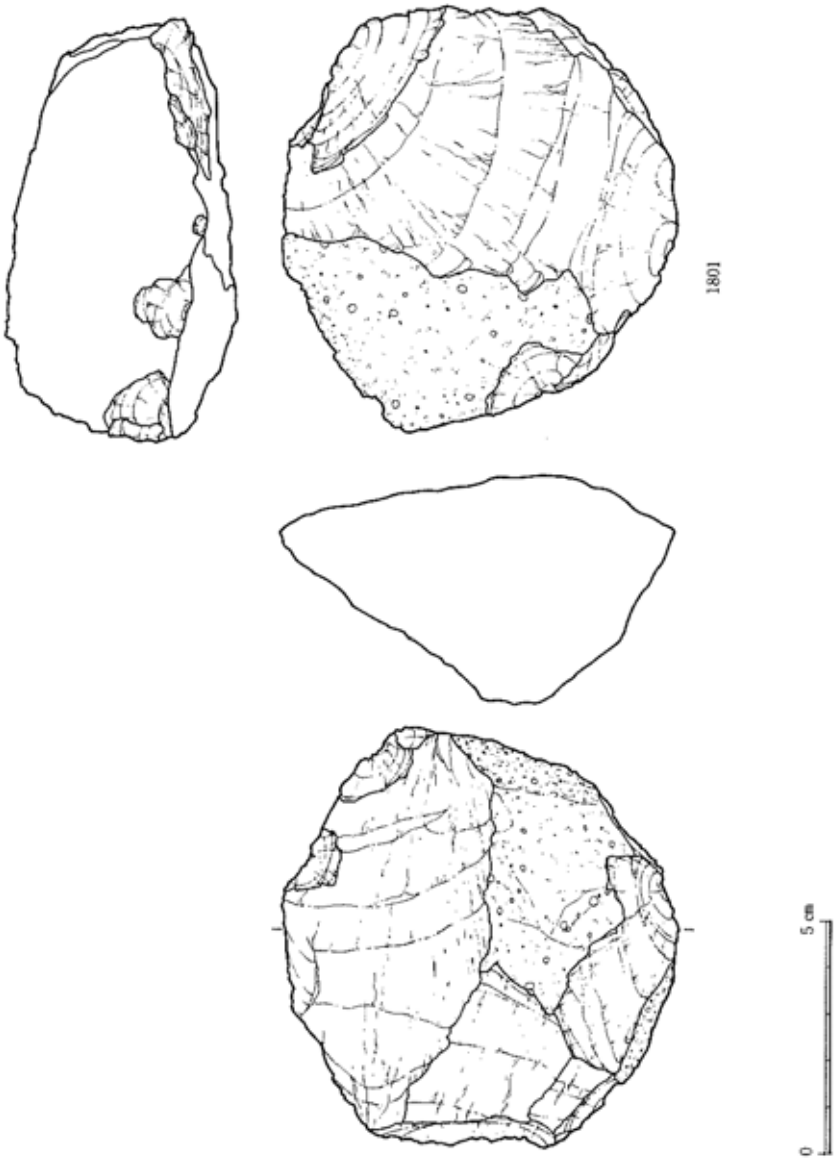
1901 は自然面打面の横長剥片である。側面に細かい剥離があり、ヒンジ・フラクチュアを示す末端部には摩耗がみとめられる。

1902 は玉髄の両面加工石器である。二次加工には、石器の対面に抜けるような奥行のある剥離がみられる。図上部にややまがった尖端部が形成されている。

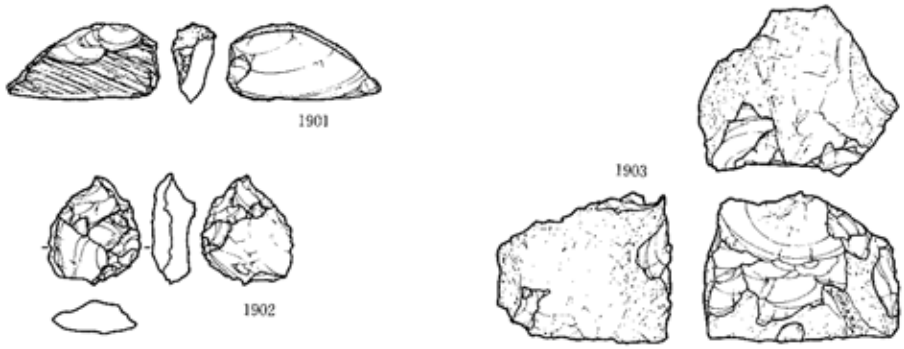
1903 は表採された玉髄製の多面体石核である。石核からⅦ層中石器群に含まれる可能性がある。

石器にみとめられるパティナの違いについて（第 98 図）

Ⅶ層中石器群に限らないが、石器の剥離面中にパティナの異なるものがみとめられる場合がある。表土中の石器はともかくもⅦ層中の石器の場合はカジリによるものとは考えられない。第 98 図に二重パティナのある石器を示した。図中のトーンの異なる部分は二次加工の中でも他



第96図　第18集中地点の石器(3)
Fig.96　Lithic artifacts of concentration 18. stratum Ⅶ(3)



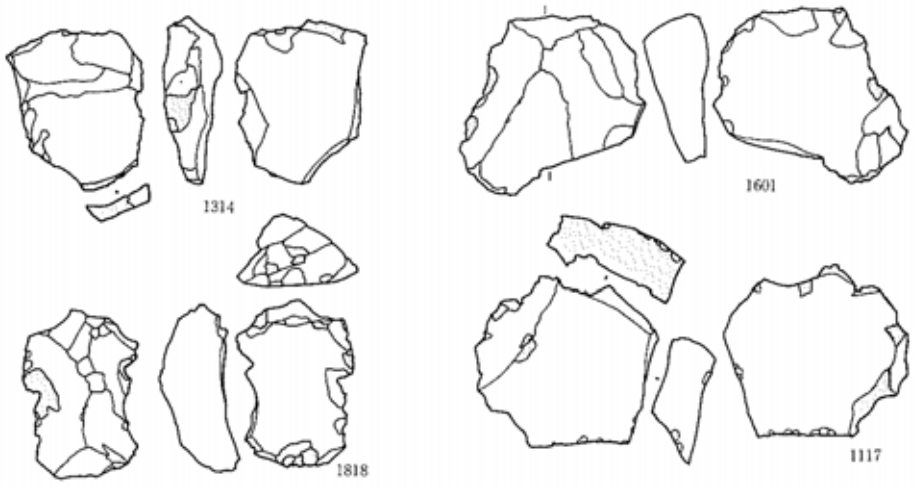
第97図　地点不明の石器
Fig.97 Other lithic artifacts.

の剥離面に比してパティナが新しい。パティナの新しい面は切合関係のうえでも新しい剥離面なので、これらが剥離の時間差を反映しているのはまちがいないであろう。仮にこれらが堆積前に生じたものと考えた場合、パティナの違いは二次加工の間の時間差を反映している可能性もある。

2）考察……Ⅶ層中石器群の位置づけ

石器製作技術からみたⅦ層石器群の特徴

Ⅶ層中出土石器群は石器１点１点をみると形態が多様で、従来の旧石器の器種に単純にあてはめて理解できるものばかりではない。そこで、以下の考察では石器製作技術の視点から、同石器群の全体像の把握を試みたい。



第98図　二重パティナのある石器
Fig.98 Lithic artifacts with different patina

Ⅶ層中出土石器群の石材

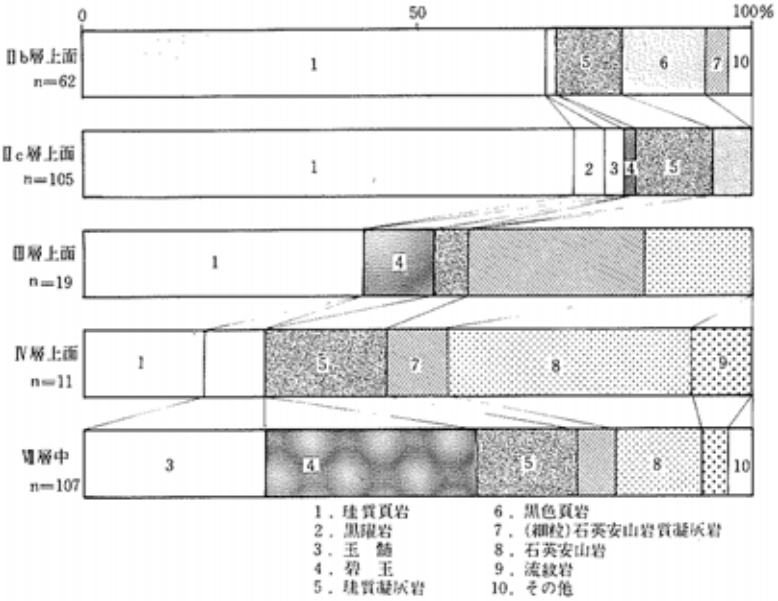
Ⅶ層中出土石器群に用いられる石材は、玉髄、碧玉、石英安山岩、石英安山岩質凝灰岩、安山岩、流紋岩、脈状石英、珪化凝灰岩であり、とりわけ玉髄、碧玉の存在が目につく。玉髄、碧玉を主体とする石材構成を上層と比較すると、Ⅶ層中出土石器鮮の石材選択の特殊性は明瞭である（第 99 図）。後期旧石期時代のⅡｂ，Ⅱｃ層上面出土石器群の主体は珪質頁岩と珪化凝灰岩であり、前期旧石器時代に含まれるⅢ、Ⅳ層上面出土石器群では、これに石英安山岩、流紋岩といった粗粒の石材の比率が増す。この傾向は宮城県北部の他遺跡でも確認されていることではあるが、中峯Ｃ遺跡Ⅶ層中出土石器群の場合は珪質の石材にかわって玉髄、碧玉が石材の主体を占める。

玉髄、碧玉の類は県北部の一迫川および二迫川流域によくみられる石材のようであり、その点では遺跡の立地がこの石材選択の原因とはいえない。

Ⅶ層中出土石器群には、少数ではあるが、安山岩、流紋岩、脈状石英といったⅢ・Ⅳ層上面出土石器群をはじめ県北の前期旧石器時代石器群に共通する石材がみとめられる点は注意を要する。

Ⅶ層中出土石器群を石器の素材としての石材という視点からみた場合、まず大きく 2 群に分類することができる。

その 1 つは、玉髄、碧玉、珪質岩を用いる 89 点の小形の石器で、これらは総て剥片石器であ



第99図　各層の石材構成
Fig.99　Assemblage of lithic materials

る（Ⅰ類）。他の1群は、石英安山岩、石英安山岩質凝灰岩、安山岩、流紋岩、脈状石英といったごく粗粒の石材を用いる17点の大形の石器であり、その多くは角礫を素材とする礫石器である（Ⅱ類）。

Ⅶ層中出土石器群の剥片生産技術

石材に続いて剥片生産技術のあり方について考えてみよう。ただしⅦ層中出土石器群の剥片生産技術を明らかにするについては、上層と同様の資料的制約がある。

Ⅰ類中には石核と考えられる石器が2点ある。1810は残核に近く、剥離作業の内容が不明確だが、1406は扁平な剥片素材の石核で、その腹面から、薄く幅広の剥片がとられている。Ⅰ類の石器の素材となっている剥片をみると、大きさ、形態は多様であり、背面構成も複雑なものが多い。これらの剥片は、打面転位の頻繁な多面体石核の存在を推測させる。一方、例外的なのは、1803,1804,1806のような薄手で打角の大きい剥片であり、これらは1406を大きくしたような扁平な円盤状？石核の存在を示唆する。Ⅰ類中には明らかに両極打法によっていると考えられる剥片はみとめられなかった。

Ⅱ類には石核の可能性がある石器が3点ある。それらはすべて扁平な礫を素材とし、その一面から大形の剥片を剥離している。石核からとられる剥片は1乃至2点にすぎないので、これはほとんど礫の荒割に近い。礫素材以外の石器の素材はほとんどこれらの石核に示されるような荒割剥片だが、1503,1506は小形の剥片であり、上記以外の剥片生産技術によっている。

石材レベルで分類されたⅠ・Ⅱ類は剥片生産技術においても全く異なったあり方を示す。

Ⅶ層中出土石器群の二次加工技術……石器の分類

石器の二次加工技術を整理すると次のようになる。

@1. 槍先形尖頭器の整形に用いられるような、面的に奥行、広がりのある平坦な剥離

@2. @1と同様に平坦な剥離だが、奥行がなく、広がりが縁辺部に限られるもの

@3. 縁辺部を深く抉る剥離

@4. 2〜3㎜程度の大きさの細かい剥離

@5. 階段状剥離

@6. 彫刻刀形石器にみとめられるような樋状剥離

@7. 折れ面（折断）

@8. 両極剥離

「折れ面」については、剥片剥離時、石器使用時、さらには堆積中等いろいろな過程で石器が折れることが指摘されている。しかしながら、Ⅶ層中石器群の場合は折れ面のある石器が全体の62%と多く、さらにその中には、折れ面より新しい二次加工のある例、一つの石器に複数の折れ面のある例が約80%みとめられる。第100図はその一部を示したものだが折れ面は二次

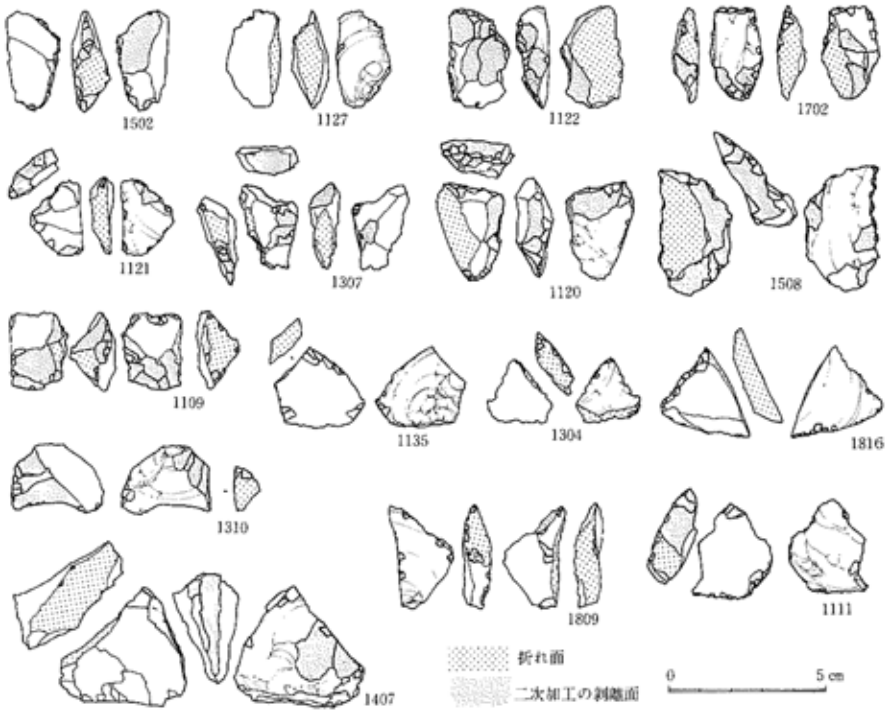
加工の過程において他の剥離と不可分の関係にある。こうした点は折れ面を単なる破損と考えては説明できない。そこで、折れ面は意図的な折断として二次加工技術に含めて考えていく。

石核を除くⅦ層出土の石器は二次加工技術とそれに伴う石器の形態あるいは加工部位の形態の違いから、次のように分類できる。

Ⅰａ類；…1121, 1127, 1120, 1122, 1307, 1702, 1508, 1502

Ⅰ類中に@1〜4 剥離がある程度まとまってみとめられる石器、いいかえれば、素材の形態をかなり変えている石器がだいたい 16 点ある。さらに、その中でも切出状に整形されているという点で共通するのがこの 8 点である。

第 100 図には、Ⅰ類の素材と二次加工技術、特に折断の関係がトーンをかえて表されている。Ⅰａ類の石器は、縦長の形態をえるために、素材の剥片を折断もしくは折断に近い@1 剥離でまず二分する、というのが技術上の特徴である。折断後は石器の周囲から@1〜4 の剥離がなされるが、@2, 4 が殊に多く用いられるようである。剥片を折断して用いるため、石器は幅に比して厚手のものが多くなる。Ⅰａ類の形態は後期旧石器時代のナイフ形石器の一部に類似



第100図　折れ面と二次加工のある石器
Fig.100　Snapped lithic tools.

するが、二次加工はナイフ形石器のブランティングのように斉一なものではないし、素材の用い方、鋭いエッヂと加工部位との位置関係にはほとんど規則性がない。

Ⅰｂ類；1131, 1108, 1129, 1305, 1709, 1602, 1819

Ⅰａ類と同様に@1～4 剥離が素材の両面にわたるが、大きさ、形態にまとまりのない石器である。この 7 点に共通する特徴は素材の側縁の必ず背腹両面に二次加工があることで、加工部位の側面観は鋸歯状を呈する。二次加工のプロセスを観察すると、一面全体を剥離後、反対面の加工がなされる例が多く、意図的に鋸歯状の縁辺がつくりだされているらしい。

Ⅰｃ類；1303, 1407, 1701, 1712, 1411, 1811

@6；彫刻刀形石器の彫刻刀面のような縦長の剥離がみとめられる石器が 6 点ある。ただし、大きさ、形態にはまとまりがないし、@6 剥離のはいる打面は調整があるものとないものがある。@6 剥離が最終加工であるともかぎらない。

Ⅰｄ類；1123, 1107, 1126, 1118, 1312, 1313, 1703？, 1408

@8；両極打法による二次加工のある石器である。両極剥離がほぼ全面にわたる石器は方形もしくは長方形に近い形態になる。両極剥離はおおむね長軸方向だが、これと直交する方向でさらに剥離される例もある。石器は両極剥離前に@2 剥離あるいは@7 折断によってその大きさ、形態が規定されているようである。

Ⅰｅ類；1110, 1136？, 1135, 1111, 1106, 1304, 1309, 1306, 1705？, 1710, 1707？, 1813？, 1816, 1809, 1802

@4 の細かい剥離が連続してあるが、あるいは@7 折断によって、錐状の加工部位を形成している石器がこの 15 点である。二次加工が@4 剥離のみからなるものは少なく、@4 に@7 折断が組み合わさって尖端部をつくるものが多い（第 100 図）。二面の@7 が交叉して尖端部になるのもある。先端部の角度が 90 度近くなるものがあり、また二次加工上はっきりと錐とわかるものは少ないが、尖端部を中心に微細剥離痕がみとめられる石器が多い。

Ⅰｆ類；1132, 1113, 1311, 1504, 1603, 1812, 1803, 1818

@3 剥離もしくは@4 剥離によってノッチを形成する石器である。ノッチの大きさには大小があり、二次加工は、縁辺に@4 が連続する場合と@3 が単独でノッチを形成する場合がある。

Ⅰｇ類；1109, 1134, 1103, 1130, 1115, 1112, 1310, 1315, 1706, 1814, 1807, 1804, 1806

縁辺に@1～4 剥離のいずれかが連続してみとめられる石器で、上記各類に属さないものである。スクレイパー。

Ⅰｈ類；1117, 1133, 1125, 1105, 1128, 1101, 1301, 1302, 1314, 1708, 1711, 1704, 1404, 1410, 1501, 1601, 1604, 1605, 1808, 1119

縁辺にまとまった二次加工のみとめられない石器である。しかしながら、この中には全く二

次加工のない石器はほとんどない。

Ⅰ類の二次加工技術上の特徴は、まずⅠa類を除いて定形的な石器がない。折断を含めて二次加工技術には変異がある。しかしながら、これらは、たとえばⅠｂ類が＜@1～4 剥離による両面加工⇒鋸歯状縁辺＞、Ⅰｅ類が＜@4 剥離と@7 折断の組合わせ⇒尖端部作出＞、Ⅰｆ類が＜@3 もしくは@4 剥離⇒ノッチ＞というように、概して特定の加工部位を形成するために用いられる傾向にある。

Ⅱ類は石核３点をのぞいて、次のように分類される。

Ⅱａ類；1003, 1403, 1402

@4 剥離を縁辺の背腹面に施して鋸歯状の加工部位をつくりだしている石器。チョッピングトウール。礫もしくは荒割礫素材で、整形段階で@8 両極打法が用いられる例がある。石器の大きさ、形態にはまとまりがない。

Ⅱｂ類；1002, 1116, 1405

@8 両極剥離と@1～4 剥離によって一端に尖端部をつくりだしている石器である。ピック?長さ約８㎝でやや厚手である。

Ⅱｃ類；1506, 1507, 1805

縁辺に連続して@2 剥離がみとめられる石器。スクレイパー。

Ⅱｄ類；1001, 1503, 1505, 1607, 1801

まとまった二次加工がみとめられない石器である。

Ⅱ類の二次加工技術上の特徴としては、大形の礫もしくは荒割礫素材の石器の場合、まず、両極打法によってこれらが整形され、次で@1～4 剥離がなされる点があげられる。Ⅱ類では二次加工は決して頻繁ではなく、素材の面を多く残している石器がめだつ。Ⅱ類における両極剥離は、Ⅰ－ｄ類のそれが石器の最終加工に限られるのと対照的であり、同じ両極打法でもⅠ類とⅡ類ではその用い方が異なることがわかる。

中峯Ｃ遺跡Ⅶ層石器群の位置づけ－周辺遺跡との比較

宮城県内ではこれまでに、中峯遺跡をはじめ岩出山町座散乱木遺跡、小野田町鹿原Ｄ遺跡、仙台市山田上ノ台遺跡・北前遺跡・青葉山Ｂ遺跡、多賀城市志引遺跡、古川市馬場壇Ａ遺跡、泉市長岫遺跡など９ケ所の遺跡で旧石器の発掘調査が行われ、そのうち座散乱木遺跡、鹿原Ｄ遺跡、山田上ノ台遺跡・北前遺跡・志引遺跡の調査報告書が刊行されている。こうしたなかで前期石器時代の大まかな変遷過程も把握されつつあるので、これまでの編年案を私見を加えながら紹介し、中峯Ｃ遺跡Ⅶ層の石器群との比較を試みたい。

宮城県内を中心とした前期旧石器の変遷は、「山田上ノ台、馬場壇A遺跡で代表される石器群」⇒「座散乱木および周辺遺跡の12、13層上面出土石器群」（岡村1983）、「A群」⇒「B群」（鎌田1984）という形で説明されている。2つの考えに大きな違いはない。具体的には、

★座散乱木遺跡15層上面・山田上ノ台遺跡下層・馬場壇A遺跡ＢＰ（馬場壇軽石層）以下・志引遺跡9層出土の安山岩等の粗粒の石材を用いたチョッパー・チョッピングトゥール・ピック等の大形で粗雑な石器を特徴とする石器群

↓

★座散乱木遺跡13層上面・北前遺跡下層・志引遺跡7，8層出土の珪質頁岩等を用いた尖頭器・スクレイパー等の小形剥片石器の一群

といいかえることができる。しかしながら、この編年には幾つか疑問点がある。

まず、この二石器群の石器を比較してみると、大きさ・形態・石材・製作技術のすべてにおいて異なっている。したがって、両石器群の間に単純な型式学的変遷をかんがえる訳にはいかないようである。特に、安山岩など粗粒質の石材を用いた大形石器の一群については、石器の機能を考えると、これらがある時期の石器組成のすべてとは理解しにくい点がある。

先にあげた諸遺跡のなかで年代測定がなされているのは、座散乱木・馬場壇A遺跡にすぎないが、さいわい座散乱木遺跡では13層（4.1〜4.2万年前）と15層（4.1〜4.4万年前）の間でこの2石器群が層位的に出土しているので、その画期をおおむね4万数千年におくことができる。しかしながら、ここで座散乱木遺跡の15層と13層の時間差が数千年にすぎないという点は注意を要す。馬場壇A遺跡ＢＰ以下の14〜18層の年代は5〜7万年前であり、やはり安山岩等の大形石器の一群が古いことを示すものとされてきた（石器文化談話会 1983）が、最近の発掘調査ではこのＢＰ以下の層からも頁岩等の剥片石器がまとまって出土している。多賀城市志引遺跡では7，8層と9層の間で2石器群が層位的にとらえられているが、9層では実際には大形粗製石器と小形剥片石器が同一集中地点内に共伴している（多賀城市1984）。

仙台市の山田上ノ台・北前の2遺跡は全く内容の異なる石器を出土しているが、同一段丘面上の礫層のすぐ上の層中にあることを考えれば、座散乱木遺跡の場合と同様、大きな時間差をもたないものかもしれない。また2遺跡の位置する段丘面に関しては、武蔵野もしくは下末吉段丘に比定される可能性が指摘されており（仙台市 1981）、座散乱木遺跡より古くなることも考えられる。同じことは下末吉海進期に形成された海岸段丘上に立地する志引遺跡についてもいえる。

こうして各遺跡の層位を検討してみると、先の編年案とは矛盾する点がある。現時点では約4万年前以降の前期旧石器時代もごく新しい時期に安山岩等の大形粗製石器がなくなるという点は正しいかもしれないが、それ以前については志引遺跡9層のように2石器群がなんらかの形

で共伴する時期が続いていたと考えたほうが理解しやすい。先の編年の基準となった各遺跡はいずれも出土資料が少数であり、ある時期の組成の一部が現れていた可能性がないか、再検討する必要があろう。

さて、中峯Ｃ遺跡Ⅶ層出土の石器は既に紹介したように大きく２類に分けられる。Ⅱ類は安山岩・流紋岩等の粗製石器であり座散乱木遺跡 15 層上面・山田上ノ台遺跡等に代表される石器群と類似する。Ⅰ類は玉髄、碧玉等の小形剥片石器だが、これらについては昨年調査された馬場壇Ａ遺跡 20 層上面出土の石器を除いて類似する資料はない。先にあげた座散乱木遺跡 13 層上面、北前遺跡下層等の小形剥片石器の一群と中峯Ｃ遺跡のⅠ類を比較すると、Ⅰ類は石材に玉髄・碧玉が多く用いられる点でこれらと異なり、大きさも 2，3 ㎝と小さいものがめだつ。またⅠａ類のように他遺跡にみとめられない形態の石器がある。

中峯Ｃ遺跡Ⅲ層石器群が座散乱木遺跡 10～13 層程度、Ⅵ層石器群が馬場壇Ａ遺跡ＢＰ以下の 5～7 万年前の石器群に対比できるであろうことを考えれば、中峯Ｃ遺跡Ⅶ層石器群が前期旧石器のより古い様相を示すものであることはまちがいない。中峯遺跡に唯一類似する石器がみとめられる馬場壇Ａ遺跡 20 層は層位的に県北地域では最も古い石器群の一つになることが確実であり、この点も中峯遺跡Ⅶ層の位置づけと矛盾しない。Ⅶ層石器群がどの程度の古さをもつものであるかは明らかでないが、Ⅰ類は石器製作技術という点では、規格性のある剥片をとる技術がみとめられず、不定形石器が石器群の主体を占めるという大枠において先の珪質岩製小形剥片石器の一群と共通しており、両者の間に大きな隔絶があるとは思われない。

次に中峯Ｃ遺跡Ⅶ層石器群を県外の他遺跡と比較してみる。

大分県早水台遺跡では石英脈岩・石英粗面岩等を用いたチョッパー・チョッピングトゥールピックといった石器が出土しており、中峯Ｃ遺跡Ⅶ層石器群に類似する。同遺跡は下末吉海進期に形成された段丘面上に位置するとされ、10～12 万年前のものと考えられる。

東アジア、特に中国では更新世前期、中期に遡る遺跡が発見されている。これらの遺跡の石器を断片的な図・写真からみた限りでは、まず「砍　器」「三稜大尖状器」と呼ばれる粗製の礫器やピックを特徴とする石器群が、元謀、藍田、匼河、石頭竜、丁村といった、地域・時期の異なる遺跡で出土しており、かなり長時間にわたってみとめられるもののようである。これらの遺跡には石核・剥片も存在するが、剥離技術は未分化であり、石器は概して大形である。また、用いられる石材は石英、石英脈岩等に限られる。中国とりわけ華北地域において、小形の剥片石器が出現するのは周口店第１地点以降である。北京原人を出土したことで著名なこの遺跡は、人骨と石器の確かな共伴関係があり、また数少ない重層遺跡という点で他遺跡にない

重要な意味を持っている。周口店第1地点には、先の礫器に加えて、多様な形態のスクレイパー、尖頭器、錐、彫刻刀形石器といった小形の剥片石器があり、また石器製作技術には両極打法がみとめられることから、中峯C遺跡と類似する点が指摘できる。周口店第1地点の堆積層は46万〜23万年と長期にわたっており、上層にいくほど小形剥片石器の比率が増すようである（呉・林 1983）。旧人段階の人骨の発見された山西省許家窰遺跡には大量の石器があり、そのほとんどは小形の剥片石器である。石材はメノウ、燧石、オパール、水晶、石英脈岩等多様であり、中峯C遺跡の石器と類似する。しかし、同遺跡には中峯C遺跡にない石器や、かなり整った薄手の剥片も存在する。許家窰遺跡は当初、出土した動物化石と石器の特徴から6〜3万年前と考えられていたが、最近の年代測定の結果では約10万年前とされている（陳・原他1982）。

こうした石器の比較から、中峯C遺跡Ⅶ層石器群の年代についてはおおむね10〜40万年前に遡るものと思われるが、実際のところ、華北地域における周口店第1地点から後期旧石器時代にいたる石器の変遷に関しては、資料不足で不明な点が多く、厳密な比較はむづかしい。周口店、許家窰といった既調査の遺跡も資料の一部が公表されているにすぎないので、正式な報告書の一日も早い刊行が待たれる。

中峯遺跡の測定年代について

中峯C遺跡の石器群のうち、類例に乏しいⅥ層上面、Ⅶ層中石器群それから、この地域の鍵層となると考えられるⅥ層（パミス）について、熱ルミネッセンス法、フィッション・トラック法によって年代測定を試みた。その結果は別に報告した通りである。Ⅳ層については結果が得られなかったが、Ⅵ・Ⅶ層に関しては熱ルミネッセンス法によりそれぞれ140,100＋6,200年B．P．368,300＋24,700年B．P．という年代が与えられた。フィッション・トラック法によるⅥ層の年代は210,000年B．P．だが、外来のジルコンの混入の可能性を考えれば、さらに新しくなるものかもしれない。

Ⅶ層の37万年という値は、中峯C遺跡の段丘面を多摩面とする対比とよく一致する。この測定結果に従えば、Ⅶ層中に含まれる石器群は約37万年前にのこされたものということになる。

Ⅵ層とⅦ層の間には約23万年という大きなギャップがあるので、この点について若干検討を加えてみたい。Ⅵ層とⅦ層の年代差の理由としては、まずⅦ層堆積後、長期間火山灰の降下がなかったことが考えられる。しかしながら、Ⅶ層上面では石器は発見されていない。また、Ⅶ層上面は不連続面ではあるがⅢ層上面程の著しい風化はみとめられない。そこでもう一つの可能性として、仮にⅦ層上面が当時地形的に不安定な状態にあったと考えた場合、小規模な火山灰の降下は流失してしまうようなことがあったかもしれない。こうした状況がⅥ層の厚いパミスが堆積する時期まで長期にわたって繰りかえされていたと考えれば、この仮説は年代のギャ

ップを説明しうる。しかしながらその場合にはⅦ層自体も動いている可能性がでてくるし、石器の年代も単純にⅦ層の年代とするわけにはいかない。ただし、Ⅶ層の測定資料中には他の火山灰の混入した証拠はない。また発掘調査時においてもⅦ層が再堆積であるような特徴はみとめられていない。

仮に、Ⅶ層の再堆積の過程で石器がのこされたとしてもⅦ層は不連続面を挟んで明らかにⅦ層の上位にあるので石器は14万年より古いことは確実である。

石器を製作・使用した人間について

石器をのこした人間を明らかにするうえでの直接的な証拠は、遺物と確かな共伴関係にある人骨が得られることである。中峯C遺跡Ⅶ層では石器以外の出土遺物はないので、この問題に関しては石器の比較と年代からの推論にとどまらざるをえない。

ヨーロッパでは旧石器時代は8万年、3.5万年前を境に前、中、後期に3分され、それぞれ人類進化の猿人・原人、旧人、新人段階にあたるものとされている。各期の石器の特徴は比較的明瞭なので、たとえばアシュール文化に特有のハンドアックスの出上する遺跡であれば、ホモ・エレクトウスののこしたものといった、ある程度確かな推測ができる。しかしながら、東アジアの旧石器時代の場合は石器から人間を単純に類推することにはむずかしい面がある。既に紹介したように中峯C遺跡と類似する資料としては周口店第1地点、許家窰遺跡があげられる。2遺跡はそれぞれ原人、旧人段階の化石人骨を出土しており、中峯C遺跡の場合はその双方の可能性がある。

中峯C遺跡Ⅶ層の石器の年代は先に検討したように37万年前もしくはこれより新しくなる。北京原人の年代は46〜23万年前であり、また旧人の確かな出現はリス・ヴュルム間永期、すなわち十数万年前以降である。単に年代という点から考えれば、中峯C遺跡Ⅶ層の石器をのこしたのは北京原人と同様の原人であった可能性も考えられる。

今後の課題

中峯C遺跡Ⅶ層中石器群は宮城県内最古の石器群であり、日本の中でも最も古い石器群の一つである。14〜37万年前という年代測定結果は、既調査の座散乱木遺跡の4万年、馬場壇A遺跡の7万年を大きく遡るものであり、その年代的位置づけに関しては、発表当初より、多くの反響と批判的意見があった。石器を含む火山灰層の問題、測定年代の是非、石器群の内容の理解とその位置づけ、遺跡の性格、それから石器を使用した人間の問題等、多くの課題が考えられたが、本報告書で十分な答えを出すことはできなかった。中峯遺跡では石器以外の情報がほ

とんど得られなかったし、また総数で106点という出土石器は石器研究のうえでも十分な資料とはいえない。その意味で今後は、遺跡から限られた情報を効率的に収集する調査方法を検討しつつ、周辺遺跡の継続的な調査を進める必要がある。

宮城県内の旧石器研究の成果は石器文化談話会の地道だが実証的な調査研究に負うところが大きい。談話会は東北歴史資料館とともに馬場壇A遺跡の調査を継続中であり、県北部のより古い石器群の内容も明らかになりつつある。昨年調査された東北大学構内の青葉山B遺跡でも中峯C遺跡と同程度に古い層中から石器が出土しており、先の課題の解決にむけてこうした調査の進展に期待したい。中峯C遺跡をはじめとする宮城県内の調査の成果は日本の前期旧石器時代にまだまだ未解明の部分が多いことを示唆している。今後の旧石器研究の中で日本における初期の人間居住のあり方を解明していくためには前期旧石器の内容とその変遷を明らかにしていくことこそが重要な課題であることを認識する必要があろう。

（註）1. 剥片素材で背腹面が識別しうる石器を除き、実測図の左手を「背面側」、右手を「腹面側」と呼ぶこととする。

（註）2. この場合、石器の長軸の一端を「刃部」とよんでいる。使用痕分析から推定される機能的部位といった意味ではない。

（註）3. 1㎜以下の剥離面を微細剥離痕とし、実測図中に表現可能な場合はスクリーントーンでこれを表現した。

（註）4. 石核からとられた「剥片」と二次加工時に生じる「砕片（チップ）」を識別するのは困難なので、これらは一括して剥片として扱う。

＜引用・参考文献＞

岡村道雄（1983）：「第3章　総括」『座散乱木遺跡』pp. 100～107
岡村道雄・鎌田俊昭（1980）：「宮城県北部の旧石器時代について」東北歴史資料館研究紀要6　pp. 1～28
小野田町教委.（1980）：『鹿原D遺跡』
鎌田俊昭（1984）：「総括　旧石器時代について」『志引遺跡』pp. 70～74
呉汝康・林聖竜（1983）：「北京原人」サイエンス13－8　pp. 20～29
賈蘭坡・奇（1976）：「阻高許家窰旧石器時代文化遺址」考古学報1976第2期
賈蘭坡（1979）：『中国大陸における太古の住民』
澄田正一・大参義一（1967）：「酒呑ジュリンナ」名古屋大学文学部研究紀要ＸＬⅣ
仙台市教委.（1981）：『山田上ノ台遺跡　発掘調査概報』
石器文化談話会（1981）：『座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
石器文化談話会（1983）：『座散乱木遺跡…考古学と自然科学の提携…』
芹択長介・須藤隆（1968）：「新潟県田択遺跡の発掘調査予報」考古学ジャーナル27
多賀城市（1984：『志引遺跡』
中国科学院古脊椎動物与古人類研究所編（1980）：『中国古人類画集』
陳鉄梅・原思訓也（1982）：『許家窰遺址哺乳動物化石的鈾子系法年代測定』人類学学報1－1　pp. 91～95
中川久夫（1965）：「早水台旧石器包含層の層位学的予察」日本文化研究所研究報告1　pp. 121～141
山田一郎・庄子貞雄（1985）：「5. 中峯遺跡の火山灰」『中峯遺跡発掘調査報告書』

〈第２集中地点の石器属性表〉

No.	分類	石材	重さ	長幅A	厚	素材(剥片)	折面	付着物	焼け	備考
211	Ⅳ	砂質頁岩	(56.5)	(63)×45	(17)	—	A	・	・	
212	Ⅳ	珪質頁岩	47.2	88×33	17	剥片？	・	・	○	
213	礫片							・		
214	—	珪化凝灰岩	(8.1)	(38)×(29)	10	剥片？	B	・	・	
215	Ⅱ	黒色頁岩	(8.1)	(30)×(34)	(8)	剥片？	B	・	・	
216	—	珪質頁岩	(4.7)	(35)×(24)	(8)	剥片？	B	・	・	
217	Ⅱ	黒色泉岩	15.4	48×32	11	—	・	・	・	
218	—	砂質頁岩	(9.9)	(48)×(28)	(8)	剥片？	B	・	・	
219	Ⅰ	珪化凝灰岩	3.4	36×15	7	剥片？	・	・	・	
220	—	珪化凝灰岩	(8.4)	(41)×(29)	10	剥片？	B	・	・	
221	Ⅲ	珪質頁岩	68.5	79×44	20	—	・	・	・	摩滅あり
222	Ⅱ？	珪質頁岩	(3.6)	(21)×(31)	(7)	—	B	・	・	
223	Ⅲ	珪質頁岩	(24.0)	(36)×38	17	剥片？	A	・	・	
224	Ⅱ	珪質頁岩	5.3	31×27	7	剥片？	・	・	・	
225	Ⅰ	珪質頁岩	(3.5)	(26)×22	6	—	A	・	・	
226	Ⅱ？	珪質頁岩	(1.8)	—	(6)	—	B	・	・	
227	Ⅲ	珪質頁岩	34.5	58×38	18	—	・	・	・	
228	Ⅲ	黒色頁岩	34.7	55×32	17	荒割礫？	B	・	・	
229	Ⅲ	珪質頁岩	22.1	53×29	17	—	・	・	・	
230	Ⅰ	珪質頁岩	(6.4)	(38)×21	8	剥片？	A	・	○	
231	Ⅰ	珪質頁岩	(1.9)	(23)×(15)	7	—	A	・	・	
232	Ⅰ	黒色頁岩	4.4	38×18	8	—	・	・	・	
233	Ⅰ	珪質頁岩	(3.4)	(22)×21	7	—	B	・	・	

〈第５集中地点〉

No.	器種分類	石材	重さ (g)	長幅A (mm)	長幅B (mm)	厚 (mm)	素材(剥片) 打面構成	剥離角	バルブ	作面構成 1 2 3 4 Co.	折面	付着物	焼け	備考
501＋502	石刃	珪質頁岩	8.4	—	—	(5)	—	—	—	○・・・・	A	○	・	
503	石刃	珪質頁岩	37.3	—	97×38	12	0-1	100	1B	○・○・・	・	○?	・	
504＋506	石刃	珪質頁岩	13.2	—	91×33	6	—	—	—	○・・・・	A	・	・	
505	石刃	珪質頁岩	10.7	—	—	7	—	—	—	○・・・・	A	・	・	光沢あり
507	石鏃	細粒石英安山岩質凝灰岩	1.0	(16×17)	—	5	—	—	—	・・・	A	・	・	

〈第７集中地点〉

701＋709	石刃	珪質頁岩	18.3	—	89×29	8	0-1	109	1A	○・・・・	A	・	・	
702	尖状石器	珪質頁岩	44.6	60×41	—	16	—	—	—	—	・	・	・	
703	石刃	珪質頁岩	18.3	—	—	6	—	—	—	○○・・・	・	・	・	光沢あり
704	尖状石器	細粒石英安山岩質凝灰岩	36.4	78×39	—	15	—	—	—	—	・	・	・	
705	スクレイパー	珪化凝灰岩	34.5	75×33	—	14	—	—	—	—	・	・	・	

〈第８集中地点〉

520	石刃	珪質頁岩	27.7	—	114×31	8	0-1	108	1B	○・・・・	・	・	・	
801＋808	石刃	珪質頁岩	7.4	—	(52)×37	5	0-1	—	—	○・・○・	A	・	・	
802	剥片	珪質頁岩	4.8	—	—	5	—	—	—	○・○・・	・	・	・	
803	剥片	珪質頁岩	1.8	—	23×23	4	5-0	124	2B	○○○○・	・	・	・	
804	剥片	珪質頁岩	1.7	—	29×17	4	3-1	141	2C	○・・○・	・	・	・	
805	剥片	珪質頁岩	3.8	—	—	5	—	—	—	○・・○・	A	・	○	
806	剥片	珪質頁岩	6.4	—	40×25	5	8-0	117	2C	・・○・・	・	・	・	
807＋519	石刃	珪質頁岩	15.5	—	—	5	—	—	—	○・・○・	A	・	・	

〈第９集中地点〉

514	石刃	黒色頁岩	5.5	—	—	(5)	—	—	—	・○○・・	B	・	・	
515＋906	剥片	細粒石英安山岩質凝灰岩	7.0	—	—	(10)	—	—	—	○・・・・	A	・	・	
513	剥片	黒色頁岩	3.7	—	—	(7)	—	—	—	—	B	・	・	
517	石刃	珪質頁岩	16.5	—	103×27	6	0-1	103	1A	○・○・・	A	・	・	
901	剥片	珪質頁岩	22.2	—	(46×40)	12	Cort.	—	2A	○○・・○	B	・	・	
902	剥片	玉髓	3.6	—	32×17	7	0-1	—	2B	○・○○・	・	・	・	
903	両面加工石器	珪質頁岩	12.3	—	—	11	—	—	—	—	・	○?	○	
904	剥片	珪質頁岩	2.6	—	(23×23)	5	0-1	—	2B	○○○○・	B	・	・	
905	石刃	珪質頁岩	(14.3)	—	—	7	—	—	—	○・○・・	A	・	・	光沢あり
516	剥片	珪化凝灰岩	0.1	—	12×(11)	2	0-1	136	2B	○・・○・	A	・	・	

第６表　中峯Ｃ遺跡出土石器の属性表　(1)
Table6　Attributes list of lithic artifacts

〈集中地点外〉

510	石　刃	珪質頁岩	28.5	—	134×(28)	8	0-1	105	1 A	○・○・・	・	・	・	光沢あり
518	石　刃	珪質頁岩	3.1	—	—	4	—	—	—	○・・・・	A	・	・	光沢あり
706	剥　片	珪質頁岩	9.9	—	—	6	—	—	—	○○・・・	・	・	・	
511+512	石　刃	珪質頁岩	17.5	—	77×33	10	0-1	97	1 A	○・○・・	A	・	・	光沢あり
509	石　刃	珪質頁岩	26.6	—	95×30	9	0-1	110	1 A	○・○・・	・	・	・	光沢あり
508	石　刃	珪化凝灰岩	11.6	—	—	6	—	—	—	○・・・・	A	・	・	

〈表採資料等〉

44	剥　片	珪質頁岩	13.6	—	34×42	11	Cort.	—	1 A	・○○・○	B	・	・	
22	尖頭器	珪質頁岩	0.4	18×12	—	3	剥片？		—	・	A	・	○	
707	スクレイパー	黒色頁岩	10.7	27×41	—	7	剥片	—	—	○・・・・	B	・	・	
708	土器片			—			—							
1	石　斧	珪化凝灰岩	177.8	136×40		31	礫	—	—	—	・	・	・	

〈第１集中地点〉

No	器種分類	石材	重さ (g)	長幅A (mm)	長幅B (mm)	厚 (mm)	素材（剥片） 打面構成	剥離角	バルブ	作面構成 1 2 3 4 Co.	断面	付着物	焼け	備考
31	石　刃	珪質頁岩	10.9	—	49×23	10	0-1	121	1 A	○・・○○	・	・	・	
32	剥　片	珪質頁岩	0.6	—	—	3	—	—	—	○・○○・	A	・	・	
33	剥　片	珪質頁岩	3.9	—	39×21	6	0-1	107	1 B	○・・・・	・	・	・	
34	剥　片	珪質頁岩	0.3	—	16×8	2	0-1	137	2 B	○・・・・	・	・	・	
35	スクレイパー	珪質頁岩	8.9	—	31×35	8	0-1	124	1 B	○○・・・	・	・	・	
36	剥　片	碧　玉	0.6	—	—	2	—	—	—	○・・・○	A	・	・	
37	エンドスクレイパー	頁　岩	7.4	35×24	—	10	—	剥片	—	—	・	・	・	
38	スクレイパー	珪化凝灰岩	15.0	—	(45×46)	9	0-1	105	1 A	○・・・・	B	・	・	
39	石　刃	玉　髄	2.5	—	25×15	6	0-1	74	2 B	○○・・・	B	・	・	
40	剥　片	珪質頁岩	2.3	—	35×17	4	2-4	110	1 B	○・・○・	A	・	・	
41	剥　片	碧　玉	0.5	—	18×9	4	0-1	124	2 B	○・・○・	A	・	・	
42	両極剥離痕ある石器	頁　岩	3.0	24×14	—	8	—	—	—	—	・	・	・	
43	両極剥離痕ある石器	頁　岩	7.0	35×23	—	10	—	—	—	—	・	・	○	
44	剥　片	珪質頁岩	7.7	—	36×24	10	0-1	125	1 B	○○○・・	・	・	・	
45	石　刃	珪化凝灰岩	14.4	—	58×23	10	0-2	104	2 B	○・・・・	・	・	・	
46	剥　片	玉　髄	1.0	—	21×14	3	0-1	158	2 C	○・・○・	B	・	・	
47	剥　片	珪化凝灰岩	3.9	—	—	6	—	—	—	○○・・・	・	・	・	
48	スクレイパー	黒色頁岩	11.6	—	36×35	10	Cort.	110	1 A	○・・・・	B	・	・	
49	石　刃	黒色頁岩	5.9	—	46×21	7	0-1	112	1 A	○・・・・	・	・	・	
50	両極剥離痕ある石器	頁　岩	5.0	27×23	—	8	—	剥片	—	—	・	・	・	
51	石　核	珪質頁岩	3.8	—	—	—	—	—	—	—	・	・	・	
52	石　核	珪質頁岩	12.1	25×22	—	36	—	—	—	—	・	・	・	
53	剥　片	黒色頁岩	0.2	—	(17)×7	3	0-1	156	2 C	・○・○・	A	・	・	
54	剥　片	珪質頁岩	0.7	—	28×11	2	0-1	134	2 B	○○・○・	・	・	・	
55	石　鏃	玉　髄	2.0	24×18	17×22	4	Cort.	101	1 B	○・・・・	B	・	・	
56	スクレイパー	頁　岩	11.5	29×46	—	12	—	剥片	—	—	A	・	○	
57	剥　片	珪質頁岩	1.1	—	—	—	—	—	—	○・○・・	B	・	・	
58	剥　片	珪質頁岩	0.7	—	25×13	2	0-1	120	2 B	○・・・・	・	・	・	
59	石　刃	珪質頁岩	3.7	—	—	6	—	—	—	○○・・・	B	・	・	
60	剥　片	珪質頁岩	1.8	—	33×19	3	1-3	149	2 C	○○○○・	・	・	・	
61	槍先形尖頭器	珪質頁岩	4.5	(31×26)	—	8	—	—	—	・	B	・	・	
62	剥　片	珪質頁岩	0.2	—	—	—	—		—	○○○○・	A	・	・	
63	剥　片	珪質頁岩	0.5	—	—	3	—	—	—	○○・・・	・	・	・	
64	剥　片	珪質頁岩	1.2	—	—	2	—	—	—	・○・・・	A	・	・	
65	剥　片	珪質頁岩	2.8	—	25×23	7				○○・・・	A	・	○	
66	剥　片	珪質頁岩	0.2	—	13×9	3	0-1	133	2 B	・○・○・	B	・	・	
67	剥　片	珪質頁岩	0.3	—	18×12	3	0-3	112	2 C	○・・・・	・	・	・	
68	礫　片							—	—					
69	両極剥離のスポール	珪質頁岩	0.4	—	—	—	—	—	—	—	・	・	・	
70	剥　片	珪質頁岩	2.0	—	14×28	7	0-1	94	1 A	○○・・・	・	・	・	
71	剥　片	珪質頁岩	0.2	—	(12)×14	2	—	—	—	・・○・・	・	・	・	
72	剥　片	珪質頁岩	0.6	—	15×15	4	1-2	132	2 C	○・○・・	A	・	・	

第７表　中峯Ｃ遺跡出土石器の属性表　(2)
Table7　Attributes list of lithic artifacts

73	剥　片	珪質頁岩	0.9	—	11×15	5	3-2	115	2 C	○○・○・	・	・	・	
74	剥　片	珪質頁岩	0.4	—	—		-	—	—	・○○・・	B	・	・	
75	剥　片	珪質頁岩	0.9	—	23×11	3	1-1	116	2 B	○○・○○	・	・	・	
76	剥　片	珪質頁岩	0.7	—	—	3	-	—	—	—	—	・	・	
77	剥　片	珪質頁岩	0.8	—	24×11	3	0-1	121	2 A	○・・・・	—	・	・	
78	剥　片	珪質頁岩	0.1	—	—		-	—	—	○○○・・	A	・	・	
79	剥　片	珪質頁岩	0.8	—	14×19	3	0-1	111	2 B	○○・・・	・	・	・	
80	剥　片	珪質頁岩	0.6	—	(14×19)	3	0-1	104	1 A	○・・・・	A	・	・	
81	剥　片	珪化凝灰岩	0.8	—	16×19	3	0-1	133	2 C	○○・・・	・	・	・	
82	剥　片	珪質頁岩	0.5	—	17×15	3	0-1	119	2 B	○○・・・	・	・	・	
83	剥　片	珪質頁岩	1.1	—	—	4	-	—	—	○・○・・	・	・	・	
84	石　刃	珪質頁岩	4.5	—	44×22	6	0-1	121	1 B	○・・・○	・	・	・	
85	剥　片	珪質頁岩	0.7	—	—	3	-	—	—	・・○○・	・	・	・	
86	剥　片	珪質頁岩	0.2	—	—	2	-	—	—	○○・・・	・	・	○	
87	剥　片	珪質頁岩	1.1	—	—	3	-	—	—	○○○○・	・	・	○	
88	剥　片	珪質頁岩	1.3	—	—		-	—	—	—	B	○	○	
89	剥　片	珪質頁岩	1.1	—	31×12	4	0-1	140	2 C	○○・○・	・	・	・	
90	剥　片	黒色頁岩	0.6	—	25×10	4	0-1	119	2 B	○・○・・	・	・・	○	
91	剥　片	珪質頁岩	1.8	—	—	6	-	—	—	○・・・・	・	・	・	
92	剥　片	珪質頁岩	1.4	—	—		-	—	—	・・○・・	・	・	・	
93	剥　片	珪質頁岩	0.2	—	—		-	—	—	○・・○・	・	・	・	
94	剥　片	珪質頁岩	1.5	—	—	6	-	—	—	○・○○・	A	・	・	
95	剥　片	珪質頁岩	1.1	—	13×22	3	0-1	95	1 A	○・・・・	B	・	・	
96	剥　片	珪質頁岩	1.2	—	(21×16)	3	0-1	130	2 C	○○○・・	・	・	・	
97	剥　片	珪質頁岩	0.4	—	—	2	-	—	—	○・○○・	B	・	・	
98	剥　片	珪質頁岩	1.7	—	32×19	3	2-2	—	2 B	○○・・・	A	・	・	
99	剥　片	珪質頁岩	1.3	—	24×20	4	0-4	109	1 A	○○・・・	・	・	・	
100	石　核	珪質頁岩	1.4	—	—		-	—	—	—	—	・	・	
101	剥　片	珪化凝灰岩	5.4	—	—	7	-	—	—	○・・・・	・	・	・	
102	剥　片	珪質頁岩	2.6	—	22×23	5	0-1	98	1 A	○○○○・	B	・	・	
103	剥　片	珪質頁岩	2.3	—	31×15	7	0-1	103	2 B	○・○○・	B	・	・	
104	剥　片	珪質頁岩	0.8	—	16×16	3	0-4	140	2 C	○・・○・	・	・	・	
105	剥　片	珪質頁岩	5.3	—	36×23	8	2-3	114	1 B	○・○○・	A	・	・	
106	スクレイパー	珪質頁岩	1.3	—	—	5	-	—	—	—	・	・	・	
107	剥　片	珪質頁岩	1.7	—	21×21	4	2-3	135	2 B	○○○・・	・	・	・	
108	剥　片	珪質頁岩	1.1	—	—	3	-	—	—	○○○・・	・	・	・	
109	石　刃	珪質頁岩	1.8	—	—	(6)	-	—	—	○・○・・	A	・	○	
110	剥　片	珪質頁岩	1.6	—	26×17	3	4-2	146	2 B	○○○○・	・	○	・	
111	剥　片	珪質頁岩	1.3	—	17×16	3	-	—	2 B	○○・・・	・	○	・	
112	剥　片	珪化凝灰岩	1.2	—	—	4	-	—	—	○・・・・	A	・	・	
113	剥　片	珪化凝灰岩	0.6	—	20×14	2	2-1	142	2 B	○・・○・	A	・	・	
114	剥　片	珪質頁岩	1.5	—	27×19	5	2-1	137	2 B	○・○○・	・	・	・	
115	剥　片	珪質頁岩	0.2	—	—	2	-	—	—	○・・・・	・	・	・	
116	スクレイパー	珪質頁岩	2.5	—	32×15	5	0-1	106	1 B	○・○・・	・	・	・	
117	剥　片	黒色頁岩	1.2	—	22×16	5	1-1	109	1 C	○○・○・	A	・	・	
118	剥　片	珪質頁岩	0.2	—	19×9	2	0-1	139	2 C	○○・・・	・	・	・	
119	スクレイパー	珪質頁岩	2.2	—	—	7	-	—	—	○・・・・	B	・	・	
120	剥　片	珪質頁岩	4.7	—	29×20	9	0-2	120	2 A	○・○・○	・	・	・	
121	剥　片	珪化凝灰岩	0.9	—	23×15	3	0-4	133	2 C	○○・・・	・	・	・	
122	剥　片	珪質頁岩	0.4	—	16×12	2	-	128	2 A	—	・	・	・	
123	剥　片	珪化凝灰岩	7.2	—	40×32	7	4-2	139	2 B	○・○○○	A	・	・	
124	スクレイパー	珪質頁岩	5.0	—	24×28	10	0-1	123	2 B	・○・・○	B	・	○	
125	剥　片	珪質頁岩	4.1	—	—	8	-	—	—	○・・・・	B	・	・	
126	剥　片	珪質頁岩	0.7	—	—	2	-	—	—	○○・○・	・	・	○	
127	剥　片	黒色頁岩	0.2	—	—	—	-	—	—	○○・・・	A	・	・	
128	剥　片	珪質頁岩	1.3	—	(23)×15	3	Cort.	131	—	○・・○・	A	・	・	
129	剥　片	珪質頁岩	0.4	—	—	—	-	—	—	○・・○・	A	○	・	
130	剥　片	珪化凝灰岩	0.3	—	15×11	3	0-2	115	2 C	○・・・・	・	・	・	
131	剥　片	珪質頁岩	0.7	—	18×17	3	0-1	125	2 B	○○・○・	・	・	・	
132	両極剥離痕ある石器	黒曜岩	9.7	31×22	—	11	-	—	—	— ○	・	・	・	
133	剥　片	珪質頁岩	1.0	—	19×19	3	0-1	121	2 A	・・・○・	A	・	・	

第８表　中峯Ｃ遺跡出土石器の属性表　(3)
Table 8　Attributes list of lithic artifacts

134	剥　片	珪化凝灰岩	0.3	—	(20)×9	2	0-1	139	2 C	○○・・・	A	・	・	
135	剥　片	珪化凝灰岩	1.1	—	21×18	3	3-3	144	2 C	○○・・・	・	・	・	
136	剥　片	珪化凝灰岩	2.8	—	35×19	4	1-1	95	1 B	・○・○・	・	・	・	
137	剥　片	珪質頁岩	0.1	—	17×8	2	0-2	111	2 B	○・・○・	・	・	・	
138	剥　片	珪質頁岩	0.5	—	—	4	・	—	—	○・○・・	B	・	・	

〈第3集中地点〉

No.	器種分類	石　材	重さ (g)	長幅B (mm)	長幅C (mm)	厚 (mm)	素材(剥片) 打面構成	剥離角	バルブ	背面構成 1 2 3 4 Co.	折面	付着物	焼け	備　考
301	石　錐	碧　玉	2.5	21×15(A)	23×15	8	—	—	—	—	B	・	・	
302	両面加工石器?	碧　玉	10.1	—	36×32	9	—	—	—	—	・	・	・	
303	剥　片	珪質頁岩	5.0	—	38×18	8	—	—	1 A	・○○・・	A	・	○	
304	剥　片	珪質頁岩	7.4	29×27	38×25	10	0-2	114	1 B	・・○・・	・	・	・	

〈第4集中地点〉

401	剥　片	細粒石英安山岩質凝灰岩	6.9	29×21	46×21	8	0-1	127	1 C	○・・・○	・	・	・	摩滅
402	スクレイパー	珪質頁岩	5.5	—	42×16	8	—	—	—	○・・○・	・	・	・	
403	剥　片	細粒石英安山岩質凝灰岩	2.4	25×17	26×16	6	0-1	—	2 C	○・・・・	・	・	・	摩滅著しい
404	剥　片	珪質頁岩	6.0	—	44×27	7	—	—	—	○・・・○	B	・	・	
405	剥　片	細粒石英安山岩質凝灰岩	9.2	42×45	65×30	6	Cort.	99	1 A	○・・○・	・	・	・	
406	剥　片	珪質頁岩	2.2	—	24×17	5	—	—	—	○○・・・	B	・	・	
407	剥　片	細粒石英安山岩質凝灰岩	3.9	29×29	34×25	6	0-1	111	1 A	○・・・○	A	・	・	摩滅
408	両極剥離痕ある石器	珪質頁岩	5.3	—	31×15	11	—	—	—	—	・	・	・	摩滅
409	両極剥離痕ある石器	石英安山岩	4.1		33×18	8	—	—	—	—	A	・	・	摩滅著しい
410	両面加工石器	珪質頁岩	13.3	—	36×28	12	—	—	—	・・・・・	A	・	○	
411	剥　片	石英安山岩	1.5	—	27×13	6	—	—	—	○・・・・	A	・	・	
412	剥　片	珪化凝灰岩	2.0	—	30×19	6	—	—	—	○・・・・	A	・	・	
413	剥　片	珪質頁岩	12.5	35×37	37×35	13	Cort.	114	1 A	・・・・○	・	・	・	
414	剥　片	細粒石英安山岩質凝灰岩	19.0	56×41	57×41	10	3-1	109	1 A	○○・・・	A	・	・	
415	スクレイパー	石英安山岩	16.0	46×33	53×33	9	5-1	112	1 A	○・・○・	A	・	・	

〈第6集中地点〉

No.	器種分類	石　材	重さ (g)	長幅B (mm)	長幅C (mm)	厚 (mm)	素材(剥片) 打面構成	剥離角	バルブ	背面構成 1 2 3 4 Co.	折面	付着物	焼け	備　考
601	剥　片	珪化凝灰岩	7.0	28×24	33×26	10	3-2	96	2 B	○○・・・	A	・	・	
602	両極剥離痕ある石器	石英安山岩	33.9	—	63×40	17	—	—	—	—	B	・	・	
603	?	珪質頁岩	7.4	—	35×19	9	—	—	—	—	A	・	○	
604	剥　片	石英安山岩	4.3	27×25	31×27	8	Cort.	102	1 B	○・・○○	・	・	・	
605	石　核	石英安山岩	250	—	83×74	63	—	—	—	・	・	・	・	
606	剥　片	流紋岩	25.7	38×38	51×37	14	0-1	103	1 A	・○・・○	・	・	・	
607	石　核?	珪化凝灰岩	23.7	38×42	51×37	23	—	—	—	—	・	・	・	
608	石　核?	石英安山岩	45.0	—	70×41	20	—	—	—	—	・	・	・	
609	両極剥離痕ある石器	石英安山岩質凝灰岩	60.7	—	99×35	25	—	—	—	—	・	・	・	
610	剥　片	玉　髄	11.4	40×51	53×38	8	0-1	102	1 A	○・・・・	・	・	・	
611	石　核?	珪質頁岩	2.4	—	21×21	6	—	—	—	—	A	・	・	

〈第10集中地点〉

No.	分類	石　材	重さ (g)	長幅B (mm)	長幅C (mm)	厚 (mm)	素材(剥片) 打面構成	剥離角	バルブ	背面構成 1 2 3 4 Co.	折面	付着物	焼け	備　考
1001	Ⅱd	石英安山岩	22.2	—	57×30	12	—	—	—	・・・・○	・	・	・	
1002	Ⅱb	石英安山岩質凝灰岩	143.0	—	76×68	32	(0-1)	(110)	2 B	・・・・○	B	・	・	
1003	Ⅲa	石英安山岩	96.3	—	72×46	25	礫素材			—	B	・	・	

〈第11集中地点〉

1101	Ⅰh	細粒石英安山岩質凝灰岩	11.1	(30×32)	42×31	11	0-1	105	2 A	○○・○○	B	・	・	
1102	礫													
1103	Ⅰg	珪化凝灰岩	15.6	42×33	49×33	13	0-1	110	1 B	○ —	B	・	・	
1104	原石	玉髄	63.4							—				
1105	Ⅰh	流紋岩	6.7	(23×33)	36×22	10	0-1	81	1 A	○・・・○	B	・	・	
1106	Ⅰe	石英安山岩	7.7	—	40×28	9	—	—	—	・・・・○	B	・	・	

第9表　中峯C遺跡出土石器の属性表 (4)
Table 9　Attributes list of lithic artifacts

1107	Ⅰd?	玉髄	8.6	(30×28)	32×27	10	(0-1)	(125)	2 C	—	·	·	·	
1108	Ⅰb	珪化凝灰岩	28.3	—	61×42	18	—	—	—	—	B	·	·	
1109	Ⅰg	玉髄	5.7	—	26×21	13	—	—	—	—	B	·	·	
1110	Ⅰe	玉髄	9.6	—	33×25	12	—	—	—	—	B	·	·	
1111	Ⅰe	玉髄	6.7	—	31×24	11	—	—	—	○○○・・	B	·	·	
1112	Ⅰg	碧玉	29.5	60×30	65×34	15	1-2	121	1 A	○○・・・	B	·	·	
1113	Ⅰf	珪化凝灰岩	24.1	—	69×33	14	Cort.	—	—	○・○・○	B	·	○?	
1114	原石	石英安山岩	29.1											
1115	Ⅰg	碧玉	8.5	—	35×22	10	—	—	—	○・・・○	B	·	·	
1116	Ⅱb	石英安山岩	113.6	—	77×68	29	—	—	—	—	A	·	·	
1117	Ⅰh	玉髄	25.7	—	43×39	13	—	—	—	○・・○	B	·	·	
1118	Ⅰd	玉髄	15.2	—	36×22	18	—	—	—	— ○	·	·	·	
1119	Ⅰh	碧玉	7.4	—	34×22	9	—	—	—	○○・・○	B	·	·	
1120	Ⅰa	玉髄	6.2	(21×28)	32×20	10	0-1	(112)	1 A	○○・・・	B	·	·	
1121	Ⅰa	玉髄	2.6	—	23×16	6	—	—	—	○○○○	B	·	·	
1122	Ⅰa	碧玉	5.5	(23×30)	32×18	10	—	—	—	—	B	·	·	
1123	Ⅰd	碧玉	4.4	—	23×21	9	—	—	—	— ○	B	·	·	
1124	原石	碧玉	40.2											
1125	Ⅰh	玉髄	2.3	—	33×14	4	—	—	—	—	A	·	○	
1126	Ⅰd?	玉髄	6.3	—	35×22	8	—	—	—	— —	·	·	·	
1127	Ⅰa	碧玉	5.8	(23×23)	30×17	11	Cort.	(114)	2 B		A	·	○	
1128	Ⅰh	碧玉	1.7	—	21×18	5	—	—	—	○○・○○	B	·	·	
1129	Ⅰb	玉髄	33.4	60×33	65×30	19	Cort.	115	1 B	○○・・○	B	·	·	
1130	Ⅰg	玉髄	5.4	—	32×27	8	—	—	—	・○・・○	B	·	·	
1131	Ⅰb	玉髄	5.0	—	34×18	10	—	—	—	—	·	○?	·	
1132	Ⅰf	碧玉	13.8	34×29	38×35	14	0-2+Co.	116	1 A	○・・○○		·	·	
1133	Ⅰh	細粒石英安山岩質凝灰岩	1.0	—	17×13	5	—	—	—	○・・・○	A	·	○?	
1134	Ⅰg	玉髄	6.3	—	36×26	8	—	—	—	○・・・・	B	·	·	
1135	Ⅰe	玉髄	5.9	(25×28)	28×24	10	0-1	99	2 B	○○・○・	B	·	·	
1136	Ⅰe?	碧玉	4.4	—	35×20	7	—	—	—	○・・○○	B	·	·	

〈第13集中地点〉

1301	Ⅰh	細粒石英安山岩質凝灰岩	3.1	30×21	32×23	6	4-2	124	1 B	○○・○	A	·	·	
1302	Ⅰh	碧玉	7.2	36×23	36×22	9	Cort.	—	2 B	・・・○・	B	·	·	
1303	Ⅰc	玉髄	1.8	19×24	24×18	5	3-2	104	1 A	○・・・・	·	·	·	
1304	Ⅰe	玉髄(一部珪化凝灰岩)	2.1	—	22×19	7	—	—	—	・・・○○	B	·	·	
1305	Ⅰb	玉髄	2.0	17×20	22×17	6	0-1	111	1 A	—	·	·	·	
1306	Ⅰe	玉髄	2.5	17×18	21×17	8	3-2	115	1 A	○・○・・	B	·	·	
1307	Ⅰa	碧玉	3.5	—	29×16	9	—	—	—	—	B	·	·	
1308	Ⅰe?	玉髄	1.7	—	17×15	8	—	—	—	—	B	·	·	
1309	Ⅰe	碧玉	2.4	17×22	22×15	7	—	117	1 A	○○・・○	·	·	·	
1310	Ⅰg	碧玉	6.7	(22×29)	30×20	13	0-1	138	2 B	・○・○・	B	·	·	
1311	Ⅰf	碧玉	7.9	(30×32)	37×33	7	3-2	105	1 A	○○・・・	B	·	·	
1312	Ⅰd	玉髄	2.9	—	24×13	7	—	—		—	·	·	·	
1313	Ⅰd	玉髄	15.3	—	36×24	15	—	—	—	—	·	·	·	
1314	Ⅰh	石英安山岩	13.8	(37×31)	39×32	11	2-1	117	—	○・・・・	B	·	·	
1315	Ⅰg	碧玉	4.2	26×32	36×26	7	Cort.	93	2 A	○・・・・	·	·	·	

〈第14集中地点〉

1401	石核	石英安山岩	362	80×108(A)	102×86	41	礫素材			—	·	·	·	
1402	Ⅱa	流紋岩	127.5	—	77×45	77	礫素材			—	·	·	·	
1403	Ⅱa	塊状石英	62.1	—	57×49	24	—	—	—	・・・・○	·	·	·	
1404	Ⅰh	珪化凝灰岩(碧玉化)	12.7	—	42×33	8	—	—	—	○・・・○	B	·	·	
1405	Ⅱb	石英安山岩	185.8	83×63(A)	84×61	39	礫素材			—	—	·	·	
1406	石核	細粒石英安山岩質凝灰岩	18.9	—	53×48	12	—	—	—	○・○・・	—	·	·	
1407	Ⅰc	碧玉	22.8	(38×39)	42×33	17	0-9	(112)	1 A	—	B	·	·	
1408	Ⅰd	玉髄	22.1	—	23×17	7	—	—	—	—	B	·	·	
1409	原石	珪化凝灰岩(一部玉髄化)	51.6	—					—					
1410	Ⅰh	細粒石英安山岩質凝灰岩	16.2	41×36	45×40	9	Cort.	103	1 B	○○○・・	A	·	·	
1411	Ⅰe?	珪化凝灰岩(碧玉化)	17.2	—	51×27	13	0-1	154	1 B	・○・・○	—	·	·	
1412	礫													
1413	Ⅰe?	碧玉	10.9	37×27	42×22	12	0-1	119	1 A	○・・・○	B	·	·	
1414	Ⅰa	珪化凝灰岩	4.2	—	29×15	8	—	—	—	—	B	·	·	

第10表　中峯C遺跡出土石器の属性表　(5)

Table.10 Attributes list of lithic artifacts

1703	Ⅰd?	碧玉	4.7	—	26×22	10	—	—	—	—	·	·	○	
1704	Ⅰh	珪化凝灰岩	4.5	(33×20)	34×21	6	0-1	(132)	1 B	○ · · ○ ·	A	·	·	
1705	Ⅰe?	珪化凝灰岩	5.3	36×20	37×21	7	1-2	120	1 B	○○ · ○○	·	·	·	
1706	Ⅰg	石英安山岩質角礫凝灰岩	10.3	37×36	41×31	12	—	—	—	· · · ○ ·	·	·	·	
1707	Ⅰe?	玉髓	4.8	22×22	27×21	14	2-1	111	1 A	○ · ○ · ·	B	·	·	
1708	Ⅰh	珪化凝灰岩(一部玉髓化)	2.9	—	23×21	8	—	—	—	○ · · · ○	B	·	·	
1709	Ⅰb	玉髓(一部珪化凝灰岩)	7.0	—	38×20	10	—	—	—	—	·	·	·	
1710	Ⅰe	碧玉	3.3	—	32×18	7	—	—	—	○ · ○ · ·	A	·	·	
1711	Ⅰh	碧玉	11.1	—	40×24	11	Cort.	—	—	· · · · ○	A	·	·	
1712	Ⅰc?	玉髓	8.3	—	32×21	12	—	—	—	○ · · · ○	B	·	·	

〈第15集中地点〉

1501	Ⅰh	玉髓	10.8	(35×27)	37×27	13	0-3	102	1 B	○ · ○ · ·	B	○?	·	
1502	Ⅰa	玉髓	5.1	—	32×17	11	—	—	—	— ○	B	·	·	
1503	Ⅱd	石英安山岩	3.8	(29×17	26×17	8	—	—	—	· ○○○ ·	A	·	·	
1504	Ⅰf	碧玉	10.9	38×35	43×40	9	Cort.	98	1 A	○ · · · ○	·	·	·	
1505	Ⅱd	石英安山岩	12.1	—	39×26	13	被覆材			—		·	·	
1506	Ⅱc	石英安山岩	18.9	30×31	41×32	18	0-1	88	2 B	○○ · · ○		·	·	
1507	Ⅱc	流紋岩	147.5	—	75×60	41	被覆材							
1508	Ⅰa	碧玉	9.4	—	40×22	13	—	—	—	— ○		·	·	

〈第16集中地点〉

1601	Ⅰh	珪化凝灰岩	17.6	—	47×38	12	—	—	—	○○○○ ·	A	·	·	
1602	Ⅰb	玉髓	5.1	—	29×19	8	—	—	—	○ —	B	·	·	
1603	Ⅰf	珪化凝灰岩	18.2	(37×39)	44×38	12	2-1	(103)	1 A	○ · ○ · ·	B	·	·	
1604	Ⅰh	石英安山岩(一部碧玉化)	36.4	43×52	63×44	15	2-1+Co.	97	2 C	○○ · ○ ·	·	·	·	
1605	Ⅰh	珪化凝灰岩	12.1	33×42	47×32	15	1-2	(130)	2 C	· · · · ○		·	·	
1606	石棒	石英安山岩	64.8	—	55×44	21	被覆材							
1607	Ⅱd	流紋岩	140.5	—	96×66	24	Cort.	101	2 B	· · · · ○		·	·	
1813	Ⅰe	碧玉	5.7	—	36×17	11	—	—	—	○○ · ○ ·	B	·	·	

〈第18集中地点〉

1801	Ⅱd?	石英安山岩	383.5	—	94×84	47	被覆材			—		·	·	
1802	Ⅰe	珪化凝灰岩(玉髓化)	6.4	—	38×29	6	—	—	—	○○ · · ○	B	·	·	
1803	Ⅰf	碧玉	12.5	(43×37)	47×33	10	0-1	120	1 A	○ · · · ·	A	○	·	
1804	Ⅰg	碧玉	19.8	44×43	48×39	11	Cort.	110	1 A	○ · · ○○		·	·	
1805	Ⅱc	縞状石英	72.3	49×54	58×47	25	0-2	96	1 A	· · · · ○		·	·	
1806	Ⅰg	碧玉	22.8	54×37	54×40	12	0-1	112	1 B	○ · · ○○		·	·	
1807	Ⅰg	珪化凝灰岩	6.3	—	33×23	9	Cort.	—	—	· · · ○○	B	·	·	
1808	Ⅰh	玉髓	3.2	21×20	27×19	7	0-1+Co.	96	1 A	○ · ○ · ○		·	·	
1809	Ⅰe	玉髓	4.5	(33×16)	33×17	18	—	114	1 B	○ · ○ · ·	B	·	·	
1810	石棒?	玉髓	8.5	—	41×20	11	—	—	—	— ○		·	·	
1811	Ⅰc?	碧玉	19.4	(48×32)	54×38	12	0-1	113?	1 A	○ · · ○ ·	B	·	·	
1812	Ⅰf	玉髓	2.9	25×21	27×18	7	1-2	103	1 B	○ · · · ·		·	·	
1814	Ⅰg	碧玉	5.4	—	30×22	9	0-1	103	—	○ · · · ·	B	·	·	
1815	Ⅰh	玉髓	4.4	26×22	27×24	8	0-1	122	2 C	○○○ · ○	B	·	·	
1816	Ⅰe	碧玉	4.4	—	31×23	7	—	—	—	○○ · · ○	A	·	·	
1817	石棒	安山岩	75.1	—	66×63	17	被覆材?							
1818	Ⅰf	碧玉	12.7	—	38×26	14	—	—	—	○○ · ○ ·	B	·	·	
1819	Ⅰb	碧玉	4.2	—	30×25	8	—	—	—	—	B	·	·	

〈地点不明〉

1901	Ⅰh	玉髓	4.3	19×35	36×17	7	Cort.	108	2 B	○ · ○ · ·	B	·	·	
1902	Ⅰe	玉髓	4.5	—	25×20	10	—	—	—	—	A	·	·	

第11表　中峯C遺跡出土石器の属性表　(6)
Table.11 Attributes list of lithic artifacts

(注)1. 珪質頁岩と珪化凝灰岩は明らかに区別できることもあるが、一般には区別が困難である。特に微細な石器では難しい。玉髄と碧玉とは、いずれもSiO_2にとむもので珪質頁岩や珪化凝灰岩の一部がさらに著しく珪化したものと考えられる。碧玉はそのなかで、赤鉄鉱や針鉄鉱の微細結晶が含まれるために、肉眼で赤色ないし黒色を呈するものとした。黒色頁岩は珪質頁岩よりも、肉眼で珪化の程度が弱く、黒色を呈するものを示す。

玉髄、碧玉の類が多い。また、石英安山岩・流紋岩もめだつ。これらは一迫川および二迫川流域によくみられるものである。特に№.1407 のような、いわゆる黒玉と称する碧玉は栗駒町文字付近に発達する中新世の文字層にみられるものに酷似する。いずれも中峯遺跡からやや離れたところに分布する岩石である。（蟹沢聡史）

(注)2. 長幅Ａ；長軸を設定しうる定形石器について「みかけの最大長、最大幅」を計測した（下図）。（数字）は一部破損している資料である。

(注)3. 長幅Ｂ；剥片素材の石器について、剥片の打面を基準に「みかけの最大長」と「実質最大幅」を計測した（下図参照）

(注)4. 長幅Ｃ；石器の輪郭線上の任意の２点を結ぶ線分のうち、最大のものを基準線として、「実質の最大長、最大幅」を計測した。（下図参照）。

(注)5. 厚さ；「みかけの最大厚」を計測した。

(注)6. 打面構成；数字は打面を構成する剥離面のうち、それぞれ「打点ののこるもの」・「打点ののこらないもの」の数である。「Cort.」は自然である。

(注)7. バルブ；バルブは、打点の有無と断面形状から下図のように分類した。

(注)8. 背面構成；背面を構成する剥離面の加撃方向を４分し、それぞれの有無を示した。「Ｃｏ」は自然面である。（下図参照）。

(注)9. 折面；折れ面のある石器のうち、折れ面上に打点があるか、折れ面をきる二次加工もしくは微細剥離痕のあるものを「Ｂ」とし、それ以外の折れ面は「Ａ」として示した。

計測方法等

第12表　中峯Ｃ遺跡出土石器の属性表（注記）
Table.12 Attributes list of lithic artifacts

11. ま と め

1. 中峯遺跡は旧石器時代から平安時代にいたる重層遺跡である。
2. 中峯C遺跡の火山灰層中からは5枚の旧石器時代の生活面が検出された。Ⅱｂ層石器群は旧石器時代終末に位置づけられるもので同時期の宮城県には珍しい大形の石刃を含む集中地点がある。Ⅱｃ層石器群は後期旧石器時代に属する。Ⅲ層、Ⅳ層そしてⅦ層石器群は前期旧石器時代に含まれる。とりわけⅦ層中石器群は、県内で今までに確認されている前期旧石器に比して古い様相を示す石器群であり、同層の測定年代は約37万年前である。
3. 中峯B遺跡は縄文時代大木3、4式期を主体とする遺跡であり、該期の五角形を呈する竪穴住居跡1軒を検出している。
4. 中峯A、C遺跡はまた9世紀の、平安時代の集落遺跡でもある。中峯A遺跡では掘立柱建物跡5棟、竪穴住居跡17軒が発見されており、これらは2時期に分けられる。中峯C遺跡では掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡3軒、焼土遺構3基が出土している。集落はいずれも丘陵上の頂部に掘立柱建物があり、その南斜面に住居跡が分布するという構成をとる。

Summary : The Excavation of the Nakamine Site

The Nakamine site is located at Taiwa-cho, about 20km north of Sendai City, Miyagi Pref. in Tohoku District of Japan (Fig. 3). In 1983, construction of a filtration plant was planned on the site, so the Board of Education carried out the salvage excavation.

The Nakamine site is c cm posed of A, B, C, which was originally considerd to belong to Heion Period (1000A.D.). But in the course of excavation, Palaeolithic tools were discovered in Nakamine C site (Fig. 40).

The Nakamine C site is on the higher terrace 90m above sea level at the eastern end of the spur of dissected hills (Fig. 2～4). Fig. 5 is a schematic stratigraphy of the Nakamine C site. Five Palaeolithic living floors are found in 7 loam layers of more than 5m thick, which originated fr cm superimposed volcanic ash. In loam layers, several reddishbrown soils weathered by warm environment (stratum Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ,) and pumise (stratum Ⅵ) are identified as key layers. stratumⅢ can be estimated to be about 40,000 B.P. in c cm parison with the Zazaragi site. Other absolute dates are availableas follows;

210,000 straumⅥ (fission track)
140,100 ± 6,200 straumⅥ (thermo-luminescence)
368,300 ±24,700 straumⅦ (thermo-luminescence)

These dates do not contradict the fact that the site is on the highest terrace.

On stratumⅡb, 66 artifacts were found, which are divided into tow clusters. One of them includes small points, an axe and bifacial tools in a concentration (Fig. 55, 57, 58). The other is c cm posed of large blades, scrapers and chips (Fig. 60～64). Two chusters separated in distribution (Fig. 54) both belong to the Metholithic Period, about 10,000 B.P.

On stratumⅡc, 107 artifacts were excavated in a elliptical concentration 3m in longer diameter (Fig. 70). There are a point, a drill, an end-srapers, scrapers, tools retouched by bipolar technique, blandes, cores, flakes and chips (Fig. 67～69) made of siliceous shale, siliceous tuff, obsidian and chalcedony. This assemblage belongs to the Upper Palaeolithic.

On stratumⅢ, 19 artifacts were found, consisting of bifacial tools, scrapers, a drill, tools retouched by bipolar technique and flakes (Fig. 74～76). This assemblage is similar to that of the Zazaragi site, which belongs to the Middle palaeolithic, about 40,000 B.P.

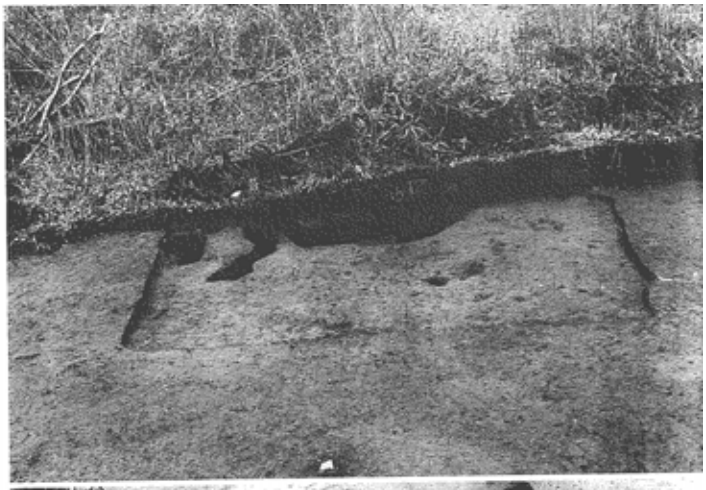
On stratumⅣ, only 11 artifacts were found in a concentration. They are cores, flakes and a tool fabricated by bipolar technique, made of rhyorite, dacite, tuff and siliceous shale(Fig. 77～79)

In stratumⅦ, 106 artifacts were excavated. They were c cm posed of two groups distributing on the gentle slopes on both sides of a hollow. Each group includes several concentrations made up of 3 to 33 artifacts respectively(Fig. 89) Lithic material is various:chalcedony, jasper, siliceous tuff, dacite, rhyorite, vein guartz, andesite and so on. Artifacts are divided into a group of heavy tools using coarse material and a group of light flake tools using siliceous fine material. Heavy tools made fr cm tabular pebbles include chopping tools, picks and crude scrapers(Fig. 81, 89, 90, 91, 93, 96). Bipolar technique was frequertly applied heavy core tools' fabrication. Light flake tools include bifacial tools, drills, gravers?, tools retonced by bipolar technigne, notches, denticulates, scrapers, cores and flakes(Fig. 82～84, 87, 88, 92, 94, 95). They were flaked fr cm polyhedral and/or discoidal core, but not by Levalloian technique.

In c cm parison with so far discovered Middle Palaeolithic assemblages in Japan, the Nakamine site stratumⅦ has an affinity to them, but is different fr cm them in point of the existence of small tools and the variety of materials. In China Loc. 1 of Zhoukoudian upper layers and the Xujiyao site has numerous small tools. Between the Nakamine and Loc. 1 of Zhoukoudian site. there are morpho-technological similarties; various scrapers, points, drills, gravers, core tools, and bipolar technique, which suggests they belong to the same period. The dating of the Nakamine site stratumⅦ confirms this c cm parison. the Nakamine site is a deffusion of Lower Palaeolithic site in Japan, which is important to pursue the diffusion of Lower Palaeolithic culture in East Asia and the origin of human occupation in Japan.

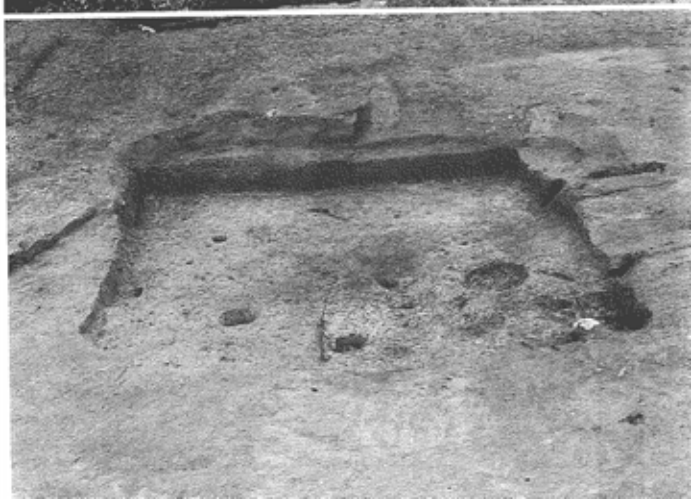
図　　版

第１号住居跡

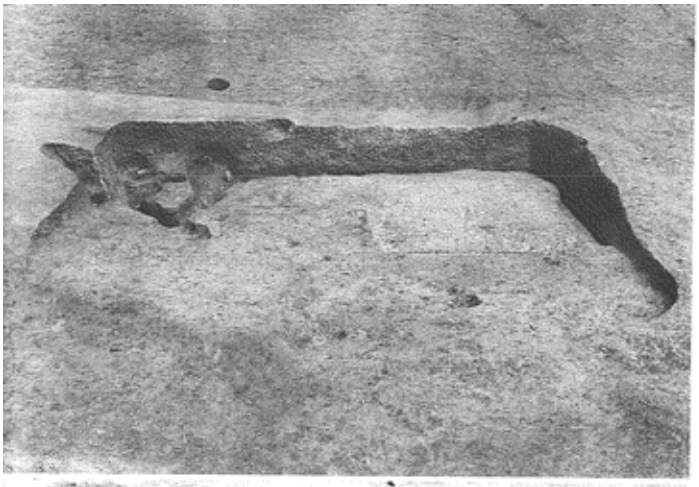


第２号住居跡

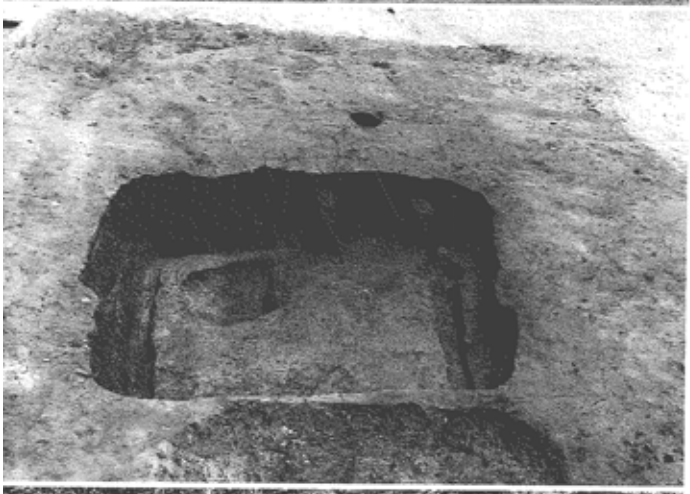
第３号住居跡



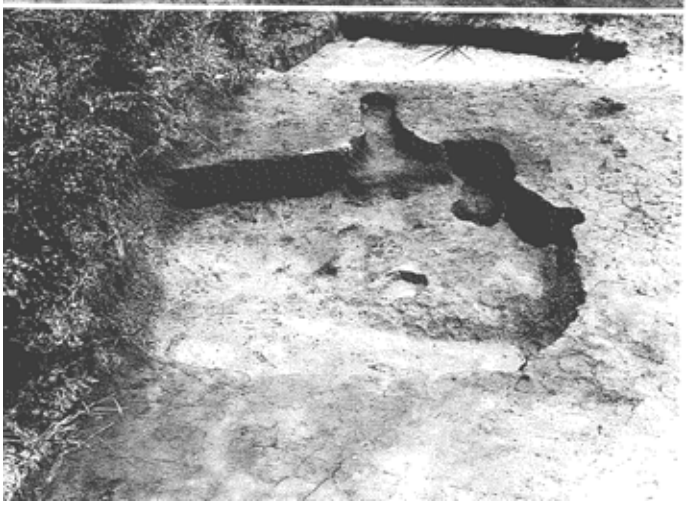
図版１



第４号住居跡



第５号住居跡



第８号住居跡

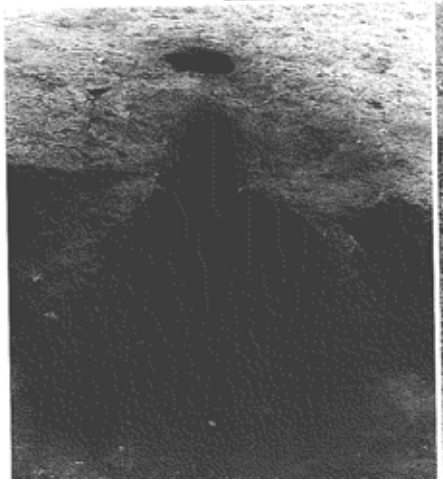
図版２

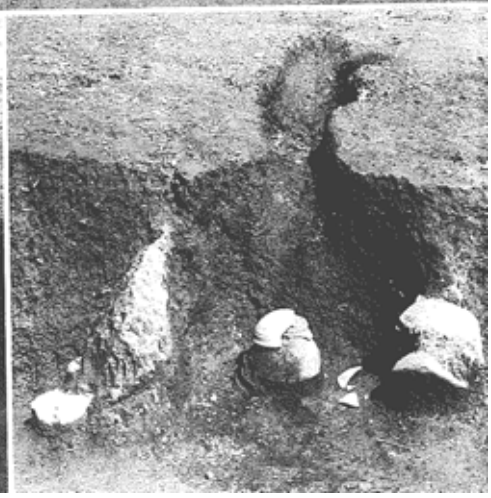
第９、14号住居跡

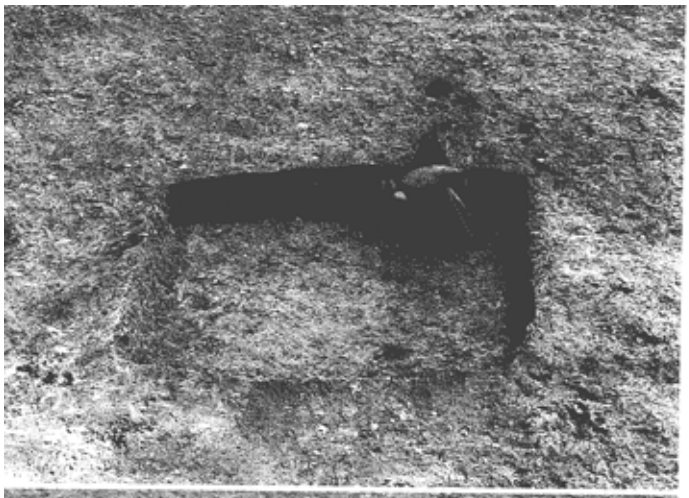
第10号住居跡

図版３

第２号住居跡カマド（下）
第10号住居跡カマド（右下）

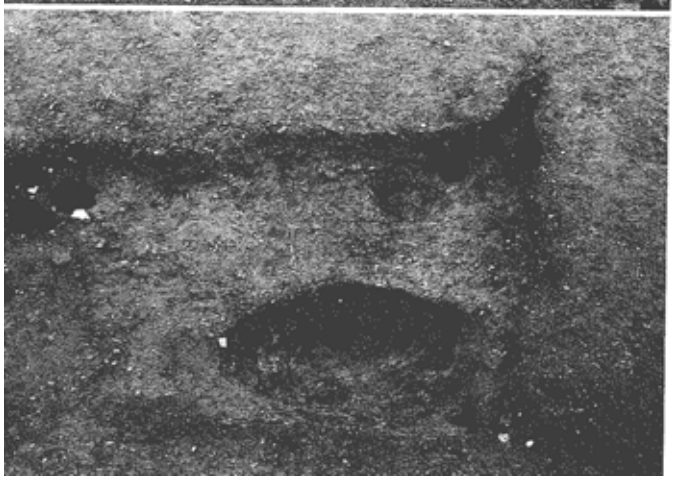






第11号住居跡

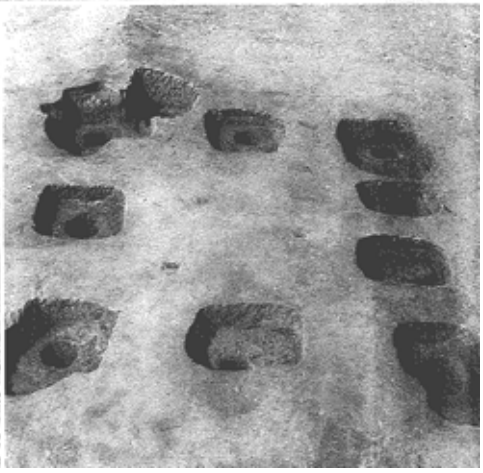
第12号住居跡

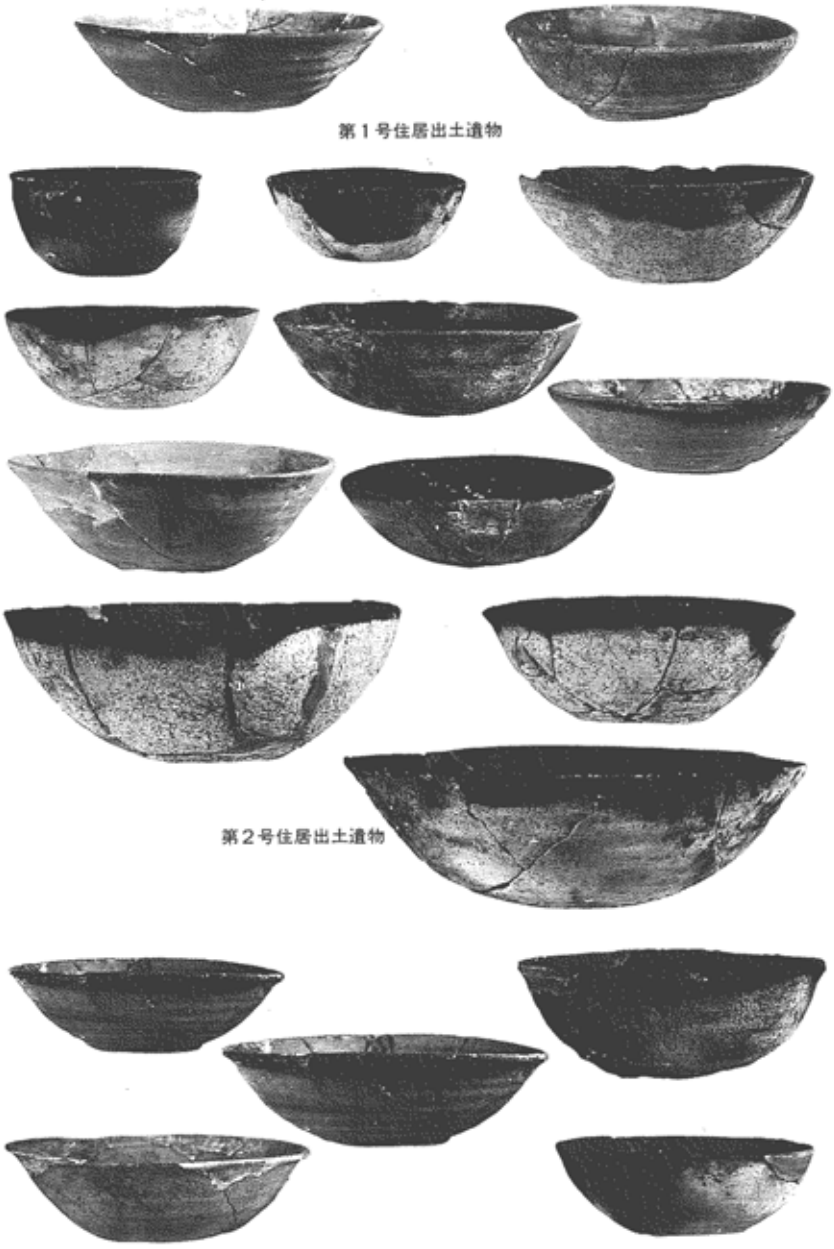


第13号住居跡

図版４

図版５





第１号住居出土遺物

第２号住居出土遺物

第３号住居出土遺物

図版６

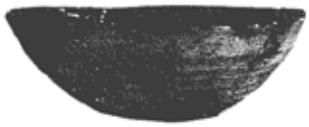
図版７

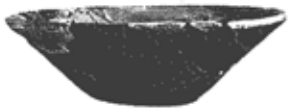
第６号住居出土遺物　　第７号住居出土遺物

第８号住居出土遺物

第９号住居出土遺物

第11号住居出土遺物





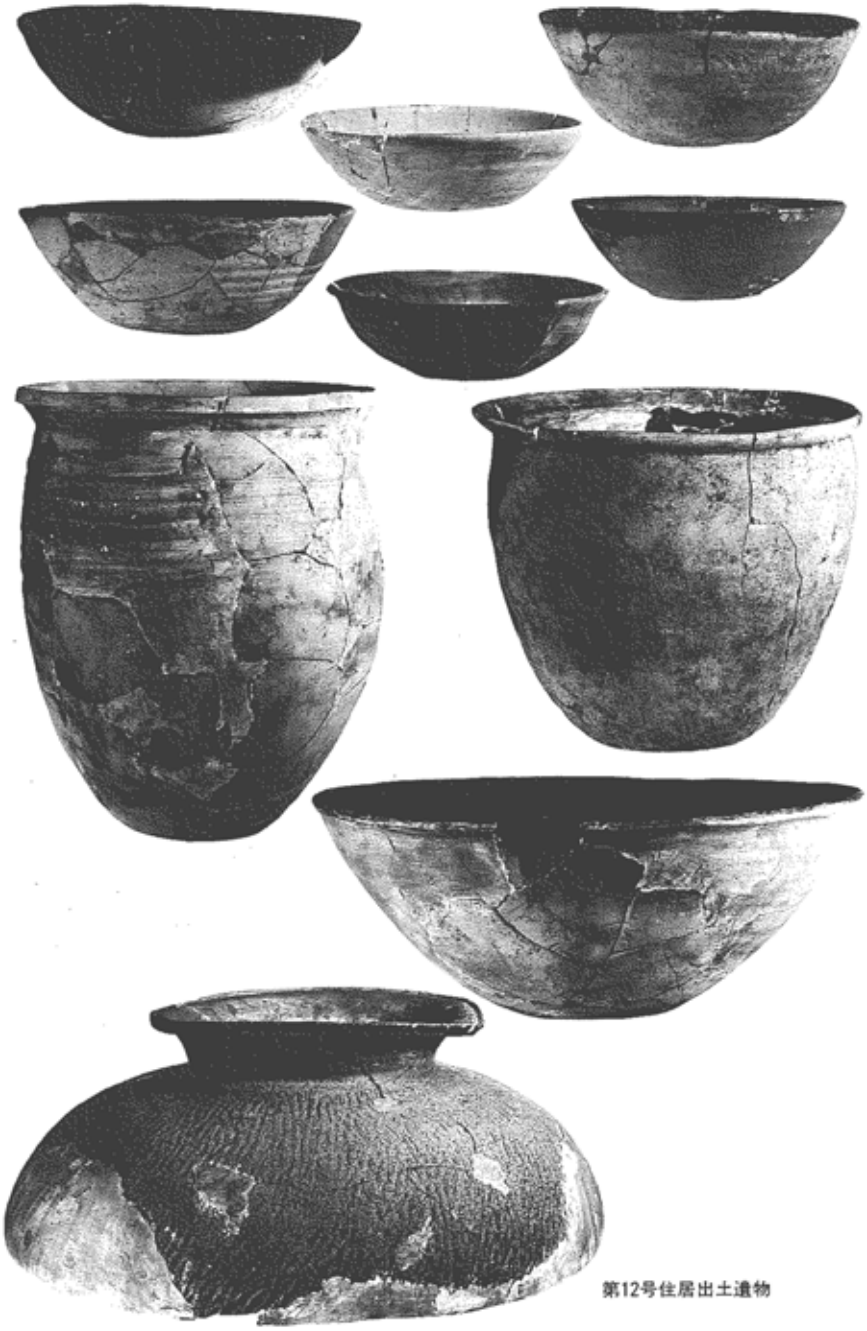
第13号住居出土遺物　　第17号住居出土遺物

図版８

第14号住居出土遺物

第10号住居出土遺物

図版９

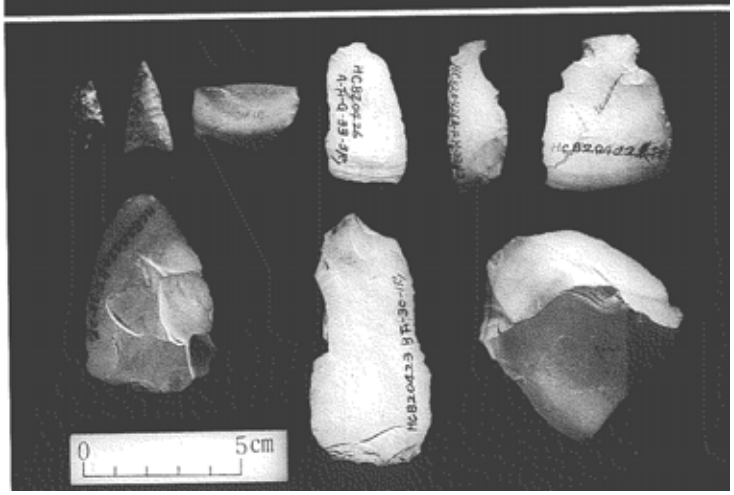


第12号住居出土遺物

図版10

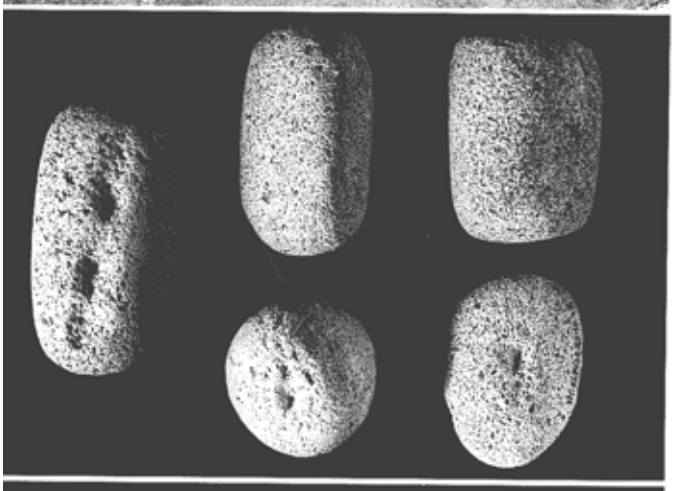
中雀A遺跡 第4号掘立柱建物跡

中雀B遺跡 出土石器(1)



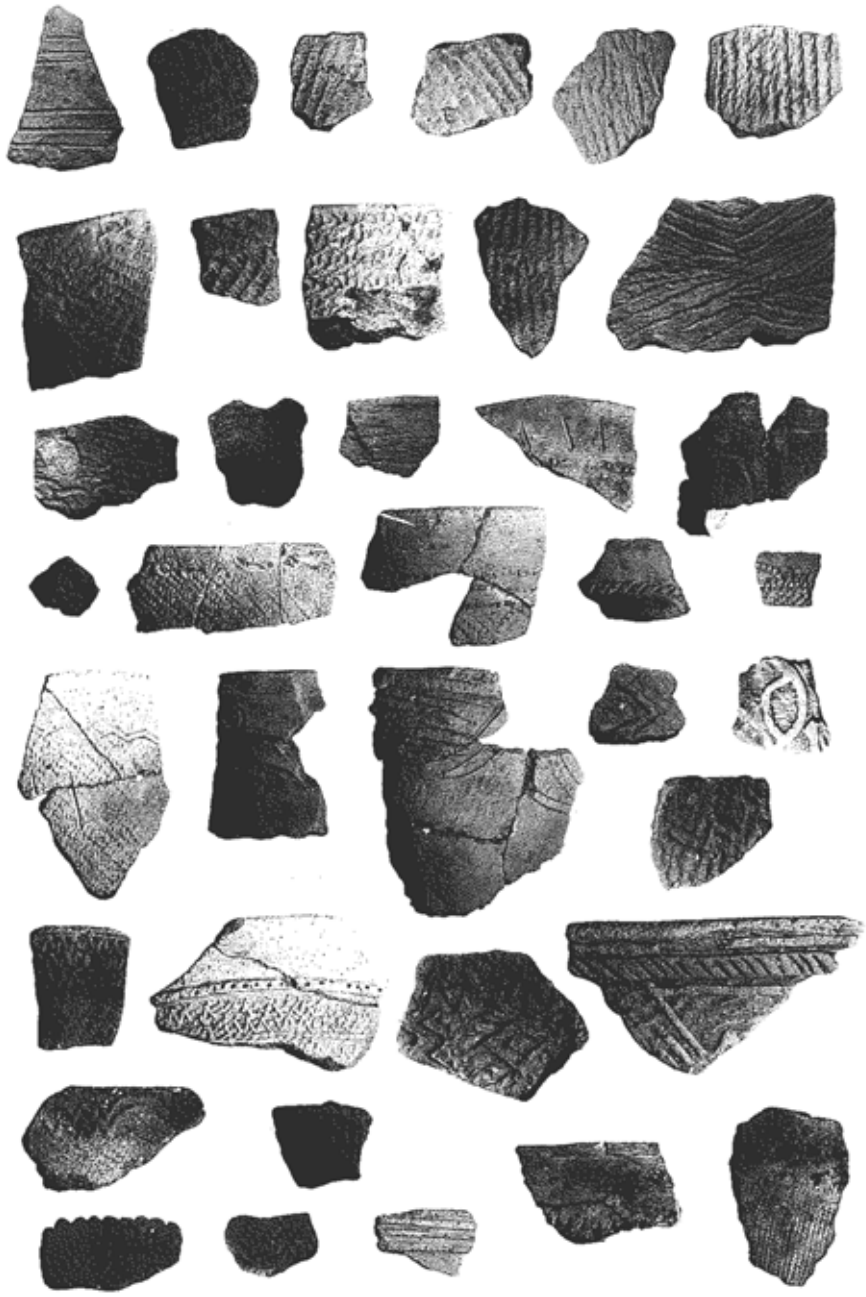
図版11

中雀B遺跡 竪穴住居跡



中雀B遺跡 出土石器(2)

図版12



中峯B遺跡 出土土器

図版13

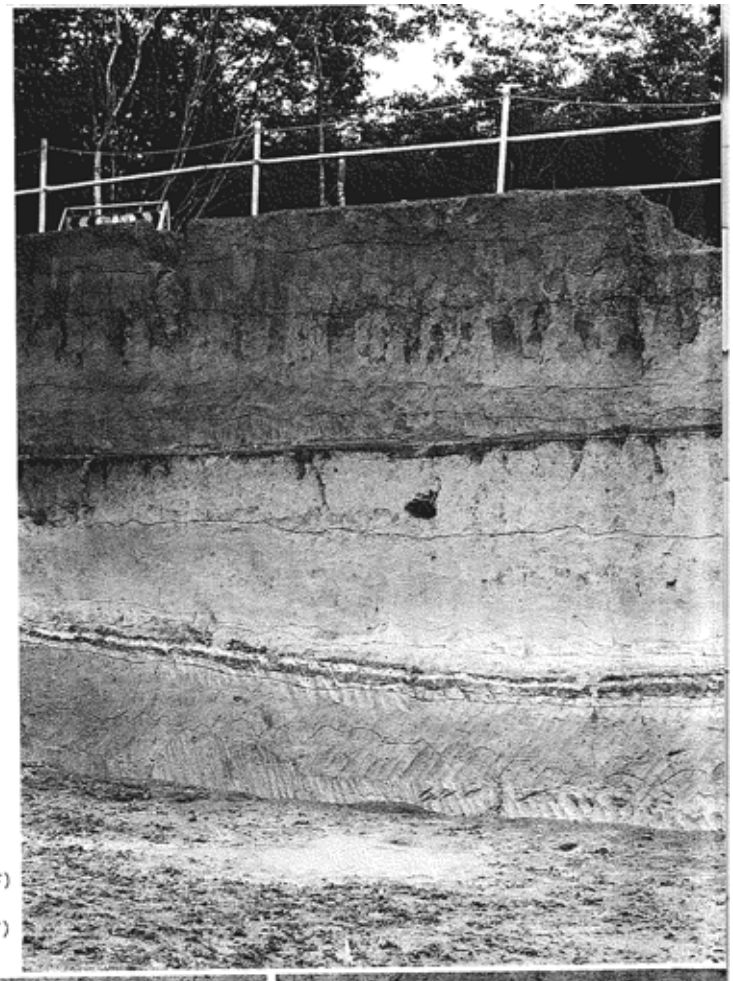
遺跡遠景(南東より)
Distant view of the Nakamine sites (from South-East)

遺跡遠景(南より)
Distant view of the Nakamine sites (from South)

中雀C遺跡 Ⅶ層発掘区
(南西より)
Excavation area of the Nakamine C site

図版14
Plate14

中峯C遺跡 発掘区
北壁土層断面
North cross-section of the Nakamine C site



図版15
Plate15

Ⅵ層(パミス)の堆積状況(下)
A close up of Stratum Ⅵ
Ⅶ層(網状斑)の状況(右下)
A close up of stratumⅦ

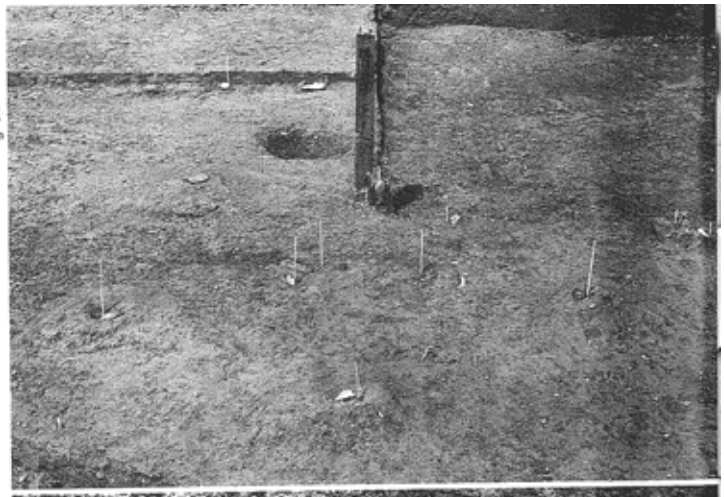
第101号土坑墓
Pit No.101

第102号土壙
Pit No.102

IIb層上面 第２集中地点(北より)

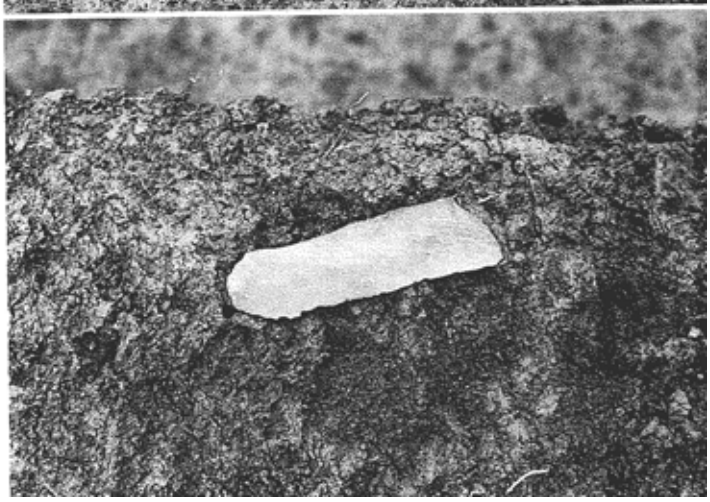
Lithic artifacts of concentration 2
on stratum IIb

図版16
Plate16



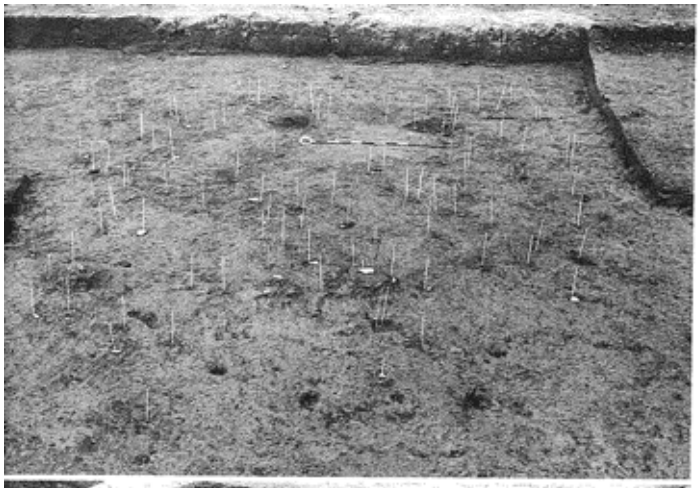
IIb層上面 第2集中地点
Lithic artifacts of concentration 2 on Stratum IIb

IIb層上面 第7集中地点
Lithic artifacts of concentration 7 on stratum IIb

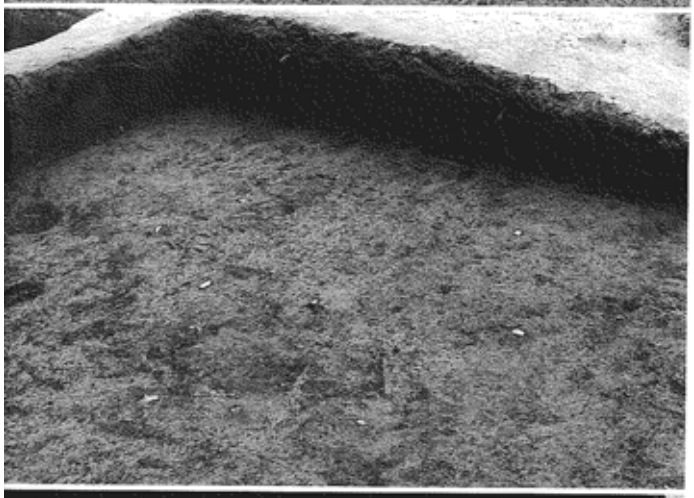


No.509 出土状況
A Close up of No.509

図版17
Plate17



IIc層上面 第1集中地点
(東より)
Lithic artifacts of concentration 1
on stratum IIC

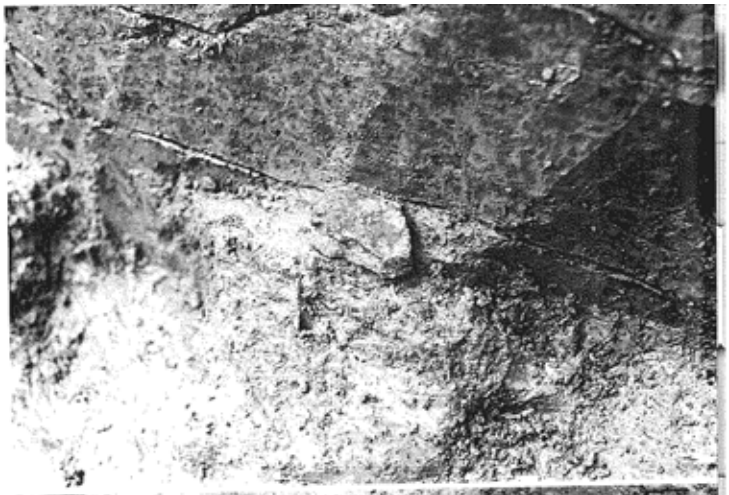


III層上面 第4集中地点(北東より)
Lithic artifacts of
concentration 4 on stratum III

IV層上面 第6集中地点
Lithic artifacts of concentration 6
on Stratum IV

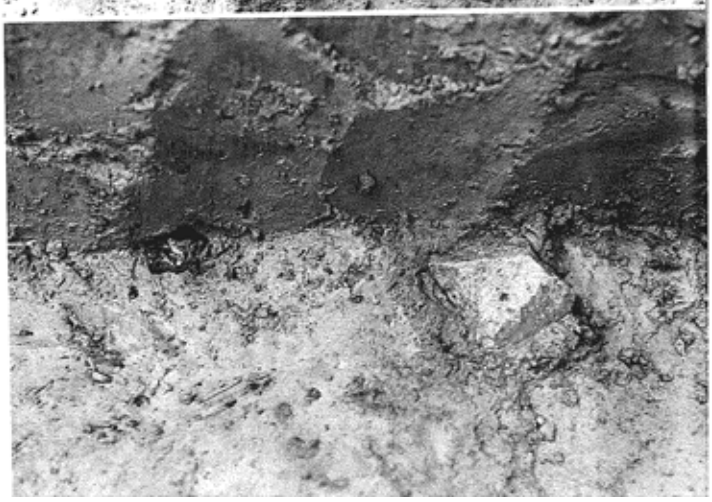
図版18
Plate 18

No.1003 出土状況
A Close up of No.1003

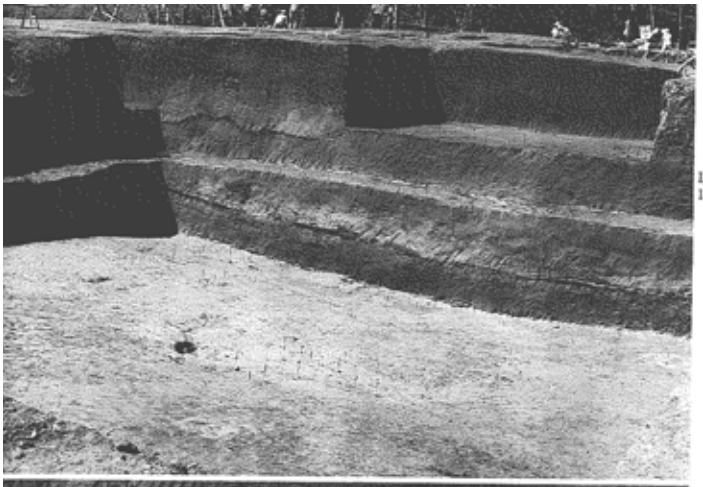


第11集中地点 石器出土状況
A Close up of lithic artifacts of concentration 11

No.1115、1116出土状況
A Close up No.1115, 1116

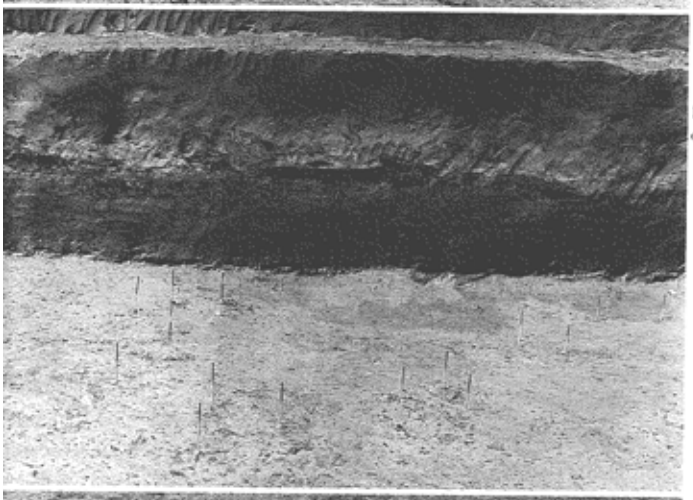


図版19
Plate19



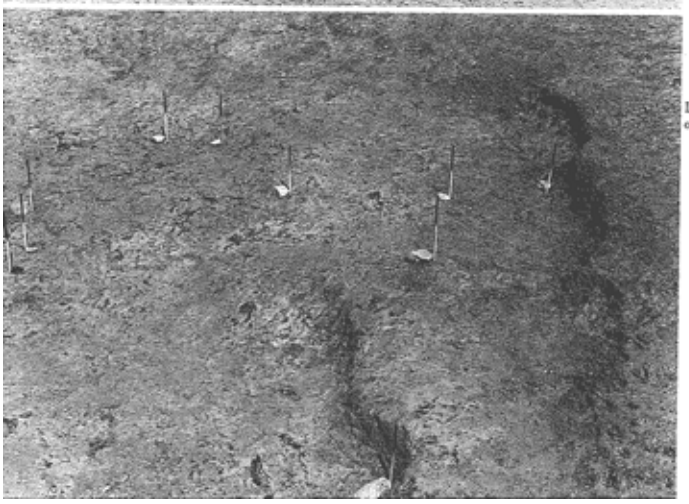
Ⅶ層中 第13、14、15、16
集中地点

Lithic artifacts of concentration
13, 14, 15, 16 on Stratum Ⅶ



Ⅶ層中 第13集中地点

Lithic artifacts of concentration 13
on stratum Ⅶ

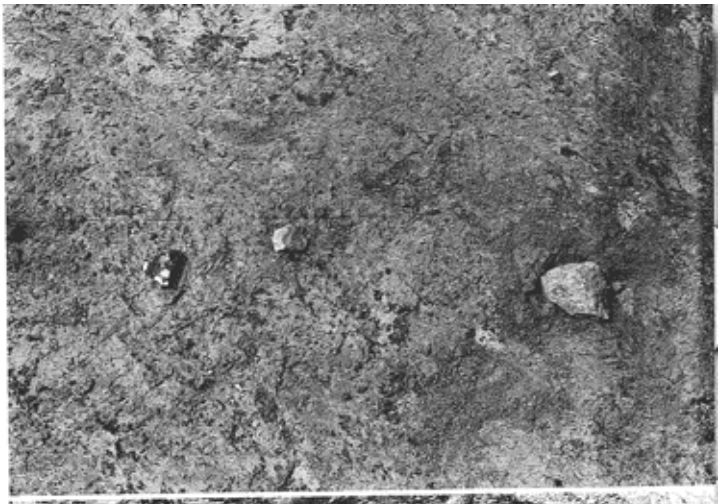


Ⅶ層中 第14集中地点

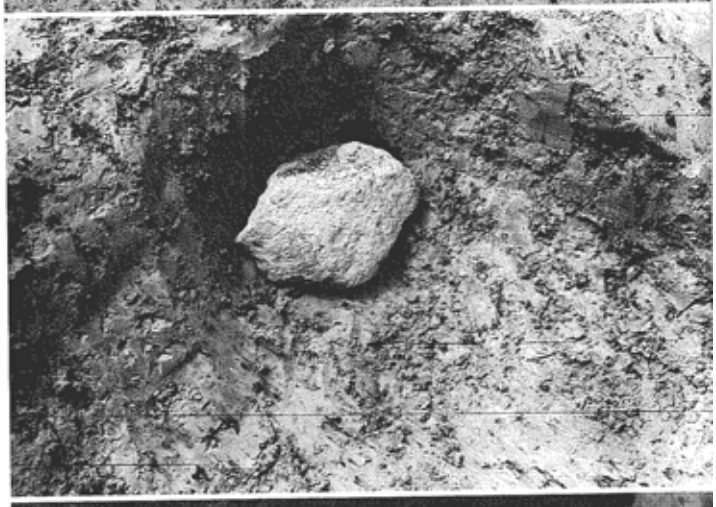
Lithic artifacts of concentration 14
on stratum Ⅶ

図版20
Plate20

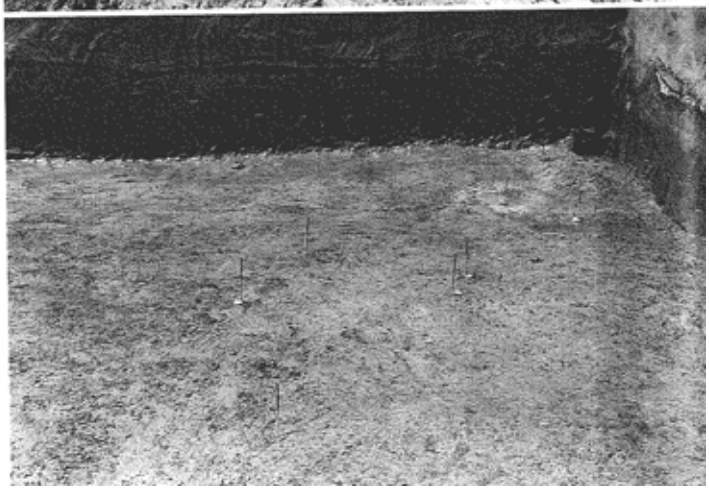
第14集中地点 石器出土状況
A Close up of lithic artifacts of concentration 14



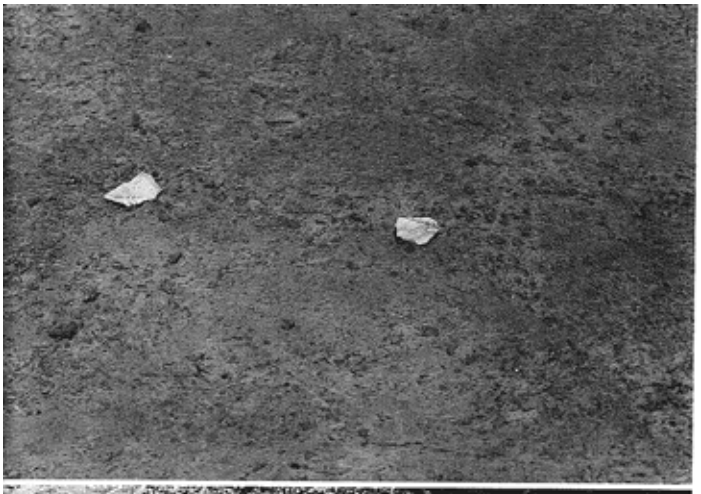
No.1401 出土状況
A Close up of No.1401



Ⅶ層中 第15集中地点(東より)
Lithic artifacts of concentration 15 on stratum Ⅶ

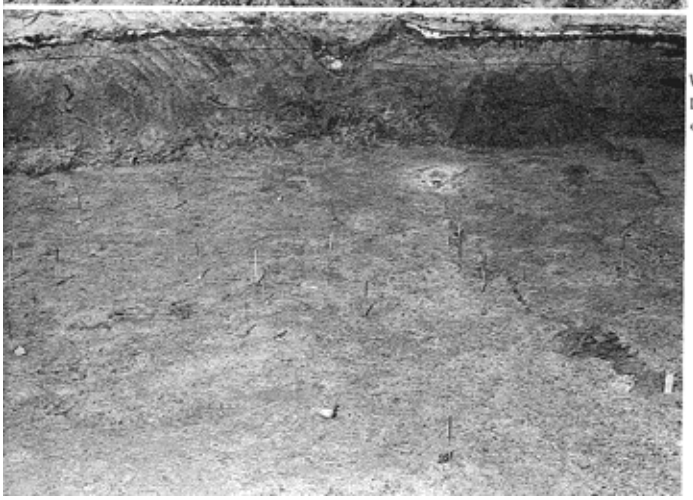


図版21
Plate21



No.1603、1604 出土状況
A Close up of No.1603, 1604

No.1607 出土状況
A Close up of No.1607



Ⅶ層中 18集中地点(南より)
Lithic artifacts of concentration 18
on stratum Ⅶ

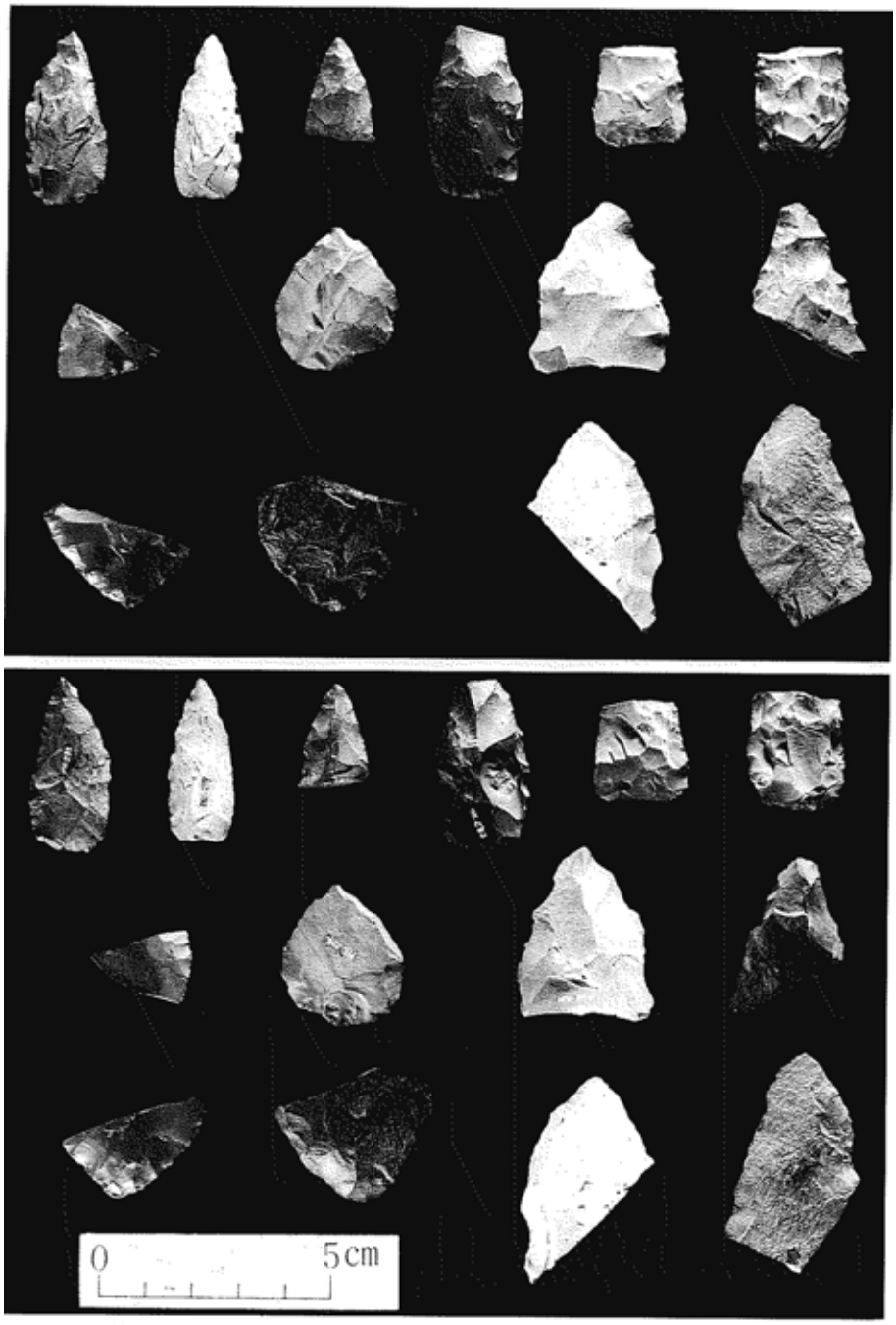
図版22
Plate22

No.1811 出土状況
A Close up of No.1811

発掘風景
A snapshot of excavaton

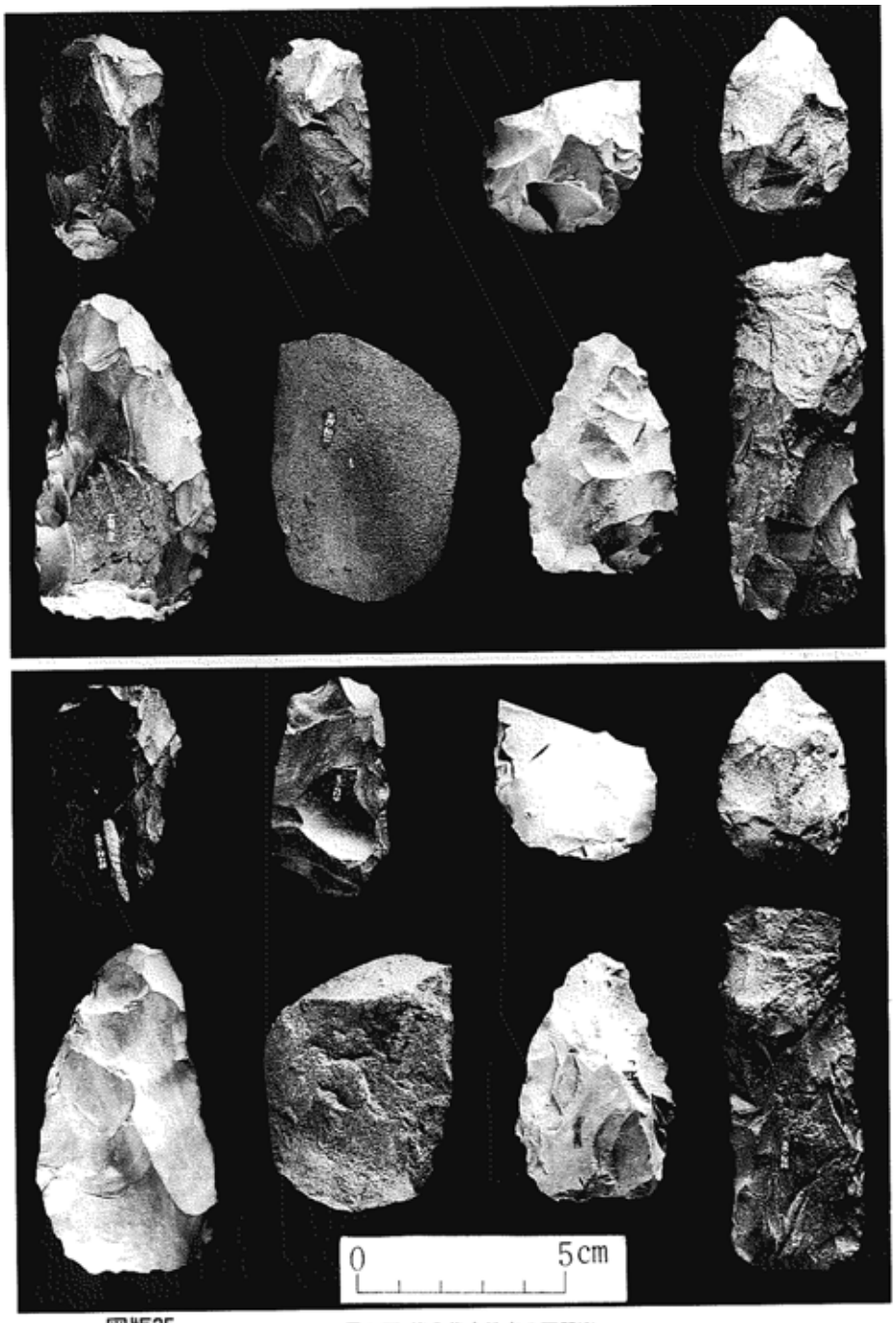
発掘調査を行なった人たち

図版23
Plate23



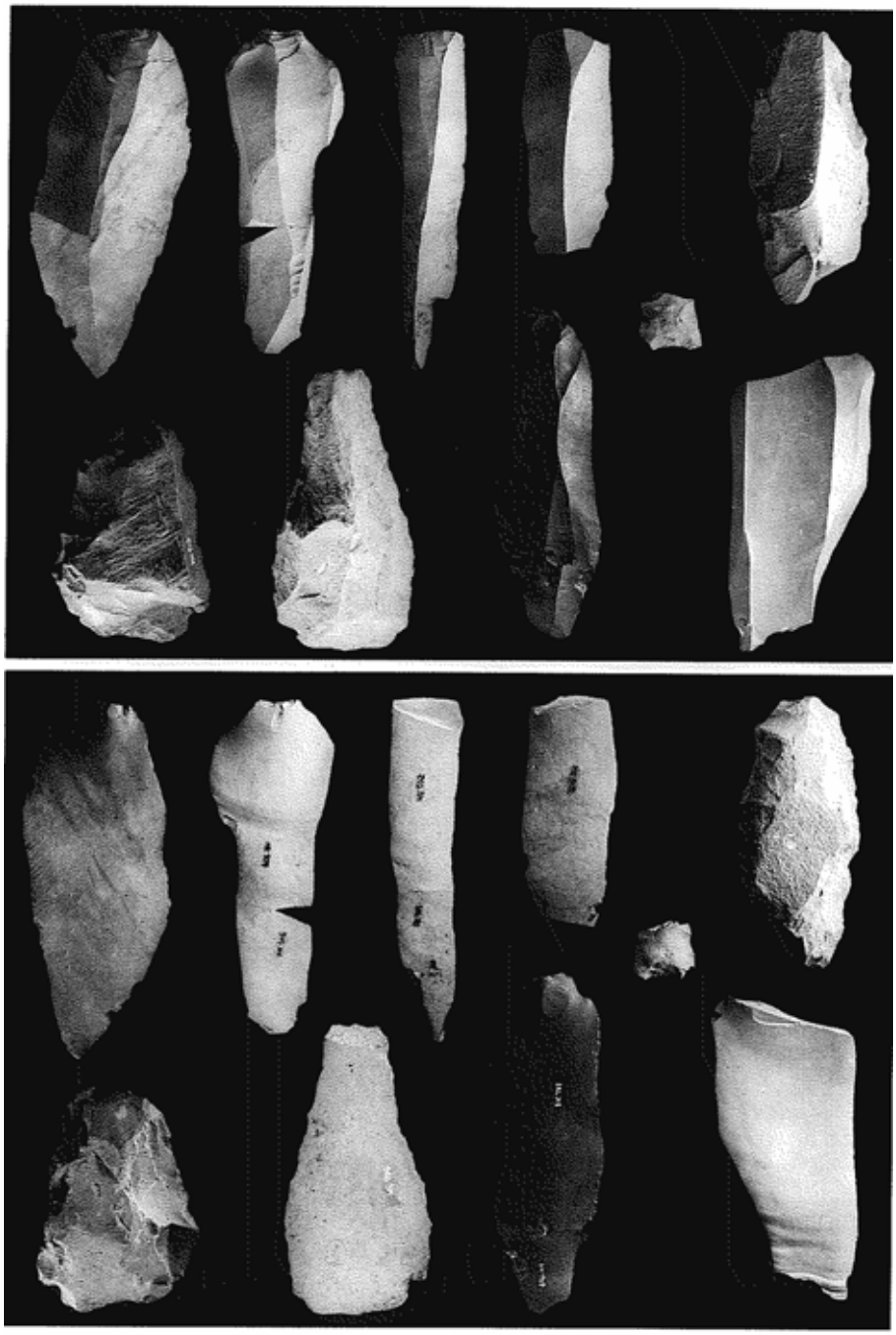
図版24
Plate24

IIb層上面 第２集中地点の石器(1)
Lithic artifacts of concentration 2, stratum IIb (1)



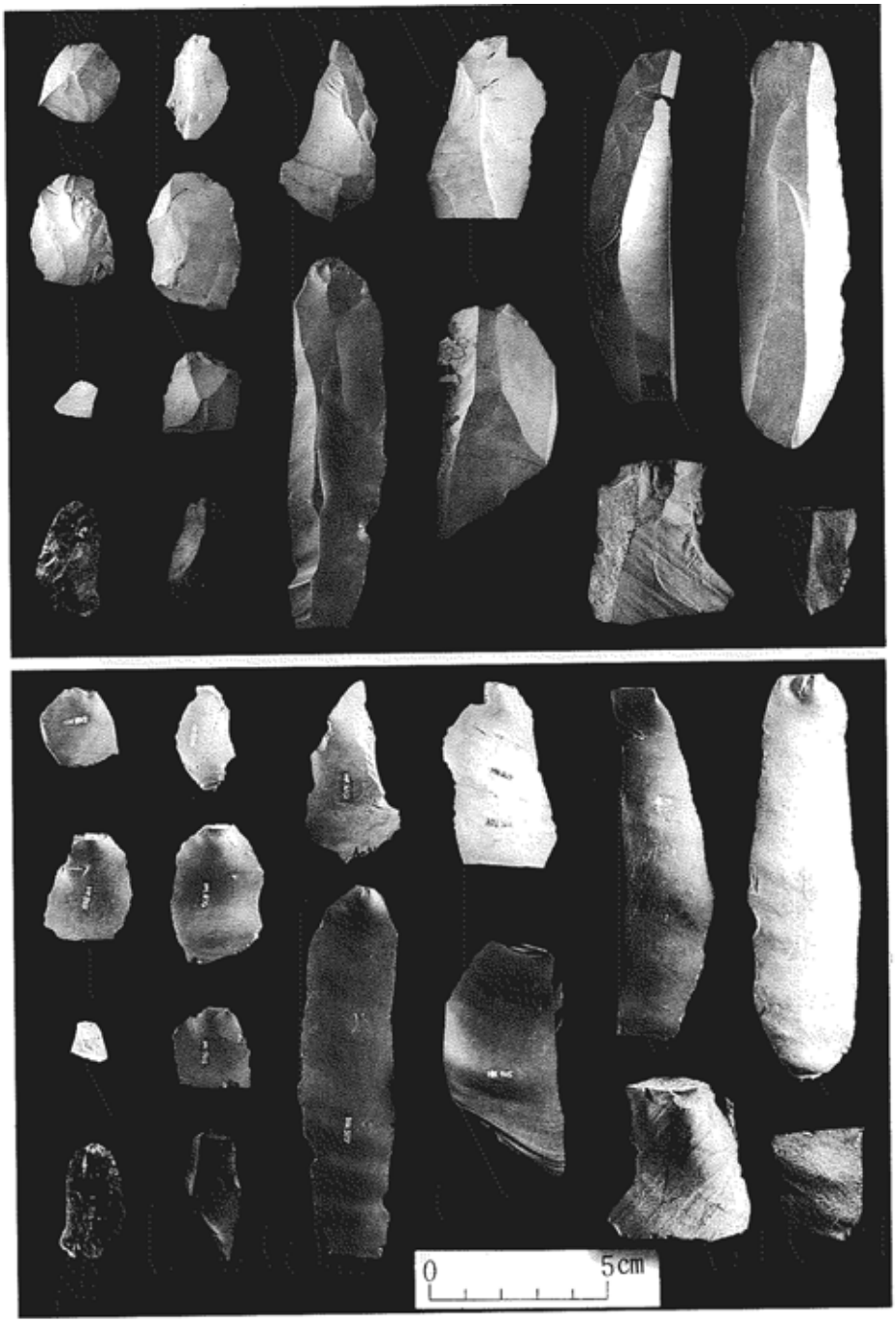
図版25
Plate25

IIb層上面 第２集中地点の石器(2)
Lithic artifacts of concentration 2, stratum IIb(2)



図版26
Plate26

IIb層上面 第5、7集中地点の石器
Lithic artifacts of concentration 5, 7, stratum IIb

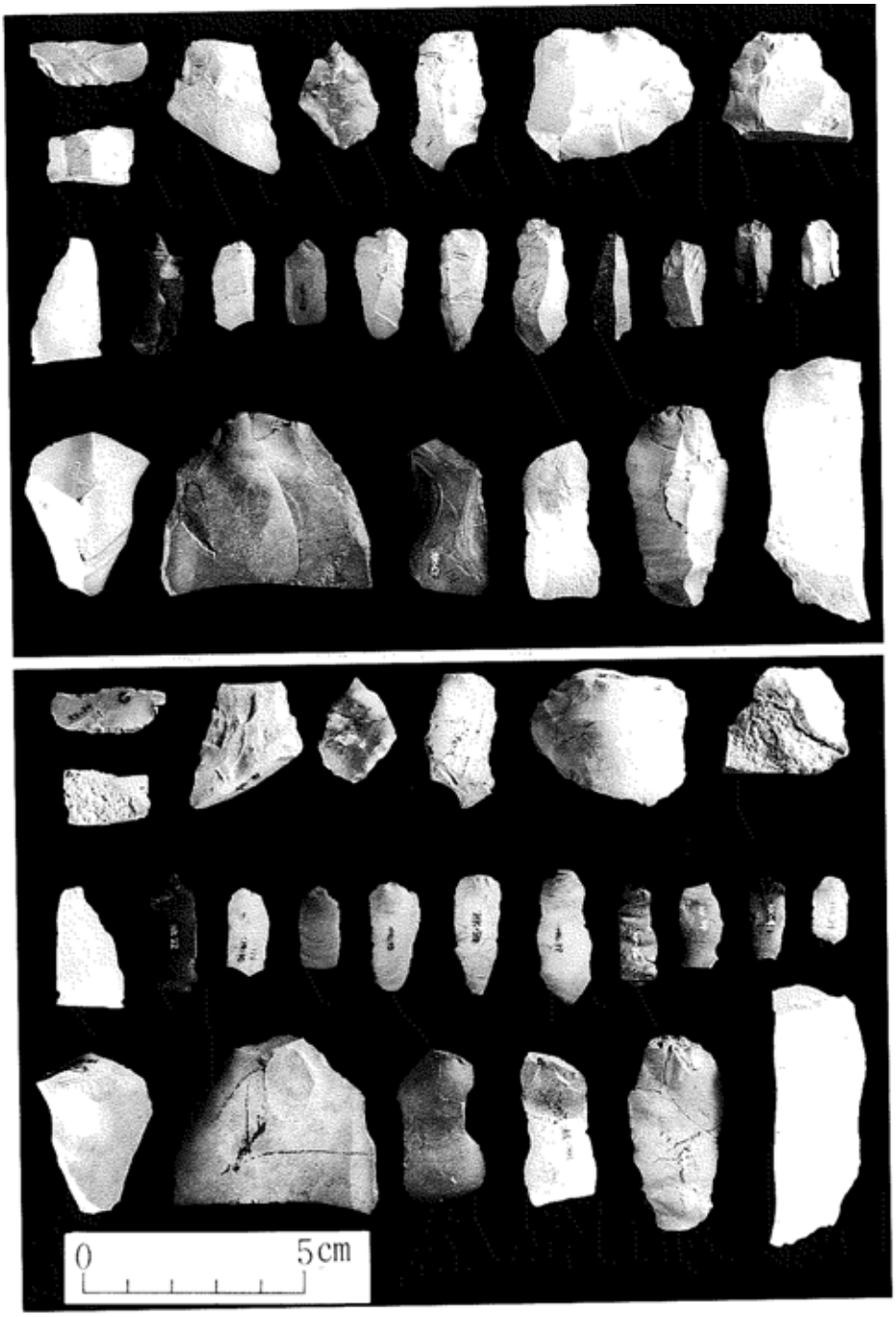


図版27
Plate27

IIb層上面 第8、9集中地点の石器
Lithic artifacts of concemtration 8, 9, stratum IIb

図版28
Plate28

IIb層上面 集中地点外の石器と表採資料
Other lithic artifacts from stratum IIb

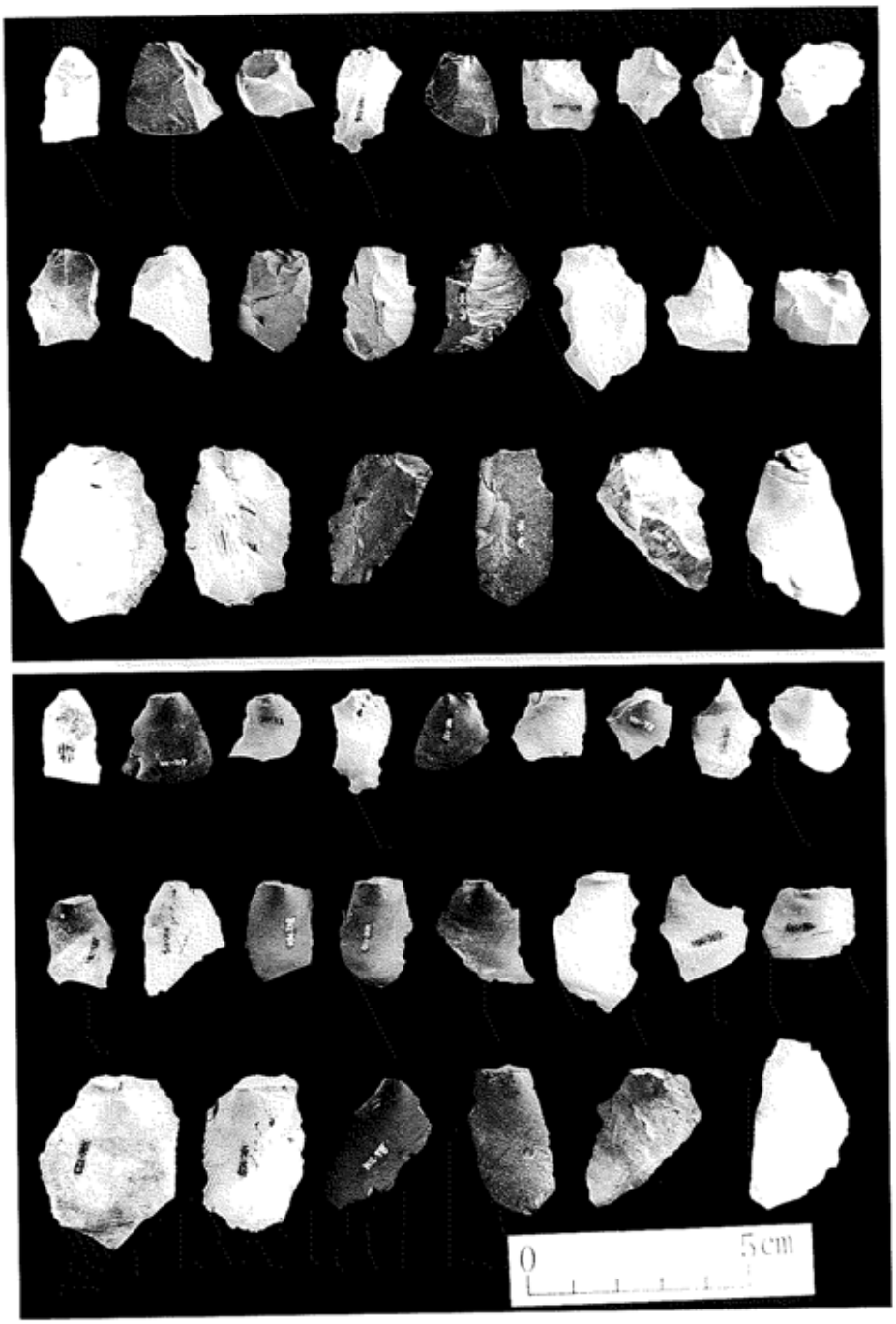


図版29
Plate29

IIc層上面 第1集中地点の石器(1)
Lithic artifacts of concentration 1, stratum IIc (1)

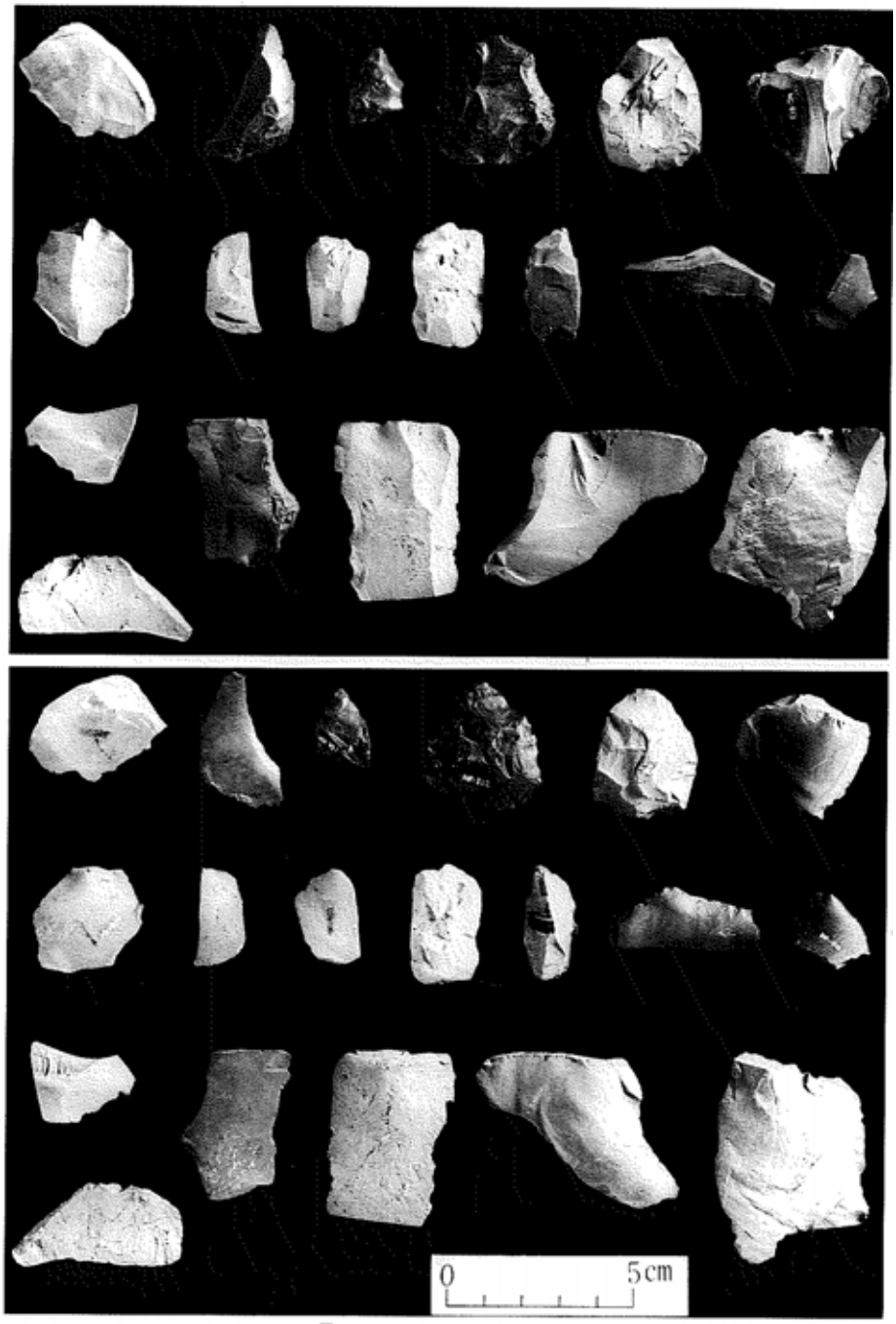
図版30
Plate30

IIc層上面 第1集中地点の石器(2)
Lithic artifacts of concentration 1, stratum IIc (2)



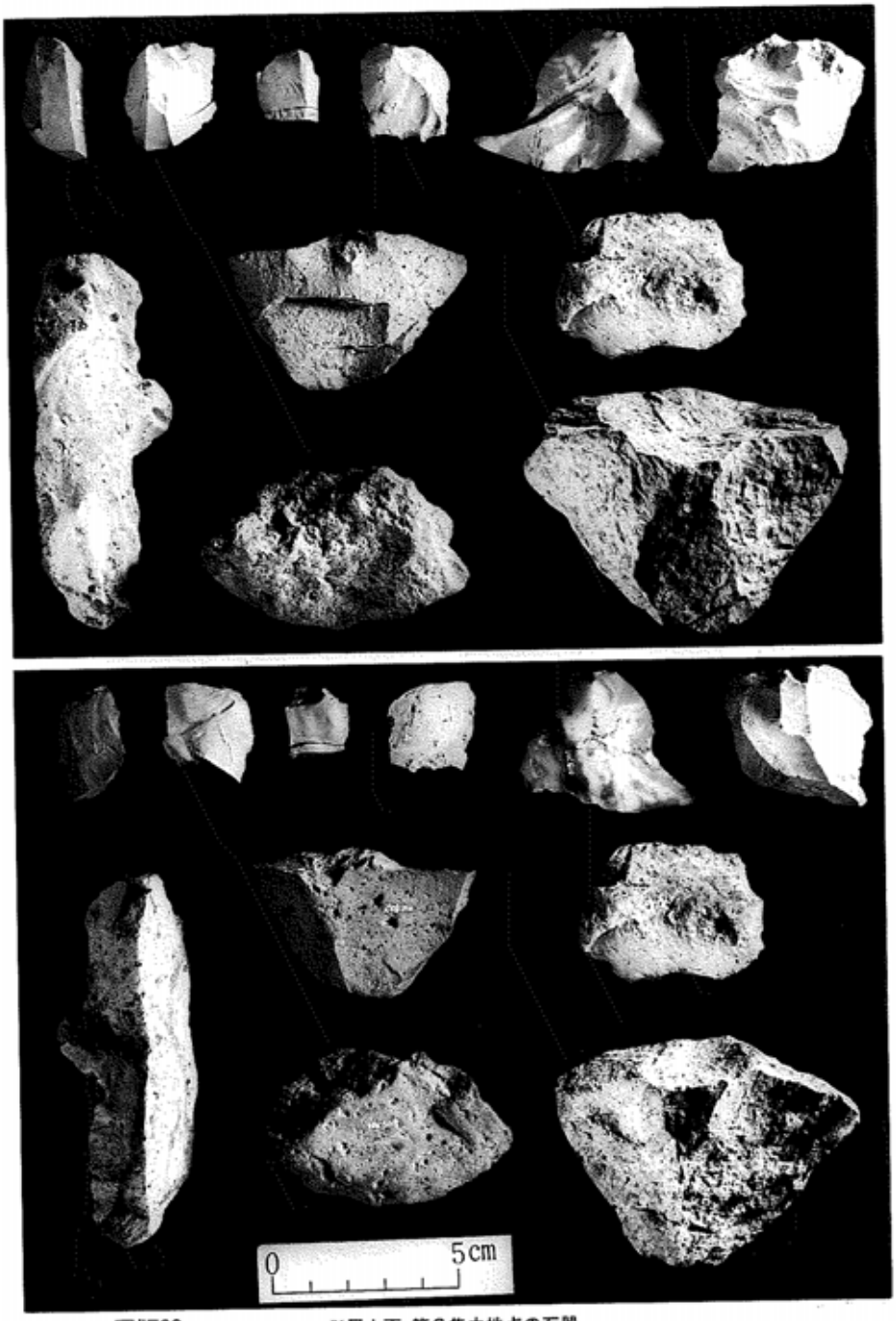
図版31
Plate31

IIc層上面 第1集中地点の石器(3)
Lithic artifacts of concentration 1, stratum IIc (3)



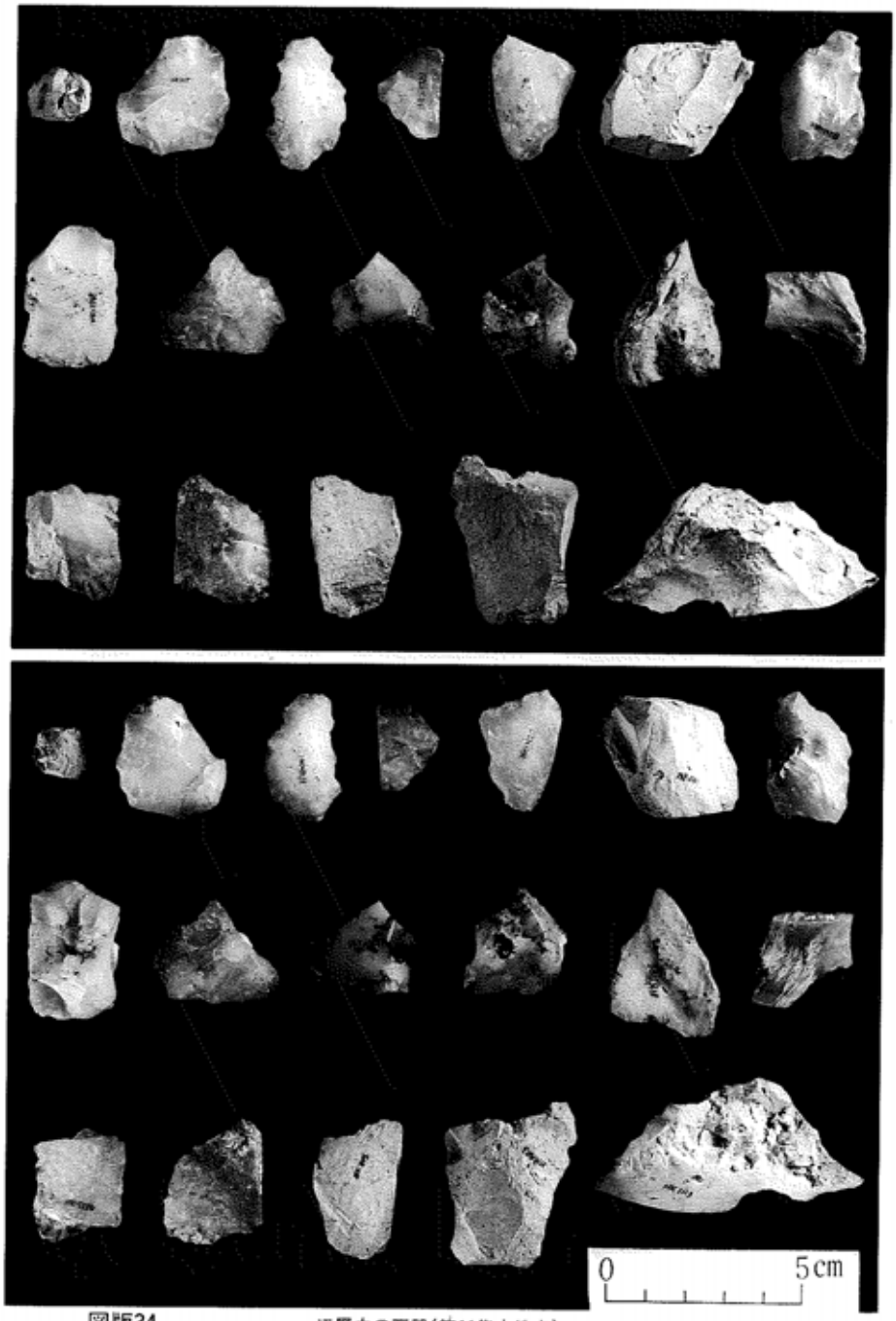
図版32
Plate32

III層上面 第3、4集中地点の石器
Lithic artifacts of concentration 3, 4, stratum III



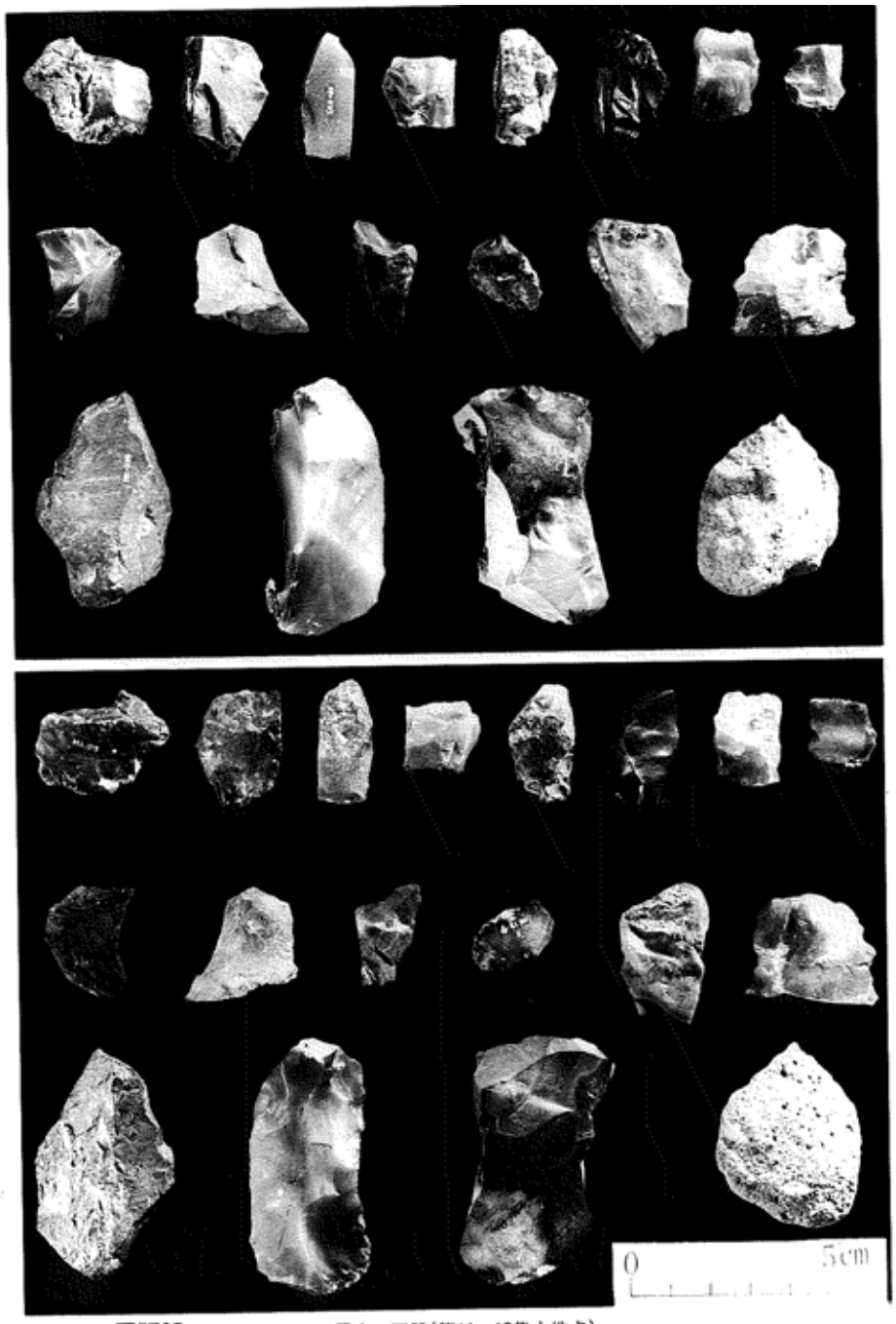
図版33
Plate33

Ⅳ層上面 第6集中地点の石器
Lithic artifacts of concentration 6, stratum Ⅳ



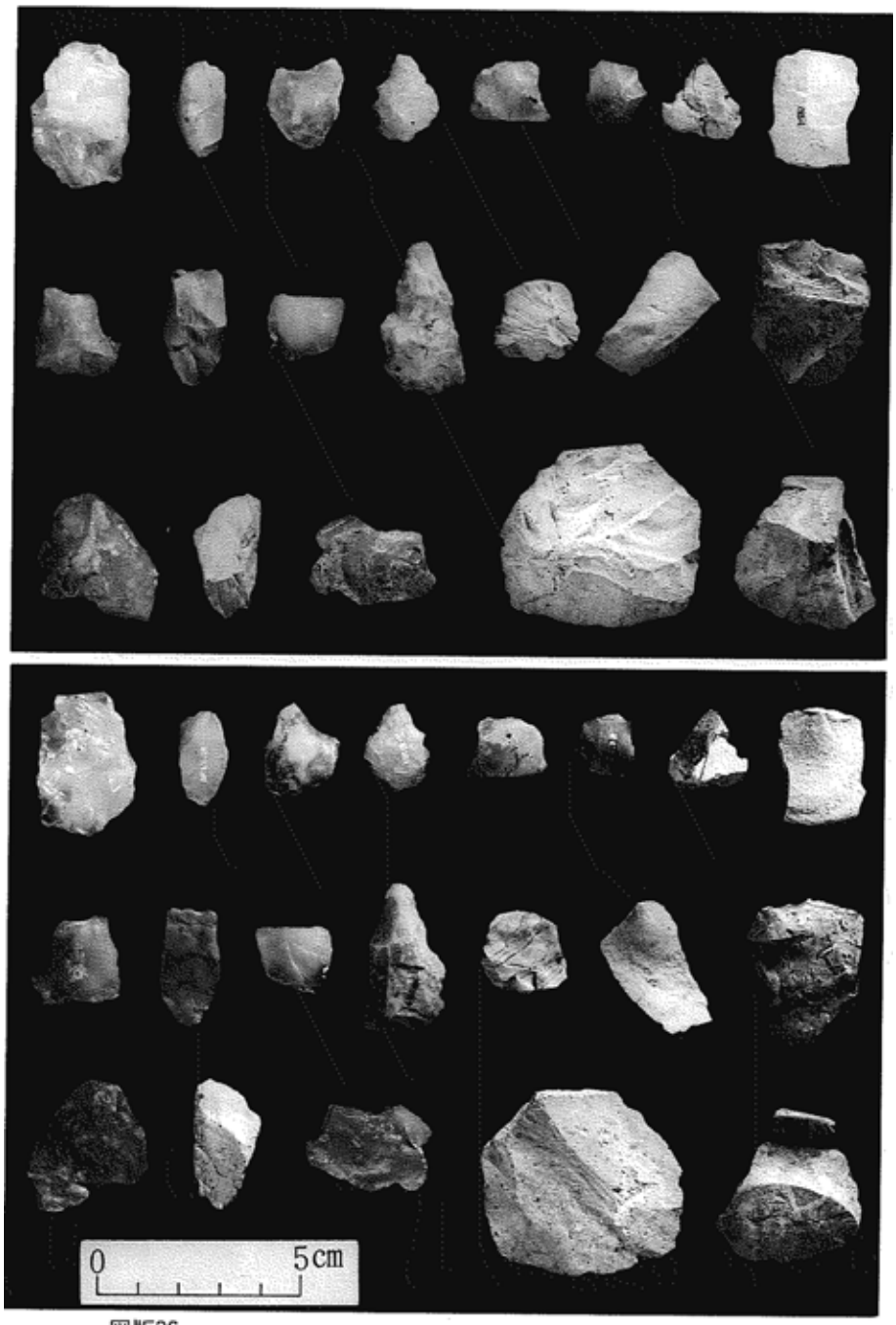
図版34
Plate 34

Ⅶ層中の石器(第11集中地点)
Lithic artifacts of concentration 11, stratum Ⅶ



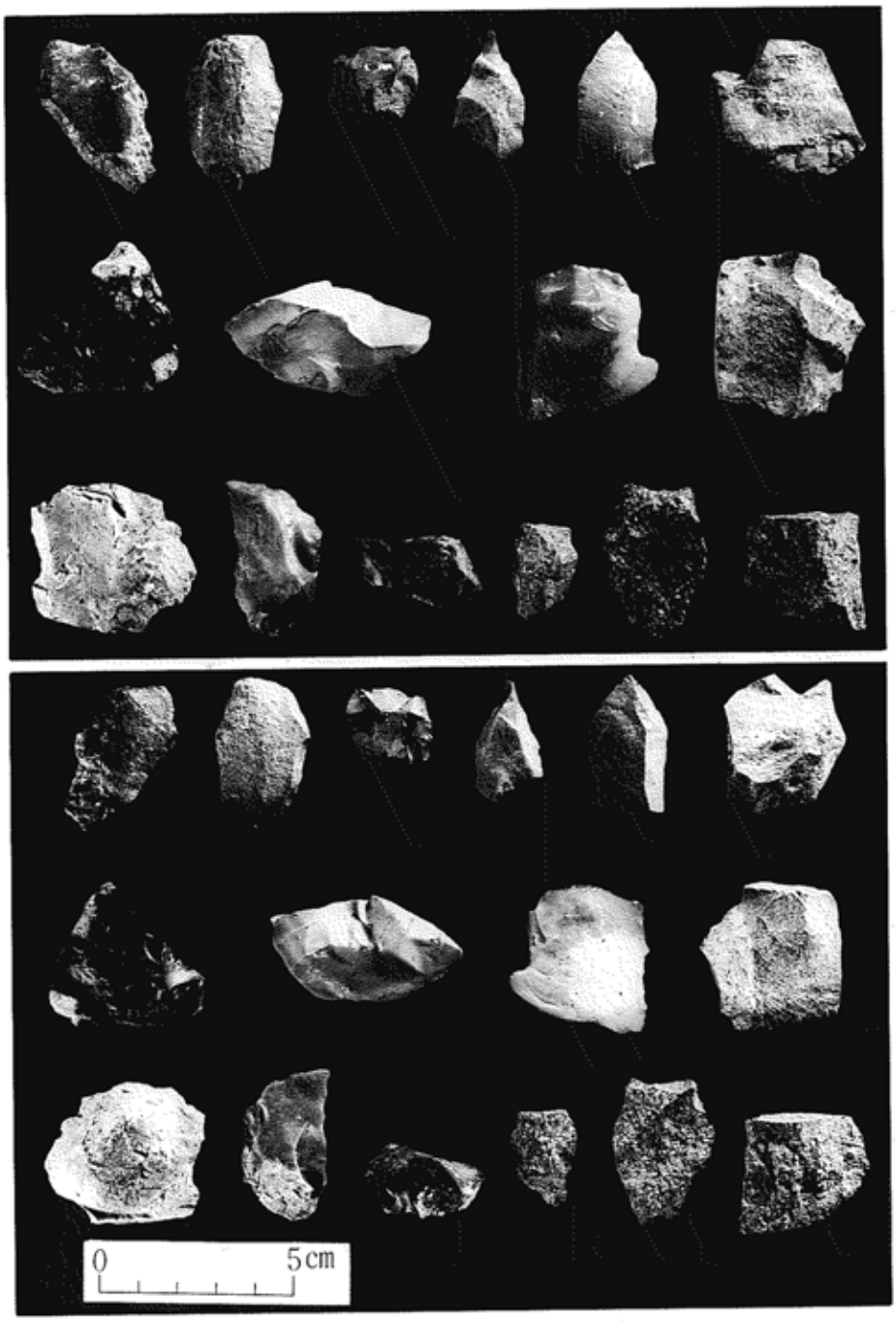
図版35
Plate35

Ⅶ層中の石器(第11、13集中地点)
Lithic artifacts of concentration 11, 13, stratum Ⅶ



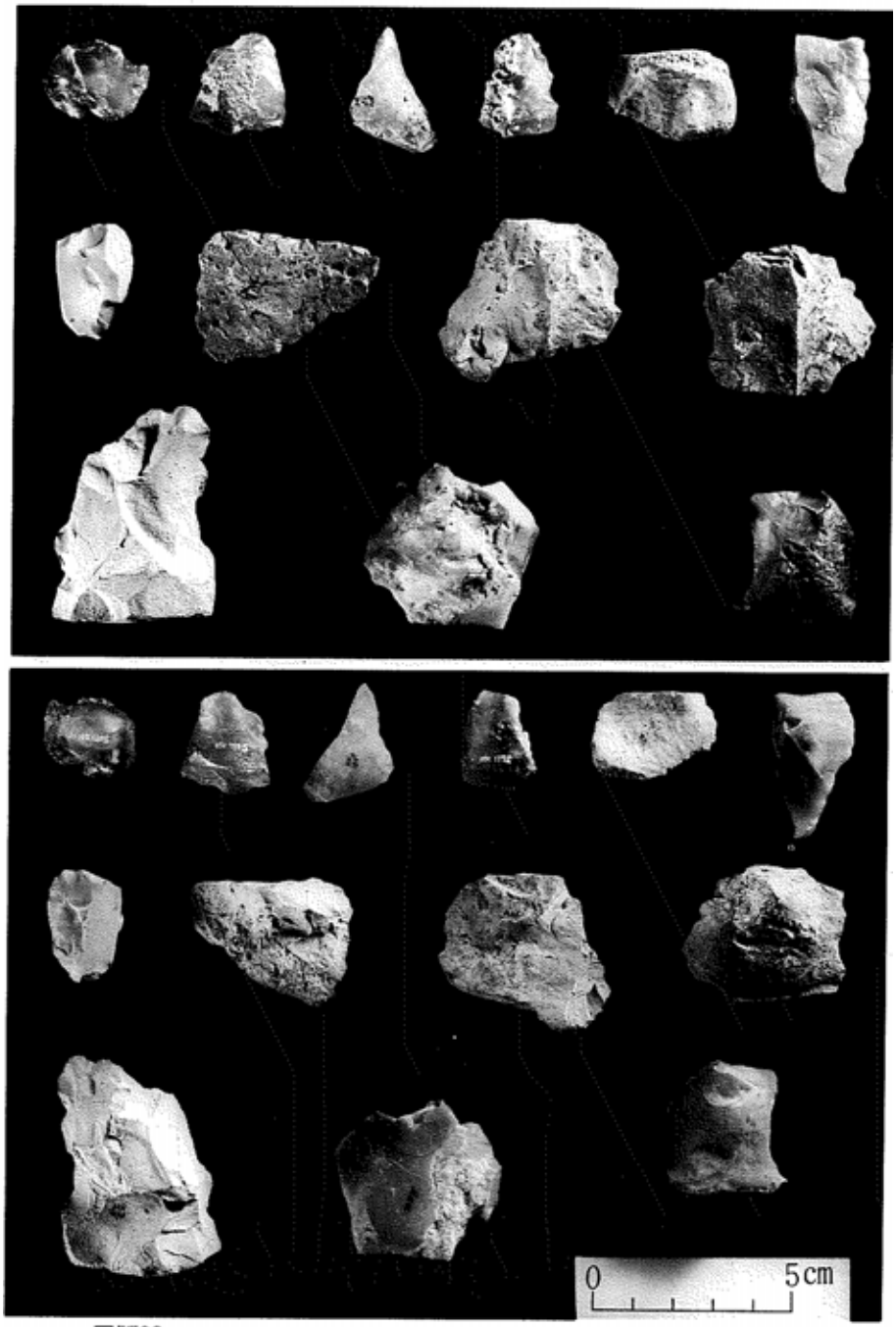
図版36
Plate 36

Ⅶ層中の石器
Lithic artifacts from stratum Ⅶ



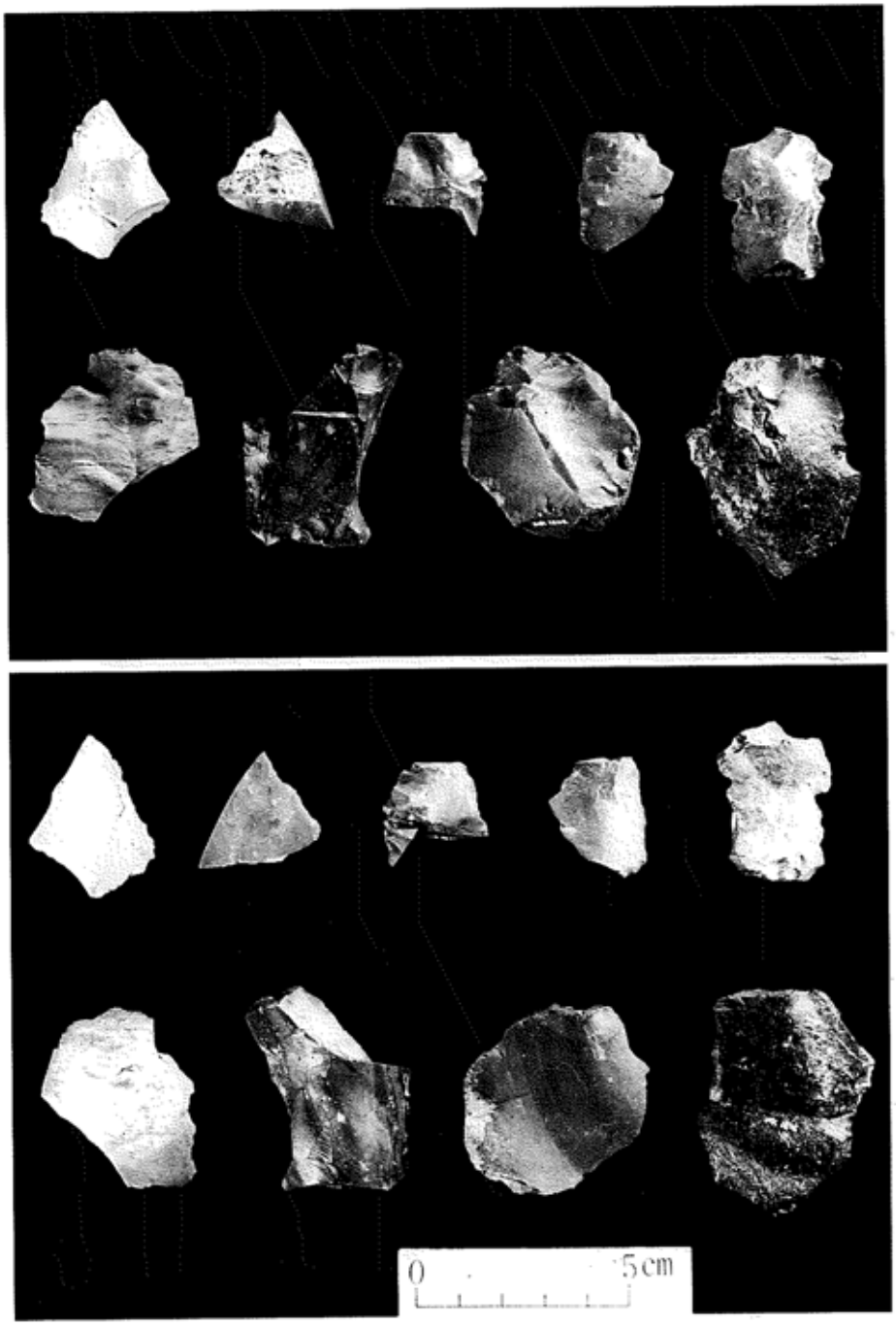
図版37
Plate37

Ⅶ層中の石器(第14、15、16集中地点)
Lithic artifacts of concentration 14, 15, 16, stratum Ⅶ



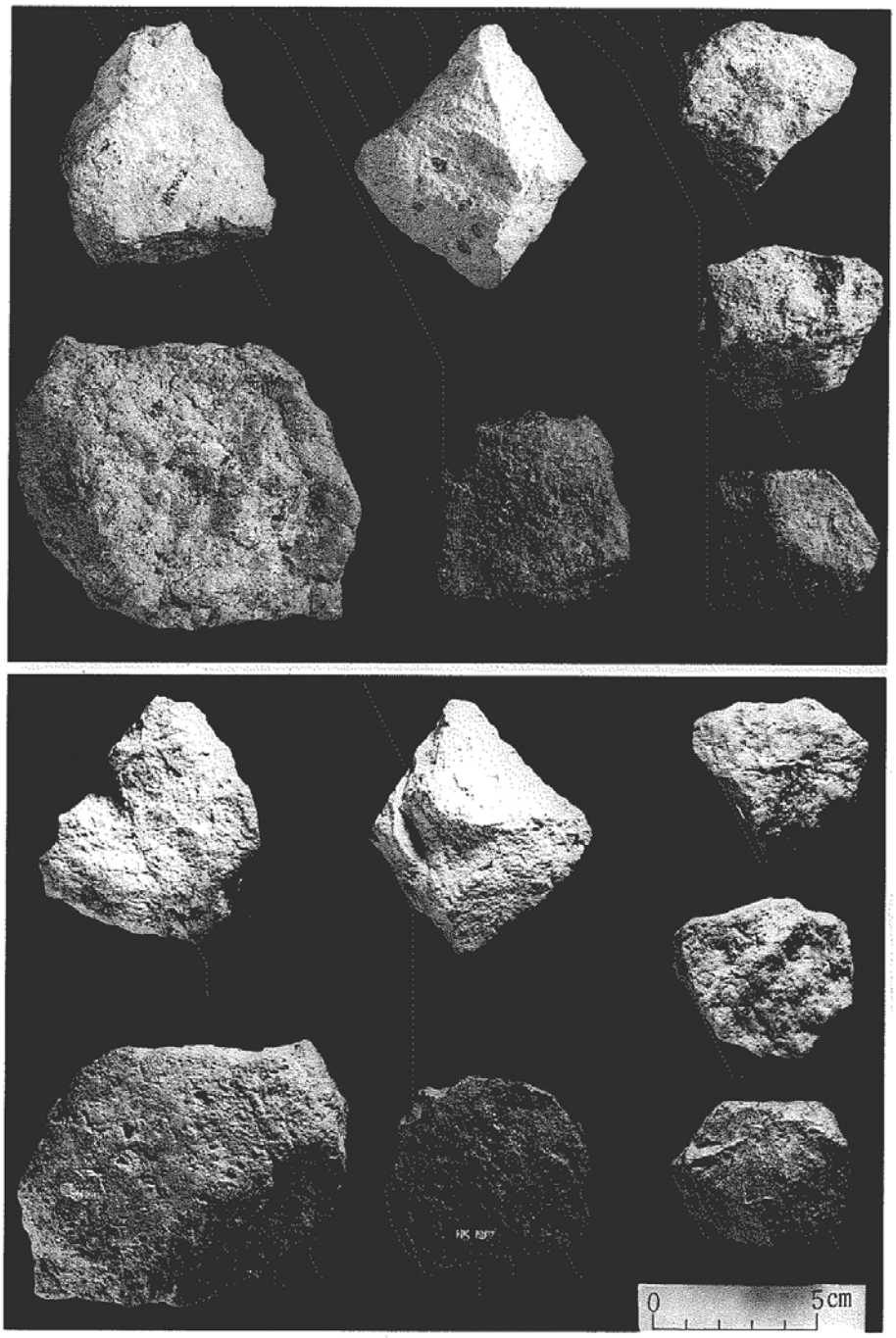
図版38
Plate38

Ⅶ層中の石器(第11、16、18集中地点)
Lithic artifacts of concentration 11, 16, 18, stratum Ⅶ



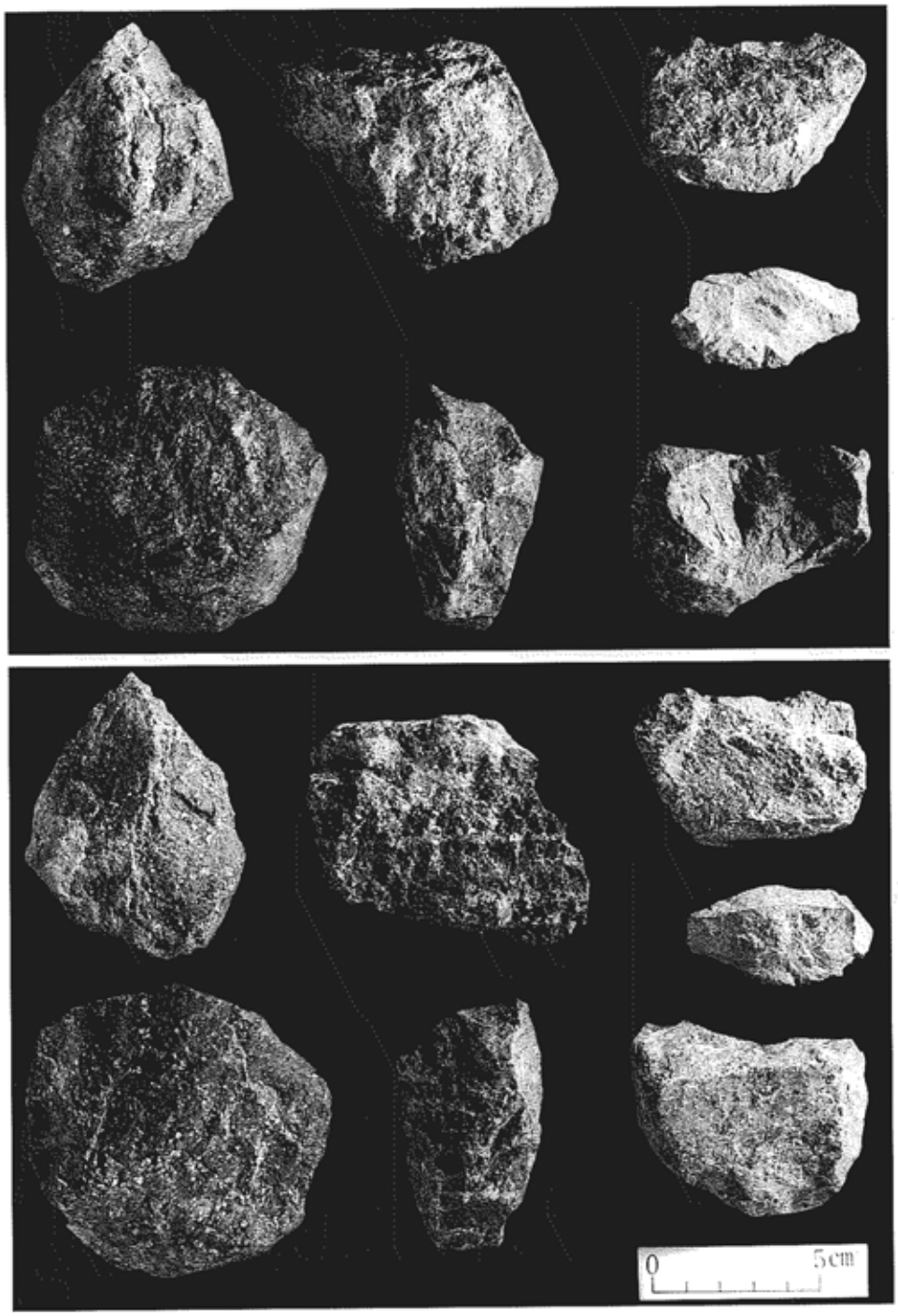
図版39
Plate39

Ⅶ層中の石器(第18集中地点)
Lithic artifacts of concentration 18, stratum Ⅶ



図版40
Plate40

Ⅶ層中の石器
Lithic artifacts from stratum Ⅶ



図版41
Plate41

Ⅶ層中の石器
Lithic artifacts from stratum Ⅶ